現実生活と心理学。

第７１回大会発表論文集

日本応用心理学会

日本大学商学部

２００４年９月４日（土）・５日（日）

日本応用心理学会　第７１回大会

発表論文集

大会テーマ

「現実生活と心理学」

２００４．９．４－５

日本大学商学部

The Japan Association of Applied Psychology 71st

目　　次

大会記念講演・公開講演・研修会

大会記念講演 p.1

９月５日（日）１４：３０～１６：００　（１号館１３１教室）

講演者　鳥山　敏子（賢治の学校　主宰）
演　題　"育ちなおし"について
司　会　嘉部　和夫（日本大学　大会準備委員長）

公開講演１ ..... p.3

９月４日（土）１６：１５～１７：４５　（１号館１２２教室）

講演者　小野寺　富男（株式会社　Ｇプラン）
演　題　マーケテイングの実際
司　会　松本　洸（日本大学　準備委員）

公開講演２ ..... p.4

９月４日（土）１６：１５～１７：４５　（１号館１２３教室）

講演者　野口　薫（日本大学文理学部　教授）
演　題　交通の心理学
司　会　嘉部　和夫（日本大学　大会準備委員長）

公開講演３ ..... p.5

９月５日（日）１２：４５～１４：１５　（１号館１２２教室）

講演者　内藤　佳津雄（日本大学文理学部　助教授）
演　題　痴呆高齢者の介護
司　会　外島　裕（日本大学　大会事務局長）

公開講演４ ..... p.6

９月５日（日）１２：４５～１４：１５　（１号館１２３教室）

講演者　樋口　紀男（日本大学商学部　教授）
演　題　ＣＦから見た消費者心理
司　会　時田　学（日本大学　大会事務局）

研修会Ａ p.7

９月５日（日）１０：００～１１：３０　（１号館１２４教室）

講　師　　小野　　公一　（亜細亜大学教授　本学会正会員）
講義題目　　キャリア発達とメンタリング
司　会　　大坊　　郁夫　（大阪大学）

研修会Ｂ p.8

９月５日（日）１２：４５～１４：１５　（１号館１２４教室）

講　師　　正田　　亘　（常磐大学教授　本学会名誉会員）
講義題目　　五感の体操～新しい安全運動技法～
司　会　　森下　高治　（流通科学大学）

研究発表（ポスター発表）

第１日　９月４日(土)　ポスター発表　ポスター掲示時間　9:30～11:30

在席責任時間　　奇数番号　9:30～10:15　　偶数番号　10:45～11:30

211 教室
看　護

211-1	無菌操作技術修得のための学習方法（その１） －注射器の操作検定の導入－	埼玉医科大学短期大学　看護学科 埼玉医科大学短期大学　看護学科 埼玉医科大学短期大学　看護学科 埼玉医科大学短期大学　看護学科 埼玉医科大学短期大学　看護学科 埼玉医科大学短期大学　看護学科 埼玉医科大学短期大学　看護学科	○ 藤島和子 臼井恵美 高原素子 玉木ミヨ子 纐纈葉月 蒲生澄美子 関口恵子	11
211-2	看護学生（二年課程）の基礎看護学実習についてのストレス（その２）	東京都立青梅看護専門学校 千葉大学	○ 加藤奈保美 内海　滉	12
211-3	無菌操作技術修得のための学習方法（その２） －注射器の操作検定における検定群と非検定群の修得度の比較－	埼玉医科大学短期大学　看護学科 埼玉医科大学短期大学　看護学科 埼玉医科大学短期大学　看護学科 埼玉医科大学短期大学　看護学科 埼玉医科大学短期大学　看護学科 埼玉医科大学短期大学　看護学科 埼玉医科大学短期大学　看護学科	○ 臼井恵美 藤島和子 高原素子 玉木ミヨ子 纐纈葉月 蒲生澄美子 関口恵子	13
211-4	安全行動に関する看護師の特性調査 －安全性格診断システムを使用して－	国立病院機構函館病院 国立病院機構釜石病院 元国立病院機構八雲病院	○ 佐々木妙子 菊池洋子 山内和枝	14
211-5	ゲームが学童期の子どもに影響する保護者の認識	県立長崎シーボルト大学 県立長崎シーボルト大学 群馬大学 千葉大学	○ 中　淑子 林田りか 草野美根子 内海　滉	15
211-6	事前情報が看護援助に与える効果	北海道大学　医学部保健学科 北海道大学　医学部保健学科	○ 宮島直子 森下節子	16

212 教室
発達・教育

212-1	中学生・高校生・大学生の主観的ウェルビーイング（６）	帝京平成大学　健康メディカル学部	○ 角野善司	17
212-2	長欠学生の大学生活４年間に渡る適応パターンに関する－考察 －長欠開始時期別群からみた長欠学生のパターン化－	日本大学　経済学部	○ 土屋明夫	18
212-3	大学生の被援助志向性とその抑制要因に関する研究 －ディストレス開示、援助不安の視点から－	明治学院大学大学院　心理学研究科	○ 飯田敏晴	19
212-4	看護学生の達成動機に関する研究 －自己教育力の育成との関連から－	熊本大学　医学部保健学科 信州大学　医学部保健学科 千葉大学	○ 森田敏子 松永保子 内海　滉	20
212-5	就職活動に対する自己効力－測定尺度作成の試み－	東京富士大学　経営学部 東京富士大学　経営学部	○ 太田さつき 岡村一成	21
212-6	人格の偉大性要因について IX －人格の「やさしさ」類型化の試み（３）－	城西大学　女子短期大学部 共立女子大学	○ 藤田主一 高嶋正士	22

212-7	性教育におけるアサーション・トレーニングの活用	桐生短期大学　生活科学科	○ 宇部弘子	23

213 教室
産業・職業

213-1	「やらない」症候群	東京都立科学技術大学　工学部	○ 大澤　光	24
213-2	外乱により誘発されるエラーの発生メカニズムに関する実験的研究	大阪大学大学院　人間科学研究科 大阪大学大学院　人間科学研究科 大阪大学大学院　人間科学研究科 産業安全研究所 名古屋工業大学大学院　工学研究科	○ 太刀掛俊之 臼井伸之介 篠原一光 中村隆宏 神田幸治	25
213-3	特性的自己効力感が心理的ストレス反応に及ぼす影響の検討 －適応に関する個人要因検討の試み－	鉄道総合技術研究所　人間科学研究部	○ 鈴木綾子	26
213-4	状況認識手法を用いた事故事例分析	労働科学研究所・関東学院大学文学部 労働科学研究所 労働科学研究所 労働科学研究所 労働科学研究所･関東学院大学人間環境学部	○ 細田　聡 施　桂栄 奥村隆志 余村朋樹 井上枝一郎	27
213-5	若年層のキャリア意識の形成要因に関する探索的調査	東京富士大学　経営学部 東京富士大学　経営学部	○ 関口和代 岡村一成	28
213-6	コンピュータ入門教育における諸問題（２） －ＭＳ-ＷＯＲＤに対する初心者の反応－	関東学院大学　人間環境学部	○ 伊藤典幸	29

214 教室
社会・文化

214-1	日本人と韓国人の原因帰属の類似性と相違性 －アジア的帰属傾向について－	白梅学園短期大学　心理学科 立正大学　心理学部	○ 荻野七重 齊藤　勇	30
214-2	動物のいる風景（６） －犬は飼い主に似るか②－	麻布大学　環境保健学部	○ 田之内厚三	31
214-3	子育て期女性の社会参加に関する一考察 －地域三世代子育て支援活動を通じての育ち合いから－	立命館大学大学院　社会学研究科	○ 河野　望	32
214-4	パーソナルスペースと性格特性との関連性 －接近者の印象評定も含めて－	文京学院大学大学院　人間学研究科 文京学院大学大学院　人間学研究科 文京学院大学大学院　人間学研究科 文京学院大学　人間学部 文京学院大学大学院　人間学研究科	○ 雨森雅哉 中尾彩子 松尾千尋 野瀬　出 山岡　淳	33
214-5	メール文字のイメージ解釈についての研究	東京富士大学　学生相談室 東京富士大学　経営学部	○ 木村たき子 岡村一成	34
214-6	鉄道旅客の迷惑行為に対する対処方法についての基礎的検討	鉄道総合技術研究所　人間科学研究部	○ 山内香奈	35

215 教室
認知・感情

215-1	EQ 測定のための基礎的研究 －共感性に関する質問項目と顔写真との関係－	東京富士大学　経営学部 東京富士大学　経営学部	○ 浮谷秀一 岡村一成	36
215-2	個人識別属性と顔のマッチング	山口県警科学捜査研究所 山口大学　教育学部	○ 福本純一 福田　廣	37

215-3	大学生における「気まずさ」喚起状況	信州大学大学院　人文科学研究科 信州大学　人文学部	○ 小林桂子 内藤哲雄	38
215-4	幼児をもつ母親の育児不安と疲労の自覚症状に関する研究	県立長崎シーボルト大学 県立長崎シーボルト大学 群馬大学 千葉大学	○ 林田りか 中　淑子 草野美根子 内海　滉	39
215-5	注意機能尺度の作成の試み（７）	東北大学大学院　情報科学研究科 東北大学大学院　情報科学研究科 東北大学大学院　情報科学研究科	○ 鈴木大輔 和田裕一 岩崎祥一	40
215-6	砂に触ることによるリラクセーション効果の検討 －生理心理的指標を用いて－	文京学院大学大学院　人間学研究科 文京学院大学　人間学部 文京学院大学大学院　人間学研究科	○ 大野高志 野瀬　出 山岡　淳	41

第２日　９月５日(日)　ポスター発表　ポスター掲示時間　9:30～11:30

在席責任時間　　奇数番号　9:30～10:15　　偶数番号　10:45～11:30

211 教室
介　護

211-1	ALS 患者の PAC 分析例	エム･オー･エー健康科学センター 文京学院大学大学院　人間学研究科	○ 木村友昭 山岡　淳	42
211-2	入院中の脳梗塞患者における自尊感情と日常生活動作の障害との関連	九州大学　医学部保健学科	○ 篠原純子	43
211-3	介護保健施設の利用者・利用者家族・職員の意識分析	日本大学　商学部 白百合女子大学大学院　文学研究科 日本大学　歯学部	○ 外島　裕 佐藤恵美 山﨑晴美	44
211-4	映像法による障害者に対する態度変容効果について	北星学園大学　社会福祉学部	○ 豊村和真	45
211-5	介護保険施設の利用形態別の意識分析	白百合女子大学大学院　文学研究科 日本大学　商学部 日本大学　歯学部	○ 佐藤恵美 外島　裕 山﨑晴美	46
211-6	単列配置の警告ブロックにおける方向情報の提供 －全盲被験者による点の大きさ判断－	東京大学先端科学技術研究センター	○ 布川清彦	47
211-7	福祉系大学におけるメンタルフレンドの課題に関する研究	福島学院大学　福祉学部	○ 鑑さやか	48

212 教室
臨床・相談

212-1	カウンセリングにおける名人芸的なるもの（２）	杉野服飾大学	○ 蓮見将敏	49
212-2	Self-Differential 尺度の検討	日本大学大学院　文学研究科	○ 秋元幸見	50
212-3	自伝的記憶の想起が気分に及ぼす影響について －回想的手法「思い出絵日記」をもちいて－	群馬社会福祉大学　社会福祉学部 群馬社会福祉大学　社会福祉学部	○ 梶原隆之 山村　豊	51
212-4	自己分化インベントリーにおける高校生を対象とした検討	日本大学大学院　文学研究科	○ 徳光紗妃	52

212-5	概日リズム睡眠障害と精神疾患との関連 －ＰＩＬに着目して－	国立精神・神経センター武蔵病院 むさしクリニック 国立精神・神経センター武蔵病院 国立精神・神経センター武蔵病院 山梨県立中央病院 杏林大学 精神神経科学振興財団	○ 吉田統子 梶村尚史 堀　達 中林哲夫 渡邊　剛 中島　亨 高橋清久	53
212-6	看護学生に用いたロールレタリングの効果に関する研究	徳島大学　医学部 千葉大学	○ 關戸啓子 内海　滉	54
212-7	特別入試合格者における「入学前教育」の効果について —自己効力の変容を通じての考察—	立命館大学アドミッションズオフィス	○ 宮下明大	55

213 教室
発達・教育、看護

213-1	柔道の応用心理学的研究 －（１）柔道に対するイメージ調査の検討－	国士舘大学　武道徳育研究所 国士舘大学　体育学部武道学科 日本武道学会 城西大学　女子短期大学部	○ 中島多木 森脇保彦 飯田穎男 藤田主一	56
213-2	軽度精神発達遅滞の子どもたちの発達保障を考える（１） －Ｋ市における「親子教室」の子どもたちの取り組みより－	京田辺市健康推進課 京田辺市療育教室	○ 荒木美知子 長崎純子	57
213-3	児童期から青年前期における登校困難からの回復過程と教育支援－自己認識と論理的思考及び社会的交流活動の発達連関をもとに－	京都大学高等教育研究開発推進ｾﾝﾀｰ	○ 田中真介	58
213-4	軽度精神発達遅滞の子どもたちの発達保障を考える（２） －Ｋ市における「親子教室」の子どもたちの取り組みより－	京田辺市療育教室 京田辺市健康推進課	○ 長崎純子 荒木美知子	59
213-5	看護学生における心肺蘇生法実施に関する意識	岐阜大学　医学部看護学科 信州大学　医学部保健学科 熊本大学　医学部保健学科	○ 松田好美 松永保子 森田敏子	60
213-6	開放性次元による外向傾向の代替可能性 －ハイリスク職種の選抜・教育に関する考察－	防衛庁　航空自衛隊航空安全管理隊	○ 廣島克佳	61
213-7	看護学生の意識構造 －患者から拒絶反応を受けた場合－	呉大学 足利短期大学 広尾看護専門学校 北多摩看護専門学校 千葉大学	○ 金子潔子 弓削美鈴 渡辺ナツ子 網野寛子 内海　滉	62

214 教室
人　格

214-1	TV ゲームとパーソナリティに関する一考察	桜美林大学大学院　国際学研究科	○ 橋本泰子	63
214-2	性能的性格（３） －慎重・綿密性の自己評定値と作業成績との関連その２－	東海女子大学　人間関係学部 アイ　シー　ディー 適合性評価研究所	○ 川島大司 岡村美奈 久米　稔	64
214-3	「血液型性格学」は信頼できるか（第２１報） －埋もれた心理学史を尋ねて　第２報－目黒宏次・澄子の「人間関係学」を評論する	日本大学 東京富士大学	○ 大村政男 浮谷秀一	65

214-4	MSC（創造的構え）テスト改訂の試み（８） ータイプ・グループによる検討　その II－	日本福祉教育専門学校 適合性評価研究所 秋田桂城短期大学 秋田桂城短期大学 文化女子大学 松本短期大学	○ 寺澤美彦 久米　稔 成田　猛 高野隆一 伊賀憲子 内藤美智子	66
214-5	妻の自己開示と夫婦関係満足度の関連性 －自己開示尺度の作成と関連要因との相関関係－	武蔵野大学　通信教育部	○ 虎谷美保 冨重健一	67
214-6	笹本戒浄と元良勇次郎の研究交流の序論的研究 －明治 41 年 7 月 8 日の讀賣新聞の記事を中心にした予備的検討－	龍谷大学大学院　文学研究科	○ 高木宣行	68
214-7	ユーモア測定尺度の作成（２） －性差・年齢差・性格検査との関連－	関西福祉科学大学　社会福祉学部	○ 宇惠　弘	69

215 教室
検査・測定，社会・文化

215-1	スポーツ選手の精神的適性に関する研究 －柔道 T 選手と T 高校女子柔道部員の事例的研究－	桐蔭横浜大学　工学部 桐蔭横浜大学　工学部 桐蔭横浜大学　工学部	○ 増地克之 藤江　学 吉鷹幸春	70
215-2	芸能活動を用いたサポート校での不登校生への援助 －家庭内暴力を繰り返した、一少年の SCT の変化について－	東京自由学園　カウンセリング室	○ 高野真吾	71
215-3	内田クレペリン検査の評価法について ―定型モデルと健常者一万人モデル―	日本・精神技術研究所	○ 山田耕嗣	72
215-4	共通項目法による一般化部分採点モデルの項目母数の等化 －対称性を持たせた等化係数の推定－	筑波大学大学院　人間総合科学研究科	○ 服部　環	73
215-5	イップスの研究（１）－完全主義的思考とＹＧ－	白梅学園短期大学 中央学院大学　商学部	○ 林　潔 八木孝彦	74
215-6	仰臥位と座位のパーソナルスペース	リバーサイドホスピタル 信州大学　人文学部	○ 石橋里美 内藤哲雄	75
215-7	イップスの研究（２）－完全主義的思考とＭＭＰＩ－	中央学院大学　商学部 白梅学園短期大学	○ 八木孝彦 林　潔	76

研究発表（口頭発表）

第１日　９月４日(土)　口頭発表①・トークイン　10:00～11:00

121 教室
看　護

司会：佐藤清公

121-1	10:00	基礎看護学実習における３年課程と２年課程の自己像の比較	兵庫医科大学　附属看護専門学校 千葉大学	○	髙橋友子 内海　滉	77
121-2	10:30	医療安全におけるモティベーションの重要性に関する研究Ⅰ　－リピーターと安全意識の関係分析－	愛知新城大谷大学 名城大学大学院　都市情報学研究科	○	天野　寛 酒井順哉	78

122 教室
看　護

司会：蓮見将敬

122-1	10:00	小児看護学実習における事故とリスク要因の検討	群馬大学 県立長崎シーボルト大学 県立長崎シーボルト大学 千葉大学	○	草野美根子 中　淑子 林田りか 内海　滉	79
122-2	10:30	看護学生の達成動機に関する研究 －自己効力感との関連において－	信州大学　医学部保健学科 熊本大学　医学部保健学科 千葉大学	○	松永保子 森田敏子 内海　滉	80

123 教室
発達・教育

司会：高久信一

123-1	10:00	幼児間の会話発達に関する研究（８） －同輩幼児間における会話の質的変化と教育的課題－	龍谷大学大学院　文学研究科	○	山本弥栄子	81
123-2	10:30	保育所における食事道具の扱い方の発達的研究（５） －２歳半から３歳前後における食事場面の発達と保育のポイント－	京都市内保育園	○	守島　恵	82

124 教室
交通，産業・職業

司会：松本　洸

124-1	10:00	ワークサンプリング法による船舶ブリッジチーム員の見張り方法に関する一考察	神戸大学　海事科学部 神戸大学　海事科学部	○	村井康二 林　祐司	83
124-2	10:30	列車運転スキルの獲得過程に関する研究 －列車運転の手順と構造化の試み－	鉄道総合技術研究所人間科学研究部	○	深沢伸幸	84

第１日　９月４日(土)　口頭発表①・トークイン　13:15～14:45

121 教室
発達・教育

司会：山﨑晴美

121-3	13:15	障害の重い青年期以降の労働問題と人格性発達Ⅱ －２次元可逆操作期における労働に対する主体的関わりと認識の形成－	社会福祉法人おおつ福祉会	○	山田宗寛	85
121-4	13:45	保健室利用と不登校に対する教師の意識の一側面（２） －「１０年経験者研修」参加教師に対する調査から－	関西学院大学教職教育研究センター	○	小谷正登	86

121-5	14:15	国家の変容と心理教育に関する考察 －ジェンダー思潮の焦点化を端緒として－	日本認定心理士会	○	望月雅和	87

第１日　９月４日(土)　口頭発表②・ラウンドテーブル　15:00～16:00

121 教室　　司会：浮谷秀一

産業・職業

121-61	15:00	職場におけるセクシュアル・ハラスメント ―その心理・社会的基底（１）―	日本経営協会総合研究所 駒沢女子大学　人文学部 慶應義塾大学　文学部	 ○	加藤　理 吉田　悟 南　隆男	88
121-62	15:00	職場におけるセクシュアル・ハラスメント ―その心理・社会的基底（２）―	日本経営協会総合研究所 駒沢女子大学　人文学部 慶應義塾大学　文学部	 ○ 	加藤　理 吉田　悟 南　隆男	89
121-63	15:00	職場におけるセクシュアル・ハラスメント ―その心理・社会的基底（３）―	日本経営協会総合研究所 駒沢女子大学　人文学部 慶應義塾大学　文学部	○ 	加藤　理 吉田　悟 南　隆男	90

第１日　９月４日(土)　口頭発表①・トークイン　13:15～15:30

122 教室　　司会：藤田主一

社会・文化，産業・職業

122-3	13:15	「癒し」の心理尺度作成の試み －とくに芸術作品に対する癒し－	日本大学　芸術学部 日本大学　商学部 日本大学　歯学部 日本大学　総合科学研究所	○ 	松本　洸 外島　裕 山﨑晴美 佐藤清公	91
122-4	13:45	個人のパーソナリティ特性と組織のＨＲＭ施策に対する認知が職務行動に与える影響	愛知学院大学経営学部国際経営学科 明治大学　経営学部経営学科 日本大学　商学部	○ 	竹内規彦 竹内倫和 外島　裕	92
122-5	14:30	個人のパーソナリティ特性と個人－環境適合がストレスに与える影響	明治大学　経営学部経営学科 愛知学院大学経営学部国際経営学科 日本大学　商学部	○ 	竹内倫和 竹内規彦 外島　裕	93
122-6	15:00	自然災害の中のヒヤリ・ハット体験 －山口県宇部市を対象にした高潮災害のケース－	常磐大学　人間科学部	○	申　紅仙	94

123 教室　　司会：松田浩平

検査・測定

123-3	13:15	多変量解析による印刷手法の分類	科学警察研究所　法科学第四部	○	関　陽子	95
123-4	13:45	筆字固定時期の推定	愛知工業大学　応用化学科 愛知県警察本部　科学捜査研究所 愛知県警察本部　科学捜査研究所 科学警察研究所　文書鑑定室	○ 	三井利幸 若原克文 菅原博嗣 関　陽子	96
123-5	14:30	筆跡座標値の測定方法の違いが筆者識別に及ぼす影響について	愛知県警察本部　科学捜査研究所 愛知県警察本部　科学捜査研究所 愛知工業大学　応用化学科	○ 	若原克文 菅原博嗣 三井利幸	97

123-6	15:00	筆跡からの筆圧の指標化に関する研究（Ⅱ）	愛知県警察本部　科学捜査研究所 愛知県警察本部　科学捜査研究所 愛知工業大学　応用化学科	○	菅原博嗣 若原克文 三井利幸	98

124 教室

司会：伊坂裕子

看　護

124-3	13:15	プロセスレコードを用いた他者理解と自己理解に関する計量的分析 III	熊本保健科学大学　保健科学部 熊本保健科学大学　保健科学部 熊本保健科学大学　保健科学部 千葉大学	○	吉田一子 山本勝則 多久島寛孝 内海　滉	99
124-4	13:45	プロセスレコードを用いた他者理解と自己理解に関する計量的分析 IV	熊本保健科学大学　保健科学部 熊本保健科学大学　保健科学部 熊本保健科学大学　保健科学部 千葉大学	○	山本勝則 吉田一子 多久島寛孝 内海　滉	100
124-5	14:30	看護学生のストレスに関する研究（その１） －ストレスの因子構造－	杏林大学　保健学部 杏林大学　保健学部 千葉大学	○	今留　忍 矢口久美子 内海　滉	101
124-6	15:00	看護学生のストレスに関する研究（その２） －全日制と定時制の比較－	杏林大学　保健学部 杏林大学　保健学部 千葉大学	○	矢口久実子 今留　忍 内海　滉	102

第２日　９月５日(日)　口頭発表①・トークイン　10:00～11:00

122 教室

司会：高橋秀和

発達・教育，人格

122-1	10:00	教育評価の研究（その４４） －ヒト　一生の学習時代を考える－	大泉会四期会	○	岸本英男	103
122-2	10:30	発達と発達保障への研究 －人間発達における創出の階層への移行について－	京都発達研究会 人間発達研究所	○	小倉昭平 田中昌人	104

大会記念講演

大会記念講演　9月5日（日）

14：30～16：00　（1号館131教室）

講演者　鳥山　敏子

（賢治の学校　主宰）

演 題　“育ちなおし”について

司会　嘉部　和夫（日本大学　大会準備委員長）

【講演要旨】

一年間ドイツで学び、これまであいまいな表現で人間をみてきた自分の問題に気づかされた。シュタイナー教育には「人間をどのようにみるか」についての根本の考え方がある。

佐世保での小６の事件は、私にとって特異な響きをもつものではない。それは、今の時代を生きる子どもたちのこころとからだ、魂の成長を支え、助け、うながすだけの家庭、地域、学校での教育が、この日本では、まだ本当に創造できるところまでいっていない現実をたくさんの事件が浮き彫りにして気づかせてくれているからだ。表現をかえれば、子どもたちの実体に沿った「人間学」の欠如ということもできる。人間を「霊的」「魂的」「肉体的」に考察することを抜きに、人間の見えない部分にも、肉体にも深く働きかけることはできないともいえるだろう。

【講演者略歴】

ＮＰＯ法人東京賢治の学校代表。1941年広島生まれ。香川大学教育学部卒業。30年間東京都の公立小学校に勤務しながら一男一女を育てる。生徒にいきいき働きかける革新的な授業を展開。1976年自分こわしのために竹内演劇研究所に入る。1994年退職、子どもたちが希望のもてる社会を作り出すために宮沢賢治の『農民芸術概論要綱』の精神をよりどころに「賢治の学校」をたちあげる。以来全国の親や子どもや、教師、若者たちの苦しみのもとをさぐり、人生の課題を見つけだしていく手伝いをするワークショップを展開。2001年より、再び教師として子どもたちの前にたち、シュタイナー教育を学ぶために１年間ドイツに留学し、今夏帰国。

［主な著書や活動］

『からだが変わる授業が変わる』（晩成出版）『いのちに触れる』（太郎次郎社）『賢治の学校』（サンマーク出版）『居場所のない子どもたち』（岩波書店）『生まれ変わる家族』（法蔵館）『生きる力をからだで学』（トランスビュー）他多数。グループ現代との共同制作の映画、「鳥山先生と子どもたちの１ヶ月」「みんなが孫悟空」「先生はほほ一つと宙に舞った」「自然農」「あの山を残そう子どもたちのために」「未来からのまちづくり先駆者」「わたしの多摩川わたしのまち」他多数。

公　開　講　演

公開講演１　９月４日（土）１６：１５～１７：４５

（１号館１２２教室）

講演者　小野寺　富男

（株式会社　Ｇプラン）

演題　マーケテイングの実際

司会　松本　洸（日本大学　準備委員）

【講演要旨】

1. マーケテイングとは（領域、考え方の変遷）
2. マーケテイングの面白さ、深さ／いつも成功するとは限らない
   何故成功するのか、何故失敗するのか
3. マーケテイングの実際ー事例ー
   企業におけるマーケテイングの実践活動をご紹介する
4. マーケテイングと心理学とのかかわり
   マーケテイングとの接点に触れながら、心理学の重要性を説く
5. これからのマーケテイング（21 世紀のマーケテイングに求められるものは何か）

【講演者略歴】

大学院博士課程修了／実験心理学　心理統計学

1976 年　ソニー・ヤングラボラトリー入社
　　その後ソニー株式会社へ転籍

1996 年　ソニー・ヤングラボラトリー
　　取締役　調査企画部門　部門長

1999 年　ソニー株式会社退社
　　ジー・プラン株式会社設立　代表取締役　現在に至る

［主な著書や活動］

1. 主な商品企画／開発サポート他（～1999 年）

①ウォークマン　②８ミリビデオ　⑨ＣＤ　④カラーテレビ　⑤プレステ　等

2. ソニーブランドイメージ、事業戦略調査を担当（～1999 年）
3. 現在、ブランド戦略、商品開発のコンサルタント事業、中国でのブランド調査
4. 飲料メーカーの商品開発顧問

公開講演２

９月４日（土）１６：１５～１７：４５

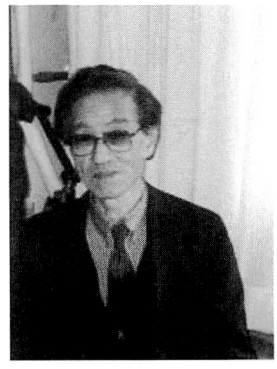
（１号館１２３教室）

講演者　野口　　薫

（日本大学文理学部　教授）

演題　　交通の心理学

司会　　嘉部　　和夫（日本大学　大会準備委員長）



【講演要旨】

「安全運転」という言葉はドライバーにとって現実感をもたず、自分にとってどのような運転が危険であるかということこそが重要である。そこで、ここでは交通心理学の立場から、まずドライバーの心理と運転行動のメカニズムを示し、次に「危険運転」にはどのようなタイプがあるかを示し、それぞれのタイプの危険にどのように対処したらよいかについて述べる。危険運転のタイプは次のように分類される。

1 無知　2 不注意　3 誤知覚　4 誤判断　5 誤振作　6 リスク・ティキング

7 コミュニケーション不足

【講演者略歴】

千葉大学文理学部（心理学）卒業、東京都立大学大学院修士課程（心理学）修了

ミュンヘン大学医学光学研究所客員研究員、トリエステ大学心理学研究所客員教授、

千葉大学工学部・大学院自然科学研究所（デザイン科学）教授を経て、

現在、日本大学文理学部・大学院文学研究科（心理学）教授

［主な著書や活動］

月刊誌『人と車』、『自動車学校』に「危険運転の心理」を連載

「運転者の心理と交通事故」川上他編『交通警察』立花書房

「道路・交通」望月・大山編『環境心理学』朝倉書店

シャイナー著／野口・山下訳『交通心理学入門』サイエンス社

現在、国際交通安全学会理事

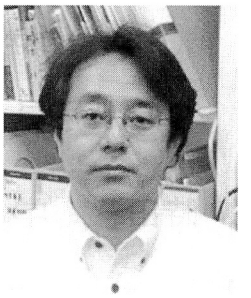
公開講演３

９月５日（日）１２：４５～１４：１５

（１号館１２２教室）

講演者　内藤　佳津雄

（日本大学文理学部　助教授）



演題　痴呆高齢者の介護

司会　外島　裕（日本大学　大会事務局長）

【講演要旨】

現在の高齢者介護の分野では、痴呆介護の質量の向上が重要課題の１つとなっている。新しい痴呆介護の潮流としては、小規模なグループを単位とする「グループホームケア」を基本としており、心理的影響に配慮した環境整備を行う、コミュニケーションを重視する、本人のできることを支援し自尊心を高める、といったケアが求められている。これらはまさに「心理的な」ケアであり、痴呆ケアの質の向上を図ることや、介護職員の技術の向上やストレス緩和などについて心理学が貢献できる部分が大きい。この講演では、現在の痴呆介護の動向と課題について整理し、そのなかで心理学に期待される役割について考えていきたいと思います。

【講演者略歴】

1992 年　日本大学大学院文学研究科心理学専攻博士後期課程満期退学
1997 年　厚生省老人保健福祉局老人福祉専門官
1999 年　日本社会事業大学社会事業研究所専任講師
2000 年　日本大学文理学部専任講師
2002年　現職

［主な著書や活動］

主な著書：痴呆性高齢者の介護のためのモデルケアプラン（共訳編）ワールドプランニング（2004）、福祉キーワードシリーズ：痴呆ケア（共監著）　中央法規出版（2003）、介護保険辞典（共編著）中央法規出版（2001）

社会的活動：厚生労働省要介護認定調査検討会委員（2000～2002）、高齢者痴呆介護研究・研修東京・仙台・大府センター指導者研修講師（2001～）

公開講演４　９月５日（日）１２：４５～１４：１５

（１号館１２３教室）

講演者　樋口　紀男

（日本大学商学部　教授）

演題　ＣＦから見た消費者心理

司会　時田　学（日本大学　大会事務局）

【講演要旨】

「歌は世につれ、世は歌につれ」という。このことは広告にも言える。

広告は時代の人々の意識を表し、時代の空気を振動させることにより時代の風俗をある方向に推し進め、時代を形づくる。広告は「時代の合わせ鏡」である。

広告のこの力はどこから来るのか。広告の作り出す世界は「事実」でもなければ「虚偽」の世界でもない。それは人々の「心理的世界」である。この「心理的世界」は社会の価値体系、つまり「環境世界」「企業世界」「生活世界」が共有する「客観的相関物」といえる。本報告では、時代相の推移の中で広告どのような「客観的相関物」を紡ぎだしてきたかを見ていきたい。

【講演者略歴】

1940 年兵庫県生まれ。

中央大学大学院修士課程商学研究科修了。（株）博報堂入社、調査、マーケテイング、研究開発に従事。広告キャンペーン、商品・ブランド開発、事業開発、都市開発、マーケティング・ビジネス・システムの開発等のプロデュースを担当。その間、現代風俗研究会、科学技術庁・安全フォーラム等に参画。

現在、日本大学商学部教授、広告コミュニケーション論、消費論、消費・サービス論、消費者行動論を担当。

［主な著書や活動］

著書：『マーケテイング・ソリューション』（共著．白桃書房・2001）、『マーケテイング流通戦略』（共著．白桃書房．2001）、『経営学検定試験公式テキスト』「キーワード集」「①経営学の基本」「②マーケテイング」（いずれも中央経済社．2003）。論文‥「製品の安全性と情報公開ー広告の＜公共空間＞の可能性を探るー」（日本消費経済学会年報　第 23 集・2001）竿。学会報告「ｅービジネスと市場社会の変容」（日本消費経済学会　2004）等。

学会研修委員会企画

第 3 回 研 修 会

学会研修委員会企画　第３回研修会

研修会Ａ　９月５日（日）１０：００～１１：３０

（１号館１２４教室）

【講師】　小野　公一　（亜細亜大学教授　本学会正会員）

【講義題目】　キャリア発達とメンタリング

【司会】　大坊　郁夫　（大阪大学）

【講義要旨】

近年、わが国の産業界では成果主義という言葉と並行して“キャリアの自己責任”という言葉が急激にその勢いを増し、企業の教育訓練費が削減され、その一方で、人員削減の圧力は、必ずしも弱まってはいない。そのような中で、かつては働く人々のキャリア発達に重要な役割を果たしていた教育訓練機会は奪われ、日常的なキャリア形成の重要な手段であったＯＪＴについても、そのために必要な時間的・精神的なゆとりが、上司や先輩から奪われ、単なる仕事上の知識・技術だけでなく、職業生活に必要なさまざまな規範やノウハウを、他者通して自動的・受動的に学び取る機会が奪われてきている。しかしながら、個人の自己啓発意欲や努力だけでなく、他者の経験や知識を通した代理学習や他者の模倣は、キャリア発達の促進には欠かせないものと考えられる。

この講義では、働く人々のキャリア発達を支援するさまざまな活動・態度について、私的な人間関係を基盤としたメンタリングという視点から、わが国において実施した実証研究のデータをもとに、その機能や効果などを論じていく。なお、メンターが提供する支援は、職業人として姿勢やモラルの問題から、キャリアに関する相談や指導、仕事生活に必要な知識・技術、今の職場での人間関係のコツやちょっとした情報の提供などがあり、直接教えるだけでなく、相談相手や行動のモデルになるなどさまざまな形をとる。

【講演者略歴】

1980年3月　亜細亜大学大学院　経営学研究科博士後期課程　単位取得退学
1980年4月～1983年2月　株式会社　社会調査研究所（現：インテージ）
1985年4月　亜細亜大学経営学部　専任講師
現　在　同学部　教授

［主な著書や活動(単著)］

2003年　『キャリア発達におけるメンターの役割』白桃書房
1997年　『“ひと”の視点から見た人事管理』白桃書房
1993年　『職務満足感と生活満足感』白桃書房
2003年　「看護師のキャリア発達とメンター」『日本労務学会誌』第5巻第1号
2003年　「人事評価が職務態度に及ぼす影響」『亜細亜大学経営論集』第39巻1号

学会研修委員会企画　第３回研修会

研修会Ｂ　９月５日（日）１２：４５～１４：１５

（１号館１２４教室）

【講師】　正田　亘　（常磐大学教授　本学会名誉会員）

【講義題目】　五感の体操～新しい安全運動技法～

【司会】　森下　高治　（流通科学大学）

【講義要旨】

日本の産業現場で実施されている安全運動には、ＫＹＴ（危険予知訓練）、ＴＢＭ（ツール・ボックス・ミーティング：道具箱などに腰かけながら行う安全についての話し合い）、指差呼称、ラジオ体操などがある。一番普及しているのはラジオ体操であろう。しかし、この体操も真剣にやっている人は意外と少ない。若者の中には、おざなりにやっている人が多い。これでは作業にかかる前の準備運動としては効果があがらない。どんな運動でもそうであるが、長く続けられるとマンネリ化し、人々に飽きられる。従来の安全運動に見直しがきているように思われる。

そこで、始業時・終業時・休憩時間などに手軽にでき、作業者に主体的・積極的に参加してもらえ、やって面白かった、またやってみたいという安全運動のプログラムの開発を試みた。そのためには、遊びの要素を取り入れたゲーム性をもたせることが必要になる。また、自己の五感に関する能力を体験的に学習してもらうため、できるだけ道具を使用することを考えた。既存の道具がないときは、設計図を考え、新しい道具を町工場で作ってもらうこととした。さらに、ラジオ体操のように毎日同じことを繰り返すのではなく、日替わりメニューを用意することとした。プログラムは個人用と集団用から構成されている。

【講演者略歴】

1958 年　立教大学大学院文学研究科応用心理学修士課程修了

1971 年　立教大学教授

1984 年　学術博士（大阪大学）

1998年　常磐大学教授、立教大学名誉教授

［主な著書や活動］

『職場の事故防止』（総合労働研究所 1972）、『安全心理』（技術評論社 1981）、『環境心理入門』（学文社 1984）、『新版　産業心理入門』（縫合労働研究所 1985）、『産業・組織心理学』（恒星社厚生閣 1992）、『増補新版　人間工学』（恒星社厚生閣 1997）、『五感の体操』（学文社　2001）、『危険と安全の心理学』（中央労働災害防止協会　2001）ほか

五感の体操

― 新しい安全運動技法 ―

正　田　　亘
（常磐大学人間科学部）

キーワード：五感　安全運動技法　事故予防

【プログラム開発の契機】安全講習会の席上、受講者の人に「あなたの利き目はどちら？」とか「前方から危険物が飛来してくるようなとっさの時、あなたはどちらへ逃げますか？」と質問したところ殆どの人が答えられなかったことにある。人間は自分自身の能力や特性についての知識や情報を持っていないことに驚かされた。特に五感全般に関する知識は非常に少ない。安全行動を維持し、不安全行動を減らすためには五感についての基礎知識を増やし、自己の能力を体感的に学習し、意識下に安全を浸透させることが有効と考え、五感を活用する訓練技法を開発することとした。

【準備期間と試行研究】鹿島建設株式会社環境安全部、日本ウイルソンラーニング株式会社の協力を得て、1995年から丸1年間の準備期間と試行研究を土木・建設等の現場で行ないその成果を1996年に発表した。この年に発表された第1版は表1に示されるように個人用12種目、集団用12種目から構成されている。その後、1999年に新訂版が作成され、個人用12種目、集団用6種目が追加された。

表1　五感いきいき安全プログラムの内容

	個人用		集団用		
曜日	種目	五感テーマ	種目	五感テーマ	人数
	第1週		第1週		
月	「利き目確認運動」	視覚	「まちがいさがし運動」	視覚	2人
火	「連想ゲーム」	聴覚	「こだまがえし運動」	聴覚	2人
水	「青竹フミフミ運動」	触覚	「穴あて運動」	触覚	2人
木	「閉眼一本足運動」	平衡感覚	「玉入れ運動」	制御運動	4～5人
金	「鼻クンクン運動」	臭覚	「棒つかみ運動」	敏捷性	2人
予備	「筋肉ほぐし運動」	緊張－弛緩	「お疲れさん運動」	触覚	2人
	第2週		第2週		
月	「目のクリクリ運動」	視覚	「ジャンケンポン運動」	運動機能	2人
火	「イメージトレーニング」	イメージを描く	「射的運動」	退避行動	4人
水	「しゃがみ運動」	呼吸	「ソフトタッチ運動」	触覚	4人
木	「音あて運動」	聴覚	「接近運動」	視覚	2～3人
金	「ガムかみかみ運動」	味覚	「伝達リレー運動」	記憶力	7～10人
予備	「肩こりほぐし運動」	柔軟性	「タッチ・アンド・コール運動」	触覚	4～7人

【プログラムの実践展開】本プログラム開発のsponsorである鹿島建設株式会社では環境安全部が中心となり、1996年4月、不安全行動災害防止を目的とした心理学的アプローチによる安全プログラムの実施を開始した。具体的内容としては「五感いきいき安全プログラム」「安全カウンセリングプログラム」(管理監督者にカウンセリング技術を身につけてもらうためのビデオ教材60分、チェックシート付）の全社展開がこれである。監督者教育用教材、現場用実施ガイドブック、実施用小道具（教材）200組を作成し、全国支店の安全教育スタッフをインストラクターとして養成する研修を行なった。当初、研修に参加した受講者は鹿島357名、協力会社217名、合計574名にのぼった。また、道具セットが置かれた現場は土木102、建築98現場であった。各現場では、作業者の人々に理解を得るためと、どのようにプログラムを応用すればよいかを示すために、「実践マニュアル」を作った。このマニュアルは過去の災害事例に対して「五感安全いきいきプログラム」中のどの種目を実施すれば効果があがるかを示すものである。

【プログラム実施の効果】

(1) 一般作業者及び現場監督者の印象：筆者は本プログラムの本格的導入に際し、試行段階、予備実験の段階で土木・建築現場に何度も足を運び、現場の所長、管理監督者への指導助言を行ない、同時に作業者から本プログラムへの印象を聴取した。一般作業者からは“今日のゲームは非常に面白かった”“明日の種目は何ですか？”“五感の意味と安全行動の結びつきがよく分かった”“仲間との一体感が強まった”などと好評であった。一方、現場監督者からも“下請け業者間の横のつながりが良くなった”“職場の雰囲気が明るくなった”等の声が多かった。特に評判が良かったものとしては「閉眼一本足運動」「棒つかみ運動」があり、自分の結果を見て作業者が年齢による運動機能や敏捷性の低下を真剣に受け止めている場面があった。

(2) 質問紙調査：鹿島建設株式会社では1996年から1997年にかけて東北、関東、東京、横浜支店の9現場でプログラム実施効果の調査を行なった。調査対象は第1回（実施前）職長49名、一般作業員155名、第2回（実施後）職長52名、一般作業員173名である。調査方法は質問紙調査（5点法）で、各質問について1（全くそう思わない）～5（そう思う）の中で評価してもらい、各々0点、25点、50点、75点、100点を付し、100点を満点とし、全員の点数の平均点をグラフにまとめた。その結果の一部を図1に示す。

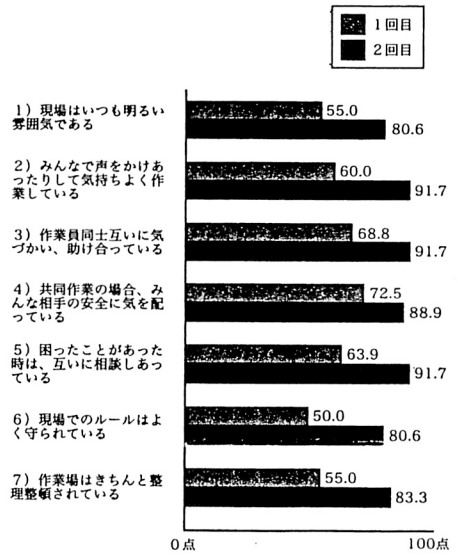


図1.　職場の雰囲気について（職長）

【引用文献】

正田亘・申紅仙・久慈洋子・朝日奈征治　1996　五感いきいき安全プログラムの開発　日本心理学会第60回大会発表論文集　341.

鹿島建設株式会社　1997　五感いきいき安全プログラム実践マニュアル～ヒューマンエラー防止のために～

正田　亘　2000　五感を活用した安全プログラムの開発とその効果　常磐大学人間科学論究　8号　1－10.

正田　亘　2001　『五感の体操』　学文社

（まさだ　わたる）

研究発表（ポスター発表）

無菌操作技術修得のための学習方法（その1）

―注射器の操作検定の導入―

○藤島和子　臼井恵美　高原素子　玉木ミヨ子　纐纈葉月　蒲生澄美子　関口恵子
（埼玉医科大学短期大学）

キーワード：検定・技術修得・無菌操作

はじめに　医療の現場で院内感染が問題になっている今日、看護師の行う無菌操作の技術は、欠くことのできない基本技術である。しかし、最近の学生は、生活体験の希薄さのためか、手先が不器用な学生が多く、「清潔なものを把持し、清潔を維持した操作ができない」等の行動がみられる。無菌操作技術の中でも、注射器の取り扱いは、無菌操作の基本的な知識が必要とされ、手先を使う細かい技術であることや、注射器の種類が多様であるため、修得しにくい技術である。

そのため、注射器操作のﾎﾟｲﾝﾄやｺﾂをおさえた教材を用い、段階的に学習することが、技術修得への一助となるのではないかと考えた。そこで、無菌操作の基本をふまえた、注射器操作の技術修得を目指し、「注射器の操作検定」を導入することにした。今回は、検定基準を作成し、自己学習用教材を作成・活用し、技術修得に対する有用性を考察した。

Ⅰ.研究目的　学習方法として注射器操作の検定を導入し、注射器操作のﾎﾟｲﾝﾄとｺﾂの修得度の変化を明らかにする。

Ⅱ.研究方法

1. 研究対象者：S短期大学看護学科2年次生のうち、研究の主旨に賛同し了解を得られた学生10名。
2. 研究期間：平成16年4月26日～平成16年6月10日。
3. 注射器操作の技術分析を実施（学生の意識と誤答分析）。
4. 3の分析を基に、注射器の操作の検定基準を作成。
5. 注射器操作のｺﾂをつかむための自己学習用教材を作成。
6. 検定の方法を設定し、検定基準にそって検定を実施。
7. 検定基準と自己学習用教材に関する学生の意識調査を自作の質問紙を使用し、留め置き法で調査。
8. 検定導入前後の注射器操作のﾎﾟｲﾝﾄとｺﾂの修得度として、3分間で薬液を無菌的に吸い上げた本数と無菌操作のｴﾗｰ回数の比較を行う。分析は統計解析ｿﾌﾄ SPSS を使用し単純集計およびｔ検定・x^2検定を行う。
9. 倫理的配慮：参加や中断は自由意思であり、それによって不利益が生じないこと口頭および文書で説明し承諾を得た。

Ⅲ.結果

1.注射器操作の技術分析　研究対象以外の3年次生10名に対し、注射器操作の難易度を調査したところ、最も難しい操作として「吸い上げ時の清潔の維持」と答える学生が多く、誤答分析と合わせてみても同様の操作が挙げられた。吸い上げ時の清潔の維持が、最も難しい注射器の大きさは2.5ml の注射器であると答える学生が多かった。

2.検定基準の作成と検定方法の設定　検定基準は技術分析の結果を基に作成し、医療の現場でも使用される注射器を選択した。課題は、吸い上げ操作のﾎﾟｲﾝﾄを中心に簡単なものから困難なものへ Rank 1 ～5 を設定した。Rank1 は注射器の特徴、清潔度の判断を口頭試問する課題とし、Rank2 からは、注射器での薬液の吸い上げを課題とし、操作が容易なものから困難なものへ段階的に設定した。Rank3 からは実際に医療の現場でも使用する薬剤を使用する課題とした。

検定は、放課後等に 3 回/週で実施し、学生が練習を行ってから検定に臨み、教員が評価表を用いて検定し、その結果のﾎﾟｲﾝﾄとｺﾂを中心にﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸした。

3.自己学習用教材（VTR・CAI・練習用物品）の作成と活用　VTR は注射器操作のｺﾂを中心に作成した。学生が困難な操作としていた「針がｱﾝﾌﾟﾙの縁に触れない」というﾎﾟｲﾝﾄに対しては、安定した注射器の支え方のｺﾂを注射器の大きさ毎に解説した。また、本研究ﾒﾝﾊﾞｰで作成した無菌操作の応用編の CAI を使用できるように準備した。練習用物品は、1～50ml の注射器と、ｱﾝﾌﾟﾙなどを VTR と CAI を参照しながら練習できるように貸し出した。

4.最終合格 Rank　期間中の最終の合格 Rank は Rank2 の学生は22%、Rank3 は22%、Rank4 は11%、Rank5 は22%であった。また、各 Rank の合格までの平均受検回数は2～3回であった。（1名は協力が得られず、除外した）

5.検定基準と教材に対する学生の意識　ｱﾝｹｰﾄの回収率は90%、有効回答率は100%であった。検定基準に対する学生の意識は適切と答えた学生が Rank1・2 が77%、Rank3 が44.4%、Rank4 は50%、Rank5 が77%であった。自己学習用教材に対する学生の意識では「VTR・CAI はｺﾂがつかめるものだったか」の質問に対し、VTR は89.9%、CAI で77.8%の学生が「はい」と答えていた。

6. 注射器操作のｺﾂの修得度　ｱﾝﾌﾟﾙ内の薬液を 3 分間で無菌的に吸い上げた平均本数は検定前 1.5 本、検定後が 3.1 本であり、ｔ検定の結果有意差があった（$p<0.05$）。ｴﾗｰ回数の平均は検定前 1.8 回、検定後 0.8 回であった。ｴﾗｰの内容は、検定前は内筒に触れる（3回）針基を支えず外れる（2回）であったが検定後は見られなかった。また、ｱﾝﾌﾟﾙの縁に触れる回数は全体で検定前が6回で、検定後が3回であった。ｴﾗｰを全くしない学生は、検定前は1名であったが検定後は3名であった。その3名は練習を30回以上行っていたが相関関係はなかった。

Ⅳ.考察

1.検定基準と教材　検定基準は 5Rank 中の Rank3 の課題が、「薬剤の吸い上げ操作を時間制限内で全量吸い上げる」であったことでやや難しい基準設定だったと考えられるが、時間を意識して練習することで合格できており、達成可能で適度に難しいものであったと考える。その他の Rank も合格までの回数が2～3回であり、容易すぎず、適切な基準であったと考える。自己学習用教材はｺﾂを中心に、解説も入れながら作成したことから、学生もｺﾂがつかみやすいと答えており、操作のｺﾂをつかむ為に有用であったと考えられる。

2.検定前後の吸い上げ技術のﾎﾟｲﾝﾄとｺﾂの修得度の比較

検定前に比べ検定後に、ｴﾗｰ回数と操作のﾎﾟｲﾝﾄやｺﾂに関連するｴﾗｰ内容が減少していた。その理由として学生は「練習時に VTR 等で練習したことで、ｺﾂやﾎﾟｲﾝﾄをつかむことができた」「検定を合格することで自信をもって実施ができた」を挙げていた。このことより、ﾎﾟｲﾝﾄやｺﾂを明確にした自己学習用教材を用いて学習し、段階的に検定を受けることで注射器操作のﾎﾟｲﾝﾄとｺﾂの修得度が上昇したのではないかと考える。また、ｴﾗｰ回数と練習回数の相関関係は見られなかったが、対象者を増やすことで関係が明らかになるのではないかと考える。

Ⅴ.まとめ

1. 自己学習用教材は注射器操作のﾎﾟｲﾝﾄとｺﾂの修得に有用であった。
2. 検定と自己学習用教材を用いた学習方法を用いることで、注射器操作のﾎﾟｲﾝﾄとｺﾂの修得度は上昇した。

（ふじしまかずこ、うすいえみ、たかはらもとこ、たまきみよこ、こうけつはづき、がもうすみこ、せきぐちけいこ）

看護学生（二年課程）の基礎看護学実習についてのストレス（その2）

○加藤奈保美　　内海滉
東京都立青梅看護専門学校　千葉大学

キーワード：看護学生，基礎看護学実習，ストレス

はじめに

実習目標達成に向けて，効果的な指導をしていくため，学生の実習に対するストレスを理解していくことが，教員にとって重要な役割となる。第70回応用心理学会で，実習の経過とともに『脅威』の感情が薄れ，『挑戦』の感情が出始めることを報告した。

Ⅰ．研究目的

二年課程の学生の基礎看護学実習に関するストレスの程度がどのように変化していくかを，学生の准看護師養成課程及び高校衛生看護科時の実習（以下，准看学生時の実習と略す）に対する気持ちと比較し，明らかにする。

Ⅱ．研究方法

1）対象：看護専門学校二年課程1年生34名（平均年齢27.6歳，女子29名・男子5名，准看護師として就職経験有り10名，無し24名，衛生看護科卒6名）

2）調査日及び内容：第1回―2004年1月23日（実習3日前），第2回―2004年2月6日（実習2週間経過後）に，第3回―2004年2月19日（実習終了後）に，基礎看護学実習（以下，実習と略す）に対する気持ちについて調査

4）データー収集と分析：

(1)堤らのストレス質問紙を参考に作成した17項目の質問紙（項目は表参照）を用いて調査に同意の得られた学生を対象に，集合調査を実習前・実習2週間経過後，実習終了後に実施。

(2) 准看学生時の実習に対する気持ちと基礎看護実習前・実習2週間経過後，実習終了後の実習に対する気持ちとの比較検討。

Ⅱ．結果

准看学生時の実習に対する気持ちと実習前・実習2週間経過後，実習終了後の実習に対する気持ちの比較は，表1に示すとおり。

Ⅲ．考察

准看学生時の実習に対する気持ちについて学生の普段の発言から，不安や心配を抱えてストレスフルであったと考えていたが，実際には，今回の実習直前の『脅威』に位置づけられている7項目は全てにおいて准看学生時より上回っていた。過去の実習に対する『脅威』の気持ちは，実習を直前に控えた学生の実習に対する気持ちとの比較において有意差は認められなかった。過去の記憶の中の実習に対する思いは，実習を直前に控えた学生の，【不安だ】【心配だ】などの実習を『脅威』と捉える気持ちのまえでは薄れているのではないかと考える。

しかし，准看学生時と2週間経過後では『脅威』に位置づけられている項目の【びくびくしている】【心配だ】【恐ろしい】【逃げ出したい】【不安だ】【圧倒されている】の順に有意差を認めた。このことから，准看学生時の実習に対して【びくびくしている】【心配だ】【恐ろしい】などと感じていた学生ほど，実習を『脅威』ととらえる気持ちが薄れていくといえる。『挑戦』については有意差は認められなかったが，実習前に比べ，全項目について平均値が上昇した。これらにより，実習が2週間経過する過程で，初めての基礎看護学実習を控え，准看学生時の実習との関係において予期できない『脅威』を感じていた学生が，実際に臨地に望み，患者と出会い，看護を展開していく学習を進めていく中で，「実習」そのものについての，まだ実際に存在しないものへの「心配」や「恐ろしさ」への感情が薄れ，『挑戦』の気持ちが現れて実習に臨めていったのではないかと考える。

また，准看学生時と実習終了後との比較においては，『脅威』『有害』『挑戦』の各項目で有意差が認められた項目が多かった。『脅威』については，実習2週間経過後よりさらに平均値が下がり，【不安だ】【心配だ】【びくびくしている】【逃げ出したい】【恐ろしい】の順に有意差が認められた。さらに，准看学生時と実習終了後との比較においては，『挑戦』の『わくわくしている』『燃えている』などの順で有意差が認められた。ただし，この『挑戦』の6項目すべてにおいて，実習2週間経過後に平均値が上昇したにもかかわらず，実習終了後に【勇気が出てくる】1項目を除き低下した。この原因については，今後明らかにしていく必要があると考える。

今回は，調査対象者数が限られていることなどで研究の限界があるが，今後も学生の実習に対する気持ちを適時把握し，学生が実習に対してさらに『挑戦』し，取り組んでいけるよう，コーピング能力を高める支援をしていくことが，引き続きの課題である。

表1. 准看師養成学校・衛生看護科での実習と基礎看護学実習前・2週間経過後・終了後の気持ちの比較

	准看護師養成所・高校衛生看護科時代の実習に関する気持ち				基礎実習前の気持ち		基礎実習2週間後の気持ち		基礎実習終了後の気持ち	
		平均	標準偏差		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
脅威	心配だった	2.79	0.98	心配だ	3.09	1.14	1.97 **	1.15	1.63 ***	1.11
	恐ろしかった	1.97	1.47	恐ろしい	2.42	1.48	1.00 **	1.33	1.00 *	1.47
	不安だった	2.91	1.16	不安だ	3.06	1.16	2.11 *	1.44	1.43 ***	1.26
	圧倒されていた	2.15	1.28	圧倒されている	2.55	1.44	1.46 *	1.27	1.45	1.48
	気がかりだった	2.06	1.46	気がかりだ	2.64	1.55	1.93	1.27	1.69	1.34
	びくびくしていた	2.30	1.47	びくびくしている	2.42	1.64	1.04 ***	1.13	1.10 **	1.35
	逃げ出したかった	1.91	1.60	逃げ出したい	2.27	1.57	0.96 *	1.28	1.03 *	1.32
有害	腹立たしかった	0.94	1.10	腹立たしい	0.73	1.21	0.86	1.32	0.76	1.18
	むなしかった	1.09	1.19	むなしい	0.73	1.34	0.82	1.07	0.34 **	0.67
	うんざりだった	1.50	1.31	うんざりだ	1.42	1.42	0.96	1.20	1.00	1.31
	がっかりしていた	1.29	1.36	がっかりしている	0.76	1.33	0.75	1.26	0.45 *	0.63
挑戦	燃えていた	1.71	1.06	燃えている	1.21 *	0.96	1.89	1.26	1.10 *	1.11
	希望を持っていた	2.03	1.14	希望を持っている	1.67	0.91	2.26	1.05	1.46 *	1.04
	意欲があった	2.18	1.07	意欲がある	1.82	1.08	2.43	1.14	1.55 *	1.30
	情熱があった	1.94	1.07	情熱がある	1.52	1.16	2.11	1.23	1.38	1.18
	勇気が出てきた	1.35	1.07	勇気が出てくる	0.45 ***	0.66	1.29	1.26	0.97	1.05
	わくわくしていた	1.64	1.19	わくわくしている	1.15	1.09	1.88	1.26	0.88 **	1.09

***:p<0.001　**:p<0.01　*::p<0.05

（かとうなほみ　うつみこう）

無菌操作技術修得のための学習方法（その２）

—注射器の操作検定における検定群と非検定群の修得度の比較—

○臼井恵美　藤島和子　髙原素子　玉木ミヨ子　纐纈葉月　蒲生澄美子　関口恵子
（埼玉医科大学短期大学）

キーワード：検定・無菌操作・技術修得

はじめに　第１報では注射器の操作検定の基準を作成し、ｺﾂを明示した自己学習用教材を用いて学習することで注射器の操作技術の修得度が上昇したことを報告した。第２報では研究対象者 20 名を検定群と非検定群に分け、技術の修得度を比較し、また修得度に関係する要因を分析したので報告する。

Ⅰ.研究目的　注射器の操作検定の導入による操作技術の修得度と技術修得に影響を及ぼす要因を明らかにする。

Ⅱ.研究方法

1.研究対象　Ｓ短期大学看護学科２年次生のうち、研究の主旨に賛同し了解が得られた学生 20 名。この中から希望により検定群 10 名、非検定群 10 名に分けた。

2.研究期間　平成 16 年４月 26 日～平成 16 年６月 10 日

3.研究方法

1)検定群の実施方法：検定のﾌﾟﾛｾｽ(1)検定の予約→(2)自己学習用教材(VTR･CAI)や練習用物品を用いて練習→(3)検定の実施→(4)評価→(5)ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ→(6)認定

2)非検定群の実施方法：期間中、検定群と同様の練習用物品を用いて自由に学習をする。

3)実施条件:検定群と非検定群が一緒に練習を行わないこと、検定内容･学習方法など情報交換をしないことを条件とした。

4.操作技術の修得度の測定方法

1)2 群とも研究開始時と終了時に、3 分以内に無菌的に、薬液を吸い上げる操作を行い、吸い上げた本数を測定した。

2)研究終了時、別紙評価表に基づいて、無菌操作のｺﾂやﾎﾟｲﾝﾄを中心に注射器操作の評価を行い、その結果を点数化した。また操作時間・操作時の最大気流値を測定した。

5.手指の条件の測定

1)手掌の長さ：研究開始時に左中指先端から手関節までの全長と母指から小指それぞれの長さを計測した。

2)手指の器用さ：裁縫用針に糸を通した針の本数を研究開始時と終了時に測定した。

3)手指のﾋﾟﾝﾁ力：研究開始時と終了時に左手指のﾋﾟﾝﾁ力(第 1･2 指、第 1･4 指、第 1･5 指)を測定した。

6.技術修得に関する意識調査　研究期間終了後、自作質問紙(無記名)を使用し対象者全員に留め置き法で調査した。

7.分析方法

1)薬液の吸い上げた本数と手指の条件の関係について、研究開始時と終了時に x^2 検定を行った。また操作技術の総得点と手指の条件の関係について、研究終了時に x^2 検定を行った。さらに操作技術の総得点・操作時間・最大気流値を２群間で t 検定を行った。統計処理は、統計解析ｿﾌﾄ SPSS を使用した。

2)操作技術の修得度の意識と技術修得の要因についてはｱﾝｹｰﾄ結果を単純集計し、記述内容は KJ 法で分類・整理した。

8.倫理的配慮　参加や中断は自由意志であり、それによって不利益を生じないことを口頭および文章で説明し承諾を得た。

Ⅲ.結果　検定群１名は協力が得られず、除外とした。

1．検定群における Rank 毎の合格人数の割合　Rank1・2 は 100%、Rank3 は 44%、Rank4 は 33%、Rank5 は 22%であった。

2．操作技術の修得度と手指の条件との比較　吸い上げの本数と手指の条件の関係性、操作技術の総得点と手指の条件の関係性について x^2 検定の結果、有意差は認められなかった。

3．注射器操作技術の修得度の２群間の比較

表１　操作技術の修得度の平均値　　n＝19

項目	検定群	非検定群
操作技術の総得点(点)*	90.44	83.20
操作時間	5 分 12 秒	5 分 31 秒
最高気流値(m/s)	0.0489	0.0580

* $p<0.01$

4．操作技術の修得度の意識　ｱﾝｹｰﾄ回収率は 95.0%、有効回答率 94.7%であった。上達度の意識は、5 段階評価で検定群は「5.大変上達した」と答えた学生は 33.3%「4.上達した」と答えた学生は 22.2%「3.やや上達した」と答えた学生は 44.4%であった。非検定群は「3.やや上達した」と答えた学生が 88.9%「2.全く上達しなかった」と答えた学生が 11.1%であった。

5．注射器の技術修得に影響を及ぼす要因　検定群は技術修得の要因として、ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸがあった(100%)、自己学習用教材があった(77.8%)、練習用物品があった(77.8%)、検定の課題が段階的であった(44.4%)ことを挙げていた。非検定群は、注射器に触ることや操作に慣れた(66.7%)ことなどを挙げていた。

Ⅳ.考察

1．検定導入における技術の修得度　検定群は非検定群に比べて、操作技術の総得点が高かった。これは検定が段階的であったこと、ｺﾂを明確にした自己学習用教材やﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸがあったことにより、注射器操作のﾎﾟｲﾝﾄをつかめたためと考える。操作時間や最高気流値は２群間に有意差が見られなかったが、操作のﾎﾟｲﾝﾄやｺﾂをつかむことで、無駄のない操作技術が身に付いた学生もいた。さらに検定群は非検定群より上達度の意識が高かった。これは段階的に検定を受け合格することで技術の修得度を実感することが出来たためと考える。また、操作技術の修得度と手指の条件には有意な関係が認められなかった。このことから、手指の条件が操作技術の修得度に直接影響するものではなく、操作のﾎﾟｲﾝﾄやｺﾂをつかむことが技術の修得度を高める要因であると推察される。

2．注射器の操作技術修得の影響要因　技術修得に影響を及ぼす要因として学生が最も多く挙げた項目は、受検後のﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸであった。これは「曖昧な知識が明確化できた」という学生の言葉から、ﾎﾟｲﾝﾄをしぼった練習をすることが出来たためと考える。次いで多い項目は自己学習用教材と練習用物品であった。自己学習用教材は「VTR はｺﾂやﾎﾟｲﾝﾄがわかりやすかった」という検定群の学生の言葉からも技術修得の要因になったと考える。また練習用物品は「恐怖心がなくなり扱いに慣れた」という検定群･非検定群の学生の言葉からも、医療器具に慣れることが技術修得に影響を及ぼすと考える。さらに検定が段階的にあったことも項目として挙げられた。これは「合格することで自信がついた」「次へ次へという思いで向上心が沸いた」という学生の言葉から、各 Rank に合格することで達成感を得て、次の Rank へ向けて学習意欲を喚起させることが出来たと考える。

Ⅴ.まとめ　注射器の操作検定を導入することで、技術の修得度は上昇した。技術修得に影響を及ぼす要因は、ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸがあったこと、自己学習用教材や練習用物品の活用、検定が段階的であったことが挙げられる。

（うすいえみ　ふじしまかずこ　たかはらもとこ　たまきみよこ　こうけつはづき　がもうすみこ　せきぐちけいこ）

安全行動に関する看護師の特性調査

― 安全性格診断システムを使用して ―

○ 佐々木妙子[1)] 菊池洋子[2)] 山内和枝[3]
([1)] 国立病院機構函館病院 [2)]国立病院機構釜石病院 [3)]元国立病院機構八雲病院)

キーワード：ヒューマンエラー、安全行動、看護師

【研究の目的】

今までの医療事故防止対策は組織としての取り組みと職員の意識改革に力を注いできた。これらは一定の効果を上げているが、同じような事故を分析すると繰り返し事故を起こしている人がいることに気づいた。このため看護師個々人の特性に応じた安全指導の必要を認識し、「安全性格診断システム」を活用したアンケート調査を行い、道南３施設の看護師・准看護師のエラー行動と性格の傾向と不安全行動を起こしやすい看護師への指導について検討したので報告する。

【方法】

- 対象：道南の国立病院・療養所に勤務する看護師、准看護師３５１名
- 期間：２００２年１２月
- 調査方法：安全性格診断システムを活用した無記名の調査
- 分析方法：１．エラー行動と性格診断項目の平均点
  ２．性格とエラー行動の関係
  ３．タイプ分類

【結果】

１．エラー行動と性格診断項目の平均点と標準偏差（表１）

表1 エラー行動と性格の平均値と標準偏差

	平均	標準偏差
疲れやすさ	3.65	2.17
気の弱さ	3.86	1.73
根気のなさ	2.02	1.78
いい加減さ	2.67	1.65
自制心の弱さ	2.76	1.82
軽率さ	3.66	2.03
協調性のなさ	3.05	1.52
神経質さ	2.64	1.12
情報受容・確認	2.16	1.69
意識中断	2.45	1.69
忘却	3.58	1.92
習慣行動	2	1.75
妥当性	1.11	1.11

２．エラー行動と性格の関係（表２）

性格・エラー行動の得点を新診断表の傾向ごとに分類しクロス検定を行った。疲れやすい傾向の強い人は、忘却のエラーが多かった。Ｐ＝＜０．０５　気の弱さの傾向の強い・やや強い傾向の人は情報受容・確認、意識中断、忘却のエラーが多かった。Ｐ＝＜０．０５　根気のなさの傾向の強い・やや強い人は情報受容・確認、習慣行動のエラーが多かった。Ｐ＝＜０．０５　軽率さの傾向の強い・やや強い人は情報受容・確認、意識中断、忘却、習慣行動のエラーが多かった。Ｐ＝＜０．０５神経質さの傾向のやや弱い・普通の人は情報受容・確認のエラーが多かった。Ｐ＝＜０．０５

表2 性格とエラー行動の関係

エラー/性格	体質・気質		自己制御		情緒特性		対人関係	
	疲れやすさ	神経質さ	根気のなさ	自制心弱さ	いい加減さ	軽率さ	気の弱さ	協調性なさ
情報受容・確認		+	+		+	+	+	
意識中断				+	+	+	+	
忘却	+				+	+	+	
習慣行動			+		+	+		

３．タイプ分類と不安全行動をおこすタイプ

６６タイプ分類をもとに分類した結果、５３タイプに該当する看護師がおり、そのうち５０タイプの人が事故を起こしたことがあると答えている。タイプ８は１０．８％、タイプ４０は１４．５％、タイプ５６は１０．８％であった。不安全行動が懸念されるタイプは、性格因子の傾向が３つ以上あってエラー行動の低いタイプが、２６，２８，５８で３．９％、性格因子が３つ以上あってエラー行動の高いタイプが、９，１７，２５，２７，４１，５７で７．１％であった。さらに自分をよく見せようとする傾向が強いタイプ　６５，６６は３．１％であった。

【考察】

道南３施設の看護師・准看護師の性格とエラーの平均点が高いのは、気の弱さと疲れやすさ、軽率さと忘却のエラーである。疲労すると忘却現象がおき、気力・体力の低下を招き億劫になると狩野は指摘している。従って、疲れやすい人は事故を起こす傾向があると考える。さらに６６タイプ中、５０タイプに事故を起こしたと答えていることは、誰でも事故を起こす可能性があると言える。不安全行動を起こしやすい看護師の傾向は、情緒特性（軽率さ、いい加減さ）の高い人に多いことがわかった。特に事故防止のためのルールを守る、予測生のある行動、合理的行動を意識して行うことを指導する必要がある。指導にあたっては、看護倫理をもとに日常の行動の何が正しいか、間違っているかを自らに問いかける習慣を身につけるよう指導する。気の弱い傾向の人は、見落とし、聞き間違いが多い。特に経験年数の少ない人は、言われたことをよく確認できずに仕事を行っていることが予測されるので、成長にあわせた指導の体制が必要である。

【引用文献】

海保博之・田辺文也　１９９９　ヒューマンエラー
正田亘　１９９２　産業・組織心理学
正田亘・渡辺敬子・馬場りえ　１９９１　―安全性格診断システムの試作とその応用（１）（２）―産業組織心理学会第７回発表論文集

（ささきたえこ、きくちようこ、やまぐちかずえ）

ゲームが学童期の子どもに影響する保護者の認識

○中　淑子[1)]　林田　りか[1)]　草野　美根子[2)]　内海　滉[3)]
([1)] 県立長崎シーボルト大学　[2)]群馬大学　[3)] 千葉大学)

キーワード：ゲーム、影響、心と身体、生活習慣

【研究の目的】ゲームは子どもの生活の中にすっかり定着し、切り離せない遊びとなっている。しかし、大人は子どもがゲームに熱中するほどその姿に疑問を感じている。社会問題の一つとして森は「ゲームをやりすぎると脳が働かなくなる」と衝撃的な警告を発し、さらに、「長年のゲーム漬け生活は、日常生活で"キレやすい"、"物忘れが激しい"などの自覚症状が現れる」とも指摘している。この警告は親だけでなく、子どもを取り巻く多くの大人たちにも衝撃を与え、様々な形で情報は広まっている。本研究では子どもをもつ親を対象に学童の行っているゲームの実態とゲームが子どもの心や身体および生活習慣への影響の態を調べ、子どもとゲームの関係、ゲームとのつきあい方について検討する資料とする。

【方法】**調査対象**：N県N市の住宅地域に設置されたK小学校の生徒をもつ母親 321 名　**調査時期**：平成 15 年 6 月　**調査方法**：K小学校に調査を依頼し1週間の留め置き法とした。**調査票**：調査票は1. 子どもの属性、2. ゲームが子どもの心と体に与える影響、3. ゲームが子どもの生活習慣に与える影響についての3種。質問票2. 3は森の指摘する影響要因を参考に本研究者により作成し4段階の評定尺度票とした。質問票2は視力・集中力・攻撃性を概念とした 15 の質問項目、質問票3は生活習慣のうち食事・睡眠・清潔・活動の4側面より20の質問項目で構成している。**分析方法**：質問票2. 3については因子分析をおこない、質問票1は2. 3の因子得点の平均値の差の検定をおこなった。データー解析は統計解析ソフトSPSS11.0Jを使用した。

【結　果】

質問票の有効回収は 250 名、有効回収率は 77.9%であった。

1. 子どもの属性とゲームの所持やゲーム関連について

1)学年別：1年生 48 名(19.2%)、2年生 51 名(20.4%)、3年生 46 名(18.4%)、4年生 47 名(18.8%)、5年生 23 名(9.2%)、6年生 35 名(14%)。

2)性別：男子 120 名(48%)、女子 130 名(52%)。

3)両親の仕事：父親のみ 116 名(46.4%)、母親のみ 13 名(5.2%)、共働き 121 名(48.4%)。

4)祖父母の同居：あり 63 名(25.2%)、なし 185 名(74%)、無回答 2 名(0.8%)。

5)ゲームの所持：あり 242 名(96.8%)、なし8名(3.2%)。

6)テレビゲームの所持：あり 196 名(78.4%)、なし 52 名(20.8%)。

7)パソコンゲームの所持：あり 128 名(51.2%)、なし 120 名(48.0%)。

8)ゲームボーイの所持：あり 169 名(67.6%)、なし 79 名(31.6%)。

9)携帯電話ゲームの所持：あり 58 名(23.2%)、なし 190 (76.0%)。

10)ゲームをする場所：自宅 198 名(79.2%)、自宅以外 45 名(18%)、不明 7 名(2.8%)。

11)ゲーム開始年齢：4歳未満 30 名(12%)、5～8歳 134 名(53.6 名)、9歳以上 32 名(12.8%)、不明 54 名(21.6%)。

12)1日のゲーム時間：1時間未満 147 名(58.8%)、1～3時間 4 名(1.6%)、3～5時間 42 名(16.8%)、不明 57 名(22.8%)。

13)1週間におこなうゲーム日数：1～2日 104 名(41.6%)、3～4日 18 名(7.2%)、5日以上 73 名(29.3%)、不明 55 名(22%)。

14)誰とゲームをおこなうか：一人で 50 名(20%)、兄弟と 105 名(42%)、友人と 67 名(26.8%)、両親と 20 名(8%)。

2. 因子分析による検討

1)心と身体への影響(表1)

バリマックス回転により、累積寄与率 53.17%で4つの因子を抽出した。因子命名は第1因子より順に「注意力欠如因子」、「攻撃的因子」、「子どもらしさの欠如因子」、「目への影響因子」と仮に銘々した。質問票のα係数による信頼性は第1因子より順に、0.795、0.848、0.876、0.538 を示し第1因子から第3因子までは許容水準を示していた。

表1 心と身体への影響

項　目	F1	F2	F3	F4
7.学校の忘れ物が多くなった.	0.737	0.269	0.099	0.099
9.学校の成績が下がった.	0.676	0.163	0.116	0.116
6.注意散漫で落ち着きがなくなった.	0.629	0.107	0.311	0.311
8.親との約束が守れなくなった.	0.552	0.283	0.167	0.167
3.目に活気がない.	0.519	0.114	0.397	0.397
11.家族や友人に当たるようになった	0.169	0.854	0.138	0.114
10. 大声をあげて怒鳴るようになった	0.203	0.792	0.193	0.144
12.暴力的行動が目立つようになった	0.256	0.607	0.146	0.007
15.子どもらしさが感じられない行動を	0.214	0.182	0.848	0.161
14. 何を考えているか理解できない	0.250	0.245	0.804	0.171
2.目が充血している.	0.114	0.081	0.067	0.737
13.ゲーム以外の遊びを考えない.	0.113	0.075	0.247	0.413
寄与率	16.82	14.28	12.53	9.53
累積寄与率	16.82	31.1	43.64	53.17

2)生活習慣への影響(表2)

同様に、累積寄与率 44.39%で4つの因子を抽出した。因子命名は第1因子より順に「睡眠不足の因子」、「身だしなみ欠如の因子」、「活動性低下の因子」、「食生活変化の因子」と仮に銘々した。

表2 生活行動への影響

項　目	F1	F2	F3	F4
6. 睡眠時間が平均8時間以下.	0.779	0.097	0.185	0.104
7. 就寝時間が0時を過ぎている.	0.771	0.134	0.082	-0.167
10. 朝、顔色が悪く疲れている.	0.714	0.071	0.030	0.257
8. 目覚めはあまり良くないようである	0.499	0.308	0.094	0.204
14. 衣服や体の汚れに無頓着である	0.157	0.775	-0.050	0.078
12. 自分で身だしなみに気を付けな	0.056	0.764	0.050	0.041
15. 部屋が散らかっても片づけない.	0.202	0.649	0.159	0.232
11. 食後に歯みがきをしない.	0.007	0.560	0.236	0.055
18. 友達と接するのを嫌がり一人でい	0.067	-0.022	0.752	0.179
17. 活気がなく表情が暗い.	0.000	0.020	0.735	-0.070
13. ゲームに熱中し入浴せずに寝る	0.265	0.067	0.624	-0.005
16. 外で遊ぶよりも家で遊ぶ.	-0.006	0.234	0.430	0.214
19. 学校を休みがちである.	0.466	-0.169	-0.039	0.584
3. ゲームに熱中し食事をとらない.	0.035	0.011	0.053	0.562
4. 偏食がある.	0.139	0.246	0.105	0.547
2. インスタントやスナック菓子を食べ	0.040	0.241	0.205	0.456
1. 朝食は食べずに学校に行く.	0.114	0.022	-0.018	0.430
寄与率	12.54	11.85	10.34	9.25
累積寄与率	12.54	24.39	35.14	44.39

【考　察】ゲームは95%以上の学童が所持していて、その種類はテレビ、ゲームボーイ、パソコン、携帯電話ゲームの順であった。さらに、ゲームの開始年齢・使用場所・所要時間などの実態と、ゲームが与える影響として森が指摘している①心と身体への影響、②生活習慣への影響が本調査においても認められ、子どもをもつ親の危惧する認識が伺われた。今や子ども文化の一つとなっているゲームを禁止することはできない。賢い与え方や使用法について大人も子どもも共に考えるべきことが示唆された。

(なか　よしこ、はやしだ　りか、くさの　みねこ、うつみ　こう)

事前情報が看護援助に与える効果

○宮島直子　　森下節子
（北海道大学医学部保健学科）
キーワード：事前情報、看護援助、コミュニケーション

【研究の目的】 看護師は患者やその家族に対して、診療の補助場面や療養上の世話場面において、不安の軽減や自己決定を促進するなどの目的で、事前情報を提供している。しかし、その情報が不十分だったり不適切であったりした場合には、かえって患者に不利益が生じる。事前情報の提供は、看護援助を効果的に行う上で重要であり注目に値する。しかし、事前情報が看護援助に与える効果についての研究報告はほとんどなされていない。

そこで本研究は、事前情報が看護援助に与える効果を測定することを目的とする。特に事前情報の内容に着目し、自己効力感の高低で必要とされる事前情報は異なり、患者が必要とする事前情報を提供することは患者の自己効力感を高め、看護援助の評価の一つとして見なせる看護師への好感度を高めると考えた。

【方法】 事前情報に関する質問紙調査を行った。
調査日：2004年7月12日
対象者：短大生2年次81名。（但し、今回は性差や年齢差の影響を考慮して、分析の対象は20歳代の女性71名に限定した。）
調査内容：患者が医師から検査を受けるよう告げられた後、3人の看護師が事前情報を提供する場面を想定し、それぞれの看護師の好感度について調査した。併せて回答者の自己効力感を調べた。

質問紙作成にあたり、「事前情報として必要とされている情報について」予備調査を行った。

調査日：2004年7月2日

対象者：女子大学生4年次67名（年齢21-23歳）

設問は、体調の不調を感じていた女子大生が思い切って外来を受診したところ、医師から緊急検査が必要だと告げられた場面を想定し、検査に臨むにあたり必要な事前情報を優先順位の高い順から全て記述してもらった。回答結果から必要な情報として24項目が得られた。医師が独自に行う7項目を除く17項目について検討した。項目は「検査の概要」、「痛みや辛さなどの感覚に関すること」、「手続きに関すること」、「必要な準備に関すること」の大きく4つに分類することが出来た。そこで、3人の異なる看護師が事前情報を提供する場面を設定し、検査の概要はどの看護師も提供する内容としたが、①感覚についての情報を提供する（S看護師）、②手続きについての情報を提供する（T看護師）、③必要な準備についての情報を提供する（M看護師）それぞれの看護師の好感度を100点満点で採点してもらった。

なお、質問紙は、順序効果を考慮し、それぞれの看護師が初めとなるような3パターンを作成し無作為に配布した。

自己効力感尺度は、シェラーら（1982）が作成した自己効力感尺度を成田ら（1995）が邦訳した（以下「SE」とする。）23項目5段階評定を用いた。

倫理的配慮：回答は無記名とした。また、データは統計的に処理し個人のデータを問題にしないこと、調査は強制では無く、協力しなかった場合に不利益を被ることは一切無いことを明記した。

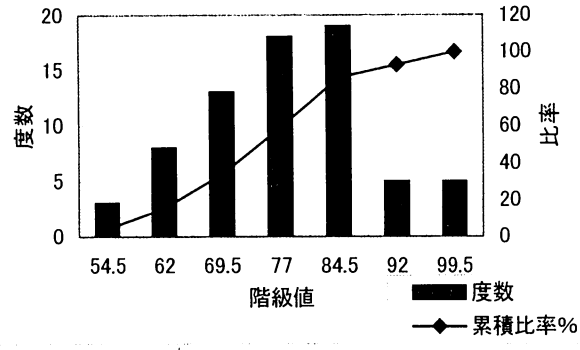


Fig.1. SE得点の度数分布

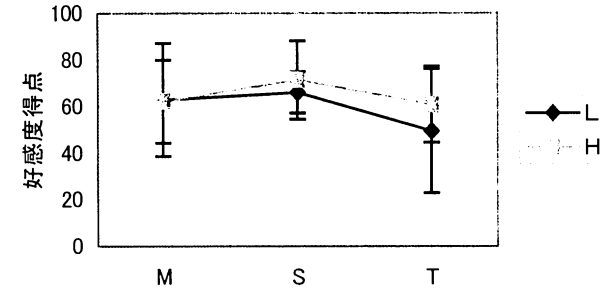


Fig.2. 看護師に対する好感度得点の平均値と標準偏差
SE得点低群（L）高群（H）別

【結果】 回収率および有効回答率は100%だった。分析対象者の平均年齢は19.8歳、標準偏差は1.19であった。

看護師条件を独立変数、看護師への好感度得点を従属変数とした1要因の分散分析を行った結果、危険率1%以下で有意差を認めた。多重比較の結果、MとT、SとTに有意差を認めた。それぞれの平均値はM=64.8、S=69.5、T=54.4であった。

回答者のSE得点の分布はFig.1に示した。高低15%にあたる得点が高い順に10人を高群、低い順に10人を低群とした。SE得点の高群・低群と看護師条件を独立変数、看護師への好感度得点を従属変数とした2×3の2要因（被験者間×被験者内）の分散分析を行った。結果、看護師条件の主効果にのみ危険率5%以下で有意差を認めた。

【考察】 事前情報の内容で、看護師の好感度得点に有意差を認めたことは、事前情報が看護援助に効果を与えることを示している。しかし、好感度得点はSE得点の高低で有意差を認めず、今回の仮説は支持されなかった。限られた情報の中で、好感度得点に大きなバラツキを認めたことは、大きな影響要因があることが予想される。予備調査では感覚に関する情報の優先順位が他より高く、今回好感度得点が高かったのは、優先順位の高い情報が提供されたためと考えることも出来る。好感度得点の低さが、情報の不足によるのか、情報がマイナスの影響を与えたのかについては、今後の検討が必要である。

（みやじま　なおこ・もりした　せつこ）

中学生・高校生・大学生の主観的ウェルビーイング（6）

角野 善司
（帝京平成大学 健康メディカル学部）
キーワード: 主観的ウェルビーイング（subjective well-being：ＳＷＢ），中学生・高校生・大学生

＝ 問題と目的 ＝

主観的ウェルビーイングは，幸福についての心理学的研究の鍵概念であり，“ある程度の時間的安定性・状況一貫性をもった，知覚された幸福(角野,1995a,b)”と定義できる．筆者は，この主観的ウェルビーイングについて研究してきた．まず，角野（1995a,b,1997）は大学生・成人を被験者として研究を行い，主観的ウェルビーイングの指標として，「人生に対する肯定的評価尺度」を開発し，この尺度が一因子構造をなし，一定水準の信頼性・妥当性をもつことを示した．また，中学生・高校生・大学生を対象に多面的な共同研究を行い，本学会を中心に報告を重ねてきた．今回の発表では，この中学生・高校生・大学生を対象とした一連の発表を総括し，今後の研究の方向性について論じる．

＝ 方法 ＝

被験者　中学生・高校生・大学生 943 名を被験者とした．学年×性別の被験者の構成は以下のとおりであった．なお，分析に必要な部分に回答漏れ等のあったものは除いたため，各報告で分析に用いた被験者数は異なる：

中学１年生：140 名（男子 75 名，女子 65 名）
中学３年生：138 名（男子 73 名，女子 65 名）
高校２年生：325 名（男子 147 名，女子 178 名）
大学１年生：340 名（男子 202 名，女子 138 名）

質問紙　主観的ウェルビーイングの指標である「人生に対する肯定的評価尺度」（角野,1995a,b,1997,2000a）12 項目（７点尺度）のほか，各報告の分析に用いた諸変数で構成された．

＝ 結果 ＝

【第１報：日心第 64 回大会発表論文集, 1087.（角野, 2000a)】

人生に対する肯定的評価尺度について各学年で因子分析を行い，また信頼性の検討も行った．その結果，いずれの学年においても一因子性・内部一貫性が十分に高く，従来の研究の対象となっていた大学生・成人だけではなく，中学生・高校生に対してもこの尺度を適用できる可能性が示された．また，尺度得点の学年間差の検討も行ったところ，中学生から高校生へと進むにつれて，人生に対する肯定的評価は下がり，その後再び高くなる傾向が見いだされた．

【第２報：応心第 67 回大会発表論文集, 92.（角野, 2000b)】

本報告では，(1) 犯罪等の被害体験や被害に遭うことへの不安が青年の主観的ウェルビーイングに及ぼす影響，および，(2) 青年の主観的ウェルビーイングの高低と不良行為・犯罪行為との関連について分析したところ，以下の結果が得られた：　いじめられた体験を持つ青年は，そうでない青年に比べ，主観的ウェルビーイングが低い傾向にある．／ 被害不安と主観的ウェルビーイングとの間には一定の傾向は見られず，前者から後者への影響は認められない．／ 主観的ウェルビーイングの高い者より低い者に喫煙の体験量が多く，特に女子では，学年を問わず，その傾向が顕著である．／ 主観的ウェルビーイングの高い者より低い者に犯罪行為が多く，特に女子において，その傾向が顕著である

【第３報：応心第 68 回大会発表論文集, 98.（角野, 2001)】

未来の成功に関する効力感と，主観的ウェルビーイングとの関係を検討した．その結果，職業達成（「希望する職業につく」「大きな会社に勤める」）や社会経済的地位の獲得（「お金持ちになる」）に関する効力感は学業達成（「学校でよい成績をとる」「希望する学校に進学する」）に関する効力感と同様に，学年が上がるにつれて主観的ウェルビーイングとの相関が低くなるという発達傾向を示した一方で，「しあわせな結婚をする」「よい親になる」ことに関する効力感はそれらとは異なり，学年が上がるにつれて主観的ウェルビーイングとの関連が相対的に強くなる傾向を示した．いずれも成人期において予想される事態である点では同じだが，職業達成や社会経済的地位の獲得は，現在の学業達成の延長上にあるものとして，「しあわせな結婚をする」ことや「よい親になる」ことは必ずしもその延長にはないものとしてとらえていることを示唆していると考えられる．

【第４報：応心第 69 回大会発表論文集, 130.（角野, 2002)】

自尊感情・自己評価と主観的ウェルビーイングとの関係を検討した．結果は以下のとおりであった：　(1) 自尊感情と主観的ウェルビーイングとの相関には学年・性による差は見られず，主観的ウェルビーイングの高い者は，自己肯定感情が高く，自己改善願望が弱い傾向が，一貫して認められた．(2) 社交性・優しさに関する自己評価と主観的ウェルビーイングとの間には，学年を問わず正の相関が見られたが，友達からの信頼に関する自己評価と主観的ウェルビーイングとの間には，学年が高くなるほど正の相関が高くなる傾向が認められた．このことは，青年期中期・後期になるにつれ，社交性や優しさといった自分から友だちへの関わり方だけではなく，友だちからどのように見られ，評価されているのかということが，重要になってくることを示したものと解釈される．

【第５報：応心第 70 回大会発表論文集, 43.（角野, 2003)】

時間的展望と主観的ウェルビーイングとの関連について検討した．時間的展望に関しては，「遠い過去（誕生から今から３年前まで)」「近い過去（３年前から半年前まで)」「現在（半年前から半年後まで)」「近い未来（半年後から３年後まで)」「遠い未来（３年後から死まで)」の主観的長さを測定し，これと主観的ウェルビーイングとの相関を算出した．その結果，男子では，中１・中３で，現在と主観的ウェルビーイングとの間に正の相関が，高２・大１で，遠い未来と主観的ウェルビーイングとの間に正の相関が見られた．この結果は，主観的ウェルビーイングの高さと結びつくものが，加齢に伴って，現在志向性の高さから未来志向性の高さへと変化することを示すものと言えよう．一方，女子では，一定の傾向の発達的変化は見出せなかった．

＝ まとめと今後の研究の方向性 ＝

一連の報告を通じて得られた知見の中でも，とりわけ，第２報以下で取り上げた，心理変数との関連からは，主観的ウェルビーイングが，青年の心理発達を読み解くうえで１つの有意義な観点であることが示されたと言えよう．

今後も，主観的ウェルビーイングの規定因や，主観的ウェルビーイングが他の心理変数に及ぼす影響についての研究をさらに重ねる必要があろう．

※ 本報告は，(財)社会安全研究財団の助成を受けて行った研究（帝京大学青少年問題研究会）の一部を再分析したものである．　（すみの　ぜんじ）

長欠学生の大学生活４年間に渡る適応パターンに関する一考察

― 長欠開始時期別群からみた長欠学生のパターン化―

○土屋　明夫
（日本大学経済学部）

キーワード：アイデンティティ、適応、長期欠席

【研究の目的】　文科省が、学生に対するサービス（不登校学生対策やサークル支援など）を骨子とした報告書をまとめ、各大学に対し学生指導の強化を図るべく通達する旨の報道がなされたのが2000年の５月であった。この背景には、大学のマス型化により、高等教育への機会は広まったものの、反面、学生の質の多様化に伴い、大学進学の目的意識も多様化するのみならず希薄化してきている現状が挙げられる。さらに、最近では、学力の低下問題など“大学の高校化”が問題視されるようにもなってきている。

そこで、今回の発表は、大学に適応出来ない大学生（長欠学生）を対象に、長欠学生のその後の適応過程からみた特徴（長欠のパターン）について検討を加える。

【方法】　調査対象：日本大学経済学部昭和 56 年度入学生1284名。調査手続：長欠学生の判定基準は、年間を前期・後期に分け、学期毎に必須科目（英語など）の出席率をチェック、その結果が５０％以下とした。また、長欠学生には、クラス担任が面接を実施した（長欠調査・面接手続きについての詳細は、別紙資料参照）。

【結果】　56年度入学生を対象に、４年間に渡り、１年次「前期」の長欠群から４年次「前期」の長欠群まで、長欠開始時期別で分類した７群間で、各長欠群の長欠開始以降卒業までの「出席」「欠席」「退学・除籍・休学」状況を比較した結果が Figure １である（ここでは１年次「前」・「後」群の２例のみを示す、７群全ての結果は別紙資料を参照）。

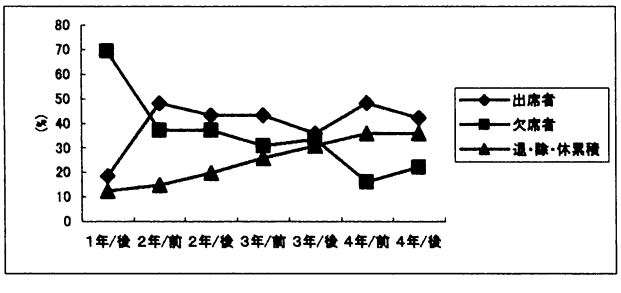


Figure1-1　１年次「前期」群の４年間に渡る適応状況

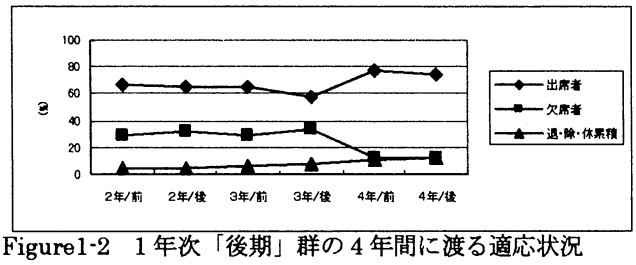


Figure1-2　１年次「後期」群の４年間に渡る適応状況

【考察】　Figure１は１年次「前期」、「後期」の２群間における結果を比較したものである。この結果は一例であるが、７群の長欠群は２パターンに大別されることが判明した。そのパターン１は“交差型：長欠継続型”であり、１年次「前」群と２年次「前」群の２群で顕著に認められた(Figure1-1)。パターン２は“平行型：長欠回復型”で、上記２群を除いた他の群で認められた(Figure1-2)。

“交差型”の特徴は、長欠開始の学期間のみならず次学期の「後期」においても、１年「前」群で69.1%、２年「前」群で73.1%が欠席状態を脱却出来ず、結局、欠席状態が都合１年間に渡ってしまうことである。さらに、その後の両群の進級後においても、「出席」状況（40%台）の方が「欠席」状況（30%台）を上回るが（交差現象）、その回復率は 40%台と低い状態のままである。以上は、回復率が60%台～80%台と高い“平行型”とは決定的に異なる点である。

ところが、４年次進級後では、この両群にも差異が認められるようになる。つまり、１年「前」群では進級後も依然として40%台の出席率に対し、２年「前」群の場合は60%台と高い回復率を示している。さらに、４年次終了時点での“卒業率”“卒業延期率”“退・除・休学率”を比較してみると（別紙資料）、１年「前」群の場合、卒業率は 29.6%、卒延期率（28.4%）、退・除・休（42%）と“退・除・休”が最も高率を占め、卒業率は約30%と極端に低い結果となっている。

それに比べ、２年「前」群は、卒業(45.2%)、卒延期(35.6%)、退・除・休（19.2%）と、卒業率（50%未満）は平行型に比べれば低率ではあるものの、先の１年「前」群（30%弱）と比べれば高率であり、一方、退・除・休率は１年「前」の1/2以下となっている。以上の結果を踏まえ、１年「前」群と２年「前」群の特徴を整理してみると、１年次「前」群は、退・除・休率（長期の休学率もこの群が最も高い、別紙資料）の高さや卒業率の低さから、大学への不適格者（アイデンティティ拡散型）が多い長欠群と言える。それに対し、２年次「前」群の場合は、卒業率が50%未満ながらも、卒業率が他の状況に比べ最上位にあり、１年次「前」群とは異なっている。この群の特徴は、卒業延期の割合が35.6%と高いことである。

さらに、この２群間の比較をするために、長欠学生を対象に実施された面接時での“長欠理由”も参考にすると、１年「前」群の場合は、（A）“怠慢、目的意識の欠如”や“精神面、身体面での悩み”などを理由とする割合が 53%に対し、（B）“アルバイト、サークル、趣味、各種学校”や“進路変更、再受験”は42%であった。それに対し、２年「前」群の場合、（A）を理由とする割合は30%と減少し、（B）を理由とする割合が60%であった。これらの結果も考慮して、２群の特徴を再整理してみると、１年「前」群は、この長欠理由からも、先に述べた特徴“アイデンティティ拡散型”が裏付けられたと言える。それに対し、２年「前」群の場合は、“卒業延期の割合が高い”特徴が認められたが、長欠理由を加味すれば、講義には出席はしないものの、怠慢や無目的の割合は低く、何であれ関心ある対象には関わっている割合が高いことを考慮すれば、“準モラトリアム型”と言える。

以上、長欠学生のパターン分類を通して、その特徴を検討してきたが、交差型（１年次「前」群と２年次「前」群）の特異性に注目し、さらに、両群の差についても検討を加えてきた。今後、大学入学生の特徴を考えてみたとき、諸状況から大学生は二極化（目的意識や能力などで）することが予測されるが、今回の結果を踏まえるならば、新入生及び２年次進級学生に対する指導対策及び体制の必要性が示唆されよう。

（つちや　あきお）

大学生の被援助志向性とその抑制要因に関する研究

― ディストレス開示，援助不安の視点から ―

飯田敏晴
（明治学院大学大学院心理学研究科）

キーワード：被援助志向性，抑制要因，ディストレス開示，援助不安

【研究の目的】大学生が，適応的な大学生活を過ごすためには，必要なときに必要な人から援助を受けられるシステムを構築する必要がある。本研究は，大学生を対象に，他者にディストレス(distress)を開示する傾向（または隠蔽する傾向）や援助に対する不安といった被援助を抑制する要因に注目し，被援助志向性との関連を検討するために実施された。

【方法】都内私立大学に在学する大学生を対象とした。調査は，2003年12月上旬に実施され，243名から質問紙を回収し，記入漏れを除いた222(男74名，女148名）名を有効回答とした。平均年齢は20.52歳(SD=.632)であった。

・被援助志向性：先行研究を参考にして，大学生が学習・研究，健康，対人関係，住居・経済，情緒の問題において，「自分で問題を解決できない場合,『学内の医師・カウンセラー(以下，専門的ヘルパー)』『クラス担任・授業担当教官（以下，役割的ヘルパー)』『同じ大学の友人・知人（以下，ボランティアヘルパー)』にどの程度援助を求めるか」を5件法で尋ねた(水野・今田,2001)。

・援助不安尺度：に援助を求めるときに持つ主観的な不安を5件法で尋ねる尺度(水野・今田,2001)。ここでは先行研究と同様に専門的ヘルパー，役割的ヘルパー，ボランティアヘルパーごとに尋ねた。援助を受けていることで周囲から汚名を着せられる「汚名への心配」と，ヘルパーとの関係性やヘルパーの能力に関連する「呼応性への心配」の2因子から構成される。

・ディストレス開示尺度(DDI: Distress Disclosure Inventory)：ディストレスの開示を，開示―隠蔽という両極構造なものとして捉え，その行動傾向を測る尺度(Kahn & Hessling,1999)。ここでは，原版の尺度を日本語に翻訳し，10項目5件法で尋ねた。合計得点が高いほど，ディストレスを開示する傾向を示し，低いほど隠蔽する傾向を示す。

【結果】

・援助不安尺度

援助不安尺度については，下位尺度のうち「汚名への心配」に関わる項目において回答の分布に偏りが認められ為,「呼応性への心配」に関わる項目のみで探索的因子分析を行った。結果，専門的ヘルパー（4項目：α=.773)，役割的ヘルパー（5項目：α=.806)，ボランティアヘルパー（5項目：α=.814）の各ヘルパーとも「呼応性への心配」という1因子構造に集約された。

・ディストレス開示尺度

原版の尺度において提出されているモデルと，本研究で得られたデータとの適合度を明らかにするために確証的因子分析を行った。結果，適合度指標は，開示―隠蔽という両極構造を示すモデルで，SRMRの値が.034，CFIの値が.980を示しており，日本の大学生を対象とした場合においても，原版のモデルが支持された(Table1 参照)。また，χ^2検定の結果もこれを支持した(χ^2=45.963, df=25, n.s.)。

Table1　DDIの確証的因子分析結果

	χ^2	Df	SRMR	CFI
1因子構造モデル	235.021**	35	.089	.809
2因子構造モデル	104.762**	34	.062	.933
両極構造モデル	**45.963**	**25**	**.034**	**.980**

Note. SRMR=standardized root mean squared residual; CFI=Comparative Fit Index
**p<.01

・被援助志向性と抑制要因との関連

ディストレス開示尺度の合計得点と各ヘルパーの「呼応性への心配」の因子得点を，平均値による高低の組み合わせから4群に分類し，被援助志向性得点との関連を一要因の分散分析で検討した。その結果，①専門的ヘルパーの対人関係領域(F(3,218)=3.14, p<.05)，③ボランティアヘルパーの学習・研究(F(3,218)=4.85, p<.05)，健康(F(3,218)=9.01, p<.01)，対人関係(F(3,218)=6.52, p<.01)，情緒(F(3,218)=11.30, p<.01)の4つの援助領域での被援助志向性との間に関連が示された。多重比較の結果，専門的ヘルパーの対人関係領域で，ディストレスを隠蔽し呼応性への心配を感じる者は，ディストレスを開示し呼応性への心配を感じない者に比べて，被援助志向性が低いことが示された。ボランティアヘルパーの学習・研究領域では，ディストレスを隠蔽し呼応性への心配を感じる者は，被援助志向性が低く，呼応性への心配を感じない者は，被援助志向性が高いことが示された。さらに，健康，対人関係，情緒領域では，ディストレスを隠蔽し呼応性への心配を感じる者は，被援助志向性が低いことが示された。

【考察】以上のことから，各ヘルパーへの被援助志向性に対する抑制要因の影響は，援助領域で異なることが示唆される。またボランティアヘルパーについては，住居・経済領域を除く全ての援助領域の被援助志向性と抑制要因との関連が認められたことからも，ピアサポートのように友人や知人をサポート資源とし整備していく際には，ディストレス開示や呼応性への心配に注目していく必要があるだろう。今後より精緻化されたモデルを用いて検討する必要がある。その際，先行研究において指摘されている性差や自尊感情，ソーシャルサポートといった変数，また実際の被援助行動とどの程度関連するのかについても検討していく必要があるだろう。

【引用文献】

Kahn, J.H., & Hessling, R.M. 2001 Measuring the tendency to conceal versus disclose psychological distress. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **20**, 41-65.

水野治久・今田里佳 2001 大学生の援助に対する不安と被援助志向性に関する研究 日本心理臨床学会大会第20回大会発表論文集（日本大学文理学部），233.

（いいだ としはる）

看護学生の達成動機に関する研究

―自己教育力の育成との関連から―

○森田敏子　○松永保子　○内海滉
（熊本大学医学部保健学科）　（信州大学医学部保健学科）　千葉大学

キーワード：看護学生　達成動機　自己教育力　看護教育

【はじめに】

Murrayらによって理論化された達成動機は、「むずかしいことを成し遂げること。（途中略）他人と競争し他人をしのぐこと。才能をうまく使って自尊心を高めること」としている。このような達成動機は自己教育力と関連が深いと考えられる。

【目的】

看護学生の達成動機の因子構造を、学年別に自己教育力の観点から検討し、教育的示唆を得る。

【方法】

研究対象は，2000年にＦ大学に在学していた看護学生のうち倫理的配慮を行い研究への協力が得られた226名（１年次生56名93.3%、２年次生55名93.2%、３年次生58名98.3%、４年次生57名98.3%）である。調査用紙は、ベンディングが開発し、堀野・森野らが修正した達成動機尺度を用いた。いずれも主成分分析後にバリマックス回転法による因子分析を行った。クロンバックα係数は0.61～0.90であった。

【結果および考察】

１年次生は“難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う”“何でも手がけたことは最善をつくしたい”などから構成されていた**「自己努力最善因子」**，“世にでて成功したいと強く願っている”“社会の高い地位をめざすことは重要だと思う”などから構成されていた**「社会成功因子」**，“人と競争することより，人とくらべることができないようなことをして自分を生かしたい”“決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい”などの負の値で構成されていた**「没個性因子」**，“こういうことがしたいなぁと考えるとわくわくする”“今日一日何をしようかと考えることは楽しい”などから構成されていた**「自己課題因子」**の４因子が抽出された（累積寄与率53.71%）。

２年次生は“成功するということは名誉や地位を得ることだ”“社会の高い地位をめざすことは重要だと思う”などから構成されていた**「社会的地位評価因子」**“今日一日何をしようかと考えることは楽しい”“こういうことがしたいなぁと考えるとわくわくする”などから構成されていた**「自己生かし充実因子」**“決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい”“どうしても私は人より優れていたい”などの負の値で構成されていた**「平凡願望因子」**，“何でも手がけたことは最善をつくしたい”“難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う”などから構成されていた**「自己努力放棄因子」**の４因子が抽出された（累積寄与率57.29%）。

３年次生は“成功することは名誉や地位を得ることだ”“世にでて成功したいと強く願っている”などから構成されていた**「社会成功因子」**，“決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい”“何か小さなことでも自分にしかできないことをしてみたい”などから構成されていた**「個性充実因子」**，“こういうことがしたいなぁと考えるとわくわくする”“ちょっとした工夫をすることが好きだ”などから構成されていた**「自己工夫努力因子」**，“いつも何か目標を持っていたい”“みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい”などから構成されていた**「自己目標努力因子」**の４因子が抽出された（累積寄与率63.60%）。

４年次生は“結果は気にしないで何かを一生懸命やってみたい”“就職する職場は，社会で高く評価されるところを選びたい”などの負の値で構成されていた**「自己逃避因子」**，“決められた仕事の中でも個性を生かしてやりたい”“いつも何か目標を持っていたい”などから構成されていた**「個性発揮因子」**，“成功するということは名誉や地位を得ることだ”“社会の高い地位をめざすことは重要だと思う”などから構成されていた**「社会地位獲得因子」**，“他人と競争して勝つとうれしい”“ちょっとした工夫をすることが好きだ”などから構成されていた**「自己工夫最善因子」**と命名した４因子が抽出された（累積寄与率53.13%）。

以上の因子構造を自己教育力の観点から考察する。

１年次生は、個人の積極的価値に基づく個人的達成欲が第１因子に位置づき、「自己努力最善因子」や「自己課題因子」は、自己教育力に関連する因子である。努力して最善を尽くし、課題を見つけて自己を育成したい、目標に向かって努力したいという意志の力が認められる。これらの意志力は、自己教育力の育成に必要不可欠なものである。

２年次生は、「自己生かし充実因子」という自己教育力の育成には肯定的と受け止められる因子とともに、「平凡願望因子」あるいは、「自己努力放棄因子」といった、自己教育力の育成には否定的と受け止められる因子が存在する。このことから、自己教育力を育成する過程には２年次という中だるみ的な位置づけがあることを教師は理解する必要があることが示唆される。

３年次生は、自己教育力の観点からみると、抽出された４因子は、いずれも社会的成功という自己の課題を成し遂げようという意志や、そのために工夫し努力する態度、目標に向かって努力する姿勢、個性が充実する気迫が窺われる。

４年次生の因子構造には、個性の発揮、社会的な地位の獲得、自分なりの工夫、何事にも最善を尽くすというように自己教育力を高める姿勢が窺われる。しかし、その一方では、自己逃避という気持ちも露呈し、自己を教育して高めたいという意識とともに、４年次つまり最終学年にありがちな重圧にも耐えている状況が窺われる。教師は、これら学生の複雑な心理状況を十分に理解して教育・指導に当たる必要性があることが示唆される。

【おわりに】

これら看護学生の達成動機は、Murrayらによるむずかしいことを成し遂げることや、McClellandらの３つの卓越基準と合致している。達成動機からみた学生の理解は、自己教育力の育成に有効な示唆を得ると考えられる。

（もりたとしこ　まつながやすこ　うつみこう）

就職活動に対する自己効力

― 測定尺度作成の試み ―

○太田さつき　　岡村一成
（東京富士大学 経営学部）

キーワード：自己効力感、就職活動、キャリア成熟

【研究の目的】大学生の就職を問題とした先行研究の多くは、職業選択や進路選択を重視する。中でも Bandura（1977）の自己効力理論を、職業や進路の選択場面に応用した研究を見受けることが多い。

しかしながら進路・職業選択やその効力感と、実際の内定獲得との関係はあまり検討されていない。検討された場合でも、直接的な強い関係は見られないとの報告もある（浦上, 1996）。大学生や短大生の就職活動を支援する場合、現実的には内定の獲得が目指す目標である。従って、職業や進路の選択だけでなく、内定の獲得を促進する就職活動を捉えることが重要であろう。

先行研究において使用されてきた尺度の多くは、職業選択以外にも実際の様々な就職活動項目の多岐に亘る内容を含むことが多かった。そのため活動初期から最終段階に到るまでの行動が混在する。進学について尋ねる項目も含まれる。それが内定獲得との関係を捉えにくい原因と考えられた。

また「職業」は、特定の職種を思わせるが、就職活動では職種だけでなく会社や仕事内容も選択する必要があるため、質問に使用された「職業」が回答に影響した可能性も考えられた。

更には、自己効力感は、ある行動がとれるという「効力感期待」と、その行動が結果に結びつくという「結果期待」に分けられるが、これまでの研究では、「就職活動を行えば就職できる」という結果期待があまり取り上げられてこなかったという問題も考えられた。

以上の点を考慮し、本研究では「就職活動に対する自己効力」を測定するための尺度を作成することを目的とした。厳しい雇用環境の中、途中で就職活動をあきらめ、活動をやめてしまう学生が増えていることを実感している。こうした状況において、就職活動に特化した尺度作成は重要であろう。

【方法】対象者　東京富士大学短期大学部の 2 年生のゼミ生を対象に質問紙調査を行った。分析対象は男子 38 名、女子 84 名の計 122 名である。

尺度　「就職活動に対する自己効力」の「効力感期待」として、浦上（1996）および冨安（2000）の尺度から、一般的に就職活動として捉えられている項目を抜粋し、「職業」を「仕事や就職先」という表現に換えて使用した。計 17 項目へは「1 全く自信がない」から「5 非常に自信がある」までの 5 件法で回答を求めた。「結果期待」としては、安達（2001）の進路選択に対する結果期待を参考に、就職活動が就職に結びつくことへの期待を尋ねる 4 項目を作成した。

分析　まず尺度の構成を確認するため因子分析を行い、下位尺度の信頼性の確認を行った。次に尺度の構成概念妥当性を検討するため、坂柳（1999）の「キャリア成熟」他、関係すると思われる尺度との相関係数を算出した。「就業意欲」、「就業未決定」、「雇用環境への認知」などである。大学主催の就職ガイダンスへの出席状況などとの関連も検討した。

【結果と考察】因子分析　「就職活動に対する自己効力」21 項目を主因子法によって分析し、分類の不明確な 1 項目を削除して最終的に 3 因子構造を採択した。第 1 因子は、「できるだけ多くのセミナーに参加すること」など就職活動を実行することへの自信の程度をあらわすものであるため「就職活動への効力感期待」と解釈した。第 2 因子は、「就職活動のノウハウを勉強すれば、よりよい就職ができるだろう」など、就職活動をすれば就職できるという確信の程度をあらわすため「就職活動への結果期待」と解釈した。第 3 因子は、「自己の持ち味を最も生かせると思う仕事や就職先を決めること」など、自己分析と就職を結びつけることへの自信の程度をあらわすものであるため「自己と就職の統合への期待」であると解釈した。尺度の基礎統計は Table 1 の通りである。下位尺度の α 係数は.83 から.93 と高い値が得られ、項目－尺度間の相関も.46 から.85 と高い値を示していた。

Table 1 就職活動に対する自己効力尺度の基礎統計

尺度名	項目数	MEAN	SD	α 係数	尺度間相関 1	尺度間相関 2
1. 効力感期待	12	3.14	0.72	.91		
2. 結果期待	4	3.73	0.72	.83	.26	
3. 統合への期待	4	3.33	0.99	.93	.61	.14

他の測度との相関　他の変数との相関は Table 2 の通り、キャリア成熟との正の相関が比較的高く見られた。就業への意欲との正の関係、受け身と未決定との負の関係も認められた。効力感期待と就職試験受験回数、結果期待とガイダンス出席回数との正の相関もみられた。これらの結果は、いずれも理論的に整合的である。しかし結果期待と就職への低期待に有意な関係が見られなかったことは予想と一致せず、結果期待と困難な雇用状況への認知との正の関係も理解が困難であった。

これらの結果から、今回作成した就職活動に対する自己効力尺度は、十分な信頼性と概ね許容可能な構成概念妥当性が得られたと判断した。しかし後者についてはまだ疑問な点もあるため、今後の課題としたい。

Table 2 他の変数との相関関係

	就職活動への効力感期待	就職活動への結果期待	自己と就職の統合への期待
就業への態度			
意欲	.34 ***	.36 ***	.15
受け身	-.24 **	-.28 **	-.13
職業未決定	-.22 *	-.03	-.48 ***
キャリア成熟			
キャリア関心性	.48 ***	.38 ***	.37 ***
キャリア自立性	.32 ***	.30 ***	.29 **
キャリア計画性	.39 ***	.07	.61 ***
雇用環境への認知			
困難な雇用状況	.13	.22 *	.00
就職への低期待	-.08	.05	-.29 **
出席状況	.17	.13	.12
成績	.28 **	.30 ***	.08
ガイダンス出席回数	.08	.18 *	.00
説明会出席回数	.19	.08	.10
試験受験回数	.32 *	.08	.24

（おおた さつき・おかむら かずなり）

人格の偉大性要因についてⅨ

―― 人格の「やさしさ」類型化の試み（3）――

○藤田主一　　高嶋正士
（城西大学女子短期大学部）　（共立女子大学名誉教授）

＜キーワード＞　人格の偉大性，偉大性のＢＡＳＩＣ構造，人格のやさしさの類型化，中高年者

【目的】

本研究は，人格の『偉大性』(greatness）を構成する要因や背景を明らかにすることを目標にしている。『偉大性』の概念は，通常「偉い人」や「立派な人」などといわれる個人を指すものであるが，必ずしも明確な定義が存在するわけではない。我々は「偉大な人格」の特性や発達などを研究する過程（小学生，中学生，大学生，社会人を対象）で，『偉大性』の５因子（ＢＡＳＩＣ）構造仮説を提案してきた（応心大会）。それは，以下に示すとおりである。

①「行動の基準と努力」因子 …… Behavior
②「仕事や業績」因子 …… Achievement
③「社会や家族への貢献」因子 …… Social contribution
④「知的能力の高さ」因子 …… Intelligence
⑤「性格や人柄」因子 …… Character

ここでは，「Ｃ」因子に含まれる項目『やさしさ』を取り上げる。日常社会でも「環境にやさしい／身体にやさしい／やさしい人」のように，「やさしい」という言葉は幅広く用いられているが，その意味するところは曖昧である。たとえば「やさしい男性／女性」という場合，実際にどのような人物像を描いているのかは不明である。本研究(1)(2)では大学生男女を対象者に調査したが，今回は中高年者に同様の手続きによる調査行い，若者との捉え方の差異を検討したい。

【方法】

(1)調査対象者：埼玉県内に在住する中高年者 162名（男性78名／平均年齢66.3歳／50～79歳，女性84名／平均年齢61.7歳／51～74歳）である。

(2)調査材料：フェイスシートに続き，「やさしい」人について自由に記述できる空欄（ＴＳＴ形式）が４種類×６個連続しているＢ４判の調査用紙を作成した。

(3)手続き：①教示は次のとおりである。「あなたは『やさしい男性／女性』とはどういう人を言うのだと思いますか？男性／女性の『やさしさ』（性格，行動，考え方など）を具体的に書いてください」「あなたは『やさしくない男性／女性』とはどういう人を言うのだと思いますか？『やさしくない男性／女性』（性格，行動，考え方など）を具体的に書いてください。②記述量および記述個数は自由である。③記述終了後「記述が複数ある場合，中でもあなたが一番主張したい『やさしい／やさしくない』男性／女性を１つ選んで○印をつけてください」という教示を続けた。

【結果と考察】

本報告では，得られた調査材料の中から「やさしい男性／女性」の結果を検討する。なお，中高年の男性／女性が記述した総個数は，「やさしい男性」に男性 253個（平均3.24）／女性 252個（平均3.00），「やさしい女性」に男性 194個（平均2.49）／女性 184個（平均2.19）であった。「やさしい男性」に対する記述数が男性／女性とも多い。記述内容は類似のカテゴリーでまとめることにした（表１／表２）。

(1)《やさしい男性》：全記述内容を精査し，10種類のカテゴリーに分類（「やさしい女性」も同様）することができた。中高年者が捉える「やさしい男性」像は，第一に「穏やかな人」である。たとえば，＜心が豊かで，広い視野を持ち，性格が穏やかで，包容力がある＞というイメージと思われる。

表１　中高年者が捉えた「やさしい男性」の分類　（頻度，%）

カテゴリー	男　性	女　性	全　体	性差
穏やかな人	55 (21.7)	39 (15.5)	94 (18.6)	
思いやりのある人	41 (16.2)	39 (15.5)	80 (15.9)	
らしさを発揮する人	32 (12.7)	36 (14.3)	68 (13.5)	
理解する人	19 (7.5)	29 (11.5)	48 (9.5)	
相談にのる人	24 (9.5)	24 (9.5)	48 (9.5)	
道徳的な人	30 (11.9)	10 (4.0)	40 (7.9)	**
援助する人	15 (5.9)	23 (9.1)	38 (7.5)	
エスコートする人	12 (4.7)	25 (9.9)	37 (7.3)	*
気づかう人	14 (5.5)	19 (7.5)	33 (6.5)	
その他	11 (4.4)	8 (3.2)	19 (3.8)	

* p<.05，** p<.01

表２　中高年者が捉えた「やさしい女性」の分類　（頻度，%）

カテゴリー	男　性	女　性	全　体	性差
穏やかな人	38 (19.6)	37 (20.1)	75 (19.8)	
理解する人	29 (14.9)	25 (13.6)	54 (14.3)	
思いやりのある人	30 (15.5)	23 (12.5)	53 (14.0)	
らしさを発揮する人	29 (14.9)	18 (9.8)	47 (12.4)	
道徳的な人	22 (11.3)	19 (10.3)	41 (10.9)	
気づかう人	12 (6.2)	16 (8.7)	28 (7.4)	
援助する人	11 (5.7)	14 (7.6)	25 (6.6)	
相談にのる人	10 (5.2)	11 (6.0)	21 (5.6)	
エスコートする人	4 (2.1)	9 (4.9)	13 (3.4)	
その他	9 (4.6)	12 (6.5)	21 (5.6)	

次に「思いやりのある人」が多い。他のカテゴリーには複数の記述が出現するが「思いやり」は単独で出現したものである。したがって，包含される「思いやり」はもっと多数かもしれない。「男／女らしさの発揮」を強調する記述，たとえば＜男らしい積極性，女らしい柔和さ＞も多い。大学生男女に対する同様の調査では，「援助する人」「気づかう人」など行動と直結するカテゴリーにも頻出したが，中高年の捉え方では人格そのものに温厚さを求めているようである。

表１のとおり，２つのカテゴリーに性差が存在した。男性はやさしさに「道徳的」な行動を求め，女性は「○○してくれる」男性像にやさしさを求めているようである。

(2)《やさしい女性》：中高年者が捉える「やさしい女性」像も「穏やかな人」である。たとえば＜心にゆとりがあり，笑みが絶えず，言葉がやさしく，気持ちが明るい＞というイメージであろうと思われる。次に「理解する人」「思いやりのある人」が続く。「理解する人」は相手の心を察したり，相手の立場を考えようとする人格像である。中高年者の「やさしい女性」に対する捉え方は，男性／女性ともほぼ同様の立場のようである。　（ふじたしゅいち・たかしままさし）

性教育におけるアサーション・トレーニングの活用

宇部　弘子
桐生短期大学

キーワード　性教育　・　アサーション・トレーニング　・　自己決定

【目　　的】

わが国の性教育では，古くは管理や指導を中心とした観念的なものであった．それが，近年，HIV/AIDS の出現により，学校現場でもエイズ教育が導入されるようになり，科学や人権を重視した現実教育へと変化（山本，1998）してきている．

中学校の教育目標（内山，1992）においても「人間尊重や人間関係を築くこと」が重視されている．そして，その目標に到達するためには，他者に迷惑をかけたり，傷つけたりしないというモラルや社会の秩序やルールに反しないという原則に基づいて，性にかかわる態度や行動を主体的に選択できる能力，つまり，自己決定能力の必要性（松本，1999）が強調されている．

また，これとは別に，学校現場では中学生に関るさまざまなこころの問題が取り上げられるなかで，コミュニケーション能力や人間関係を築く力の不足が指摘されている．そのため，相互尊重，自己信頼や自己決定能力を養うことを目的にアサーション・トレーニングが導入される動きがある．

これら，性教育とアサーション・トレーニングとは，同じ力を養うことを目標に掲げていながら，それぞれ別の目的によって行われているのが現状である．

そこで，今回，中学校での性教育にアサーション・トレーニングの理論を取り入れ，より効果的に性行動で必要な自己決定力を身につけることができるのかということについて検討することを目的とした．

【方　　法】

1．実施期間と対象

実施期間は，2003 年 11 月に学校で企画された「性教育セミナー」において，同校の体育館を会場に行われ，時間は約 90 分間．対象は，G 県 M 市の A 中学校の 2 年生（男子 69 名，女子 62 名，性別未記入 1 名）の 132 名と学年担当教員，および保護者の役員と数人の希望者であった．アンケートおよび感想文は，セミナー終了後に各クラスに戻り，担任教諭の指導の下で記入してもらった．アンケートの内容は，親との会話や性教育の経験，自己表現や悩みの有無などの 16 項目であった．

2．実践内容

まず，「相手のこころとからだを知る」ということで，思春期のからだとこころの変化についての知識を伝えた．そこでは，個人差を強調し，それゆえに他者理解には相互の自己表現が必要であるとした．次に「自分を知る、自分を伝える」では，自分を知り，他者との違いを確認するための簡単な課題に取り組んでもらった．そのうえで，アサーション・トレーニングで述べられている対人場面における 3 つの行動パターンについて説明した．さらに，アサーション行動は人権を尊重し，自己決定に支えられ，関係維持に役立つとし，それが性行動において基礎となる重要なスキルであることを強調した．

【結果と考察】

1. アンケート結果

①親や友人との会話

親や友人との会話について全体でみると，「よく話す」のは父親とが 31.3%であるのに対し，母親とは 70.3%で，母親との会話が多い．男女別では，同性の親との会話が多くなる傾向がみられた．しかし，それが「性」についてでは，ほとんどが「話さない」という結果となった．そのかわり，友人とは悩みの相談もし，「性」についての会話も多い．親から距離をとり，友人関係にシフトしていく思春期の特徴を反映するものとなった．そのため，情報の偏りが懸念され，的確な情報選択における自己決定力の必要性がうかがえた．

②過去の性教育の経験

学校での性教育は，ほとんど等しく機会が与えられているはずであるが，教育を受けたという経験や知識についての回答にばらつきがみられ，理解には個人差が大きいようである．そのため，性教育では，一方的な情報伝達だけでなく，知識やスキルを確認しながら進めることが必要であり，実感を伴う体験は，効果が期待できるのではないだろうか．

③自己表現

自己表現の一般的な傾向では，「困ったときに相談するか」という問いに対して，男子では「しない」が 26.4%あった．「する」とした男子は 29.2%，女子が 48.4%と，男子よりも女子のほうが相談機会は多いようである．「嫌なことをされたらやめてと言う」とでは，全体で「言う」と「時々は言う」を加えたものが 95.3%と高い結果となった．「好きな人に気持ちを伝える」のは，「伝えない」とした者が 61.2%と男女とも多く，異性との関係を形成していくスタート時点での自己表現でさえ，十分にはできていないようである．

④悩みの有無

悩みについては，「体の悩み」では第 2 次性徴に伴う変化についての記述もみられたが，全体で 74.0%が「ない」としている．「性格や対人関係の悩み」では，思っていることがはっきり言えない，自分勝手に振舞ってしまうことが多いという記述がみられ、「ある」と「少しある」を加え，男子が 26.0%に対し，女子は 59.7%と男子より高い結果となった．

2. セミナーの感想

性教育と銘打ったセミナーであったため，予想に反した内容で，意外性を感じたという感想が多くみられた．その中で，自己理解や自己信頼を促す役割は果たせたようである．しかし，「性行動」への結びつきはあまり強調されておらず，その点について今後の検討が必要であると思われる．

【まとめ】

今回の試みでは，アサーション・トレーニングが性教育を行う上での土台作りとして，自分と相手を大切にすることや自己の意思表示が重要性を伝えるには有効であったと考えられた．今後はより具体的なプログラムの工夫やその効果についても検討していく必要があると考えている．

「やらない」症候群

大澤　光
（東京都立科学技術大学・工学部）

キーワード：「やらない」行動、「やらない」理由、「やらない」法則

【研究の目的と方法】「やらない」症候群とは、「やらない」行動が“習慣化”している行動様式のことである。ここで、「やらない」行動とは、「やる」べき“こと”（対象）を「やらない」、あるいは、「やる」べき通りには「やらない」行動のことである。人が「やらない」症候群になると、なにかを「やる」べき状況におかれたとき、まずはそれを「やらない」理由をあげ、それを「やらない」という結果に終わることが多い。この稿では、筆者が直接・間接に経験・観察した人の行動について、以下の課題を検討・考察した。

1)「やらない」行動には、どんな「パターン」があるか。
2)「やらない」行動には、どんな「理由」があるか。
3)「やらない」症候群には、どんな「法則」があるか。

【「やらない」行動】文字通りの「やらない」という行動、「やった」がうまくいかなかった行動、「やる」べきことを「やらなかった」行動などを含む「やらない」行動を検討・整理し、この中からいくつかのパターンを見い出した。これらは、実際の「やらない」行動の理解に有効であり、また、これらの共通点や違いを考察することによって、「やらない」行動の本質や構造が解明できる可能性がある。

1)「そこそこ」行動：“こと”を精一杯には「やらない」。出し惜しみ。結果が十分でなくても満足する。
2)「だらだら」行動：“こと”をケジメなしにのろのろと「やる」。きっかけがあれば「やめる」。暇つぶし。
3)「付かず離れず」行動：“こと”に深くは関わらず、また、離れ過ぎずに「やる」。主役にはならない。ずるい。
4)「杓子定規」行動：ルールや常識にあることだけを、形式的に「やる」。それ以外は「やらない」。
5)「すり替え」行動：「やる」べき“こと”を、よりやりやすい、よりやりたい“こと”にすり替えて「やる」。
6)「思い違い」行動：「やる」べき“こと”と違うことを「やる」。早とちり、トンチンカン。能力不足。
7)「見切り発車」行動：十分な検討をせずに「やる」。手に負えなくなると「やめる」。早とちり、独り合点、見失い。
8)「あれもこれも」行動：「やる」べき“こと”を考え過ぎて「やらない」。「やらない」ための「あれもこれも」もある。
9)「まだまだ」行動：時間が経って状況が変わるのを期待して先延ばし。やり易くなる、やらずに済む。きっかけ待ち。
10)「やる振り」行動：「やる」「やっている」「やった」に見えるが、実際には「やらない」など。見栄張り、うそつき。
11)「できない」行動：端っから「できない」ので「やらない」。思い込み、諦め。意欲不足、能力不足。「やらない」から「できない」もある。
12)「やめない」行動：状況が変わり必要がなくなっても「やめない」。「やめない」ための「すり替え」もある。
13)「やらせない」行動：「やらない」だけでなく、他人にも「やらせない」。互いに示し合わせた「やらない」もある。

「やらない」行動は、問題の「発見」「調査・観察」「理解」「検討」「解決」「実行」「結果の評価」のどの段階で「やらない」かを検討することで、パターン化できる。また、「やらない」ためにする「やらない」検討は、「あれもこれも」「まだまだ」「やる振り」などが複合したものと理解できる。

【「やらない」理由】文字通りの「やらない」、直ぐには、いい加減にしか、最後まで「やらない」、ろくな検討もせずに「やる」、すぐ「やる」がすぐ「やめる」、見当違いに「やる」、必要なくても「やめない」、何かの都合で「やらせない」、他人がすべき“こと”を「やる」など、「やらない」行動の「やらない」理由を検討・整理した。ちなみに、これらは、すべて「やらない」人の主観的な申告である。

1)自分の“こと”ではない：自分が「やる」必要はない、「やる」べきではない。自分よりも適当な人が他にいる。
2)自分には「できない」：知識・経験が足りない。資源・権限などが足りない。自分だけでは「できない」。言い訳。
3)「関心」がない：忘れた、知らない。重要でない。興味。
4)「気」に入らない：“こと”や人や場や状況などが気分的・感情的に嫌だ。めんどくさい。余計な手間がかかる。
5)「後」で：直ぐ「やる」必要ない。今はよくない。まだ。
6)他の“こと”で「忙しい」：時間がない。重要でない。
7)「時間」が経てば：状況が変わり、「問題点」が解消する。「やらず」に済む。「誰か」がやってくれるかも知れない。
8)やらなくても：どうということはない。インセンティブもペナルティーも小さい。以前にも「やらず」に済んだ。なんとなくそんな雰囲気・空気。
9)「失敗」したら：沽券に関わる。「やらない」に限る。
10)「例」がない：「やった」「うまくいった」例がない。
11)「すでに」：誰かが「やっている」。
12)やっては「いけない」：“こと”には問題点がある。他の“こと”に迷惑。否定性。

【「やらない」法則】以上の検討から、人の「やらない」症候群に関して、“妥当だ”と考えられる「法則」つまり経験則や仮説あるいは「思考」を検討し、以下を見いだした。

1)「やる」よりも「やらない」方が楽だ。
2)「やる」は失敗があるが、「やらない」は失敗が少ない。
3)「やらない」理由はいくらでも見つけられる。
4)「やる」ときは「やる」理由を見つけられる。「やった」「やらなかった」「やっている」「やっていない」も同じ。
5)人は、行動（結論）を決めてからその理由を付ける。理由から行動を決めるのではない。
6)「やめる」には、特別な理由が必要である。
7)「やらない」は習慣化する。「やる」も習慣化する。
8)誰でも、「失敗」したくない。
9)ペナルティーは「やらない」。インセンティブは「やる」。
10)結果が小さいは「やらない」。大きいは「やる」。
11)分かるは「やる」。分からないは「やらない」。
12)好きは「やる」。嫌いは「やらない」。
13)見られるは「やる」。見られないは「やらない」。
14)「やらない」行動は、構造によって生じる。

【結語】この稿では、「やらない」症候群について、「やらない」行動、「やらない」理由、「やらない」法則を検討した。一般に、どんなことでも、「やらない」より「やる」方が得るものはずっと多い。次のステップでは、サントリーの創業者・鳥井信二郎の『やってみなはれ、やらな、わからしまへんで』をマインドに、以下の課題についての検討を試みる。

1)「やらない」行動の構造（からくり）はどんなものか。
2)「やらない」を「やる」に変えるにはどうしたらよいか。

【文献】1)山口瞳・開高健 2003 やってみなはれ　みとくんなはれ、新潮文庫　2)西堀栄三郎 1999 石橋を叩けば渡れない（西堀流創造的生き方）、生産性出版

（おおさわ　みつる）

外乱により誘発されるエラーの発生メカニズムに関する実験的研究

○太刀掛　俊之[1)]　臼井　伸之介[1)]　篠原　一光[1)]　中村　隆宏[2)]　神田　幸治[3)]
([1)] 大阪大学大学院人間科学研究科　[2)] 独立行政法人 産業安全研究所　[3)] 名古屋工業大学大学院工学研究科)
キーワード：外乱タスク，ステップ抜かし，ヒューマンエラー

【研究目的】

産業及び日常生活場面において，ある作業系列の遂行途中に，作業系列とは別の作業を遂行した場合，元の作業系列に復帰しようとしても，作業系列のどの部分から再開すればよいかわからなくなったり，行うべき作業系列の一部を飛ばしたりすることがある．仁平・佐々木・守川・大橋・板井（2001）は，一定の系列作業で特定のステップが抜かされる「し忘れ」現象を「ステップ抜かしエラー」と総称し，その発生メカニズムを実験的に検討した．その結果，作業系列に外乱タスクが侵入した後，本来の作業系列に復帰したとき，エラー発生率が上昇し，ステップ抜かしエラーの誘発が実験的に可能であることが示された．本実験では，さらに外乱の侵入箇所と外乱の種類を操作することにより，外乱侵入後にエラーが増加するメカニズムを吟味する．

【方法】

被験者：男性 16 名及び女性 21 名の計 37 名（平均 24.4 歳）．

装置：15 インチ CRT ディスプレイを備えたノートブック型コンピュータ（Dell 製 Inspiron 1100，OS は Windows XP）を使用した．実験プログラムは Visual Basic 6.0 を使用し，実験中は他アプリケーションを起動しないように配慮した．

課題：各試行は，6 つのタスクから構成された．1 タスクごとに，画面中央に 1 つの文字刺激が提示され，予め記憶した判断規則に従い，文字刺激が正しく表示されているか否かを，なるべく速く正確に弁別した．例えば，提示された文字刺激が偶数か否か，赤色か否か等であり，反応時間と正誤結果が記録された．なお，提示刺激に対する弁別反応が終了後，次の刺激が提示された．課題は，外乱が侵入しない統制セッションと外乱が侵入する外乱セッションにより構成された．

外乱セッション：外乱侵入時には，判断規則とは異なる指示が 1 秒間出現した後，文字刺激が提示された．その判断基準に従って文字刺激を弁別し，その後，従来の作業系列に復帰して残りのタスクを遂行した．外乱侵入箇所は，2・3 番目，3・4 番目，4・5 番目のタスク間の 3 箇所であり，外乱の種類条件として，ⅰ）外乱侵入直前のタスクを基準に，ひとつ前のタスクと同じ判断基準（Pre 水準），ⅱ）外乱侵入直前のタスクと同じ判断基準（Same 水準），ⅲ）外乱侵入直前のタスクを基準に，ひとつ後のタスクと同じ判断基準（Aft 水準），ⅳ）待機 6 秒間（Wait 水準）を設定した．各侵入箇所において，4 種類の外乱タスクを準備し，被験者内要因計画とした．外乱が侵入する試行は全体試行数の 20%であった。

手続き：①外乱を含まない練習試行 20 試行を実施する．データ確認後，不都合がある場合には，20 試行を追加実施する．②統制セッション 20 試行を実施する（統制セッション 1）．③外乱セッションについて，外乱出現をデモンストレーション後，120 試行を 60 試行ずつのセッションに分けて実施する（外乱セッション 1 及び 2）．④統制セッション 20 試行を実施する（統制セッション 2）．

【結果】

各セッションにおけるエラー発生率を Fig.1 に示す．外乱セッションにおいて‘外乱以外’は外乱侵入のない試行のタスクを，‘外乱タスク’は外乱タスク自体を、‘外乱以降’は、外乱侵入以降のタスクを含んでいる．この結果，外乱侵入以降にエラー発生率が上昇し，仁平ら（2001）の結果と同様，外乱侵入の効果が認められた．

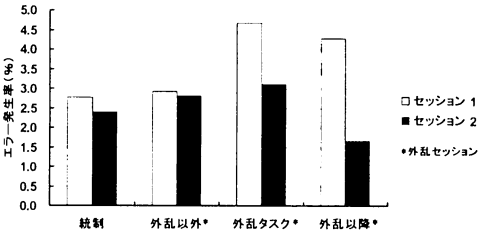


Fig.1 各セッションにおけるエラー発生率

次に，Fig.2 は外乱侵入以降の反応時間において，統制セッションから求められた基準値と比較した遅延量を示す．例えば，‘外乱直後 1’とは，外乱侵入後，本来のタスクに復帰した 1 タスク目であり，外乱侵入以降のタスク順序条件とする．Wait 水準においては，外乱タスクの反応時間が存在しないため，4（外乱侵入以降のタスク順序条件）×4（外乱の種類条件）の 2 要因分散分析を行った．この結果，外乱侵入以降のタスク順序条件の主効果（F（3,108）=4.84, p<.001）が認められ，外乱の種類条件の主効果は認められなかった（F（3,108）=0.18, n.s.）．なお，2 要因の交互作用が認められた（F（9,324）=2.47, p<.001）．特に，将来行うべきタスクが外乱として侵入した場合（Aft 水準），外乱侵入以降のタスクが進行するにつれて，パフォーマンスが次第に低下した．

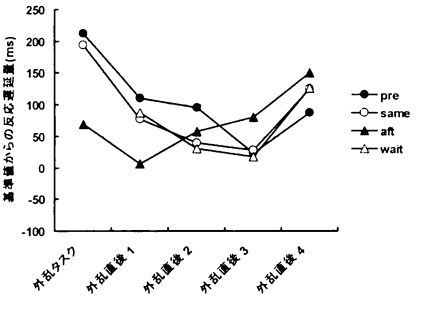


Fig.2 外乱侵入以降における反応遅延量

【考察】

Fig.2 の結果より，将来遂行すべきタスクが外乱として侵入する場合，外乱侵入以降において，次第にパフォーマンスが低下したことから，外乱の種類によりエラーの発生メカニズムは異なるものと考えられる．上記の傾向より，現在のタスク遂行時に，ある程度先に行うべきタスクに対するモニターが行われている可能性がある．すなわち，モニターの対象範囲にあるタスクの一部が外乱として処理されることで，モニター可能であった範囲に該当するタスクの遂行が代償され，次第にパフォーマンスが低下するものと推測される。

【引用文献】

仁平義明・佐々木宏之・守川伸一・大橋智樹 2001 ステップ抜かしエラーの実験的誘発（1）　-T-STEP による検討-，産業・組織心理学会第 17 回大会論文集，158-161.

（たちかけ としゆき・うすい しんのすけ・しのはら かずみつ・なかむら たかひろ・かんだ こうじ）

特性的自己効力感が心理的ストレス反応に及ぼす影響の検討

― 適応に関する個人要因検討の試み ―

○鈴木　綾子
（財団法人鉄道総合技術研究所）

キーワード：特性的自己効力感、心理的ストレス反応、適応

【目的】ある環境に対して適応的であるか否かは，個人要因の影響が大きいと言われている．仕事における教育や研修なども，個人差を考慮した方法を採用することが，最も教育効果が得られ，当該個人にとって適応的な状態を形成することに役立つと考えられることから，職場教育においての個人要因検討の重要性が指摘される．中でも，特性的自己効力感は，心理的ストレス研究において認知的評価に影響を及ぼす個人要因として注目されてきた．特性的自己効力感とは，個々の課題や状況に依存せずに，より長期的に，より一般化した状況において，ある結果を達成するために必要な行動を自分がうまくできるかどうかの予期であり（Bundura,1977;成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田，1995），特性的自己効力感の高低は，個人の行動全般にわたって影響する可能性が指摘されている（久野・矢澤・大平，2003）．個人の適応に与える特性的自己効力感の影響の予測が可能となることで，各個人に適した教育が検討できるものと考えられる．本研究では，特性的自己効力感が適応に与える影響の検討として，ストレッサーとしての実験課題に対する心理的ストレス反応に及ぼす影響を検討した．

【方法と対象】被験者：男子学生 6 名（平均年齢 20.3 歳，SD0.70）

実験時期：2003 年 10 月中旬～12 月中旬　**実験方法**：①実験の概要　実験は，電車の運転を模擬した運転シミュレーターの操作を課題とし，その前後に質問紙に回答させた．実験は 5 日間（練習 3 日間，本試行 2 日間）にわたって行われ，それぞれ前半 2 時間，休憩 1 時間，後半 2 時間のスケジュールであった．実験は，休憩時も含め，各種生理指標測定のための電極およびコード（脳電図計，心電図計，眼電図計，アイカメラ）を身体に装着させた状態で行い，実験中は被験者の音声と映像も記録した．また，実験前日は十分睡眠をとるよう指示し，実験開始 1 時間前から実験終了まで食事は禁止した．　②実験課題の内容　実在の鉄道路線を模擬した運転操作を課題とした．「時刻表どおりの運転」「所定の停止位置に対し±5m 以内の範囲に停車させること（一部±2m 以内）」「指差呼称など指定された動作を行うこと」を教示として与えた．　③測定時点　初日実験開始前に特性的自己効力感尺度（成田他，1995）と心理的ストレス反応尺度（SRS-18；鈴木・嶋田・三浦・片柳・坂野，1995）を実施した．以降，初日終了後，2 日目前半終了後・後半終了後，3 日目前半終了後・後半終了後，4 日目前半終了後・後半終了後，5 日目前半終了後・後半終了後の 9 時点において心理的ストレス反応尺度（SRS-18）を実施した．④被験者分類　初日実験開始前の特性的自己効力感の値が高い順から 3 名を特性的自己効力感高群，低い順から 3 名を特性的自己効力感低群として，両群の心理的ストレス反応尺度の得点を比較した．

【結果と考察】結果は，Figure1 に示したように，特性的自己効力感の低い者は，高い者と比較して，課題実施前の心理的ストレス反応が高い可能性が示唆された．実験進行にしたがい，特性的自己効力感の低い者は，心理的ストレス反応が低下し，特性的自己効力感の高い者とほぼ同じ値を示した．特性的自己効力感の高い者は，実験開始前から実験終了まで心理的ストレス反応はほぼ同じ値であった．

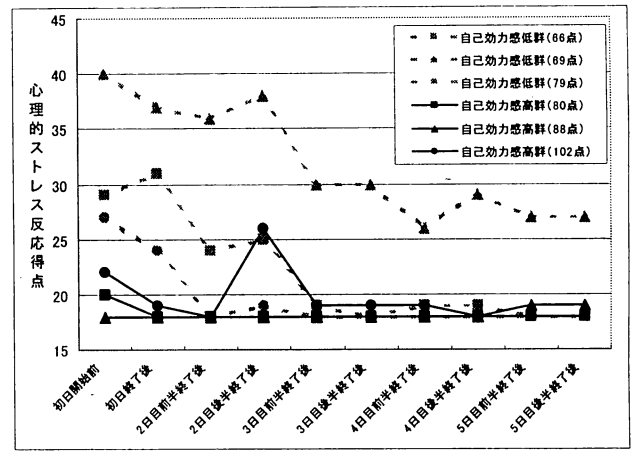


Figure1　各被験者の心理的ストレス反応の変化

Sherer, Maddux, Mercandante, Prentice-Dunn, Jacobs & Rogers（1982）によれば，特性的自己効力感は，未経験の新しい状況においても，適応的に対処できるという期待に影響を与えるとされている．したがって，本研究における特性的自己効力感高群は，実験課題という新規の事象に対しても，適応的に対処できるという期待を持ち，特性的自己効力感低群と比較して心理的ストレス反応が高い値を示さなかったものと考えられる．

本研究における結果では，特性的自己効力感低群は，実験進行とともに心理的ストレス反応得点が低下し，特性的自己効力感高群の得点に近づく傾向が認められたが，特性的自己効力感の高低は，認知的評価やコーピング方略の選択に影響を与え，心理的ストレス反応にも差異を及ぼす可能性が考えられる．また，一般に，あるストレッサーに対し過度にストレス反応が表出される場合においても，継続するストレッサーに対する認知的評価やコーピング方略が影響を受け，その後の心理的ストレス反応にも影響を及ぼすことが予想される．したがって，今後は特性的自己効力感の違いによる，ストレッサーに対する認知的評価とコーピング方略の差異を，ストレッサーの性質も含めて検討することが必要であろう．

【結論】特性的自己効力感の低い者は，高い者と比較して，負荷の大きい課題に直面する事態が予想される時，より強くストレス反応を表出する可能性が示唆された．これより，教育場面においては，特性的自己効力感の低い者に対して，より容易な課題から順次課題レベルを上げ，適切なパフォーマンスレベルが保てるように配慮することなどが考えられる．ただし，本研究は被験者数が少ないため，結果を一般化することは難しい．今後は被験者数を増やして検討を続ける予定である．

【引用文献】Bundura,A. 1977　Self-efficacy:Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*,84,191-215.
久野真由美・矢澤久史・大平英樹　2003　学習性無力感の生起事態における特性的自己効力感と免疫機能の変動　心理学研究，73，472-479.
成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤眞一・長田由紀子　1995　特性的自己効力尺度の検討―生涯発達的利用の可能性を探る―　教育心理学研究，43，306-314.
Sherer,M.,Maddux,J.E.,Mercandante,B.,Prentice-Dunn,S., Jacobs,B., & Rogers, R. W. 1982 The self-efficacy scale: Construction and validation. *Psychological Reports*,51,663-671.
鈴木伸一・嶋田洋徳・三浦正江・片柳弘司・右馬埜力也・坂野雄二　1997　新しい心理的ストレス反応尺度（ＳＲＳ-18）の開発と信頼性・妥当性の検討　行動医学研究,4,22-29.

（すずき　あやこ）

状況認識手法を用いた事故事例分析

○細田　聡[1,2]　施　桂栄[1]　奥村隆志[1]　余村　朋樹[1]　井上枝一郎[1,3]
([1] 財団法人労働科学研究所　[2]関東学院大学文学部　[3]関東学院大学人間環境学部)
キーワード：状況認識、事故分析、労働災害、ヒューマンエラー

【研究の目的】　本研究は、いわゆるヒューマンエラーが関与する労働災害の低減に寄与する新しい原因分析手法(以下、SA法) の開発とその適用を目的としている。過去に発生した災害事例を詳細に検証するならば、直接原因とされがちなヒューマンエラーは、作業環境の不具合や作業手順の不備に因って誘発された結果に過ぎないと考えられる。そこで、本研究では、個人がエラーへと誘発されるプロセスに焦点を当て、個人が危険行動を冒してしまう認知的枠組みについて、「状況認識 (Situation Awareness)」という概念をキーワードに、事故分析手法の開発を行い、その適用を図った。

【方法】　まず、状況認識に関する先行研究の文献研究を行い、本研究における状況認識概念を明確化した。その上で、1)作業の客観状況を構成する要素の抽出；2)作業者の主観状況を構成する要素の抽出；3)客観状況と主観状況との間の不適合ポイント；4) 当事者と他者の主観状況間の不適合ポイント；5)両者の不適合をもたらす要因の特定、という一連の手続きからなるSA法を確定した。そして、この手法を某産業組織で発生しためっきライン巻き込まれ事故に適用した。

1.面接調査：面接調査の対象者は、被災者をはじめ、現場オペレータ層、職長、管理者層およびスタッフの合計15名である。各対象者につき1～2時間のヒアリングを行い、延べ約25時間を要した。ヒアリングにおいては、事前に作成した質問事項に従って、作業内容、発生経緯などの情報を収集した。ヒアリング内容は全て、対象者の許可を得てICレコーダー (Olympus Voice Trek DM-1) に録音された。

2.ヒアリング内容を、事故発生までの4フェーズと事故後の対応の計5フェーズに時系列にそって分割し、また、ヒアリング内容の分類次元および項目 (表1)、の各分類軸に従い分類し整理した。

表1　ヒアリング内容の分類次元および項目

分類次元	項　目
作業ｲﾝｸﾞﾌｪｰｽ	対象設備・取扱対象物・使用治具・機器情報・作業姿勢・作業者位置/移動・対象物位置/移動
作業空間	空間構造・作業場所・環境状態　(3項目)
作業工程	作業目的・作業時間・担当業務・当該作業内容・作業性質 (通常/特殊/緊急)・全作業工程・全工程での位置づけ
作業者状態	経験/知識/技能・状況把握/予測・作業負荷・体調・性格
情報伝達	情報チャンネル・情報伝達手段・コミュニケーション状態/内容・業務指示系統・指示内容
人的管理体制	人員体制・役割体制・作業規則・事前教育/訓練・権限・動機づけ・健康管理
物的管理体制	作業計画・作業手順書・防護装置・防保護具
その他	活動・事故対応・事故への評価

3.分類・整理した各調査対象者のヒアリング内容を比較し、客観状況と主観状況の不一致及び主観状況間の不一致点を検出し、不一致点の相互関係をダイヤグラム化した。特に、日常業務のあり方から、それぞれの不一致がどのような背景から生まれてきたのかを推定した。

【結果】　本事例は、5機あるメッキラインの3号メッキラインにて、勤務に当たっていた当該班班長 (オペレータ兼務) が立入制限区域に入った上、稼働中の回転体に付着した汚れを発生させる異物を取り除こうとした際に、巻き込まれ右手中指切断、他4指挫傷したというものである。

もちろん、事故発生に直接関わる主たる要因として「回転体への対処」が挙げられる。作業規則には稼働中の回転体に触れてはいけないことが明記され、回転体に触れる際にはラインを停止して処置することが義務付けられている。しかし、オペレータの中には、「実際にはいちいち止めていられない」、「停止すると生産量は低下し、報告書作成など面倒な作業が増える」、「製品を助けるために致し方ない面もある」、といった意見も認められた。つまり、作業規則という従うべき客観物があるものの、現実的には過去の経緯もあり多少のことならば逸脱しても仕方がない、といった認識が現場にはあった。

こういった認識から推察できるように事故当日の被災者および関係者の行動やその状況認識の経緯を俯瞰すると、そのときにだけ特別な行動をとったようには見えない。したがって、日常作業の中で、個人が不安全行動を行なうことになった、もしくは、行なわせることになった要因を追求した。その結果、以下の主たる要因を検出することができた。

1.生産重視傾向　この職場ではトップダウン式に決定される生産計画があり、これが日常の作業方法を決定的に規定していた。特に、3号ラインでは生産性を増加させる必要から、数ヶ月前よりラインスピードを上げることとなった。それゆえ、現場サイドではこれを停止することに対する心理的抵抗は大きかった。また、スピードアップによって不具合が発生することの予測もされていた。生産量の増大とともに回転体など機器の劣化による異物発生頻度が高まり、品質劣化も懸念された。この予測があったにもかかわらず、「予算」との関係で相応する改善が行われず、先送りされた。この措置は現場サイドに、「スピードアップだけが優先され、予測どおり汚れが増加し品質も低下する。これを防ぐには現場で何とか対処しなければならない」という認識を産み出すこととなった。

こういった経緯は、現場に「結局、安全よりも品質、品質よりも生産である」との認識を抱かせ、管理者の期待とは別に、生産重視の雰囲気を強めたと考えられる。

2.現場依存傾向　ラインのスピードアップを受け入れた現場サイドでは、オペレータは担当ラインにかかり切りとなり、相互のコミュニケーション機会をさらに減少させていった。その結果、報告基準・品質基準がオペレータ間で統一されず、班長が各種情報を収集することも難しくなっていた。この状況は、自分のラインにのみ関心を持つというオペレータ気質を生み出す土壌を育んでいった。また、管理側も、スピードアップを優先させても予見された不具合は現場で何とか対処可能であると考えていたと推察される。すなわち、この組織には現場依存傾向が強かったと言えよう。

生産が重視され、相互監視も利かず、班長の統括も困難でオペレータ依存となれば、生産性の低下や作業負担の増大に繋がるような安全規則は形骸化するのが当然の帰結であろう。こういった生産重視、現場依存といった背景の中で、被災者が「回転物に触れない」「立入制限区域には入らない」というルールは形骸化し、それに違反しても実際には怪我をする確率は低く、逆に、作業負担が低下し生産性も維持できる可能性は高い、と考えて行動することになったと考えられる。

(ほそださとし、しけいえい、おくむらたかし、
よむらともき、いのうえしいちろう)

若年層のキャリア意識の形成要因に関する探索的調査

○関口　和代　　岡村　一成
（東京富士大学）

キーワード：キャリア意識、職業観、若年層、日韓比較、フリーター

内閣府(2003)の調査によれば、2001年現在、フリーター数は417万人、学生と主婦を除いた若年人口(15～34歳)の5人に1人(21.2%)がフリーターである。フリーターの数が10年間で2倍に増加したことに加え、高年齢化やフリーター生活の長期化傾向が見られることから、近年、社会的な問題となっている。フリーターの増加には、不況等による社会経済的要因のほか、「何がしたいかわからない」「どんな仕事が向いているのかわからない」「やりたい仕事がない」等を理由とした、若年層のキャリア意識や職業観の影響も大きいものと思われる。関口(2003)は、短大生を対象とした探索的調査において、キャリア意識の低さや職業観が確立していない要因の一つとして、仕事や進路に関する家族間での対話の少なさを指摘した。

【研究の目的】　キャリア意識を高め、職業観を確立することは、職業選択におけるミスマッチの解消やフリーターの減少に一定の効果があると思われる。それらに効果があると思われる職業教育のあり方等をはじめとした支援策について検討するために、家族との対話状況を中心に、より詳細な分析をすることが本研究の目的である。また、比較対象のために、韓国の高校・大学においても調査を実施した。

【方法】　質問紙法により実施した。

1．期間　2003年9月～2003年11月

2．対象

(1)日本7校･･･　高校2校（A高／B高）　短大1校（C短）　大学4校（D大／E大／F大／G大）

(2) 韓国2校･･･　高校1校（Y高）　大学1校（Z大）

3．方法

(1)学生のみ対象（B高／E大／F大／G大）･･･講義（授業）時間内に、配布、記入、回収。

(2)学生と親を対象（A高／Y高／C短／D大／Z大）･･･講義（授業）時間内に、学生用と親用の質問紙を配布。親用の質問紙は学生が持ち帰り、親が記入後、学生用とともに提出。D大学は、学生用と親用の質問紙を封筒に入れ、演習担当教員より学生へ配布。記入後、担当教員へ提出。

4．回答数　配布数は、日本は学生1349部、親519部、韓国は学生･親各254部である。有効回答数及び有効回答率は、日本・学生875部(64.9)・親93部(17.9)、韓国・学生220部(86.6)・親94部(37.0) である。

表1　有効回答数

日本	学生	親	韓国	学生	親
A高	80	4	Y高	69	37
B高	112	－	Z大	151	57
C短	27	14	計	220	94
D大	103	75			
E大	248	－			
F大	281	－			
G大	24	－			
計	875	93			

【結果】　単純集計の結果から、次のような傾向が示された。

1．日本人学生間の比較

フリーターに対する認識　高校・短大・大学のいずれの学生も、フリーターの将来は不安であるという認識を持っているが、短大生は、他の学生よりもフリーターとして働くことを肯定する傾向がある。

望ましい働き方　職業や仕事に対して、短大生は「安定性」よりも「やりがい」を、大学生は「安定性」よりも「能力や興味を生かせること」や「やりがい」を重視する傾向がある。

2．日韓比較

フリーターに対する認識　韓国の大学生は、日本の大学生よりも、経済環境や親の状況等がフリーターとして働くことに影響していると考えている。また、日本の大学生は、フリーターとして働くことは、将来的に不安であり、結婚の際の障壁になると懸念する傾向がある。

職業観　韓国人学生は、日本人学生よりも、仕事をすることに対して前向きであり、また職業選択や仕事をすることに対して自信を持っている。最も大きな差があった項目は、「独立して自分の店や会社を持ちたい」で、韓国人学生は大学・高校とも日本人学生を上回る。

望ましい働き方　韓国の大学生は、日本の大学生と比較して、「やりがい」よりも「職場の知名度」、「安定性」や「収入の多さ」を選択する傾向がある。

【考察】　大学生よりも高校生・短大生の方が、韓国人学生よりも日本人学生の方が、働くことや職業に対する認識があいまいであった。その背景には、新卒採用数の減少、希望職種と求人のある職種のミスマッチ等による就職状況の厳しさの影響があると考えられる。フリーターになってしまうかもしれないといった将来に対する漠然とした不安が、肯定的にフリーターを見ることにつながるのではないかと思われる。また、日本人学生に較べて、韓国人学生は、親や家族との対話の機会が多い。そのことが、若年層のキャリア意識や職業観にも影響を与えていると思われる。

全体に、日本人学生はキャリア意識が低く、職業観も確立されていない傾向があるが、職業教育の充実はそれらの改善に一定の効果をもたらすと思われる。また、効果的な職業教育のためには、長期的な視点に立った上で、家庭、地域、社会と学校との連携が必要であろう。

今後は、本調査の結果を踏まえ、若年層のキャリア意識の向上及び職業観の確立を促進する具体的な支援策について検討していきたい。

【引用文献】

内閣府 2003 平成15年版国民生活白書
関口和代 2003 短大生の職業選択に関する探索的調査 日本応用心理学会第70回大会発表論文集

（せきぐち かずよ・おかむら かずなり）

＊調査にご協力くださった各大学の先生ならびに学生、ご父母の皆様に深く感謝します。本報告は、東京富士大学の平成15年度共同研究費の交付を得て実施された研究の一部です。

コンピュータ入門教育における諸問題(2)

― MS-WORDに対する初心者の反応 ―

○伊藤 典幸
(関東学院大学 人間環境学部)

キーワード：コンピュータ、入門教育、MS-WORD

【目　的】

コンピュータを取り扱う能力は、大学教育の場においても必要不可欠になっており、他の科目の学習にできるだけ速やかにコンピュータを活用できるよう、入学後のコンピュータ入門教育においては、いかに短時間かつ効率的に必要な能力を身につけさせるかが重要な課題となっている。

初心者へ対するコンピュータ教育をする際、その初期段階においてコンピュータに対する苦手意識を持たせないようにすることが重要である。この段階で苦手意識をもってしまった場合、その後のコンピュータへの取り組みが消極的になり、試行錯誤をしながら新しいことを覚えていくというコンピュータの習熟に欠かせない行動を抑制することとなる。

初期段階において初心者が困惑する、あるいは、難しいと感じる事象を把握し、事前に遭遇するであろう事象を先回りして説明する、あるいは、講師のコントロール下で体験させると同時に解決策を示すことで、初心者に苦手意識を持たせることを最小限にとどめることができると考えられる。

本研究では、はじめて本格的にコンピュータに触れることになった初心者が新しく学習するアプリケーションソフトに接して、困惑、困難さを感じる事象を、MS-WORDについて収集することを試みた。

【方　法】

調査の内容：MS-WORDに関する実習が終了した直後の受講生に対して、記述式のアンケートを実施した。質問項目として、今回の調査の目的のための「問１、初めてＷｏｒｄを起動したときにとまどったことがあればすべて書いてください」、「問２、初めてＷｏｒｄを使ったときに困ったことがあればすべて書いてください」の２問に加えて、調査時点でのWORDについての習熟度をチェックするための質問、「授業でやったことで、今でも操作の仕方が良く分からないことがあったらすべて書いてください」「今現在、Ｗｏｒｄの使い方で難しいと感じていることをすべて書いてください」「その他、Ｗｏｒｄの使い方について自分が感じていることをすべて書いてください」、コンピュータの使い方全般に関する質問、「コンピュータ全般について、難しい、使いにくい、分かりにくいと感じていた、あるいは、いることをすべて書いてください」を加えた６問を設定した。

調査対象者：コンピュータ操作に関する基礎科目（半期必修全 27 回）を受講している文科系学科（幼児教育関連）に所属する大学１年生 50 名（男性：13 名・女性 37 名）を対象にした。調査対象者の大多数がこれまでインターネット、メールの送受信程度しかコンピュータの操作経験がなく、今回はじめてMS-WORDを本格的に学習した。また今回の調査対象者は、メールの送受信、ネット検索、WORD、ＥＸＣＥＬの順に実習を受けている。50 名の調査対象者のうちの 45 名から回答が得られたが、１回目の授業で行った事前調査で、日常的にWORDもしくは一太郎等のワープロソフトを使用していると答えた 10 名を除いた 35 名の調査対象者の回答について分析を行った。なお、調査時点では、これら調査対象者は、すでにWORDの操作に十分に習熟している。

調査の実施：一連の課程の中のMS-WORDの実習が終了した時点で調査を実施した。調査は、入力練習の体裁をとり、メールに添付し各受講者に配信したＷｏｒｄ文書の空欄に回答を記入させ、メールで返送させる形式で行った。また、できるだけ多くの回答を集めるために、６問の質問に対し、合計 550 文字以上になるように回答を記入するように指示した。

【結　果】

問１、問２それぞれの質問の趣旨の細部が十分に理解されず、調査対象者によって同一内容の回答が問１、問２に分散して記入されていたため、両質問の回答をあわせて分析した。調査対象者(35 名)から問１、問２をあわせて延べ 161 件の回答が得られた。

これらの回答をまとめると「キーボード上のキーの配置に慣れていないため、キーを見つけ出すのが大変だった」という初心者に通常見られる反応が 13 人(37.1%)、「画面上にアイコンがたくさんありすぎてわけが分からなかった」「画面上のアイコンの多さにびっくりした」といったツールバー上のアイコンの数に対するとまどいの反応が 13 人(37.1%)となった。それについで「漢字変換の際に意図している文字に変換されなかった場合の対応についてのとまどい」の反応が 12 人(34.3%)、「誤ったキーを押した、誤った場所をクリックした結果起こった意図しない状況に対するとまどい」を 10 人(28.6%)が報告している。

また、「文字の書式変更（太字、サイズ変更など）、中央揃え。右寄せ等の編集機能」に関するとまどいが 9 人(25.7%)、「Shift キーを押しながらタイプする必要がある記号の入力」が 9 人(25..7%)、「"っ"、"ょ"、"でぃ"等の子文字入力での戸惑い」が 8 人(22.9%)、「入力文字のモード変更の方法が分からなかった」が 7 人(20.0%)、これに関連した「誤ったキーを押すことによって生じた予期せぬ入力文字モードの変化に対処できない」が 5 人(14.3%)となった。

そのほか回答数は少ないが特筆すべき回答として、「立ち上げ直後の真っ白な画面に何をすればよいのかわからず戸惑った」（２人)、「赤の波線がいっぱいでたときは何がなんだか分からなかった」（４人)、「WORDがなかなか立ち上がらずアイコンを連打していたらウインドウがとんでもない量になってしまった」（３人)、「まずこれは何をするものか分からなかった」（２人)などがあげられる。

【考　察】

最近のアプリケーションソフトウエアは、機能が強化され通常使う以外の機能が数多く盛り込まれてきている。その結果、初心者にとってかえって使いにくくなった面がある。今回の調査の結果でも画面上に表示されているアイコンの数が多くなりすぎ、かえって初心者を戸惑わせる原因となっていることがうかがえる。

また、校正ツール、「natural input」モード等、本来、利用者を支援するための機能が、操作者の操作とそれによって得られる結果の関係を把握しづらくしている面があり、ある程度操作に慣れた人にとっては便利な機能が、初心者にとっては混乱をまねく、あるいは、難しく感じさせる原因となっていることをうかがわせる結果となった。

日本人と韓国人の原因帰属の類似性と相違性

—アジア的帰属傾向について—

○荻野　七重　　齊藤　勇
白梅学園短期大学　立正大学心理学部

原因帰属　日韓　自己呈示

文化による原因帰属の違いは近年社会心理学における文化相対論の隆盛から、多くの研究者が注目している。特に日本では、西欧の自己高揚的帰属に対して自己卑下的帰属傾向がみられる点に多くの研究と議論が焦点を当てている。本研究は、西欧からみると集団主義的文化圏のアジア的文化として一くくりにされる日本と韓国について帰属傾向を比較し、その類似性と相違性について調べることを第一の目的とする。また、思っていることと言うことが違うとされる日本人と、同じ東アジア圏の韓国人と内心と言葉の相違の比較をし、ホンネとタテマエの文化の具体的特徴を知ることを第二の目的とする。方法論的には内心と発言の差異を知るために両者を独立に調査している点が特徴である。

方　法

被験者　日本人大学生443名　韓国人大学生133名。ただし課題と課題の正否によって被験者数は異なる。

調査表　質問紙調査法を用いた。質問紙は次のような構成の独自調査法を作成した。

1)　課題：大学入学試験と恋愛
2)　成否：各課題の成功と失敗
3)　内心／発言：内心は自分の考え、発言は人に話すとき
4)　帰属原因：a　素性，b　能力，c　性格，d　出身校，e　努力，f　対応，g　課題，h　状況，i　運，j　運命
5)　回答法：各項目ごとの100％分割法
6)　質問：入試、恋愛など自分の生活の中で起こっている出来事の成功と失敗について考えること。そして、その成功失敗の原因、理由が何であったか（何であるか）を考え、それをa～jの理由の中から選択し、％で答えること。

手続き　大学の授業において、上記質問紙を配布し、回答させ、回収した。

結果と考察

1.　課題による帰属傾向の日韓比較

(1) 入試の帰属原因　日本人学生の入試の成功と失敗の帰属傾向について、韓国のデータとともにを表1に示す。表1から、日韓ともに入試の成功・失敗は内心、発言ともに能力、努力、運が主な帰属要因であり、これらの要因には日韓に違いがないことが明らかにされた。日韓の間で統計的に有意な差が見られたのは、帰属率が10％以上の要因では、対応のみで、韓国の方が、その場の対応がうまくいったので成功したとみる学生が多い。

(2) 恋愛の帰属原因　表1から、日韓ともに恋愛の成功、失敗は内心、発言ともに性格と運命が主な帰属原因であることが明らかにされた。ただし、恋愛においては日韓の間に次のような差がみられた。①日本人の方が運への帰属が多く、韓国人の方が運命への帰属が多い。②日韓とも性格への帰属は多いが、日本人は失敗において、韓国人は成功においてより多く性格に帰属している。③成功した時、韓国人の方が日本人より努力に多く帰属している。

2.　内心と発言の帰属傾向

入試、恋愛両課題について、日本と韓国のそれぞれの内心と発言の差を比較した。その結果、内心と発言の差には日韓で違いのあることがわかった。全体的に見ると、日本人は入試、恋愛ともに成功したときに内心と発言の差が多くの要因で見られる。韓国人は日本人に比較して、内心と発言の差が少ない。さらに主な帰属要因について内心と発言の差を日韓で比較すると次のようなことがいえる。①日本人は成功時に能力や性格など内的要因に帰属することを発言では抑制する。②日韓ともに成功時に発言では運や運命など外的要因に多く帰属する。①②とも自己卑下的自己呈示を示すといえる。③日本人は恋愛の失敗時に発言で性格要因への帰属を抑制する。これは自己高揚的である。④日韓ともに恋愛の失敗時に発言では運命への帰属が多い。考察として、日韓の帰属傾向は同一文化圏による類似性と文化固有の相違性があり、また内心の抑制と発言においても類似性と相違性がみられた。また自己卑下的帰属傾向は課題により異なり、内心と発言でも異なり、これらの差異が文化の違いによる自己呈示の相違によるものと推察できる。

表1　日本と韓国における内心と発言の平均帰属率とその差　　*** p<.001　** p<.01　** p<.05　()は内心＜発言を示す

(日韓×成否)		成功(日本)			失敗 (日本)			成功 (韓国)			失敗 (韓国)		
課題	帰属要因	内心	発言	t-検定	内心	発言	t-検定	内心	発言	t-検定	内心	発言	t-検定
入試	b　能力	16.2	11.1	***	14.9	17.0		21.3	17.9		18.3	17.2	
	c　性格	5.1	3.6		5.7	4.3		2.5	2.8		2.4	1.4	
	e　努力	26.4	25.2		40.1	40.0		26.3	26.4		31.8	33.6	
	f　対応	5.5	4.7		6.9	6.7		11.7	8.5	*	9.1	6.5	*
	i　運	18.7	30.8	(***)	13.3	15.7		17.6	26.5	(***)	15.3	19.6	(*)
	j　運命	3.3	4.2		4.4	3.7		3.0	2.5		2.7	2.4	
恋愛	b　能力	7.2	4.4	**	9.2	7.2	*	8.9	7.1		14.3	12.4	
	c　性格	26.7	20.9	***	32.6	27.9	***	32.1	29.2		22.7	21.8	
	e　努力	5.0	5.2		4.4	4.6		8.2	9.2		5.7	4.4	
	f　対応	11.1	10.2		14.1	14.3		9.3	9.3		14.1	12.1	
	i　運	13.4	19.8	(***)	8.3	10.5		4.8	4.2		5.6	4.6	
	j　運命	18.9	23.1	(**)	12.1	16.1	(**)	23.9	29.4	(*)	20.5	28.6	(**)

注　この表は、両課題を通じてどの項目にも10％以上の帰属率がない要因を記載からはずしている。　　（おぎのななえ　さいとういさむ）

動物のいる風景（6）

－犬は飼い主に似るか②－

田　之　内　厚　三
（麻布大学環境保健学部）

キーワード：飼育体験、犬の特性、類似性

【目的】『文藝春秋・３月臨時増刊号』（2004年）では73人の著名人が愛犬に寄せる熱い想いを語っているが、その中には「相性がよい」「気が合う」「似ている」といった記述が多く見られ、某氏に至っては、飼犬を「慈悲であり仙女、そして人生の師」とまでもいわせている。愛犬家の頭の中にあるこの種の体験的知識が真実であるかどうかを検証することが本研究の目的である。田之内（2002）は、人が自分に外見が似ている犬を好む傾向がある（スタンレー・コレン、2002）という点を犬種の特徴とその人の外見、とくに髪型との関係から調査、分析したが、選好された犬種の属性と本人の髪型の間にはまったく有意な相関は見られなかった。ただ、飼犬の態度・行動や性格との間に幾つかの特徴的な傾向が見られたので、今回はこの点をもう少し細かく検討してみたい。

【方法】犬の飼育体験がある獣医系の大学生に対して、その犬は誰に似ている（似ていた）かを尋ね、さらにどのような点が似ている（似ていた）かを〈外見〉〈態度・行動〉〈頭のよさ〉〈性格〉〈全体の雰囲気〉の５カテゴリーについて回答を求めた。被調査者は337名（男141名、女196名）。

【結果】被調査者全体の62%（209名）に犬の飼育体験があり、一度も飼ったことがない者は38%（128名）であった。ペットフード工業会の調査では、犬の飼育体験の割合は一般人で約35%、田之内が法学系の学生に実施した調査では47%であったことを照らし合わせれば、いかに獣医系大学生の数値が高いかがよくわかる。337名の被調査者を飼育体験の有無で「似ているか」「似ていないか」をクロス分析した結果が表１である。χ^2=3.464、P=.177で、両群にまったく差はなく、いずれも「犬は飼い主に似る」と考えている。

表１　飼育体験の有無×類似性の度合い　（%）

	似ている	似ていない	ＤＮ
体験あり	138(66)	30(14)	41(20)
なし	72(56)	26(20)	30(23)

次に、飼育体験者で「似ている」と回答した者（138名）に対して「どこが似ているか」を尋ねた結果が表２である。

表２　犬の特性と飼い主の類似性　（%）

外見	態度・行動	頭のよさ	性格	雰囲気
69(50)	107(78)	101(73)	125(91)	3(2)

「犬のどこが飼い主に似ているか」を飼育体験の有無にかかわらず尋ねてみると、〈何となく全体の雰囲気〉と答える者も多いが、こうして細かく調査してみると、以外に、ある特定の属性に類似性を感じている者が多いということがわかる。では「誰に似ているか」を尋ねると、「自分」と回答者自身をあげる者が56%ともっとも多く、「父親」16%、「母親」14%、「兄弟・姉妹」11%と続いている。ところが、興味深いのは、飼育体験者全体に対して「その犬の世話をもっともよくしている（していた）のは誰か」と質問すると、54%が「母親」をあげており、しかも「自分に似ている」と回答した者でさえ母親の数値が53%と非常に高いのである。このことから「犬は自分の世話をよくしてくれる者に似る」のではないということがわかる。そこで、図１は、４つのカテゴリーで、３者間に類似性の差異が見られるかどうかを示したものであるが、それぞれにある特徴が見られる。

【考察】図１の結果から、愛犬が誰に似ていようとも、その似ているところは主として〈態度・行動〉〈性格〉にあるといえるであろう。〈外見〉では、３人の中で「母親」をあげる者がもっとも多く（58%）、とくに顔の輪郭・顔つきがよく似ていると指摘する者が多い（21%）。前回の調査では髪型も含めた顔の輪郭に関する類似性は否定されたにもかかわらず、今回でもまたその点をあげる者が多いというのはなぜであろうか。一種のメタ認知（自動思考）であるのかもしれない。「チャーチル元英国首相の飼犬はブルドッグであった」という話は有名であるが、実は彼の愛犬はプードルであった。飼い主は自分の顔にどこか似た犬を選ぶという言い伝えは信憑性がかなり薄い。体型・体形では「父親に似ている」とする者がもっとも多い（36%）。〈頭のよさ〉に関しては、「頭がよい」のは「父親似」と答えた者が36%ともっとも高い数値を示している。反対に「単純なところは自分似である」が39%で、自分の要領の悪さとか成績の不振等を飼犬のそれに投影していると思われるふしがある。〈態度・行動〉の類似性では、３者共に犬の寝姿や形を指摘する声が大きい。父親に至っては45%の高い数値を示している。このようなことから、飼犬が父親や母親に似ていると思っている者は、その類似点をどちらかといえば外見や態度、行動等に求めやすい傾向があるといえそうである。最後に、〈性格〉の類似性であるが、「自分似」と回答した77名について分析すると、「さみしがり屋」56%、「甘えん坊」52%、「人なつっこい」32%、「ちゃめっけがある」32%、「のんびりしている」29%、といった項目をあげる者が多かった。しかし、飼犬の持っているこうした性格特性が本当に飼い主のそれと一致しているかどうかは疑問である。というのは、質問項目に回答していくうちに、自分との類似点よりも、むしろ飼犬の特性に注意が向けられてしまったのではないかと推測されるからである。これを検証するために、次回は「似ている」とした人自身の特性（４カテゴリー）を今回と同じ項目で再調査し、その結果を比較・対照する必要があろう。

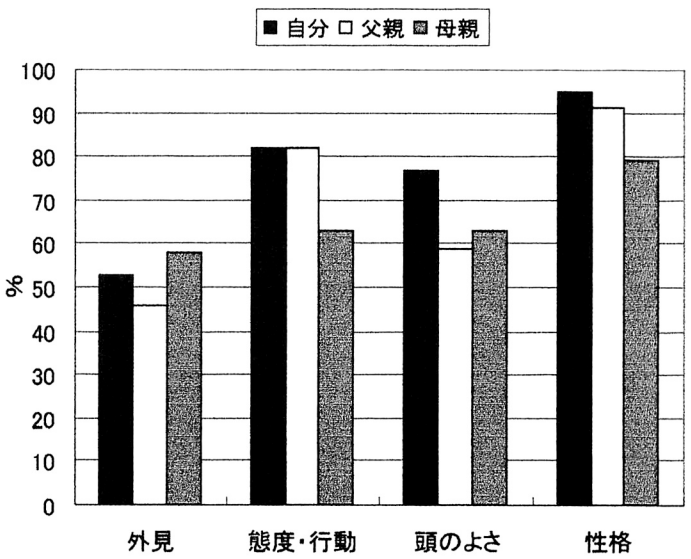


図1　飼い主との類似性

（たのうち　こうぞう）

子育て期女性の社会参加に関する一考察
－地域三世代子育て支援活動を通じての育ち合いから－

河野　望
（立命館大学大学院　社会学研究科）
キーワード：子育て期女性の社会参加、地域三世代子育て、育ち合い

【目的】

近年、家庭内の、とりわけ母親の問題として処理されてきた子育てが、社会問題の一つとして位置づけられるようになり、多くの人が子育てに携わり、社会全体で子育てを支援しようとする風潮が芽生えてきた（大日向，1999）。

当事者である子育て中の母親の中には、子育て支援活動に支援される側として受身的に参加するだけでなく、子育てサークルなどを自主的に運営したり、NPO 法人（特定非営利活動法人）の法人格を取得し、市民レベルでの子育て支援をさらに進めようとする人も増えてきている。

本研究では、主に家庭で子育て中心の生活を送っていた子育て中の母親たちが立ち上げ、シニアや学生など地域の多種多様な人のつながりをつくりながら、地域三世代子育て支援活動を行っている NPO 団体に焦点を当て、この団体スタッフへのグループインタビューから、子育て期女性にとって社会参加の持つ意味について、地域三世代子育て支援活動を通じての育ち合いという視点から検討を行うことを目的とする。

【方法】

1．対象者

Y市にある子育て支援 NPO 団体のスタッフ７名。対象者の年齢は、平均 39.1 歳（35-45 歳）。家族形態は、７名とも夫婦と未婚の子どもで暮らしている核家族で、子どもの年齢は、平均6.9歳（0歳２か月-15歳）であった。

2．日時

2003年11月に実施した。

3．方法

質問紙調査とグループインタビューを行った。

4．主なインタビュー内容

①設立・活動の動機、現在の役割について

②活動に関わってからの自分自身の変化、家族とのかかわりの変化、子育てに対する価値観の変化、およびこれまでのキャリア、仕事、他の社会参加活動との兼ね合いについて

③シニアサポーター・学生サポーター・夫である男性サポーターの存在について

【結果・考察】

1．活動の経緯

対象者全員が、この活動を行う前に、地域につながりがない中で子育てをする大変さを痛感し、子育て仲間や地域での子育てのつながりを求め、子育てサークル、子育て情報誌の編集、PTA 活動などを積極的に行っていた。スタッフである友人に誘われてさらなる社会的な活動を求めて、また自分にできることを生かしたいと思い、この活動に参加していた。なお、この団体の会員からスタッフになった人が１名いた。

2．活動を促している、可能としている要因

①自主的で自己実現の場となる活動

親が受身的に参加する子育て支援ではなく、子育て当事者が子育てしやすい環境をつくりたいという強い思いを持って、自主的に行う活動であることが、子育て期女性の社会参加を促している要因であると考えられる。子育てをしながら、働き方や活動の関わり方を模索していた女性にとって、これまでの活動の経験やキャリア、能力、特技、趣味などを生かして社会的な活動を行えることが、自己実現の場となっており、さらに活動に力を注いでいくようになっていた。また、NPO 活動として、社会的にものが言えることや活動がさらに発展しうる可能性を持っていることに魅力を感じている人もいた。

②同じ立場にある親同士の理解と配慮

スタッフは、子育て当事者である母親で構成されているので、スタッフが無理のない程度にシフトを組みながら家庭・子育てと両立しながら活動できる環境であった。また、子育ての悩みを相談し合ったり、自分の体験からアドバイスをしたりと、共に育ち合える関係であるということも社会参加を可能としている要因であると考えられる。

③家族の理解と協力

対象者がどのような活動をしているかを把握し、活動に理解を示している夫が多かった。中には、活動に参加するようになって、以前より子どもと積極的に関わるようになった人や、実際に夫である男性で構成された活動をこの団体の中で始動した人もいた。

3．地域で育ち合う三世代子育て

この活動は、「地域での育ち合いの子育て」を目指した子育て期女性が、子育て当事者とは違う見方で暖かく見守ってくれる子育てを終えたシニア女性、自分の子どもの時は仕事に忙しくほとんど子育てに関わらなかった分この活動を通して「罪滅ぼし」をしている退職後のシニア男性、子どもたちにダイナミックな遊びをするだけでなく子どもや子育て中のスタッフとの関わりから将来子育てをするときに必要な術を学んでいる学生、自分たちも地域で子育てをと仕事の時間をやりくりしながら活動を行うようになった男性（スタッフ・会員の夫）など多種多様な地域の人と共に、「地域の中で子どもたちの息遣いを感じながら」の社会的な活動を主体的に行う形で誕生した地域で育ち合う三世代子育てとなっていた。

付記：本研究は、財団法人シニアプラン開発機構の「高齢化社会におけるサラリーマンシニアの社会参加に関する研究」研究会（2003年度）の中で調査を行い、報告書（2004年３月）の発表者担当部分（第３章2.）を修正・加筆したものである。

（かわの　のぞみ）

パーソナルスペースと性格特性との関連性

—接近者の印象評定も含めて—

○雨森雅哉[1]　中尾彩子[1]　松尾千尋[1]　野瀬出[2]　山岡淳[1]
[1](文京学院大学大学院人間学研究科)　[2](文京学院大学人間学部)

キーワード ： 生理心理的指標　性格特性　パーソナルスペース

序論

Hayduk(1978)は、パーソナルスペース研究を測定技法の面から5つに分類し、stop-distance 法を信頼性の高い測定方法としている。八重澤・吉田(1981)は、stop-distance 法を用い 28mの廊下で未知の他者が被験者に徐々に近づく場面における、被験者の心的負荷を心理面・生理面から検討を行った。その結果、認知反応(心理面)は、緩やかな単調増加を示した。一方生理反応は被験者の直接的な強い情動に関連し、スペース境界付近で急激な増加を示した。

第1実験

目的

他者が接近するときに、人が認知する心理状態(不安・緊張・見えの大きさ)と生理反応(心拍・瞬目・呼吸)の変化を検討する。人の情動表出に大きく関係する視線の影響を見る。本実験では距離・歩行距離・時間・注視時間を八重澤・吉田(1981)の研究の半分の長さにした。

方法

被験者　16 名の大学生(女性・平均年齢 20.1 歳)を、モデルと視線を合わせるよう教示する群(以下、直視群とする)と単に前方を見るように教示する群(以下、非直視群とする)に 8 名ずつ割り当てた。

モデル　男子大学院生 1 名(年齢 23.5 歳、身長 178cm、やせ型)であった。実験期間を通じて同一服装(黒のパンツに白いシャツ)で被験者に接近した。直視群の被験者に対しては視線を合わせ、非直視群の被験者とは視線を合わせることなく、被験者の頭上周辺に視点を置いた。

実験設定　廊下中央のイスに座った被験者の位置から、10cm ごとに目盛テープを床に張った。被験者から 14m 離れた位置がモデルの出発点であった。距離段階 1～6 の距離は10mで、2m間隔であった。遮光カーテンを用い照明条件はほぼ一定にした。

生理指標　心電図・瞬目活動(EOG 法)・呼吸曲線を脳波計(NEC 製デジタル多用途脳波形 EE2514)において紙書き上で記録し分析した。紙送り速度は 10mm/sec であった。

手続き　被験者は、距離段階1(出発点)に立つモデルを 11 秒間見つめた。その後不安・緊張・モデルの見えの大きさについて評価した。距離段階 1(出発点)～6 をモデルは2mずつ歩いた。歩行時間 4 秒、停止時間 7 秒、計 11 秒間で 1 試行とした。各試行後に上記 3 尺度を評価させた。距離段階 6 終了後、被験者は近づいてくるモデルに対して“気詰まり”(距離段階 7)に感じた時点と“目をそらしたい”(距離段階 8)と感じた時点で合図した。被験者の合図でモデルは止まり、試行終了までその場に立っていた。この場合も歩き始めてから 11 秒後に 1 試行を終了し、上記 3 尺度を評価させた。

結果と考察

モデルが被験者に近づくに従い、被験者の心理評定(不安・緊張・見えの大きさ)の評定値は緩やかに増加した。距離段階ごとに解析した結果、全ての評定値において被験者から遠い距離段階よりも近い距離段階において増加していた。一方、瞬目数と呼吸数は、距離段階 1～3 では心理評定に対応した変化は示さず減少し、距離段階6,7 から急激に増加した。距離段階 1～6 の生理反応の推移は直視・非直視の間で差が見られないことから、ある一定の接近までは視線の影響はないと考えられる。しかし、“気詰まり”と“目をそらしたい”地点において直視群は非直視群よりも大きな対人距離をとることが確かめられた。これは視線の交錯が単に相手の姿を眺める場合よりも、より強い心理的圧迫を引き起こすと考えられる。本実験では八重澤・吉田(1981)の半分の距離を用いたにもかかわらず同様の結果が出たことは、絶対的な距離ではなく、相対的な距離によって生理反応が変わるのではないかと考えられる。

第2実験

目的

他者の接近に伴う生理反応が、第一印象によってどのように変化するのか検討する。また心理、生理反応と個人の性格特性との関連についても併せて検討する。

方法

被験者　大学生 8 名(女性 20.6 歳)。

実験設定・生理指標　実験 1 と同様であった。

モデル　男子学生 1 名(年齢 23.0 歳、身長 168cm、やせ型)であった。実験期間を通じて同一服装(黒いスーツに白いシャツ)で被験者に接近する。モデルは被験者と視線を合わせ続けた。

手続き　実験 1 と同様に行い、最後に YG 性格検査とモデルの印象評定を行った。

結果と考察

モデルに対する印象評定はモデルの印象評定の高・低にかかわらず、距離が近づくにつれて不安・緊張・見えの大きさの評定値が高くなっていた。特に、低印象評定の被験者よりも高印象群の方が、距離段階 8 において不安の評定値が高くなっていた。各生理反応において、印象評定の高・低群間を比較したところ、両群間に大きな差はみられなかったが、高群の方が全体的に瞬目数が少なかった。また、YG 性格検査の「思考的外向」が高得点であった者、「神経質」が高得点であった者と、“気詰まり”(距離段階7)、“目をそらしたい”(距離段階8)の距離との関連性を検討した。その結果、神経質の得点が高かった者の方が距離段階 7,8 のどちらもモデルとの距離がより遠かった。このことから、より神経質である者ほどパーソナルスペースが広く、思考的外向が高い者ほどパーソナルスペースが狭いということが示された。

総合考察

生理指標は実験 1、実験 2 ともに直視・非直視、印象評定の高低に関わらず、心理評定は緩やかに上昇し、生理指標は心理評定に対応した変容は示さなかった。生理的変化と心理的変化との不一致は、Valins(1966)が比較的弱い情動経験には必ずしも生理的変化は不必要と述べているように、スペース境界付近に至るまでは、認知的変化のみ現れたものと考えられる。

(あめもり まさや　なかお あやこ　まつお ちひろ　のせ いずる　やまおか きよし)

メール文字のイメージ解釈についての研究

○木村　たき子　　岡村　一成
（東京富士大学学生相談室）　（東京富士大学）

携帯メール・絵文字・顔文字・対人不安

1.はじめに

携帯電話が電話を超えた多機能な端末として、私達の日常生活の様々な場面に入りこんでいる。

現在、日本人の約6割の人が携帯電話を使い電話機能だけではなく、携帯メールによりコミュニケーションをとるというスタイルが確立されている。

その携帯メールは、容易であるということ、時間・空間を選ばない、料金が電話より安いなどの理由から利用者が増えている。その中で、絵文字・顔文字の使用は、対面コミュニケーションにはない、　目に見えない感情のさまざまな情報や状況の欠如を補うべく頻繁に利用されている。

しかし、絵文字・顔文字が見えない相手に互いに表情や感情を伝えやすいという長所もあるが、インパクトの強さから誤解を与えることも多いようである。

2003年日本応用心理学会第70回大会において、携帯メールの絵文字・顔文字の心理的イメージの調査を試みたところ、10代では絵文字・顔文字のないメール（文字のみ）に対してネガティブイメージを持つという結果がでた。

インターネットに代表されるコンピューターに媒介されたコミュニケーション（Computer Mediated Communication）は対人不安傾向の高い人にとっては、かなりポジティブな面をもったメディアであることが明らかになっている（西村・2003）が、今回、携帯メールにおける絵文字・顔文字メールの心理的イメージと対人不安の関係についてはどうであるか検討することとした。

2.方法

携帯メール使用者に対し、絵文字・顔文字にはいった携帯メールのコピーしたものと、同じ文章の文字のみの携帯メールのコピーを添付したものに、25のイメージ形容詞を記入したもの（日本応用心理学会第70回大会時使用）を7件法で解答してもらった。また、対人不安尺度には、シャイネス尺度（今井・押見1987）（5件法）を使用した。
集団調査である。

期間：　平成16年6月10日
被験者：10代～20代
　　男子大学生　　66人
　　女子大学生　　46人

3.結果・考察

心理的イメージに使用した形容詞（SD法）は、『価値』(evaluation)として1..すき―嫌い2.やぼったい―しゃれた3.特色のある―ありきたりの4.つまらない―楽しい5.親しみやすい―親しみにくい 6.薄っぺらな―深みのある 7.美しい―醜い 8.若々しい―老いた 9.わかりにくい―わかりやすい 10.風変わりな感じ―型にはまった『力動性』(potency)として、11.女らしい―男らしい 12.新しい感じ―古い感じ 13.動的な―静的な 14.暗い―明るい 15.強い―弱い 16.繊細な―大胆な 17.地味な―派手な 18.つめたい―あたたかい 19.軽い―重い 20.進歩的な―保守的な『活動性』(activity)として、21.固い―柔らかい 22.複雑な―単純な 23.現実的な―幻想的な 24.知的な―知性をかいた感じ 25.狭い―広いを用いた。

また、携帯メールの使用頻度は、(1) よく使う人が105人で (2) 時々使うという人が7人であった。(1) (2) の回答者全員が送信、受信ともによく使用しているということである。

今井・押見（1987年）のシャイネス尺度の男子学生平均は、76.48であったが、今回の被験者男子学生の平均は75.08でやや低かった。女子学生の平均は74.00であったが、今回の被験者の平均は75.72と女子の方はやや高かった。この被験者の平均より高い男子学生は34人で、女子は26人であった。それらの平均より上の学生の、25の形容詞のポジティブイメージ（7点）とネガティブイメージ（1点）を、7件法で合計し、平均をだした。

その結果、シャイネス尺度が平均より上の男女学生は、絵文字・顔文字メールに対し文字のみメールよりポジティブイメージを持つ。また、シャイネス尺度が平均より低い男女学生においても絵文字・顔文字メールに対してポジティブイメージをもつ人が多かった。表1は男女別のシャイネス尺度とメールのイメージ形容詞の平均である。

表1・シャイネス尺度とメールイメージ

シャイネス尺度	絵文字・顔文字イメージ	文字のみイメージ
男　高い	（平均）107.26	91.18
男　低い	109.31	80.56
女　高い	111.50	82.27
女　低い	115.60	79.80

以上の結果から不安傾向の高い人にとってCMCはポジティブなメディアであるが、絵文字・顔文字メールや文字のメールに関しては、シャイネス尺度の高低はあまり差がみられなかった。ただ女子学生のほうが、男子学生よりシャイネス尺度の高低に関係なく絵文字・顔文字メールのみならず、文字のみメールに対してもポジティブ、ネガティブイメージが大きく表れている。自由記述において、女子学生の方が「絵文字・顔文字メールはいつも使っている」「使うのが普通」「絵文字・顔文字メールをもらうと嬉しい」という回答が多かったが、男子学生は「もらうと嬉しいが、使うのは人を選ぶ」という回答が多かった。このようなことからも、絵文字・顔文字メールと文字のみメールにおけるシャイネス尺度差は少なかったが絵文字・顔文字と、文字のみイメージには差がみられた。。今後、年代別を含めもっと多くのデータの分析が必要と考えている。

（きむらたき子　　おかむらかずなり）

鉄道旅客の迷惑行為に対する対処方法についての基礎的検討

山内香奈
（財団法人　鉄道総合技術研究所）
キーワード：鉄道、迷惑行為、マナー

【目的】近年，公共輸送機関における旅客のマナーやモラルに起因する迷惑行為が深刻な社会問題となっており，その解消に事業者が一定の役割を果たすことが期待されている．鉄道における迷惑行為を扱った研究では，発生実態や規定要因に関する検討は若干見られるが，対処方法に焦点をあて定量的に検討したものは殆どみられず，実証的知見の蓄積は乏しい．本研究では，対処方法に関する研究の第一報として，迷惑行為に対する対処方法についての旅客の意見や要望を幅広く把握するために旅客を対象に行った質問紙調査から得た結果について報告する．主な検討内容は次の３点である．①旅客にマナー向上を訴求するための具体的対処案について，②迷惑行為の種類別にみた対処方略の違いについて，③意識調査に参加することによる旅客の態度変化について．

【方法】2003年７月に千葉県の４つのターミナル駅を利用する旅客を対象に質問紙調査を実施した．駅で調査員が調査票を配布し，後日，郵送で回収した．上記目的①と③は自由記述設問により回答を求めた．

【結果と考察】有効回収票は882票（回収率40.1%）であった．その中で「鉄道利用者のマナー向上を呼びかけるための取り組みとして有効と思われるアイディアについての自由記述欄」に記入があったのは555票であった．また，調査票最後に設けた「自由意見・感想についての自由記述欄」への記入があったのは529票であった．

①マナー向上を訴求するための対処案

対処の具体的手法の観点から自由記述の内容の類似性をもとに分類した結果を表１に示す．旅客を取り巻く物理的環境に対する介入（ハード面）と，旅客に対する介入（ソフト面）を比較した場合，後者の方が約5.6倍記述数が多く，より高い期待が寄せられている．ソフト面への対処方法を行うために使用する媒体の観点から自由記述の内容をその類似性に基づいて分類した．その結果，大きくマスメディアと鉄道システム内を含むローカルメディアに分けられ，両者を比較すると，後者の記述数が約９倍近く多く，特に鉄道システム内の放送（43.2%）やポスター（37.3%）が著しく多かった．

②迷惑行為の種類別にみた対処方略

鉄道で発生する迷惑行為を旅客の不快認知に基づき分類すると「犯罪・ルール違反行為」，「美化・衛生を脅かす行為」，「車内の強い規範からの逸脱行為」，「車内の緩やかな規範からの逸脱行為」，「乗降移動時の規範からの逸脱行為」の５つに分類できる（山内他，2004）．各分類項目から具体的な行為を選び，それらに対して鉄道事業者は次の３つの対処方略（規制的対処：規則やルールを厳しくし（設定し），自分勝手なことをする人は厳重に取り締まった方がよい，共生的対処：規則やルールを整備するより人々の意識を高めることが重要，放任的対処：何をしてもそれほど変らないので特に何かする必要はない）の中でどの方略をとるのが有効か尋ね，その結果を表２に示した．犯罪・ルール違反行為，美化・衛生を脅かす行為については，厳しい対処を求めていたが，それ以外の行為については，個々人の意識を高めるような対処が求められていた．ただし，「車内の緩やかな規範からの逸脱行為」のうち車内での化粧や飲食については，放任的対処の選択率もかなり高く，対処方法について慎重に検討する必要がある．

③意識調査に協力することによる旅客の態度変化

意識調査に協力することは自分達が問題解決のためのプロセスに関わることであり，それ自体が教育・啓発の効果が期待できる（寺部他，1997）．そこで自由意見・感想欄の自由記述の内容の類似性から分類を行い，情緒面に関するカテゴリの中で意識調査に協力したことで認識が変った（再認識した），気持ちの変化があったなどの記述内容を整理し，その割合を調べたところ，53.2%（42票）を占めた．今後，意識調査に参加してもらうことの効果のより正確な把握や調査結果のフィードバック手法についても検討する必要がある．

表１　旅客にマナー向上を訴求するための手法

項目	件数	割合(%)
ハード面の対策	69	15.1
設備の改良	27	5.9
空間の住み分け	42	9.2
ソフト面の対策	388	84.9
ルールやペナルティの設定	46	10.1
巡回強化	151	33.0
教育による指導および啓蒙	62	13.6
他機関との連携	44	9.6
自覚・意識付け強化	30	6.6
マナー・キャンペーン強化	18	3.9
雰囲気作り	16	3.5
気軽に注意し合える社会システム作り	11	2.4
研究・データ公表	10	2.2
対象人数	457	100

表２　迷惑行為の種類別にみた対処方略

行為	規制	共生	放任
犯罪・ルール違反行為	（規＞共＞放）		
暴力をふるう	91.7	7.3	1.0
設備を壊す	89.6	8.9	1.5
正しい切符を持たずに乗車する	59.5	33.3	7.2
美化・衛生を脅かす行為	（規＞共＞放）		
決められた場所以外で喫煙する	69.1	28.1	2.7
ゴミなどのポイ捨て	65.7	32.5	1.8
乗降移動時の規範からの逸脱行為	（共＞規＞放）		
乗車待ちの列を無視して乗車する	42.3	56.0	1.7
乗車待ちの列に並ばない	33.1	63.8	3.1
降車する人を無視して乗車する	30.0	67.6	2.4
車内の強い規範からの逸脱行為	（共＞規＞放）		
優先席で席を譲らない	18.5	79.1	2.4
車内の緩やかな規範からの逸脱行為	（共＞規＞放）		
大音量でヘッドホンステレオを聞く	28.5	64.9	6.6
車内で携帯電話を使用する	22.9	69.2	7.9
車内で大声で話す	19.3	75.6	5.0
他人に構わず急いだり走る	18.8	72.1	9.1
濡れた傘の持ち方・置き方に配慮しない	12.8	84.1	3.1
	（共＞放＞規）		
車内で化粧をする	6.9	60.7	32.4
車内で飲食する	5.3	65.9	28.9

注）表中の数値は割合（%）を示す

【引用文献】

山内他 2004 鉄道における迷惑行為に対する利用者の認知および行動の分析 鉄道総研報告，18(2)，25-30
寺部他 1997 交通計画における意思決定のためのパブリックインボルブメント手法 MOBILITY，108，62-67

（やまうち かな）

ＥＱ測定のための基礎的研究

－共感性に関する質問項目と顔写真との関係－

浮谷　秀一　　岡村　一成
（東京富士大学経営学部）

キーワード：ＥＱ（Emotional Quotient）　共感性　顔写真

【はじめに】　最終的な目的であるＥＱ概念を明らかにするために、構成要素について検討を重ねている。現在は、ＥＱの構成要素の一つである共感性に焦点をあわせている。一連の研究では、顔写真をどのような感情と判断するかの結果と共感性に関する質問項目との関連の検討を進めている。今回はＥＱ概念探求のために検討してきた共感性に関する質問項目の特定および顔写真評定との関連について報告する。

【目的】　ＥＱ概念の構成要素である共感性に関する質問項目の特定と顔写真評定との関連を知ることである。

被験者　Ｔ大学、Ｎ大学、Ｓ大学などの大学生・短大生 477 名（男子 281 名・女子 196 名）。年齢は 17 歳から 22 歳がほとんどで、23 歳以上が 15 名いる。

【方法】　調査は「顔写真評定用調査用紙」（２枚）と「質問評定用調査用紙」の２種類を作成した。前者は、浮谷・岡村（2003）の顔写真判断の結果から抽出された顔写真１５枚とその調査で確認されたそれぞれの顔写真に対応する感情（喜び・驚き・苦痛・恐怖・怒り・軽蔑）を組み合わせたもので構成されている。その組み合わせを「1.全く当てはまらない」「2.少し当てはまらない」「3.どちらともいえない」「4.少し当てはまる」「5.よく当てはまる」の５段階で評定してもらった。後者は、岡村・浮谷・外島・藤田（2000）で見出された中から共感性に関すると思われる質問項目 35 問で構成されている。この質問に対しても「1.全く当てはまらない」「2.少し当てはまらない」「3.どちらともいえない」「4.少し当てはまる」「5.よく当てはまる」の５段階で評定してもらった。この２種類の調査用紙３枚を綴じた状態で実施した。

【結果と考察】

「質問評定用調査用紙」の因子分析結果は下記のとおりである。（　　）内は因子負荷量である。

≪第1因子≫

28.相手の態度から感情を読み取ることができる（0.661）
29.言葉の裏にある含みを読み取るのが得意である（0.654）
14.相手の目を見て感情を知ることができる（0.643）
15.自分のカンはよく当る（0.589）
31.誰かが悩んでいる時は雰囲気でわかる（0.580）
30.相手が自分に対してどのような印象を抱いているかがわかる（0.570）
32.部屋に足を踏み入れた瞬間に全体のムードを察知できる（0.519）

≪第2因子≫

21.人づきあいでは相手の気持ちをよく考えるようにしている（0.588）
11.親しい友人に感謝の気持ちを伝えるようにしている（0.544）
5.相手の話にまず耳をかたむけるのがエチケットだ（0.543）

≪第3因子≫

7.自分の意思は人にきちんと伝えている（0.708）
9.反対意見を述べて現状を変えていくことができる（0.662）
8.「ノー」と言うべき時にはきちんと言える（0.631）

≪第4因子≫

18.一歩退いて冷静に問題を見つめ直すことがよくある（0.572）
17.みんなが興奮している時でも自分だけは冷静でいられる（0.547）
12.感情をあまり表に出さない（0.491）

≪第5因子≫

23.自分の感情的行動には責任を持つようにしている（0.540）
22.批判に耳を傾け、それが正しい時には率直に認める（0.483）
24.行動する前には、自分の気持ちをよく振り返る（0.428）
25.問題に直面した時は、まず自分にできることを考える（0.415）

≪第6因子≫

3.相手の嫌がることは口に出さない（0.802）
2.かるがるしく他人の悪口や批判をしない（0.577）

≪第7因子≫

33.議論は避けるようにしている（0.545）
35.面倒な問題をわざわざ掘り起こすことはない（0.517）

以上の結果から、因子を次のように命名した。

第１因子：『相手を察知できる』因子
第２因子：『相手に気遣いできる』因子
第３因子：『必要なことを言える』因子
第４因子：『常に冷静でいられる』因子
第５因子：『自分がわかる』因子
第６因子：『相手を責めない』因子
第７因子：『トラブルを避ける』因子

この中で、第１因子：『相手を察知できる』因子および第２因子：『相手に気遣いできる』因子の１０項目の質問が共感性に関係していると考えられる。

この 10 項目についてすべてにおいて「5.よく当てはまる」「4.少し当てはまる」のいずれかと評定した被験者は 24 名であった。そのうち「5.よく当てはまる」と評定した者は６名であった。顔写真の評定との関係については、24 名の中で「5.よく当てはまる」「4.少し当てはまる」と答えた顔写真の枚数が半数（8 枚）以上だった者は 18 名であった。また、14 枚だった者が 2 名、13 枚だった者が 3 名であった。

全体的な傾向として、共感性に関する質問に対して「5.よく当てはまる」「4.少し当てはまる」と答えた者は、顔写真の評定においても「5.よく当てはまる」「4.少し当てはまる」と答える傾向があることが示唆された。

引用文献

岡村一成・浮谷秀一・外島裕・藤田主一　ＥＱ概念に関する基礎的研究　2000 富士論叢 45 巻２号
浮谷秀一・岡村一成　ＥＱ測定のための基礎的研究 2003 富士論叢 48 巻２号

（うきやしゅういち・おかむらかずなり）

個人識別属性と顔のマッチング

○福　本　純　一　　福　田　　廣
（山口県警科学捜査研究所）（山口大学教育学部）

【キーワード】顔記憶，ＩＤ属性，示差性

目　　的

日常のコミニュケーションを円滑に行う上で，人の顔を記憶しておくことは，重要な認知的な技術である。顔には形態的、印象的特徴だけでなく，名前，経歴など様々な内容の個人属性に関する情報が結びつけられており，個人の識別を行う際に，これら付随する様々な情報も手がかりとして使用される。一般的に，人の名前は他の個人情報に比べると，顔の連合が困難であるため記憶されにくく，ブロッキングが生じやすい（吉川，2002）といわれ，McWeenyら（1987）は，名前想起を困難にする要因について検討を加えている。

本研究では，顔と個人識別属性を連合させて記憶する際，その属性情報の種類や学習の進行度がどのような違いを生じさせるのかを検討するとともに，顔の示差性の違いが個人識別属性の再生に及ぼす効果についても併せて検討した。

方　　法

実験計画　２（顔の示差性：高示差性H，低示差性L）×３（個人属性：名前N，出身県P，職業J）×５（試行：1，2，3，4，5）の３要因計画で行った。なお，いずれも被験者内要因であった。

被験者　大学生68名（男性47名，女性21名）

刺激材料　福田・福本（2003）の研究で使用した顔の示差性の程度を評価した男性（18～29才）の正面真顔カラー写真のリストから高示差性群，低示差性群に分類された顔写真各５枚の計10枚を任意に選択しコンピュータに取り込んで使用した。

属性として名前，出身県，職業を設けた。名前は電話帳登録件数による姓の全国順位調査（城岡，2003）を基に，100位以内に含まれる姓から，府県名と同じでないこと，漢字２文字で表記され刺激間で重複文字がなく，音読数が４音であることを条件に10種類の名前を用意した。出身地については，漢字２文字で刺激間で重複文字がなく，音読数が４音であることを条件に，地域に偏りがないよう10県を選択した。また，職業については，日本職業分類の小分類から一般的と思われる10種類の職種名とした。これら３種類の属性ごとに各１情報をランダムに各顔に振り分け，学習課題時に顔画像の下に記載して提示した。

手続き　実験は集団法により，学習課題と再生課題を実施した。「学習課題」は意図的記憶事態とし，個人識別属性を顔刺激と共に10秒間スクリーンに提示した。10刺激は継時的に提示し，提示順序はランダムとした。学習課題終了２秒後に「再生課題」に移った。スクリーンに学習課題と同じ順序で顔刺激のみを20秒間提示し，その間に回答用紙に各顔刺激の３種類の個人属性について記入を求めた。５秒間の休息を挟んで同様の作業を計５試行繰り返した。なお，刺激提示順序は試行ごとにランダムとした。

結　果　と　考　察

結果は，正再生数を再生成績の指標とした。各群の平均正再生数をFig. 1に示す。示差性×個人属性×試行回数の３要因の分散分析を行った結果，示差性の主効果（$F(1,67)=24.495$, $p<.001$），個人属性の主効果（$F(2,134)=27.887$, $p<.001$），試行の主効果（$F(4,268)=318.318$, $p<.001$）はいずれも有意であった。高示差群の再生成績は，低示差性群に比べ優れていた。また，個人属性及び試行回数について多重比較（Ryan法）を行ったところ，個人属性では職業条件の再生成績は他の条件よりも有意に高かった（$p<.001$）。また，試行回数は条件間ですべて有意な差がみられ，試行による学習の進行が認められた。一次の交互作用はいずれも有意でなかったが，示差性×個人属性×試行回数の二次の交互作用（$F(8,536)=2.779$, $p<.01$）が有意であった。そこで，単純交互作用をみると試行１回目における示差性×個人属性の交互作用（$F(2,670)=9.053$, $p<.001$）が有意であり，高示差性－職業条件では，他の組み合わせに比べて再生成績が良いことが示された。

これらの結果から，顔の示差性と個人識別属性の違いの効果が示された。職業に関する人物情報は，顔の属性に関わりなく他の人物情報の記憶と比較して大きな差がみられ，職業は名前よりも有意味性が高く，イメージの生成が容易であるため想起されやすいと仮定したMcWeenyら（1987）の実験結果と一致するものであったが，部分的には高示差性と職業情報の対連合が学習の初期の段階において優位に結びつく可能性も示唆される。この点に関しては，更なる実験的検討が必要であろう。また，示差性の高い顔はそうでない顔に比べ個人属性が想起されやすくなり，未知の人の顔や個人の意味情報を覚える際に手がかりとなる符合化やイメージ化といった記憶方略を促進することを示すとも考えられる。

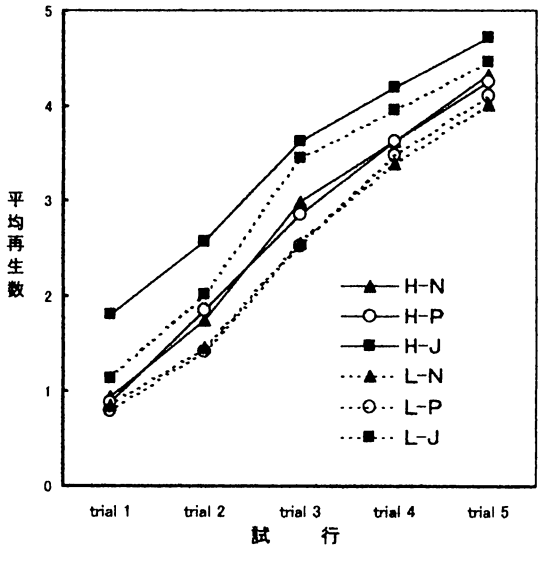


Fig. 1　示差性・個人属性・試行ごとの平均再生数

（ふくもと　じゅんいち・ふくだ　ひろし）

大学生における「気まずさ」喚起状況

○小林 桂子　　内藤 哲雄
（信州大学大学院人文科学研究科）　（信州大学人文学部）

キーワード：気まずさ 喚起状況 対人不安

【目的】

我々が対人関係の中で感じる「気まずさ」は、日常生活の中で重要な意味を持つものである。しかしこれまで「気まずさ」は対人不安の中の一部として取り上げられたり、羞恥と同様のものと見なされてきたにすぎなかった。そこで本研究では、「気まずさ」を本格的に取り上げ、「気まずさ」喚起状況の構造を検討するための調査を試みた。

【方法】

被調査者 信州大学生259名（男性145名、女性114名）

手続き　信州大学生62名（男性28名、女性34名）に「気まずさ」を感じた経験を自由記述させ、喚起状況（・・する時）に該当する186個の記述を抜き出した。このうち内容が重複・類似したものをまとめたところ、137個となり、これらは17のカテゴリーに分類された。次いで各カテゴリーを代表すると判断されたものを取り上げ、64項目からなる「気まずさ喚起状況尺度」を作成した。このようにして作成した質問紙を信州大学生259名に教室で配布し、喚起された「気まずさ」の強さを単極の11段階で評定させた。

【結果】

回答に欠損のあった12名を除いた247名の因子分析を行った（主因子法・プロマックス回転）。さらに因子負荷量が.25以上の項目を残し、再度因子分析を行ったところ6個の因子が抽出された。表1には因子負荷量が2因子以上に渡って.25以上であった項目を除いたものを掲載した。

【考察】

第1因子は、相手に隠し事をしていたことがばれてしまった、またその結果相手の信頼を裏切ってしまったという内容であり、「自分の信頼喪失」と命名できよう。第2因子は相手に迷惑をかけてしまった、相手を嫌な気分にさせるような対応をしてしまったという内容であり、「他者への配慮不足」と呼ぶことができる。第3因子は、醜態を露呈してしまった他者を目撃することで自分が「気まずさ」を感じるような状況であり、「他者の醜態目撃」と名付けることができよう。第4因子は他者の目を気にしながら行動しているような状況で、その時の自分の姿にいまひとつ自信が持てないという内容であり、「自信のない立ち回り」であると解釈できる。第5因子は異性との関係が深まったり、壊れたりする変化段階に直面したことに関する内容と捉え、「異性との関係変化」と呼ぶことにした。これは恋人を求める時期である大学生期という特徴が深く関係しているものと思われる。第6因子は運の悪さや偶然がもたらす自分のドジや失敗を他人にさらしてしまったことに関する内容であり、「偶然・運がもたらした失態」と見なすことができる。以上から、「気まずさ」は自分と関わりのある他者との関係の中で喚起する情動であると言うことができよう。

さらに第1、第2因子はいずれも相手に対してまずいことをしてしまったという状況で、有光（2002）の研究で取り上げられた罪悪感を喚起する状況と類似するものがいくつか含まれている。よって、第1、第2因子は他者に対しての罪悪感に関わる内容であると言える。次の第3因子は、Edelmann（1987）の恥をかいた他者をみることで自分も恥ずかしくなるという「共感的な羞恥」の状況が、「気まずさ」の状況としても表れたと考えられる。また、第5因子は菅原（1991）の「テレ」を喚起する状況と共有性を持つと言えるし、第6因子は他者からの嘲笑や批判を受けるという点で菅原（1991）の「ハジ」を喚起する状況によく似ていると言えよう。以上のことから、「気まずさ」は、罪悪感や羞恥などに比べてより広範な対人場面に関わるような情動であると言えよう。

表1　回転後の各因子への因子負荷量

	「気まずさ」喚起状況	負荷量
自分の信頼喪失	・嘘がばれてしまった時	0.71
	・恋人に浮気がばれた時	0.62
	・カンニングしているのを知人に見られた時	0.59
	・授業をさぼった直後に担当教官に会ってしまった時	0.53
	・同じ相手に何度も頼みごとをする時	0.47
	・飲み会が重なり、片方を断ったら偶然2次会が同じ場所で、出くわしてしまった時	0.36
	・ある人の悪口を言っていたらその人が近くにいた時	0.36
他者への配慮不足	・知り合いが怒られているのを見てしまった時	0.71
	・自分が叱り過ぎた後輩に次の日会う時	0.65
	・歩いていて対向してきた人と同じ方向によけてしまった時	0.40
	・店でサービスを受けたが、何も買わずに出てきてしまった時	0.40
	・相手の期待に応えられなかった時	0.38
	・その人の名前が思い出せない時	0.27
他者の醜態目撃	・ズボンのチャックが開いている人と話をする時	0.77
	・友人が風俗店から出てくるのを見てしまった時	0.61
	・友達がオナラをしてしまった時	0.53
	・カツラを装着する場面を見てしまった時	0.47
	・友達が言葉の使い方を間違えた時	0.46
	・友人が泣いているのを見てしまった時	0.25
自信のない立ち回り	・数人で話をしていて、自分だけ話についていけない時	0.62
	・知り合い5～6人の集団の目の前を通り過ぎないといけない時	0.61
	・顔見知り程度の人と二人きりで話している時	0.45
	・交差点の近くで知り合いに会い「またね」と言ったのに道路を離れずそのまましばらく一緒にいなければならなかった時	0.39
異性との関係変化	・その人と初めてデートする時	0.61
	・恋人と初めてキスした直後	0.55
	・告白して振られてしまった次の日会った時	0.49
	・別れてすぐの時に前の恋人と二人きりになってしまった時	0.47
	・昔好きだった人に突然会った時	0.38
偶然・運がもたらした失態	・電車の中で二度も同じ人の足を踏んでしまった時	0.54
	・誰もいないと思って独り言を言っていたら実は人がいた時	0.54
	・お金を払おうとしたが、財布にお金がないことに気づいた時	0.54
	・中に人がいるのに、トイレの扉を開けてしまった時	0.39
	・一人だけ遅刻して教室に入った時	0.32

（こばやしけいこ　ないとうてつお）

幼児をもつ母親の育児不安と疲労の自覚症状に関する研究

○林田　りか、中　淑子　　草野美根子　　内海　滉
(県立長崎シーボルト大学)　(群馬大学)　(千葉大学)

キーワード：幼児　母親　育児不安　疲労の自覚症状

＜研究目的＞

現代は育児環境が変化し、ストレスや育児疲労を持つ母親が増えている。そのため、子どもに多くの悪影響を与え、親子関係が余儀なくされている。育児に強く影響する要因を調べるため、アンケート調査を行った。育児不安の調査には吉田らの「(仮称) 育児不安スクリーニング尺度」、さらに疲労の自覚症状に関する調査には、日本産業衛生協会、産業疲労研究会の「自覚症状しらべ」を用いた。本研究では、幼児をもつ母親の育児に対する不安と疲労の程度およびそれらの関連性を明らかにすることを目的とする。

＜研究対象および方法＞

福岡県のD幼稚園およびT幼稚園に通う園児の母親を対象に、調査用紙を配布した。回収できた368名のうち、有効回答を得られた312名（有効回答率84.8%）を分析対象とした。調査期間は平成14年8月。調査用紙は、対象の属性（14項目）と吉田らが開発した「(仮称) 育児不安スクリーニング尺度（45項目)」および日本産業衛生協会、産業疲労研究会の「自覚症状しらべ（30項目)」を使用した。回答は、無記名自記式にて行った。分析方法は4段階評価法で評定し、その得点をもとに因子分析および分散分析、t検定、相関の検定を行った。データー解析には、統計解析ソフトSPSS10.0Jを使用した。

＜結果および考察＞

1．対象者の属性

母親の平均年齢は34.3歳（SD4.2）で、20歳代11.5%、30歳代77.6%、40歳代10.9%であった。母親の最終学歴は、高卒以下44.2%、短大・専門学校卒46.2%、大学・大学院卒9.6%であった。就労者は、42.9%と全体の約半数を占めていた。夫の年齢は、30歳代が63.8%と最も多く、夫の職業はサラリーマンが80%以上を占めていた。子どもの平均人数は2.2人（SD0.8）で、最大は6人であった。育児に悩んでいる母親は、27.9%と全体の1／4以上を占めていた。

2．育児不安について

1）因子構造の検討

育児不安スクリーニング尺度45項目（α係数0.729）を変数として、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、6因子を抽出した（累積寄与率46.6%)。因子の内訳は、第1因子「育児の喜び」11項目（α係数0.895)、第2因子「育児負担」13項目（α係数0.873)、第3因子「夫のサポート」7項目（α係数0.889)、第4因子「自信のなさ」5項目（α係数0.856)、第5因子「子どもの育て易さ」6項目（α係数0.758)、第6因子「相談相手の有無」3項目（α係数0.574）であった。育児に対するポジティブな因子が4つとネガティブな因子が2つ混在し、その中でも育児への肯定的なイメージが強いことが示唆された。

2）因子別の属性比較

因子得点の平均値を用いて、因子ごとに母親の属性の比較を行った。第1因子「育児の喜び」では、母親の学歴が大学卒以上と高学歴の方が高卒以下と比べて優位に高く（$p<0.05$)、母親の職業では専業主婦がパートタイムの母親より有意に高かった（$p<0.05$)。相談相手では夫や親、その他と多くの人に相談している方がそれ以外の者より育児の喜びを強く感じていた（$p<0.05$)。第2因子「育児負担」では、夫や親以外に相談している方が育児負担を強く感じていた（$p<0.01$)。また、育児に悩みのある方がない者より育児負担を強く感じていた（$p<0.01$)。第3因子「夫のサポート」では、夫や親、その他と多くの人に相談している方が、夫のサポートを多く受けている結果となった（$p<0.01$)。また、育児に悩みのある者は、「自信のなさ」が強く、「子どもの育て易さ」を感じることが少なく、「相談相手の有無」では悩みのないものより有意に高かった（$p<0.05$)。

3．疲労の自覚症状について

1）質問項目別の訴えスコアの平均値

質問番号1～10までの質問項目を“Ⅰ群　ねむけとだるさ”（以下Ⅰ群とする)、11～20までの質問項目を“Ⅱ群　注意集中の困難”（以下Ⅱ群とする)、21～30までの質問項目を“Ⅲ群　局在する身体違和感”（以下Ⅲ群とする）の3群にわけた。そして項目ごとに訴えスコアの平均値を算出し、群ごとに比較した。平均値が2点以上の質問項目はⅠ群では「ねむい」「横になりたい」であり、Ⅱ群では「いらいらする」、Ⅲ群では「肩が凝る」であった。

2）3群別にみた訴えスコアの比較

訴えスコアの平均値を3群間で比較した。Ⅰ群が1.63(SD0.45)と、Ⅱ群1.52(SD0.43)やⅢ群1.43(SD0.35)より有意に高い値を示した（$p<0.01$)。育児中の母親には、疲労症状として“ねむけとだるさ”が強く感じられることが明らかとなった。

4．育児不安と疲労の自覚症状との相関

育児不安スクリーニング尺度から抽出された6因子と、疲労の自覚症状しらべの3群の相関を調べた。育児不安スクリーニング尺度の第2因子「育児負担」と疲労の自覚症状しらべのⅠ・Ⅱ・Ⅲ群間に正の相関がみられ（Ⅰ群 $r=0.444$、Ⅱ群 $r=0.550$、Ⅲ群 $r=0.336$)、同様に第4因子「自信のなさ」とⅡ群「注意集中の困難」に正の相関（$r=0.483$)、第5因子「子どもの育て易さ」とⅡ群に負の相関がみられた（$r=-0.483$)。育児負担が強くなると疲労の身体症状も強まる結果となり、心身ともに悪影響を及ぼすことが明らかとなった。

（はやしだ　りか　　なか　よしこ　　くさの　みねこ
うつみ　こう）

注意機能尺度の作成の試み（7）

○鈴木　大輔・和田　裕一・岩崎　洋一
（東北大学大学院情報科学研究科）

キーワード：注意、探索的因子分析、検証的因子分析、CFQ

注意の機能分類の研究は、実験的研究に基づくものが多く、日常生活における注意の働きとこれまで見出されてきた注意機能の分類とどの程度対応するかについては明らかにされていない。そこで我々は、Sohlberg & Mateer（1989）による分類を参考に、①内部に向けられる注意、②外部に向けられる注意、③維持、④切り替え、⑤分割の５つの注意機能カテゴリーを仮定し、これらの注意機能と日常生活に関連した行動場面における個人の注意特性や行動特性との対応関係について質問紙法を用いて検討し、２つの注意因子からなる注意機能尺度を作成した（鈴木他, 2002, 2003）。しかし、本尺度においては各注意因子の寄与率が低く、因子妥当性が十分とはいえなかった。そこで本研究では、５つの注意機能カテゴリーを再度仮定し、質問項目にいくつかの修正を加えて注意機能尺度の妥当性を再検討することを目的とした。特に今回は質問文の提示方法の違いに注目し、被験者が具体的な日常場面を想起して回答することができるように質問文の状況が該当する日常行動場面を明示的に指定する場合（場面設定あり群）と、それを明示しない場合（場面設定なし群）とで、抽出される因子にいかなる違いがみられるかについて検討した。

＜方法＞

調査対象者：316人（男性235人、女性81人）。

質問紙の構成：①上述の5つの注意機能のカテゴリーを仮定し収集した注意機能に関する項目（43項目、5件法）に加えて、構成概念妥当性を検討するために、②失敗行動傾向を測定するCFQ、③向性（E）や神経症傾向（N）等の人格特性を測定するEPI、④衝動性傾向を測定するBIS-10をあわせて実施した。注意機能に関する質問項目43項目について、被験者が理解しやすいよういくつか日常場面を設定した場面設定あり群（男子123人、女子43人、計166人）と、従来の場面設定を設けない場面設定なし群（男子112人、女子38人、計150人）の2群をそれぞれ設定した。

＜結果および考察＞

まず、場面設定なし群について探索的因子分析（主因子法、promax回転）ならびに検証的因子分析を行った結果、分割、切り替え、多動性の３つの注意因子からなるモデルが妥当であると判断した。このモデルに基づき、場面設定なし群と場面設定あり群との間で多母集団の同時分析を行った結果、両群の質問項目が同質であるとするモデルが最も良い適合度が得られ（GFI=0.86、AGFI＝0.82、RMSEA＝0.04）、場面設定の有無が因子抽出に及ぼす影響はないと判断された。そこで、2つの群のデータをあわせて探索的因子分析を行った結果、3因子解による解釈が最適であると判断された。さらに抽出された各因子の因子負荷量が近似している項目、因子負荷量が0.4未満の項目を削除した上で再度因子分析を行い、21項目からなる因子を抽出した（表1参照）。さらに検証的因子分析を行い、修正指標が他の因子へ高い数値を示した項目を削除し、再度検証的因子分析を行った結果、満足しうる適合度指標が得られ（GFI=0.88, AGFI＝0.85, RMSEA＝0.07）、3因子モデルが検証された（表1参照）。第1因子は「分割」因子と命名した。CFQ、EPIのE尺度で弱い相関が見られ（CFQ: r=－0.12 p<.05,　E: r=0.20, p<.01）、鈴木らが抽出した2因子モデルの「能動的コントロール」因子の一部を包括する内容となった。第2因子は「切り替え」因子と命名した。BIS-10、E尺度で弱い相関が見られ（BIS-10: r=0.15, p<.01,　E: r=－0.18, p<.01）、CFQ、N尺度で中程度の相関が見られた（CFQ: r=0.41, p<.01,　N: r=0.49, p<.01）。さらに第3因子では、鈴木らが抽出した2因子モデル多動性因子と類似した項目が抽出され、「多動性」因子と命名した。E尺度では弱い相関が見られ（E: r=0.18, p<01）、N尺度とBIS-10は中程度の相関が見られた（N: r=0.31, p<.01, BIS-10: r=0.48, p<.01）。

本研究より、質問項目を提示する際の場面設定の有無は、抽出される因子の内容に影響を及ぼさないことがわかった。しかし、場面設定なし群より、あり群において各質問項目の標準偏差が低い項目が多くみられ、被験者の反応のレンジを狭めている可能性が示唆される。このことから従来の場面設定を行わない提示方法がより適切であると考えられる。さらに本研究では、従来の2因子モデルとは異なり、3因子モデルが検証された。第2因子「切り替え」因子は、これまで鈴木らが抽出した2因子モデルの「多動性」因子と「能動的コントロール」因子中の双方の「切り替え」に関する項目を包括する内容となり、機能が詳細に抽出された。今後は、2因子モデル、3因子モデル双方について検証し、注意行動指標との対応関係について検討していく必要があると思われる。

表1　注意機能に関する項目の探索的因子分析、検証的因子分析の結果

質問項目	探索的因子分析 F1	F2	F3	検証的因子分析
第1因子：分割（α＝.76）				
9.　⑤2つ以上のことを同時並行してできる。	0.69	－0.03	0.00	0.71
6.　⑤作業に集中しながら、同時に他のことも考えられる。	0.67	0.01	0.04	0.67
17.　⑤手を休めることなく、人の話を聞ける。	0.57	－0.03	0.04	0.56
36.　④複数の本を同時に読み進めることができる。	0.52	0.16	－0.13	0.50
19.　⑤複数の人の話を同時に聞いても混乱しない。	0.52	－0.02	0.00	0.51
18.　②騒がしい状況でも相手の話を聞ける。	0.46	－0.07	－0.11	0.46
33.　⑤多くのことに注意を払うのは得意だ。 a)	0.43	－0.15	－0.13	
11.　①いくつかの作業をするとき、同時にいくつものことに手をだす。	0.40	0.17	0.16	0.31
第2因子：切り替え（α＝.43）				
26.　④済んだことをくよくよ考える。	0.08	0.70	－0.04	0.68
32.　④うまく気持ちの切り替えができる。 *)	0.08	－0.67	0.12	－0.67
14.　④新しい作業を行うとき、うまく頭の切り替えができない。	－0.10	0.54	－0.05	0.55
12.　①作業中、何をやるのか目的を失う。	0.10	0.50	0.14	0.49
15.　④気になることがあると、他の大切な作業をしているときでさえ気になる。	0.07	0.47	0.01	0.47
38.　④新しい環境やルールになれるのに時間がかかる。	－0.14	0.42	0.03	0.48
8.　②新しい作業なのに、それまでやっていた前の作業を繰り返す。	0.14	0.40	0.10	0.36
第3因子：多動性（α＝.70）				
43.　③落ち着きがない。	0.10	0.01	0.73	0.45
31.　③長時間じっとしていられない。	－0.01	－0.04	0.70	0.53
42.　③講演会や音楽界などで長時間じっと座っているのは苦手だ。	－0.09	－0.15	0.58	0.59
25.　②早とちりをする。	0.01	0.15	0.52	0.54
24.　①人の話を聞いていないといわれる。	－0.07	0.06	0.49	0.69
34.　⑤別なことに気をとられて、忘れ物をしたり、やるべきことを忘れたりする。	－0.03	0.12	0.40	0.70
負荷量平方和合計（因子負荷量2乗和）	3.75	1.79	1.24	
負荷量平方和分散（寄与率）（%）	17.90	8.51	5.92	
負荷量平方和累積（累積寄与率）（%）	17.90	26.41	32.33	

注）項目欄の最初の数字は質問紙の番号、2つ目の丸数字は仮定した5つの注意機能のカテゴリーに対応する。
a)　検証的因子分析の際、他因子への観測変数の修正指標が高いため削除した項目。
*)　逆転項目。

（すずき　だいすけ・わだ　ゆういち・いわさき　しょういち）

砂を触ることによるリラクセーション効果の検討

―生理心理的指標を用いて―

○大野 高志[1)]　野瀬 出[2)]　山岡 淳[1)]
([1)]文京学院大学大学院人間学研究科　[2)]文京学院大学人間学部)

キーワード：　砂、リラクセーション、生理心理的指標

【目的】

これまで、砂は箱庭療法等で用いられるなど、その効果が注目されてきている(河合, 1985)。砂に触ることで退行的になりやすいなどの報告はあるが(岡田, 2002)、実際に砂に触ることの有用性が検討された研究は少ない。そこで、今回はリラクセーションの観点から、生理心理的指標として心拍と呼吸、血流量を測定し、砂を触ることによる効果について検討する。

【方法】

被験者：大学生および大学院生７名(女性、19～23 歳)。

実験環境：関東近郊の大学の閑静な一室。室温は 26～28℃の範囲に保った。

実験材料：箱庭療法で用いる自然色の人工砂および砂箱（千葉テストセンター)。

計算課題：計算課題は内田クレペリン検査に準じた形式で行った。150 個×15 行の数字が印刷された用紙を用い、被験者は実験者が１分ごとに設定した目標（85 個）を達成することが求められた。

質問紙：新版 STAI(肥田野ら, 2000)、多面的感情状態尺度(寺元ら, 1992)を用いた。

生理心理的指標：心拍は、銀皿電極を用いて第２誘導で導出し（時定数 0.3sec)、心拍数を算出した。呼吸はストレインゲージ式トランスデューサを用いて導出し(時定数 0.3sec)、呼吸数を算出した。以上は簡易型ポリグラフ（NEC 製）にて増幅記録した。血流量及び皮膚表面温度はレーザードップラー血流計(Moor Instrument 製 DRT4)を用い、前額中心部と鼻尖部から導出した。

手続き：実験は砂セッションと統制セッションから構成されており、全被験者が両セッションに参加した。砂セッションと統制セッションの間は１週間以上をあけ、実施順序はランダムとした。両セッション共に、暗算課題ブロック(15 分)、および課題後ブロック(5 分)が含まれていた。課題後ブロック中、砂セッションにおいては、被験者に椅子に腰掛けたままで砂に触れさせた。握る・つかんで落とす・なでる・掃く・かき回すという例を挙げた上で、手背部・手掌部・指尖部を含む両手の全体に砂が触れるよう指示した。一方の統制セッションにおいては、椅子に腰掛けさせ安静にさせた。生理心理的指標は、各ブロックの前後（各２分）および課題後ブロック実施中に記録した。また STAI 状態不安と多面的感情状態尺度を各ブロックの前後に記入させた。

【結果】

まず、課題後ブロック前後の生理心理的指標の変化量について t 検定を行った結果、砂セッションにおいて統制セッションよりも心拍数が低下していた($t(6)=2.45$, $p<.05$)。前額中心部血流量および皮膚表面温度については、砂セッションで上昇する傾向がみられた($t(5)=2.34$, $p<.10$; $t(6)=2.22$, $p<.10$))。質問紙に関しては、STAI 状態不安は砂セッション中に低下していた($t(6)=5.38$, $p<.01$)。多面的感情状態尺度においては、抑鬱・不安($t(6)=2.78$, $p<.05$)、倦怠($t(6)=2.54$, $p<.05$)、集中($t(6)=2.51$, $p<.05$)の下位項目が砂セッション中に低下しており、活動的快($t(6)=2.65$, $p<.05$)と非活動的快($t(6)=3.56$, $p<.01$)が砂セッション中に上昇していた。以上の結果より、砂を触ることによるリラクセーション効果が認められた。

次に、各生理心理的指標の課題後ブロック中の変化過程について検討を行った。計算課題終了後の安静状態からの変化率を１分ごとに算出し、セッション(2)×時間経過(5)の２要因分散分析を行った。その結果、呼吸ではセッションの主効果のみが認められ($F(1, 69)=4.92$, $p<.05$)、砂セッションにおいては呼吸数が増加する傾向にあった。前額中心部皮膚表面温度については、セッションの主効果($F(1, 69)=6.01$, $p<.05$)と、セッションと時間経過の交互作用($F(4, 69)=4.53$, $p<.01$)が認められ、砂セッションにおいては、時間経過に伴って皮膚表面温度が高くなる傾向にあった。砂に冷感があるとの内省報告があったが、実際の表面温度は上昇していた。

【考察】

本研究では、砂を触ることによって、心拍数の減少、前額中心部の血流量の増加と皮膚表面温度の上昇がみられた。さらに質問紙については、不安感情は減少し、快感情は増加していた。内省報告からも、７名中６名が砂の感触がきもちよかったと答えており、また、７名が安静状態と比較すれば、砂を触っていた状態のほうがよかったと答えている。このように主観的にも客観的にも、リラクセーション効果がみられたと考えられる。

生理心理的指標についてであるが、山岡ら(1989)は快の気分によるリラックス状態の現れとして呼吸数が減少することを報告している。本研究の結果はこれと一致しておらず、むしろ増加傾向を示していた。課題後ブロック中の時間経過について解析した結果、砂セッションにおいて呼吸数が増加していた。これは砂を触るという運動的要因を反映していると考えられる。砂に触るという行動が運動的要因も含んでいることで影響を与えている可能性は否定できない。但し、課題後ブロック後において心拍数が減少していたことは、単に運動的要因の影響のみとは考えにくい。

以上のように、砂を触ることによるリラクセーション効果は認められたが、それと運動的要因とを区別することは難しかった。今後は快感情を喚起する砂と類似した物への触感覚や、非運動状況での砂への接触場面の比較も含めて検討する必要があろう。

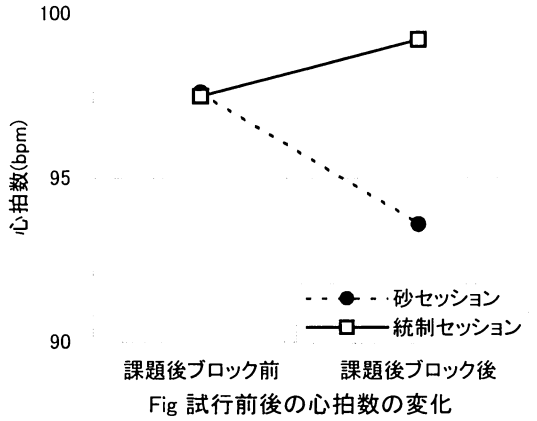


Fig 試行前後の心拍数の変化

(おおのたかし　のせいずる　やまおかきよし)

ALS 患者の PAC 分析例

○木村　友昭[1)]　山岡　淳[1,2)]
([1)]財団法人エム・オー・エー健康科学センター　[2)]文京学院大学大学院人間学研究科)

キーワード：PAC 分析、ALS、人生観、病気の受容

【背景・目的】 神経難病の一つである ALS（筋萎縮性側索硬化症）は、呼吸や嚥下を含む全身の運動機能が阻害される進行性の疾患で、根本的な治療法がなく、本人はもちろん、家族や周囲の人にも多大な負担を強いることから、患者の介護や心理的サポートが重要な課題となっている。生きがいや病気（障害）の受容は、個人個人で異なっており、患者を理解し、サポートやケアのあり方を考えるためには、一般論ではなく、個別のアプローチが必要である。本報では、PAC 分析(内藤,1997)の手法で ALS の患者の人生観を共有した事例を紹介し、心理的サポートのあり方を考察する。

【方法】 研究の趣旨に同意した ALS 患者（女性）を被験者として、PAC 分析を行った。被験者は、文字を書くことができないが、会話は可能であったので、変則的な方法でデータを収集した。すなわち、被験者は、刺激語「人生・生きがい」に対して連想したイメージや言葉を口頭で語り、面接者はそれをカードに記入し、被験者に確認した。クラスター分析（ウォード法）とデンドログラムの作成は、JMPv4 日本語版（SAS 社）を使用した(木村,2003)。被験者は、その他、健康関連 QOL 尺度である SF-36 日本語版(Fukuhara, et al.,1998)、気分感情の尺度である日本版 POMS(横山ら,1990)、ALS 患者用の尺度である日本語版 ALSAQ40(山口ら,2004)に回答した。

【結果】 被験者は、X 年 8 月、主治医から ALS の疑いと告知された。同年 10 月、被験者への面接と PAC 分析を行った。その結果(デンドログラムとクラスターの命名)を図に示す。18 個の言葉のうち、16 個がプラスのイメージであった。健康関連 QOL は、身体機能だけでなく、心の健康の得点も低かった（19-36、100 点満点）。POMS では、「抑うつ・落ち込み」（偏差値 72）と「疲労」（同 77）の得点が高かった。12 月に実施した ALSAQ40 では、5 つの下位尺度の得点が高く（86-100、100 点満点）、QOL や ADL が低いことを示した。なお、被験者は X+1 年 1 月に医療機関に入院し、3 月に呼吸器を装着した。

【考察】 被験者は、ALS の告知を受けた直後であることから、病気の受容はできておらず、軽い抑うつ状態にあるものと推定された。PAC 分析の結果、被験者の人生観や生きがいが浮き彫りになった。デンドログラムは、3 つのクラスターからなり、1 つ目は、「人生を回想する」と命名した。病気を告知された現在の状態から人生を振り返った心境である。2 つ目は、「生きていることへの感謝」と命名した。自然を楽しみ、子育てや趣味に没頭して充実した人生を送ってきた具体的な事柄を表している。3 つ目は、項目数が少ないが、ネガティブな感情が表れているので、「いやな思い出」と命名した。演者は、「病気も無駄ではない」「これまで病気をしなかった感謝」の言葉に優等生的模範解答を感じ、むしろ「なぜ病気になったのか分からない」が本音の表出であろうと推測した。ALS で寝たきりになり、自然や趣味を楽しむことが制限された被験者は、絶望感や無力感に悩まされているように思えた。それが、質問紙の QOL や心理状態の結果によく表れている。このような患者（障害者）に対しては、共感や思いやりはもちろん必要だが、現実から目をそらさないで、少しずつ病気を受容できる方向にサポートしていくことが有効と考えた。心理サポートは、患者本人だけでなく、周囲の介護者に対しても必要である。

【謝辞】 本研究を行うに当たり、東海大学医学部神経内科の吉井文均助教授に助言をいただきましたので、感謝申し上げます。

【引用文献】

内藤哲雄 1997　PAC 分析実施法入門　ナカニシヤ出版
木村友昭 2003 「心の相談日」における PAC 分析例 –統計ソフトウェア"JMP"を使用して–　日本応用心理学会第 70 回大会発表論文集 67.
Fukuhara S, et al. 1998　Translation, adaptation, and validation of the SF-36 health survey for use in Japan. J Clin Epidemiol 51: 1037-1044.
横山和仁、他 1990　POMS（感情プロフィール検査）日本語版の作成と信頼性および妥当性の検討　日本公衛誌 37: 913-918.
山口拓洋、他 2004　ALS 特異的尺度 ALSAQ-40 日本語版 –その妥当性と応用にむけて–　脳と神経（投稿審査中）

（きむら　ともあき・やまおか　きよし）

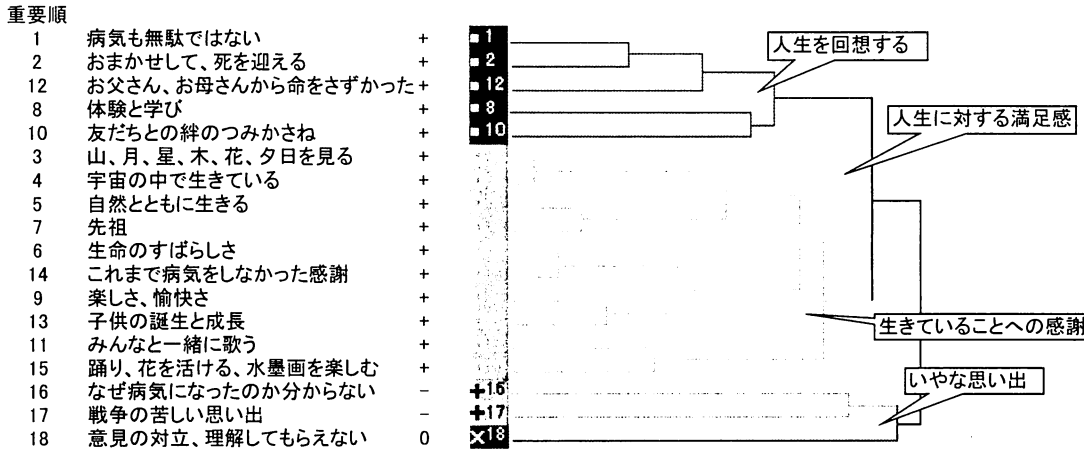


図. PAC分析によるデンドログラム（刺激語＝人生・生きがい）

入院中の脳梗塞患者における自尊感情と日常生活動作の障害との関連

篠原　純子
(九州大学医学部保健学科)

キーワード：Self-Esteem，脳梗塞，Barthel index

【研究の目的】自尊感情とは自分自身に対する肯定的・否定的感情であり，自尊感情の低いことは「自分はだめだ」と感じる傾向にあることを意味する[1]。脳卒中の障害は運動・行為・認知・コミュニケーションなど広範囲にわたる。そのため，障害によっては自己概念に影響が及び，脳卒中発症後に自尊感情が低下する可能性がある。しかし，入院中の患者を対象とした自尊感情の研究はほとんどない。そこで，本研究は入院中の脳梗塞患者の自尊感情と障害との関連を明らかにし，看護介入への示唆を得ることを目的とした。

【方法】1) 研究デザイン：面接法によるアンケート調査(質問紙法) 2) 研究対象　脳梗塞を発症しA病院A・B病棟で入院治療を受けた患者(再発を含む)のうち包含基準を満たし，かつ除外基準に該当しない者。

包含基準；臨床診断が脳梗塞であり，CTまたはMRIによって病巣が確認できる。

除外基準；①コミュニケーションに支障がある(失語症，痴呆と診断されている)。②脳梗塞発症前または調査時に精神科的疾患に罹患している。

3) 調査期間　平成14年7月1日から平成16年3月31日

4) 調査項目 (1)基本的属性(カルテから情報収集)；年齢，性別，入院日数，入院時National institute of Health Stroke Scale(以後NIHSSと略す)，発作回数，梗塞部位，転帰，など。

※NIHSSは脳卒中の障害の程度を測定する尺度であり、意識レベル・視野・四肢の麻痺・感覚・言語など13項目からなる。0～42点で評価し，点数が高いほど障害の程度が重い。

(2)自尊感情(質問紙)；Rosenbergの Self-Esteem(以後RSEと略す)。RSEは10項目からなりそう・ややそう・ややちがう・ちがうの4段階で評価する。得点は10～40の値をとり，得点が低いほど自尊感情が低いことを示す。

(3)日常生活動作の障害の程度(質問紙)；Barthel index (以後BIと略す)。BIは自立の機能を評価する尺度であり，食事・移乗・整容・トイレ・入浴・歩行・階段昇降・着替え・排便・排尿の10項目からなる。5点刻みの100点満点で評価し，点数が低いほど日常生活動作が自立できていないことを意味する[2]。

5) 倫理的配慮　①研究対象者のプライバシーを保護する，②研究対象者に必要な情報を与える，③強制をしない，④不必要な苦痛のないように配慮するなどに留意し，A病院の倫理委員会の承認を得て実施した。

6) 分析　統計解析には統計解析ソフトSPSSを使用し，t検定，Mann-WhitneyのU検定，χ^2検定，スピアマンの順位相関係数を用いた。すべて統計的有意水準は5%とした。

【結果】対象者は188名であった。そのうち，同意が得られなかった患者36名・依頼できずに退院した患者26名を除く126名(67.0%)にアンケート調査を実施した。入院後アンケート調査実施までの期間は平均13±7日であった。

1) 基本的属性　表1に示す。年齢・入院日数・入院時NIHSS平均値において男女間で差はみられなかった。

2) 自尊感情：RSE平均値は29.8±6であった。男性(30.5±6.0)より女性(28.2±5.5)のRSEが低かった($t=2.08, P<0.05$)。自宅退院した患者(30.6±6.0)より転院した患者(25.0±4.1)のRSEが低かった($Z=-3.92, P<0.001$)。転院した患者の割合は男性82名中9名(11%)，女性39名中10名26%であり，女性であることと転院していることに関連がみられた($\chi^2=4.29, P<0.05$)。

表1　基本的属性

	全体	男性	女性
性　別	126名	85名(67.5%)	41名(32.5%)
平均年齢	65±12歳	63±12歳	67±11歳
入院日数	22±13日	22±14日	22±11日
NIHSS	3.7±2.9	3.5±2.8	4.0±3.0
発作回数	初回 108名	2回以上 18名	
梗塞部位	右側 62名	左側 57名	両側 7名
転　帰	自宅 102名	転院 19名	転科 5名

3) 日常生活動作の障害の程度：BI平均値は89±16点であった。男性(93±12)より女性(82±21)のBI平均値が低かった($Z=2.08, P<0.001$)。自宅退院した患者(93±12)より転院した患者(66±19)のBI平均値が低かった($Z=-6.10, P<0.001$)。

3) 自尊感情と障害の程度の関連：RSEとBIの間にはやや強い正の相関がみられた($\rho=0.424, P<0.001$)。RSEと入院時のNIHSS($\rho=-0.310, P<0.001$)との間には弱い負の相関がみられた。

【考察】本研究により日常生活動作の障害の程度と自尊感情との関連が明らかとなった。千葉ら[4]の家庭復帰した脳血管障害患者を対象とした研究においても活動能力の低いことと自尊感情が低いことが関連しており，脳血管障害患者において日常生活動作の自立が損なわれることは自尊感情へ大きく影響するといえる。

先行研究において転院した患者の日常生活動作の自立度が低いことは明らかにされている[5]。本研究においても転院した患者の日常生活動作の自立度と自尊感情が低くなっていた。これらの患者における日常生活動作の再獲得と精神的援助は重要であり，看護師は日常生活動作に対する援助と同時に心理面への介入を重視していく必要があると考えられる。なお，日常生活動作の自立度と自尊感情の男女差については他研究の結果と異なるため，その関連性については検討課題である。

【引用文献】

1) Rosenberg M 1965 Society and the Adolescent Self-image Princeton University Press

2) 正門由久・永田雅章他 1989 脳血管障害のリハビリテーションにおける評価－Barthel indexを用いて－ 総合リハビリテーション 17(9)

3) 石川まりこ・佐藤カク子他 2000 日常生活動作の自立の障害別比較-自尊感情への影響の視点から- 日本リハビリテーション看護学集録 12回

4) 千葉さおり・阿部佳恵他 2001 社会復帰した脳血管障害患者の自尊感情と社会生活要因との関連 山形医学 19(1)

5) 近藤克則・安達元明 1999 脳卒中リハビリテーション患者の退院先決定に影響する因子の研究 日本公衆衛生雑誌 46(7)

(しのはらじゅんこ)

介護保健施設の利用者・利用者家族・職員の意識分析

外島 裕　佐藤恵美　山崎晴美
日本大学商学部　白百合女子大学大学院文学研究科　日本大学歯学部
キーワード：介護サービス，イメージ分析，

Ⅰ．はじめに

人口の 15 %以上が 65 歳以上を占める高齢社会が到来してから，20 年以上が過ぎた。この間，老人福祉施設やデイサービスに至るまで多様な利用形態が参入したため，利用者にとってサービス利用が幅広く，充実するようになった。社会福祉施設が公共事業としてではなく，民間企業の参入も目立ち，福祉的支援を行う体制が以前より強化された。

社会福祉施設の増加に伴い，施設における人的支援を中心とした資格制度の充実が図られ，社会福祉士や介護福祉士といったような国家資格制度も整備された。このような社会施設や国家資格の整備を契機に，福祉現場で行われる「措置」という概念から，「サービス」という考え方に変わってきた。

これには高齢社会の急速な到来によって日本に定着していない福祉の概念と社会制度を急速に行った現状と経営者の苦境がある。しかし，社会福祉施設の増設，民間の事業拡大，国家資格の充実と同時に，施設利用者あるいは施設内で働く職員を対象に調査を実施する機会は得られなかった。これからの新しい支援サービスの展開を行う前に，サービスの充実と老後のより良い生活の質を目指して，利用者，利用者を取り巻く家族，そして現場で働く人々の調査を実施した。

Ⅱ．目的

介護福祉施設を利用している利用者とその家族を対象に，介護やサービスに対する要望や感じたについて自由に記述させた。これをもとに，利用者・利用者家族・職員のそれぞれの立場で，施設や介護に対して，どのようなイメージを抱いているかを明らかにする。

Ⅲ．方法

【調査日時】2003 年 10 月 1 日～ 11 月 30 日

【調査対象者】地方の介護保健施設に勤める施設職員に対し，期間内に集められた 1106 名の自由記述を対象とした。

【自由記述の書き方】施設職員に対し，施設内の利用者や利用者家族から聞いたこと，体験したこと，提案などを自由に書いてもらった。

【分析使用機器】株式会社電通リサーチによって開発された，電通自然言語解析システム(特許出願中)(Dentsu-Flexible Analyzer of Context and Opinion :DE-FACTO)を使用した。

【分析方法】介護保険施設を利用している利用者，利用者の家族，介護保険福祉施設で働いている職員・スタッフの３つに分類した。対象者ごとに自然言語解析システムに従って自由記述を分類した。自由記述の回答をもとに，普段感じていることやサービスについてのイメージを分析し，この結果を単語マップに表した。単語マップは，自由記述の重みづけを採用した。さらに，自由記述内で頻繁に使用されている単語を取り上げ，単語マップを作成した（当日掲示）。

Ⅳ．結果

１．サービス利用者のイメージ分析の結果

老人保険介護支援施設の施設入所者，通所（デイケア等），在宅サービス利用者（入浴サービス等）を対象に，イメージ分析を行った結果，施設や食事，入浴等のサービス利用に対し，全体的に「良い」というイメージであった。さらに，イメージをクラスタに分けた結果，「食事クラスタ」「時間クラスタ」「職員クラスタ」「マッサージクラスタ」「トイレクラスタ」「入浴クラスタ」の６クラスタであった。特に，「食事クラスタ」は毎日のご飯がおいしいこと，特に文化祭やイベントなどの行事で何かを食べることが楽しく，嬉しいという印象を抱いていた。さらに，ご飯やみそ汁など基本的な食事に対して「おいしい」と「改善してほしい」という２つの意見があった。食事は家庭の味を基準として，味の濃さを判断しているために意見が分かれることが示唆された。また，ご飯の量が「多い」と「少ない」という２つに意見が分かれる結果となったが，食事の量の性差が明らかになった。

２．施設職員のイメージ分析の結果

施設に勤務しているスタッフや職員は，仕事や業務に対して一生懸命に人間的サービスを心がけているという印象が強く，職員は「介護には心が必要である」という人間的サービスとしての職業意識を根底に持っているというイメージであった。イメージクラスタは，「外出クラスタ」「業務クラスタ」「仕事クラスタ」「良いクラスタ」「利用者クラスタ」の５クラスタであった。特に顕著だったクラスタでは，職員会議の必要性を認め，利用者への対応の現状の不満と職員同士のコミュニケーション不足を感じているという意識もあった。さらに職員同士の問題として，人手不足のために利用者に十分なケアができない，利用者と接する時間が短い，業務負担が大きいなどを感じていた。

３．利用者家族のイメージ分析の結果

老人介護に関する施設やサービスを利用している利用者の家族は，介護サービスについて「安心で良い」というイメージであった。利用者家族のイメージクラスタは「スタッフクラスタ」「訪問クラスタ」「利用クラスタ」「介護クラスタ」「来るクラスタ」「笑顔クラスタ」の６クラスタであった。自分たちの代わりに面倒を見てくれる職員に対して，感謝を述べる意見が大変多かった。特に，入浴など負担のかかる介護に対して，スタッフが明るい，楽しい人だと家族は安心する傾向にあった。さらに，「助かる」「ありがたい」など妻の意見が多く，また家族も「妻が助かる」など，職員の援助で家族内の介助を行わなければならない人の負担が減っていることを示している。しかし，訪問介護において毎回違うスタッフが来るので，初めから説明しなければならず，これによってスタッフによってサービス内容が異なるという結果だった。

Ⅴ．考察

利用者・利用者家族・職員のイメージ分析を行い，単語マップを作成した結果，サービス利用者は施設サービスについてかなり満足をしていた。利用者を支える家族は，介護サービスは自分の負担を減らすものとしてサービスを利用する傾向が高く，サービスは自分たちを支えるものとしての認識が薄いことを示唆する結果となった。施設職員やスタッフは，業務の給与等待遇面に疑問を感じ，サービス業に従事する人間のつらさと喜びの比重のバランスが取れていないということが示唆された。

（としまゆたか，さとうえみ，やまざきはるよし）

映像法による障害者に対する態度変容効果について

○豊村　和真[1]
(北星学園大学　社会福祉学部)
キーワード：障害、意識、学生

【目的】

障害者に対する態度を受容的に変容させる方法として，啓蒙や直接的接触等を使用した研究（山内,1982;木舩,1986 など）がある。大体において健常者の態度がポジティブに変容したことが報告されており，健常者と障害者の直接的接触が重要であるとされる。しかしながら必ずしも障害者との直接的接触ができるわけではない。障害者との交流に関する意欲があったとしても時間的，空間的に様々な制限がありボランティア活動等ができない場合も多い。そして，障害児，障害者に対して現在特に関心のない人に対しては，むしろ間接的接触によって，より多くの人々に障害者に対する態度変容を試みることも（仮に直接的接触ほど有効でないとしても），また重要である。このような視点から本研究では，大学生・専門学校生を対象にして、障害者を取り扱った映像の視聴前と視聴直後の態度変容効果を確認すると共に、１週間後の態度変容の持続性を確認することを目的とした。また、交流経験の有無によって態度変容効果があるか、内容の異なる２種類の映像を提示することで、障害者に対する態度変容にどのような影響をもたらすかを確認することをも目的とした。

【方法】

被験者：社会福祉学部の学生（２～４年生）のうち映像の視聴前・視聴直後・視聴から１週間後の３回の調査・実験を全て出席した３５名と、介護福祉系専門学校（１～２年生）のうち視聴前・視聴直後の２回の調査・実験を全て出席した８４名。

調査用紙：

① 性別，学年，学部，障害児･者との交流経験等のフェイスシート

② 簡素で明快な尺度をめざし徳田(1990)を参考にして作成された，25 項目７段階評定からなる「障害児者に対する受容的態度尺度」

③ 視聴経験の有無（今回の刺激映像を見たことがあったか否か）

手続き：

実験に用いた映像として２種類用意した。いずれもすでにＴＶで放送された物で，態度変容が受容的・非受容的に影響しやすい場面等を取り出し約１５分に編集した物である。一つは、両手両足がなくてもありのままの自分として受け入れ，様々な人と交流する活気に満ちた人生を送るシングルマザーの「アリソン・ラッパー」，もう一つは、両手両足がないという障害のために、過酷な人生を送ってきた「中村久子」の映像である。この映像のいずれか１つを視聴させた後，調査用紙の①～③に記入させた。

【結果と考察】

態度受容尺度をバリマックス回転による因子分析をした結果，４因子を抽出した（積極的行動態度）「肯定的態度」「好意的態度」「能力肯定態度」)。表１は，「アリソン・ラッパー」の大学生のみの結果であるが，視聴直後には、「肯定的態度」「好意的態度」が受容的になり、全体的に各因子でも受容的な態度になる傾向がみられた。「好意的態度」のみ持続性がみられなかった（表１参照)。専門学校生についてもほぼ同様の結果が得られている。これから，多少の援助は必要とするものの，自分のできる限りの力で子育てをし，明るく積極的に行動するアリソンの生き方やパーソナリティを肯定的にとらえ，障害者自体を社会的にまたは自分の領域に受け入れたいと考えたといえるであろう。しかし，同様にして得られた「中村久子」の視聴では態度変容の差はみられなく，全体的に各因子で受容的態度が低くなっている傾向にある。また，男女別に比較したところ，男性よりも女性の方が受容的で，男性は視聴直後には非好意的態度となった。「中村久子」は母親に身売りされ，自尊心が崩壊しながらも懸命に生きていく壮絶な人生に，障害者と共に生きることに対する戸惑いやネガティブな態度が形成されたと考えられる。このように，ビデオ視聴においてもその内容により，障害受容の程度や質が変化することが示された。

表1　大学生の視聴前後における態度変容効果

	視聴前	視聴後	1週間後
積極的行動態度	4.28 (0.85)	4.45 (0.86)	4.40 (0.85)
肯定的態度	4.42 (0.38)	4.64 (0.42)	4.50 (0.44)
好意的態度	5.03 (0.95)	5.08 (0.78)	4.88 (0.84)
能力肯定態度	3.90 (0.57)	3.91 (0.68)	3.99 (0.72)

また，交流経験の有る人の方が無い人よりも態度は受容的で，交流経験の有る人の方が態度の持続性がみられた。交流経験の無い人は，その場限りで形成された態度であったために，持続性がみられないと考えられる。

次に「各因子（積極的行動態度・肯定的態度・好意的態度・能力肯定態度)」×「アリソン・ラッパーの映像の視聴前・視聴後・１週間後」の計１２変数について，クラスター分析をおこなった。その結果大学生，専門学校生ともに，２クラスターが抽出され，それらのクラスター間で一番大きな差があるのは，好意的態度であった。なお，視聴経験の有無により大学生と専門学校生のクラスターのパターンが異なっていた。

【引用文献】

木舩憲幸 1986　精神薄弱児に対する普通児の態度と交流経験との関係．特殊教育学研究，24(1)，11－19.

徳田克巳 1990　障害児・者に対する態度を測定するための多次元的尺度の開発(1)－全体構成と妥当性の検討－．桐花教育研究所研究紀要,3,21－29.

山内隆久 1982　協同事態における対人的態度の研究－晴眼者と盲人の協同事態による検討－．心理学研究，53(4)，240－244.

（とよむら　かずま）

介護保険施設の利用形態別の意識分析

佐藤恵美　外島 裕　山崎晴美
白百合女子大学大学院文学研究科　日本大学商学部　日本大学歯学部
キーワード：介護サービス，利用者，イメージ分析

Ⅰ．はじめに

近年，さまざまな老人健康福祉施設，またはデイケア，デイサービスに至るまでさまざまな利用形態が参入したことで，利用者の利用の幅が広くなってきた。しかし，施設内で働く職員や利用者を対象に，介護サービスに関する調査を行う機会はなかなか得られず，施設ごとに異なったサービス内容や，利用者の満足度などを把握することが難しかった。

「介護保険施設の利用者・利用者家族・職員の意識分析(外島ら，応心71回大会論文集)」において，介護福祉施設を利用する利用者とその家族，施設の職員を対象に，介護サービスのイメージと意識傾向について分析をした。しかし，利用形態の違いによってサービス内容が異なるため，一概にイメージを捉えることが難しかった。本研究では，サービス利用者に焦点を当て，施設入所，通所，在宅介護に分けて要望等を分類し，介護サービスに対する意識の性差を検討した。

Ⅱ．目的

介護サービス利用者が持つ介護やサービスに対する意識を調査した。利用者を男女に分け，施設入所，通所，在宅介護の３分類に分け，各サービス内容を受けたときのイメージを分類し，性差を明らかにした。

Ⅲ．方法

【調査日時】【調査対象者】【自由記述の書き方】【分析使用機器】は，「介護保険施設の利用者・利用者家族・職員の意識分析(外島ら，応心71回大会論文集)」と同様とした。

【分析方法】介護保険施設の利用者を３つに分類した。

1) 施設入所者(男性56人，女性162人)。
2) 通所，デイサービス等利用者(男性178人，女性480人)。
3) 在宅サービス利用者(男性127人，女性227人)。

さらに，男女に分け，サービス利用者が普段感じていること，サービスについての要求や介護へのイメージを自然言語解析システムに従って分類し，単語マップに表した（当日配布)。

Ⅳ．結果

１．施設入所者のイメージ分析結果

老人保険介護支援施設や病院等に入所している利用者を対象に，イメージ分析を行った結果，施設設備等に関して性差が見られなかったが，施設内での生活や介護サービス，職員やスタッフに対する考え方に男女差があった。

施設入所（男性）：「トイレクラスタ」「テレホンカードクラスタ」「車椅子クラスタ」「施設クラスタ」「職員クラスタ」の５クラスタに分けられた。男性は職員・施設・介護用具・トイレにいたるまで「使えない」という意見が中心であり，施設に入所することに否定的な感情を抱いていた。

施設入所（女性）：「職員クラスタ」「行けないクラスタ」「部屋クラスタ」「良いクラスタ」の４クラスタに分けられた。施設入所の女性は，食事・職員・施設など全体的に「良い」という意見であり，日常生活には満足しているのが見受けられる。看護婦・職員に対しても気遣う様子が感じられる。施設や部屋もきれいで満足感があるという結果であった。

２．通所サービス利用者のイメージ分析結果

通所サービス利用者を対象にイメージ分析を行った結果，日々の入浴とマッサージ，文化祭などの行事が楽しいイメージが大きく，イベントなどの楽しさから通所に通う人が多いことが示唆された。その一方で，送迎時間がまちまちであること，トイレが汚いこと，入浴・マッサージの順番待ちが長いことが不満としてあげられた。

通所利用者（男性）：「スタッフクラスタ」「少ないクラスタ」「送迎クラスタ」「時間クラスタ」「良いクラスタ」「入浴クラスタ」の６クラスタに分けられた。時間が余る，送迎時間など，時間についての不満が大きいという印象であった。また，施設内の男性スタッフ，利用者などの少なさに心細げであり，通所してもどう振る舞って良いのか，何をしたらいいのかという男性利用者の戸惑いが見える結果となった。

通所利用者（女性）：「職員クラスタ」「待機クラスタ」「帰宅クラスタ」「入浴クラスタ」「食事クラスタ」「楽しいクラスタ」の６クラスタに分けられた。通所サービス利用の女性は，サービスや施設などすべてに対して「良い」というイメージを抱き，スタッフや食事など通所生活が楽しいという充実した生活を送っている印象が強かった。

３．在宅利用者のイメージ分析結果

在宅サービス（入浴，配膳サービス等）利用者のイメージ分析の結果，男女共通の意見として，入浴やリハビリには肯定的で，「助かる」イメージが大きかったのに対し，買い物やマッサージなどに不満が多かった。このため，在宅サービス利用者はサービスに対する満足度が低かった。それでも，女性は在宅サービスに満足している傾向が高く，男性は「仕方ないから受けている」といったような気持ちの違いがあり，サービスを受けることへの男女の意識の違いが表れた。

在宅利用者（男性）：「サービスクラスタ」「リハビリクラスタ」「利用者クラスタ」「スタッフクラスタ」の４クラスタに分けられた。ヘルパーなど訪問者が来ることはいいが，在宅で受けられるサービスに対して，満足度が低く，あまり良い印象を抱いていないようだった。

在宅利用者（女性）：「入浴クラスタ」「看護クラスタ」「おむつクラスタ」「請求クラスタ」「良いクラスタ」「利用者クラスタ」の６クラスタに分けられた。在宅サービス利用の女性は，スタッフなど他人の「訪問」についてのイメージが強く，誰かと「話をする」ということに重点を置いているという結果であった。

Ⅴ．考察

介護サービス利用者を男女別に分けた結果，介護に対するイメージに性差があった。男性はサービスを受けることに対して否定的であるが，女性は肯定的なイメージを持っていた。これは，女性は家事をサポートしてくれるサービスを受ける方が楽であるのに対し，男性は自分をよくわかっている家にいたほうが施設よりも居心地良く，集団の中でどのように振る舞ってよいかわからない不安が，施設やサービスに不満があるという形で表れることが示唆された。

（さとうえみ，としまゆたか，やまざきはるよし）

単列配置の警告ブロックにおける方向情報の提供

― 全盲被験者による点の大きさ判断 ―

布川　清彦
東京大学先端科学技術研究センター　バリアフリープロジェクト

キーワード：警告ブロック，視覚障害者，方向情報

【研究の目的】警告ブロックは，視覚障害者に対して危険箇所の警告といった情報をブロックの突起によって提供することが目的であり，現在では，都市部のほとんどの駅のプラットホームの縁端部に警告ブロックが敷設されている。しかし，島式ホーム上に誘導ブロックと警告ブロックを並置して配列する場合には，柱や売店といった設置物が存在することによりブロックが敷設できないことや視覚障害者がブロックを利用することが困難になることが考えられる。先行研究では，これまでの設置方法をできるだけ変えることなく，複数列配置以外の方向情報・位置情報の提供を行うための新しい方法として，単一警告ブロック内の点の高さ・直径・数を組織的に変化させる事を提案し，その可能性について考察した（布川，1999;2000;2001）。しかしながら，そこでの被験者はアイマスクをした晴眼ユーザであった。本研究では，実際に主たるユーザである視覚障害者（全盲）を被験者として，単一警告ブロック内の左右の領域で直径の異なる点を配置し，その上を歩行した際に直径の違いを検出できるかどうかを明らかにし，複数列配置以外の方向情報・位置情報提供の可能性を検討する。

【方法】

・装置

全て木製であった。1枚の板の大きさは，縦1800㎜横300㎜，厚みは12㎜であった。板の上には円柱が配置された。その円柱の大きさは，高さが5㎜で一定，その直径は15，20，25，30，35，40㎜の6種類であった。円柱は板の縦方向の半分である縦1500㎜横150㎜の領域に配置された。一枚の板に配置された円柱の数は90個であった。すべての円柱の配置が平行配列で，その中心間距離は50㎜であった。その両脇に円柱を配置した領域を内側にして，2枚の板を，隙間を空けずに平行に並べた。これにより，円柱の配置領域は縦3000㎜横300㎜になった。その両脇に円柱を配置しない同じ大きさ（縦1800㎜横300㎜）の板を並べた。4枚の組み合わせを2組用意して，円柱が連続するようにして並べた。全体として縦3600㎜横1200㎜になり，これを歩行路とした　（図1）。歩行路の両脇には紐を張り，ガイドとした。

・刺激条件

その円柱の大きさは，高さが5㎜で一定，その直径は15，20，25，30，35，40㎜の6種類であった。全ての組み合わせ15条件と全て35㎜が配置された1条件を合わせた16条件とその左右の関係を入れ替えた，計32条件が用意された。この32条件を1系列とした。

・被験者

被験者は3名の成人の視覚障害者（全盲）である（表1）。歩行時は，全員靴下を着用し，履き慣れた靴を履いた。

表1．被験者の属性

	性別	年齢	種別	失明時期	履き物
A	男	40代前半	全盲	幼児期	革靴
B	男	30代前半	全盲	幼児期	革靴
C	女	30代前半	全盲	幼児期	厚底サンダル

・手続き

被験者は，歩行路の先頭にある円柱の無い位置に立ち，実験者の合図に従って歩行路の最後にある円柱の無い位置まで，ガイドに沿って歩いた。停止後に，左右に配置された円柱の大きさに違いが有ったかどうか，有った場合は左右のどちらが大きかったかを報告した。報告までを1試行として，1系列で32試行が行われた。1系列内で条件はランダムに提示された。被験者によって，2系列から4系列が行われた。

【結果と考察】大きさの違いが検出され，かつ左右の位置判断が正しかった場合を正答として（全て35㎜の条件では，違いが検出されない場合）検出率を算出した。その結果，被験者A，BとCの間で異なる傾向が見られた。被験者A，Bでは，15-35，15-40，25-35，25-40の4条件が平均検出率100%であった（図2）。被験者A，Bに対しては，この4条件のいずれかを用いる事により，方向情報・位置情報の提供が可能であると考えられる。しかしながら，被験者Cは，ほとんどの条件でその検出率が50%であった。その理由としては，履き物の影響が考えられる。警告ブロックは，その目的から，全てのユーザに対して的確に情報を提供しなければならない。従って，本研究での試みを実用化するためには，さらに検討を加える必要がある。

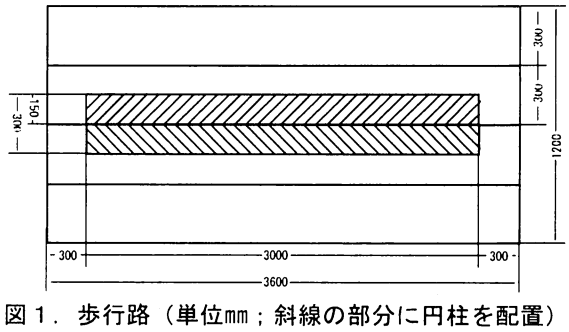


図1．歩行路（単位㎜；斜線の部分に円柱を配置）

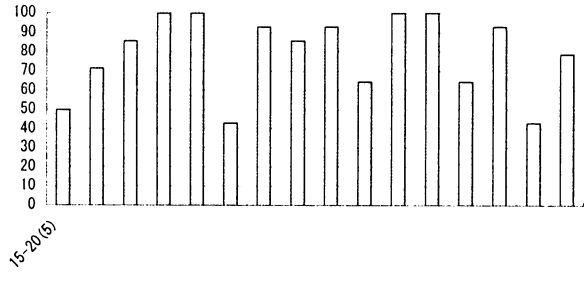


図2．被験者AとBの平均検出率（%）

【引用文献】

布川清彦　1999 警告ブロックの単列配置における方向情報の提供 日本応用心理学会第66回発表論文集
布川清彦　2000 単列配置の警告ブロックにおける方向情報の提供-その2点の直径と数- 日本応用心理学会第67回発表論文集
布川清彦　2001 単列配置の警告ブロックにおける2次情報の提供-その3　点の高さによる階段・エスカレーターの上昇下降情報- 日本応用心理学会第68回発表論文集

（ぬのかわ　きよひこ）

福祉系大学におけるメンタルフレンドの課題に関する研究

鑑　さやか
（福島学院大学 福祉学部）
キーワード：メンタルフレンド、発達障害、不登校、ひきこもり、子育て支援

【はじめに】

メンタルフレンド事業とは、平成3年4月に当時の厚生省が事業化した「ひきこもり・不登校児童福祉対策モデル事業」の一環として全国の児童相談所が中心となり実施している「ふれあい心の友訪問援助事業」であり、ひきこもりや不登校児童に対し児童福祉司等の助言・指導をうけた大学生等が当該児童とのふれあうことにより、児童の福祉の向上を図るものである。その後、メンタルフレンド活動は全国の大学相談室やサークル等を通じても実施されており拡がりをみせている。

福島学院大学では、平成13年4月より大学附属メンタルヘルスセンターが開設された。その目的は学生相談のみならず、県内外の心の問題を抱える小児・思春期の子どもとその家族を対象とした心理相談や発達相談であり、年間延べ4,000名を超える相談者が来所しており、メンタルフレンドを派遣する対象は本センターへ通所している相談者となる。

子どもとその家族からの希望を募り、学生をメンタルフレンドとして家庭や地域社会に派遣することにより、心の問題を抱える青少年や発達障害児とレクリエーション、スポーツ、必要ならば学習などの機会を設けてコミュニケーションを図り、子どもの情緒的安定と社会性・自我の発達を図ることを目標とし、試行的に平成15年秋より数名の学生を派遣しており、平成17年度に向けてメンタルフレンドバンクを設置するための準備を進めている。

【目的】

現在、メンタルフレンド活動は児童相談所を含め、大学その他の機関において全国規模での拡がりをみせていることは前述したとおりである。メンタルフレンドを派遣するにあたり、子どもや家族と学生のマッチングの方法、学生に対する事前指導や実際に派遣されてからのフォローをどのように行っていくのか等、今後構築していかなければならないことは多い。そこで、本研究においては学生のメンタルフレンドへの関心度や意欲、さらに不安に感じていることはどのようなことなのかについて明確にすることにより、子どもやその家族への福祉の向上のみならず、派遣される学生も有益な活動を行うためのメンタルフレンドバンクを確立する手助けとしたい。

【方法】

平成15年6月に、福島学院大学福祉学部福祉心理学科1年生118名に対し、メンタルフレンド活動に関するアンケートを実施し、101名より回答を得た（回収率85.6%）。

主なアンケート項目は、①メンタルフレンドへの興味、②対象について、③活動する場合の日時や時間、④報酬について、⑤活動するにあたっての不安である。

なお、本大学は平成15年度4月に開学し、調査対象者は第1期生となる。また、「精神保健学」「精神医学」において小児期・思春期の心の病や発達障害についての講義が事前に行われた。それに付随し、メンタルフレンドについても紹介が行われている。

【結果】

メンタルフレンドに「興味がある」と回答した学生は73.3%おり、「少し興味がある」と合わせると98.1%の学生が興味を持っていることがわかった。さらに、それらの学生に対し機会があればやってみたいかを質問したところ、「ぜひやってみたい」と回答した学生は82.2%であり、学生のメンタルフレンドへの関心および意欲が高いことが示される結果となった。

また、どのような子どもを対象にしてみたいかを尋ねたところ「不登校児」（72.3%）が最も多く、次いで「ひきこもりの子」（65.3%）、「自閉症児」（55.4%）、「AD/HD児」および「LD児」がそれぞれ32.7%となった。

さらに、メンタルフレンドを引き受けるに際してどのような不安や心配をもっているのかについて設けた質問（自由記述による）では、①ふとした言動で子どもを傷つけてしまうのではないか（24名）、②勉強不足や未熟なため適切な対応ができるかどうかわからない（18名）、③子どもと上手に関われるか（好かれるか）（15名）、④期待に応えられるか、精神科医と同じ期待をされないか（5名）、⑤子ども（家庭）に受け入れてもらえるか（信頼関係を築くことができるか）（4名）という回答が得られた。その他、メンタルフレンドとして自分に適正があるのか不安、（自分が）人見知りをするタイプなので心配、子どもが暴力を振るうのでは、帰りの時間や大学の勉強との両立等であった。

【考察】

実際に派遣されている活動形態をみると、場所については利用者の自宅が多く、活動回数については週1～2回となっている。また、多くのメンタルフレンドが活動内容や子どもたちとのかかわりを肯定的にとらえている。反面、専門的な訓練を受けていないことから、多種多様な問題を抱えている子どもを受けもち、対応している中でさまざまな悩みや葛藤を抱えていることも事実である。

今後、メンタルフレンドバンクを組織し活動を実施していくにあたり、それぞれの段階に応じた研修やスーパーヴィジョン体制を充実させ、メンタルフレンドとしての資質向上の機会を提供し自己研鑽を促すことが重要となる。

【参考文献】

1）市根井 都・中野明徳（1999）「児童相談所におけるメンタルフレンド活動の現状と課題」『福島大学教育実践研究紀要』第36号
2）中野明徳・青木真理・中田洋二郎・ほか（2003）「平成14（2002）年度福島大学教育学部附属臨床心理・教育相談室活動報告」『福島大学教育実践研究紀要』第44号
3）長谷川博一（2000）『こんにちは、メンタルフレンド ― 引きこもりの子どもの心を開き、家族を開く支援システム』日本評論者

（かがみ さやか）

カウンセリングにおける名人芸的なるもの（2）

蓮見　将敏
杉野服飾大学

カウンセリングの態度　カウンセリングの技術　カウンセリングの境地

〔問題と目的〕

筆者は、カウンセリングにおける名人とは、どのような態度でどのような技術を駆使する人なのかを、今後検討して行くために、カウンセリングにおける名人芸的なるもの（1）を提言した（日本カウンセリング学会、2004）。引き続いて今回、カウンセリングにおける名人芸的なるもの（2）を提言したい。

〔方法〕

筆者は大学院の5年間と並行して、大学4年から6年間、（財）日本カウンセリング・センターにてカウンセリングの訓練を受ける。その後種々の臨床現場にて、ほぼ30年間カウンセリングを行ってきた。名人芸的なるものが脳裏をよぎり出したのが、2～3年前からである。それ以降のカウンセリング事例（約200 例）から、名人芸的なるものと感得した事例（数例）を精選して、内容分析した。それは、カウンセリングにおける名人芸的なるもの（1）の場合と同様である。

〔結果〕

カウンセラーの主に態度に焦点を当て、3種類に分類した。

①外面的な問題点

＊態度　間合い、雰囲気、表情、眼、ジェスチャー（身振り、しぐさ）、姿勢、距離

＊言葉　タイミング、内容、語彙、抑揚、強弱　＊沈黙

②内面的な問題点

＊共感性　＊純粋性　＊受容性　＊直感力（勘）　＊想像力

＊価値観　常識、人間関係観、人間観、人生観、治療観

＊診断（心理判定）　＊関心度（逆転移も含む）

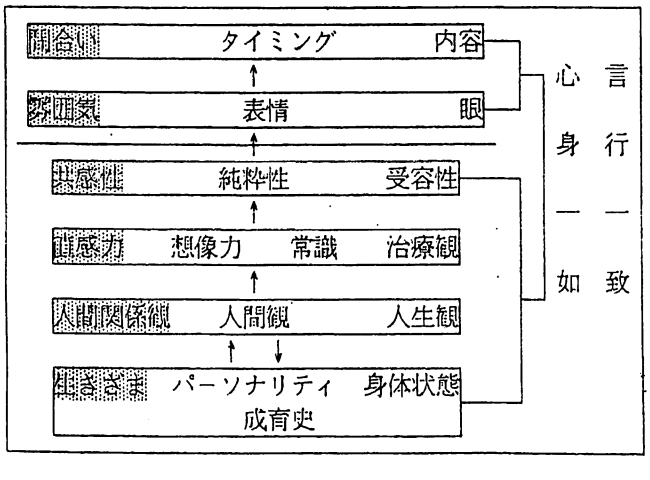
③両面的な問題点

＊言行一致　＊心身一如

＊生きざま　家庭の人間関係の有様、学校の人間関係の有様、職場の人間関係の有様、地域の人間関係の有様、その他の人間関係の有様　その他の生きざま

＊パーソナリティ　＊身体の状態　＊成育史

そして、名人芸的なるものを考察するために、さらにそれらを精選したものが表である。表中の横線の下はカウンセラーの心境などで、上は心境が外側に現れたものである。特に網かけの点が重要と考える。そして、網かけの点の内容を、名人芸的なるものとして提言説明したのが、カウンセリングにおける名人芸的なるもの（1）の研究であった。



今回は、③両面的な問題点、それらはこれまで余り検討されてきていない問題点であるが、それらの中の生きざまについて考察したい。

〔考察〕

生きざまは人間関係観を生み、また人間関係観が生きざまを生むが、それらがカウンセリング中に染み出てしまう。従って、カウンセラーは自分の生きざまや人間関係観を内省自覚する必要がある。クライエントに役立つためにである。

生きざまがクライエントのそれに似ていれば似ているほど、類推想像しやすいので、現実的な真に迫った共感が起こりやすい。この場合、カウンセラーは生きざまで、悩み抜いていることが重要で、もしそうでなければ、クライエントと同じく悩んでいることになるから、到底カウンセリングにならない。またクライエントに提案するとして、断定的強要的な言い方になる危険性があるので、注意する必要がある。

生きざまがクライエントのそれと違っていれば違っているほど、類推想像し辛いので、共感が薄くなる。たとえ共感が起こっても、ドラマを見ているごとく、それはどこか傍観者的な共感に過ぎず、クライエントにしてみれば、どこか真実から遠く、何か表面的な嘘っぽい共感に感じてしまう。

この場合、カウンセラーはどうあればよいのか、あるいはどうすればよいのかも提言したい。

1つには、追体験的な行為をしてみることがよいと考える。カウンセリングは聴くことであるが、それのみでは、現実的な真に迫った共感が起こりにくい。可能ならば、見ることである。クライエントの日常生活の何か、たとえばクライエントの見る雑誌、遊ぶ場所、住む地域などを見ることである。また可能ならば、やってみることである。クライエントの歩いた道を歩く、ドライブした道をドライブする、食べた物を食べてみるなど、必ずしも同一にやってみる必要はないが、やってみる。また読んでみることである。クライエントの読んだ書物などを。このように追体験的な行為をしてみると、共感の薄さを補えると考える。

もう1つは、カウンセラー自身のクライエントに向かう気持ちの在り方にある。生きざまが違い、共感が薄いのであるから、あくまでも詫びる気持ちを基底に持って、真摯に謙虚に誠実に向かうことである。そして、クライエントが生きてるそのことを、意味あるクライエントの存在を、あるいは、生きてるクライエントの価値を心から尊重することである。さらに、クライエントの全心身の深淵から湧き出す、将来への生きる渇望、将来への希望、将来への夢を引き出すことである。

中でも重要なのは、カウンセラーが詫びる気持ちを基底に持つことであると考える。なぜならば、生きざまが似ているのならばまだしも、違っているのだから、真なる共感は起こりえない。たとえ生きざまが違っても、生きざまの本質性を感得できれば、共感が起こり得るが、しかしそれとても、真なる共感からは遠い。真なる共感はあくまでもほぼ同一の体験をした者のみに起こるものである。たとえば戦友のごとく。

それゆえ、カウンセラーは詫びる気持ちを基底に持たなければ、クライエントは真から自己開示しないと考える。

Self-Differential 尺度の検討

秋元　幸見
（日本大学大学院文学研究科心理学専攻）
キーワード：Self-Differential、現実自己、大学生

【研究の目的】

Semantic Differential Technique による自己像の定量的研究には，長島，藤原，原野，斎藤，堀（1966，1967）によって作成された Self-Differential 尺度が使用されることが多い．この尺度は連想実験の結果から項目を選び，反応分布を吟味したうえで因子分析を行うという手続きを経て提出されたものである．しかしこの尺度が作成されてから 38 年も経過しており，この間人々の言葉の使用の仕方や自己意識のあり方等にも多少の変化が生じてきているものと思われる．そこで本研究では，今後の研究を推し進めるためにも，一応の検討を加え，信頼性のある尺度項目を選定し吟味する．

【方法】

調査対象　大学生 1112 名（平均年齢 19.8 歳　SD=2.15）を調査対象とした．そのうち，男性が 580 名，女 523 名，不明 9 名である．

手続き　大学の授業の一部を利用して、質問紙を集団で実施した．

質問紙用紙　i）Self－Differential Form A｛大学生用｝．評定の際，「自分のあるがままの姿」（以下，現実自己と呼ぶ）を思い浮かべてもらい，Self－Differential Form A｛大学生用｝47 項目を 7 段階評定尺度で回答を求めた

【結果】

分析には，現実自己の概念に対する反応に対して因子分析を行い，因子を抽出した．また，バリマックス回転によって因子行列を求めた．解釈は回転後の資料について行なった．結果，5 因子が抽出された．

この因子分析の結果を，長島他（1957）によって提出されている因子分析の結果と照合すると，過敏性の因子に相当するものは見出されなかった．また，因子構造もやや異なっている（表 1）．

表 1. Self-Differential尺度の因子番号－過去と現在

因子番号	Self-Differential尺度の因子名	本研究の因子名
1	向性	向性
2	情緒安定性	強靭性
3	強靭性	誠実性
4	誠実性	情緒安定性
5	過敏性	理知性
6	理知性	—

しかし，抽出された 5 つの因子項目は，長島他が解釈し命名した「向性因子」，「情緒安定性の因子」，「強靭性の因子」，「誠実性の因子」，「理知性の因子」の項目にほぼ対応するものであった．従って，以下，この名称をそのまま使用する（表 2）．

因子尺度に関して，Self－Differential Form A ｛大学生用｝では尺度として入っていたものが，本研究で入らなかったものがある．それは Self－Differential Form A ｛大学生用｝で、情緒安定性の因子尺度とされていた「気持ちよい－気持悪い」，強靭性の因子尺度とされていた「無気力な—意欲的な」と「個性のない—個性的な」，誠実性の因子尺度とされていた「敏感な—鈍感な」，理知性因子の因子尺度とされていた「慎重な－軽率な」である．

表2. Self-Differential尺度の因子分析の結果

因子番号	因子名	α	固有値	寄与率	累積寄与率
1	向性	0.87	5.91	12.57	12.57
2	強靭性	0.86	4.62	9.82	22.39
3	誠実性	0.80	4.50	9.57	31.96
4	情緒安定性	0.79	3.98	8.47	40.43
5	理知性	0.63	2.44	5.19	45.62

【考察】

本研究では，過敏性因子が見出されなかった．これは，過去においても寄与率が 3.6%と低い．また，芳野（1984)の研究においても過敏性因子が見出されず，一般性が少ないとされていた．これは，「病的な－元気な」，「不安定な－安定な」，「敏感な－鈍感な」，「懐疑的な－信じやすい」など，内容的に意味の明確な因子でなかったために見出されなかったのではないだろうか．また，Self－Differential Form A ｛大学生用｝が作られた時代から 17 年経過した時点で，過敏性が自己を捉える上で重要視されなくなったのではないかということも考えられる．

また因子構造がやや異なったことに関して，強靭で意欲的な側面を代表する強靭性因子の方が，精神的に健康なイメージ，ポジティブな情動の存在を代表する情緒安定性因子より，現代においては自己を据える上で重要視されていることが示唆される．具体的に因子項目に置き換えて考えてみると，強靭性の因子尺度とされている「臆病な－勇敢な」，「弱々しい－たくましい」，「小心な－大胆な」の方が，情緒安定性の因子尺度とされている「丸い—角のある」，「暖かい－冷たい」，「思いやりのある－自分勝手な」より重要視されているということになる．

しかし，抽出された 5 つの因子項目の信頼性係数を見ていくと，「向性因子」が 0.87，「情緒安定性の因子」が 0.86，「強靭性の因子」が 0.80，「誠実性の因子」が 0.79，「理知性の因子」が 0.63 と高い値になっている．また，因子項目ごとに，過去と現在において因子負荷量を比べて見ても，大きな差はなかった．

このようなことから，相互に独立的な，しかも信頼性のある結果となった．従って，自己像に関連する研究の有力な測定として，今後使用することが可能であると判断することができる．

【引用文献】

長島貞夫，藤原喜悦，原野広太郎，斎藤耕二，堀洋道　1966　自我と適応の関係についての研究(2)－Self-Differential 作製の試み，東京教育大学教育学部紀要，13，59-81.

芳野晴男　1984　Self-Differential 尺度の検討　文化紀要 20　1-6.

（あきもと　ゆきみ）

自伝的記憶の想起が気分に及ぼす影響について

——回想的手法「思い出絵日記」をもちいて——

○梶原隆之　　山村　豊
（群馬社会福祉大学）

key words：気分転換　回想　自伝的記憶

はじめに

快適な方向への気分の誘導は，ストレスの緩和やリラクセーションを促進し，気分転換を図る効果があると考えられる。その気分誘導の方法として，音楽や香り，言語刺激，タッチングなど外的刺激が用いられてきた。一方，これまでの気分一致効果に関する実験的研究（例えば，山村・山下，1997；山村・張・高橋・山下，1999）や高齢者福祉における回想法の実践的研究から，記憶の想起・回想によって気分誘導が可能であると考えられる。特に，自分史を投影している自伝的記憶は喜びや悲しみなどの深い個人的感情によって彩られていることから，その回想によって外的刺激の呈示以上の気分誘導が期待される。

本研究では，後述する「思い出絵日記」を用いて，楽しい自伝的記憶を視覚的および聴覚的に回想することにより，快適な——特に緊張緩和の方向への気分誘導が可能かどうか検討する。

方　法

被験者：群馬県内専門学校１年生および大学 1 年生 95 名。

要因計画：楽しかった自伝的記憶を回想する実験群・単純な作業を行う統制群（２）×施行前後（２）の２要因計画である。

回答用紙：実験群には，B5 版用紙の上半分に絵日記のうちの“絵”を下半分に“日記”をかくように求める用紙を用意した（思い出絵日記）。統制群には，単純な精神作業を求める用紙を用意した。今回，実験群において絵日記を用いたのは，エピソードとして知覚的特質をもつ自伝的記憶を詳細に回想させるためである。

教示：実験群「これから実験を始めます。配布された用紙に，一番楽しかった日の思い出絵日記を作成してください。そして，題名と，何歳の時かのことかを記入してください。書きたくない人は、無理に書かなくてもかまいません。絵だけ、文字だけでも結構です。」

統制群「配布された用紙の上の四角の欄に，斜線を引いてください（黒板にて図示）。下のマスには，１マスずつ○を書いてください。」

手続き：実験群は，思い出絵日記の記入用紙に，一番楽しかった日の絵日記を作成してもらい，何歳の時のことなのかと，題名を記入してもらった。その前後に気分尺度(林，1971）のうち緊張度の因子を構成する 10 項目(梶原，1990)を実施し、内省を記録させた。

統制群は、思い出絵日記の記入用紙に、絵の代わりに斜線を、文字の代わりに○を書いてもらい、その前後に実験群と同じ質問項目に回答、最後に内省を記録させた。

結果

施行前後の気分変化を測定する SD 尺度について，左から右へ｜～｜の７件を１～７点として分析した。ただし，項目 1・6・10 は逆転項目のため，７～１点とした。

緊張度を測定するため，施行前後それぞれの全質問項目を足し上げて，合成得点を求めた（図１）。群間(２)×施行前後(２)の分散分析を行ったところ，群間，施行前後に有意な交互作用がみられた（$F(1,93)=26.4, p<001$）。LSD 法による単純主効果の検定を行ったところ，施行後における、群間の単純主効果が有意であった（$F(1,93)=8.53, p<.01$）。また，実験群における施行前後の単純主効果が有意であった（$F(1,93)=25.58, p<0.01$）。さらに統制群における、施行前後の単純主効果が有意であった（$F(1,93)=4.89, p<0.05$）。

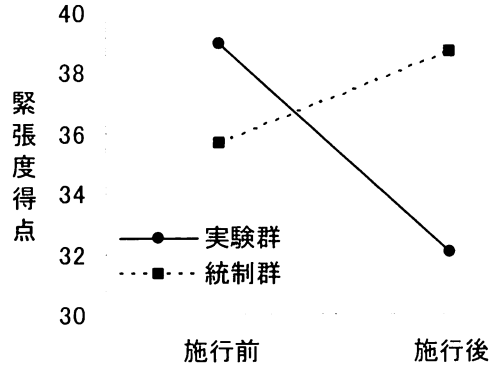


図1　施行前後の緊張度の変化

考察および今後の課題

以上の結果から，思い出絵日記による楽しい自伝的記憶の回想が，緊張度の低下，すなわちリラクセーションをもたらすことが示された。ただ，一般的な気分理論（例えば，Matthews,*et al.*,1990）によれば，今回のような教示では緊張度の高い活動的快とリラクセーションのような非活動的快の両者が喚起されそうである。しかし，今回の実験では非活動的快のみが誘導された。自伝的記憶の回想によってもたらされる快気分は，その記憶内容の感情価に関係なく，非活動的快やリラクセーションをもたらすのかもしれない。今後は，想起された内容と誘導された気分と対応関係を詳細に検討することにより自伝的記憶の回想による気分誘導の独自性を明らかにするとともに，実践場面での有効性について検討したい。

自己分化インベントリーにおける高校生を対象とした検討

徳光紗妃
（日本大学大学院文学研究科）

Key word 自己分化　家族システム

【目的】近年，子どもの問題を，親子関係だけでなく「家族システム」の枠組みの中で理解していこうという研究が増えてきている．多世代家族療法理論では，Bowen (1976) が，一つの概念として，自立の程度について自己分化という概念を提起している．平木ら (1998)，安藤ら (2000)，野末ら (2001) は，多世代家族療法理論に立脚して，日本版自己分化インベントリー開発の試みを行っている．本研究では，18 歳以上の未婚青年を対象とした自己分化インベントリー青年未婚者版（野末ら，2001）を使用し，高校生を対象に検討する．

【方法】高校生 227 名（男 96 名　女 131 名）（平均年齢 17.4 歳 SD=0.7）を対象に 2003 年 12 月に，大学生 256 名(男 134 名　女 120 名）（平均年齢 19.03 歳 SD=1.3）を対象に 2004 年 5 月に，質問紙調査を行った．*自己分化インベントリー青年未婚者版（野末ら，2001）*：母親との自律的親密さ・父親との自律的親密さ・恋人/友人との自律的親密さ・両親との融合・両親との三角関係化・情緒的遮断の 6 つの下位尺度から構成されていて，66 項目各々6 段階で評定する．

【結果】本尺度の得点範囲は，高校生は平均 283.3 (SD=35.32)，大学生は平均 287.4 (SD=29.52) である．尺度全体の信頼性を検討するためクロンバックのα係数を算出した結果，高校生 0.92，大学生 0.90 となり，高い信頼性を示す結果が得られたといえよう．因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行った結果，高校生，大学生共に 6 因子が抽出された．高校生では，第一因子は，家族に対する否定的な感情が根底にあり家族関係を拒絶するなどを表す項目の逆転項目と，境界が明瞭である母子関係を表す項目に対し，高い負荷を示した．そこで「家族/母親との情緒的遮断の低さ」と命名した．第二因子は，恋人・友人との肯定的な感情や，境界が明瞭な関係を表す項目に対して高い負荷を示した．そこで「恋人/友人との自律的親密さの高さ」と命名した．第三因子は，境界が不明瞭で融合した父子関係を表す項目の逆転項目と，境界が明瞭である父子関係を表す項目に対し，高い負荷を示した．そこで「父親との融合の低さ」と命名した．第四因子は，母親と父親との境界が明瞭な関係を表す項目に対し，高い負荷を示した．そこで「両親との自律的親密さの高さ」と命名した．第五因子は，両親夫婦の問題に巻き込まれていることを表す項目の逆転項目に対し，高い負荷を示した．そこで「両親との三角関係化の低さ」と命名した．第六因子は，両親に対して否定的な感情がなく，両親との境界が明瞭であることを表す項目に対し，高い負荷を示した．そこで「両親との情緒的遮断の低さ」と命名した．因子負荷量 0.35 以下を削除項目とし，55 項目を採用した(表 1)．大学生では，先行研究とほぼ同様の因子が抽出された為，先行研究を参考に，第一因子を「恋人/友人との自律的親密さの高さ」第二因子を「父親との自律的親密さの高さ」第三因子を「母親との自律的親密さの高さ」第四因子を「家族との情緒的遮断の低さ」第五因子を「両親との三角関係化の低さ」第六因子を「両親との融合の低さ」と命名した．先行研究の「両親との融合」因子としてまとまった 2 項目のみ因子負荷量 0.35 以下のため，64 項目を採用した（表 2）．高校生と大学生各々の項目の得点について t 検定を行った結果，先行研究での「恋人/友人との自律的親密さ」「情緒的遮断」因子の項目に差が見られた（表 3）．

【考察】高校生を対象とした本研究では，因子構造が異なる結果が得られた．先行研究での母親との親密性を表す項目と，母親との融合関係を表す項目の逆転項目が，本研究では，家族との情緒的遮断を表す項目の逆転項目として作成された因子に高い負荷を伴って含まれた．先行研究では「親」から「家族」という表現に変えたことで因子としてのまとまりを見せたことと，本研究では高校生の結果にのみ見られたことから，高校生は「家族」という表現から「母親」を想定すると考えられる．また，大学生では異なる関係としてまとまりを見せていた家族関係において，家族に対して否定的な感情が根底にない為に付き合いを拒絶しないという「情緒的遮断をしないこと」と，「親密ではあるが融合的ではない関係」を，同じものとして捉えていると考えられる．t 検定の結果からは，「恋人との自律的親密さ」「情緒的遮断」を表す項目で，高校生より大学生が高い結果を得られた．家族以外の他者とでは，高校生より大学生が，相手に肯定的な感情を持ちながら境界が明瞭な関係であると示唆された．また，家族関係では，大学生より高校生が，融合的な関係の反動として極端に距離をとり，葛藤を回避しようとする関係であると示唆された．

表 1　高校生における因子分析結果

因子名	α係数	固有値	寄与率	累積寄与率
1 家族/母親との情緒的遮断の低さ	0.81	12.41	18.80	18.80
2 恋人/友人との自律的親密さの高さ	0.75	8.91	13.50	32.30
3 父親との融合の低さ	0.64	9.80	14.85	47.15
4 両親との自律的親密さの高さ	0.65	6.98	10.56	57.71
5 両親との三角関係化の低さ	0.67	4.25	6.44	64.15
6 両親との情緒的遮断の低さ	0.67	4.40	6.67	70.82

表 2　大学生における因子分析結果

因子名	α係数	固有値	寄与率	累積寄与率
1 恋人/友人との自律的親密さの高さ	0.75	7.47	11.32	11.32
2 父親との自律的親密さの高さ	0.62	7.60	11.50	22.82
3 母親との自律的親密さの高さ	0.71	8.20	12.42	35.24
4 家族との情緒的遮断の低さ	0.73	9.35	14.15	49.39
5 両親との三角関係化の低さ	0.48	4.44	6.73	56.12
6 両親との融合の低さ	0.60	3.66	5.55	61.67

表 3　自己分化尺度の高校生と大学生の t 検定結果

質問項目	DF	t
6（両親との融合）	478	2.64**
27（母親との自律的親密さ）	477	2.19*
35（両親との融合）	479	3.30**
45（情緒的遮断）	478	2.18*
48（情緒的遮断）	425	2.61**
49（情緒的遮断）	441	2.61**
50（情緒的遮断）	422	3.48**
51（情緒的遮断）	439	3.81**
52（情緒的遮断）	417	2.71**
56（恋人/友人との自律的親密さ）	446	2.33*
57（恋人/友人との自律的親密さ）	476	2.06*
59（恋人/友人との自律的親密さ）	476	2.07*
61（恋人/友人との自律的親密さ）	477	2.75**
62（恋人/友人との自律的親密さ）	443	3.71**
64（恋人/友人との自律的親密さ）	478	2.43*

(*p<.05　**p<.01)

（とくみつ　さき）

概日リズム睡眠障害と精神疾患との関連
－ＰＩＬに着目して

吉田統子[1]、梶村尚史[2]、堀　達[1]、中林哲夫[1]、渡邉　剛[3]、中島　亨[4]、高橋清久[5]
[1]国立精神・神経センター武蔵病院　[2]むさしクリニック　[3]山梨県立中央病院　[4]杏林大学　[5]財団法人精神神経科学振興財団

キーワード：概日リズム睡眠障害　精神疾患　ＰＩＬ

「研究の目的」

睡眠相後退症候群（DSPS）を始めとする概日リズ睡眠障害は近年増加している疾患群である。概日リズム睡眠障害患者は近年増加している疾患群だが、これまで我々の調査より睡眠障害外来をリズム障害を主訴として受診する患者に精神疾患患者がかなり多く含まれていることが分かってきた。このような概日リズム睡眠障害と精神疾患との関連性を解明するため、概日リズム睡眠障害の精神症状を検討するとともにリズム障害を主症状とする精神疾患患者の特性を明らかにすることを目的とする。

「研究の対象と方法」

国立精神・神経センター武蔵病院リズム障害専門外来に受診を希望し、問い合わせのあった患者に対し、アンケートとともに心理テスト（PIL テスト, SDS　自己評価式抑うつ尺度, CMI　コーネル・メディカル・インデックス）を送付した。今回は 2001 年 12 月から 2003 年４月までに回答を頂いた計４０名の結果について検討を行った。アンケートでは年齢、性別、職業、既往歴、現象歴、精神科受診歴などについて調査するとともに睡眠の状況について詳しく調べるために睡眠日誌への記入も４週間行ってもらった。リズム障害専門外来を実際に受診した患者については、カルテからも診断などに関する情報を収集した。睡眠障害のタイプの確定と診断名の確定については精神科医、心理の複数名合同で行った。

「研究の結果」

40 名の内訳は男性 21 名、女性 19 名（最少年齢 15 歳　最高年齢 65 歳、平均年齢 30.9 歳、中央値 27 歳）中、28 名（70.0％）に概日リズム睡眠障害タイプの睡眠障害が認められた。このうち睡眠障害国際分類の概日リズム睡眠障害の診断基準を満たすものを１次性リズム障害、何らかの精神疾患に伴って二次的に生じたとみなされたものを２次性リズム障害として検討を行ったところ、リズム障害タイプの睡眠障害を示す患者の内 16 名（57.1％）が２次性リズム障害とみなされた。原因となった精神疾患としては人格障害が７名と最も多く、神経症、気分障害が各２名と次いで多かった。１次性リズム障害患者と２次性リズム障害患者とについて比較検討すると、CMI の精神的自覚症の項目得点とPILのＡテストにおいてｔ検定で有意な差が認められ（Ｐ＜0.05）、２次性リズム障害患者は１次性リズム障害患者に比べ、精神症状に関する自覚が強く、人生に対する目的意識が低下していることが示された。

ＰＩＬのパートＢ，Ｃについて記述の分析を行ったところ、１次性、２次性リズム障害の患者ともにパートＡの得点が低かったものについては、文章量の乏しさが顕著であった。さらに（私が今までに成しとげてきたことは）や（私が今、成しとげつつあるのは）といった刺激に対して“何もない”、とするものが極めて多く、このことから、抱えるリズム障害の問題が日常生活だけでなく、人生において大きな支障となっていることがうかがわれた。一方、パートＡの得点が高かったものにおいて、(何よりも私がしたいのは)（私ができたらと思うことは）（私の人生の本当の目的は）などの刺激に対して、個々人の何らかの希望が語られているという特徴もみられた。２次性リズム障害においては（私にとって生活の全ては）という刺激に“疲れ切っている”“流されている”とするものが多かったのに対して、１次性リズム障害患者では、抱えている疾患から阻害されない個々人の支え、軸となるものが表記されているという特徴もみられた。

「研究の考察」

リズム障害専門外来に受診を希望する患者のなかにはリズム障害の問題だけでなく、精神疾患を併せ持つものも少なくない。これらの患者の治療にあたってはリズム障害の治療とあわせて、原因となる精神疾患の治療が不可欠となるが、ＰＩＬのテストを通し、個々人の人生目標や、生活の軸の有無、その内容について多くの情報を得ることは、個々人の治療に対する姿勢や、予後をうらない、有効な治療アプローチを考慮していく上で大変に重要なことと考えられた。

看護学生に用いたロールレタリングの効果に関する研究

○關戸　啓子　　内海　滉
（徳島大学医学部）　（千葉大学）

キーワード：ロールレタリング，看護学生，手紙，未来の私

【目的】

ロールレタリング（役割交換書簡法）は，矯正教育の現場から発展した心理技法であるが，現在では臨床教育や学校教育などにも用いられている。ロールレタリングは，自らが自分の持つ問題性に気づくことを目的としており，自己カウンセリングの作用があるといわれている。そこで，人の命に関わるという職業を目指し，過密なカリキュラムのなかで学習している看護学生に適用できないかと考えた。今回は「今の私から未来の私へ」と「未来の私から今の私へ」手紙を書く方法（本研究では便宜上「タイムマシン・メッセージ」という）を用いて，看護学生に実施し効果を検討した。

【方法】

看護系大学に在学する1年次と2年次の女子学生 119人を対象とした。研究の趣旨を説明し「タイムマシン・メッセージ」の用紙を配付した。この用紙は，一枚の上半分に「今の私から未来の私へ」の手紙を，下半分に「未来の私から今の私へ」の手紙を書くようになっている。記入は全員に依頼したが，提出は研究協力に同意が得られた学生だけとした。「タイムマシン・メッセージ」は無記名で記入後，書いた感想と未来の私の年齢，職業も記載してもらった。2002年1月に実施した。分析にはＫＪ法を用いた。

【結果】

「タイムマシン・メッセージ」は 102人の学生が提出した（回収率85.7%）。有効数は96（有効回答率94.1%）であった。

1．手紙を書いた未来の私の年齢と職業

手紙を書いた未来の私の年齢は，30歳が最も多く，22人であった。20歳代後半の年齢の私に書いた学生も多く，合計で29人いた。手紙を書いた未来の私の職業は，看護職が最も多く，77人であった。「わからない」と書いた学生も7人いた。

2．「タイムマシン・メッセージ」の内容

書かれた「タイムマシン・メッセージ」の内容は，ＫＪ法を用いて分類したところ，次のように分けられた。

(1)「・・していますか」と未来の私に対して質問を書いている群

多かった質問は，「何をしていますか（28人）」「看護の仕事を頑張っていますか（22人）」「元気にやっていますか（17人）」であった。それに対して，「今は夢がかなって幸せ（19人）」「今勉強しておかないと，将来大変よ（17人）」等のメッセージが返事されていた。

(2)「・・しています」「・・という気持ちです」と未来の私に対して現状報告を書いている群

多かった報告は，「自分の将来について不安で悩んでいます（11人）」「自分の夢に近づけるよう頑張っています（9人）」「勉強が大変でくじけそうです（6人）」「専門的な勉強が始まり，期待と不安の入り交じった気持ちです（6人）」であった。それに対して，「学生時代を大変だと思っているかも知れないけれど，振り返ってみれば何でもできる良い時です（17人）」「勉強に遊びにと頑張って下さい（10人）」「自分の進みたい方向をじっくり考えて，やるべきことをやって下さい（9人）」「いろいろな経験をしておいて下さい（8人）」等のメッセージが返事されていた。

(3)「・・して下さい」と未来の私に対して，励ましを書いている群

多かった励ましは，「素敵な看護者を目指して頑張って下さい（7人）」「幸せな人生がおくれるように頑張って下さい（6人）」「身体に気をつけて頑張って下さい（5人）」等であった。それに対して，「頑張って勉強しておいて下さい（11人）」「過去のあなたにお礼が言いたいです（2人）」等のメッセージが返事されていた。

3．「タイムマシン・メッセージ」記入後の感想

多かった感想は，「未来の私を想像することは，楽しかった（19人）」「将来の自分を文章化することによって目標がはっきりし，頑張ろうと思えた（19人）」「自分が将来何をしたいのか，見つめなおすことができた（19人）」等であった。少数であるが，「自分が何を不安に感じているのかつかめた（2人）」「不安だった気持ちを書くことによって，ホッとした自分がいる（1人）」という感想もあった。

【考察】

今回のロールレタリングを実施した看護学生は，1・2年次生であり，ほとんどが18～20歳である。未来の私として想定された年齢をみると，20歳代後半から30歳が最も多く，そう遠くない未来の私に手紙を書いていた。そのため，未来の私の職業を看護職と想像した学生が約8割いるのは当然であろうと思われる。7人ではあるが「わからない」と書いた学生がいることは，現在自分の将来について迷っている学生がいると考えられる。未来の私に対して，現状報告している内容をみると，「将来について不安で悩んでいる」「勉強が大変でくじけそう」と看護職を目指すことに積極的になれないでいる学生もいることが窺える。大学に入学して1～2年がすぎ，専門教科の学習も増え，臨地実習もひかえている時期である。入学の喜びと期待の時期から，勉強の大変さや将来の職業への適性などに不安を感じる学生も出てくる時期に移っているのかも知れない。それに対して，未来の私は，「学生時代を大変だと思っているかも知れないけれど，振り返ってみれば何でもできる良い時です」とアドバイスしている。感想をみると，ロールレタリングによって，不安が全て解消したとはいえないが，自分をみつめなおす機会になり，前向きに考えて行こうと気持ちを切り換える一助にはなっていることが推測される。「自分が何を不安に感じているのかつかめた」「不安だった気持ちを書くことによって，ホッとした自分がいる」という感想から，自分の気持ちを文章として明確化することによって，客観的に自分をみつめることができたのではないかと考えられる。

未来の私に対する質問や，励ましに対しては，未来の私から「今，勉強しておいて欲しい」という内容のアドバイスが返されている。学習意欲を高めるためには，自らが学習の必要性に気づくことが大切である。将来の目標をすでにかなえた未来の私から，勉強の大切さが語られることは，学生にとって学習の動機付けになると思われる。

看護学生に用いたロールレタリングには，気持ちを前向きにする効果や，学習への動機付けを高める効果があることが示唆された。

（せきど　けいこ，うつみ　こう）

特別入試合格者における「入学前教育」の効果について

—自己効力の変容を通じての考察—

宮下　明大
（立命館大学　アドミッションズオフィス）

キーワード：特別入試　入学前教育　自己効力

【研究の目的】本研究は、立命館大学の指定校推薦制度で（以下指定校推薦）で12月に合格した受験生が、1月から3月の期間に大学が提供する「入学前教育（入学前学習講座）」を受講することによって、「大学入学後の学びへの期待」や「進路就職に関しての態度」、また「進路選択に対する自己効力」が変化するかどうかについて予備的に検討を加えるものである。

【方法】「入学前学習講座」を受講していない2002年度指定校推薦入学者（以下A群）に対して2002年4月に実施した質問紙法を用いた『新入生アンケート』の結果をもとに、大学入学後の学習意欲や期待、卒業後の進路就職についての意識を分析した結果（宮下,2003）と、2004年の1月から3月にかけて「入学前学習講座」を受講した2004年度指定校推薦入学者（以下B群）に2004年3月に実施した質問紙法を用いた『入学前学習講座受講者アンケート』の結果との比較を行った。また、同様にA群とB群との自己効力を、「進路選択に対する自己効力感尺度（浦上,1995）」を用いて実施した結果を比較する方法をとった。なお、分析に用いた表1、2のデータ標本数はA群＝指定校推薦入学者の73%、B群＝指定校推薦入学者の16%（欠損値を除いた回答件数）。表3のデータ標本数は無作為抽出したそれぞれの件数である。

【入学前教育の内容】

1．入学前教育とは

入学前教育とは、推薦入試やAO入試で合格している入学予定者に対して大学側が実施する教育活動である。実施される入学前教育の内容は大学・学部によって多種多様であるが、高校での学習内容を確実に理解することをめざした「補習型プログラム」と、課題図書を与え感想文（小論文）を提出させるなどして、大学で学ぶことへの興味を喚起する「接続型プログラム」に大別される。実施大学数は2000年度で私立大学の約3割が何らかの形で実施している（河合塾,2000）。

また、推薦入試やAO入試での合格者で、入学手続きをとった者に対しては、入学前に取り組むべき課題を課すなど、入学後の学習のための準備をあらかじめ用意しておくことが望ましい（文部科学省,2004）としている。

2．立命館大学「入学前教育」の内容

1）集合型ガイダンス（12月実施）
2）インターネット利用の「英語・日本語・数学」講座
3）通信添削での「英語・日本語・数学」講座
4）通信添削での「進学学部系統別」講座

上記1）～4）までの入学前教育に対して1）2）4）を終了した入学予定者を「B群」として調査対象とした。

【結果】

1．「大学入学後の学びへの期待」

[表1]あなたは立命館大学での学習や学生生活にどの程度意欲や期待をもっていますか？

	大変期待	まあまあ期待	どちらともいえない
A群	439(56.8%)	272(35.2%)	53(6.9%)
B群	121(74.2%)	36(22.1%)	6(3.6%)

$\chi 2$検定の結果、入学前教育を受講したB群において大学入学後の学びへの期待値が高まったことが示された。（$\chi 2(2)=15.88, p<.01$）残差分析によるとB群の「大変期待」がプラスに有意、同様に「まあまあ期待」がマイナスに有意であった。

2．「進路就職に関しての態度」

[表2]あなたは大学卒業後に自分がすすみたいと思う進路や就職先を決めていますか？

	しっかり決めている	何となく決めている	まだ決めていない
A群	97(12.6%)	373(48.3%)	290(37.5%)
B群	43(26.4%)	91(55.8%)	29(17.8%)

$\chi 2$検定の結果、入学前教育を受講したB群において進路就職に関しての態度が固まったことが示された。（$\chi 2(2)=33.73, p<.01$）残差分析によるとB群の「しっかり決めている」がプラスに有意、同様に「まだ決めていない」がマイナスに有意であった。

3．「進路選択に対する自己効力」

[表3]進路選択に対する自己効力得点（30項目　120点満点）

	平均	標準偏差	最小値	最大値	標本数
A群	83.96	11.40	58	106	50
B群	85.73	11.16	64	113	45

分散分析の結果、入学前教育による進路選択に対する自己効力得点の変化に有意差は示されなかった。（F（1.93）=0.57 n.s.）

【考察】今回の研究は、入学前学習を受講していない2002年度入学生と受講した2004年度入学生とを予備的に比較検討した。この比較は、指定校推薦での合格者の資質（学力面、態度面、意欲面）が両年度とも同一であるという前提である。それは、指定校推薦の出願資格が同じであり、高校から推薦される生徒の資質も同一であるという仮定に立脚している。

この前提において、指定校推薦入学者に対する入学前教育が、「大学入学後の学びの意欲」や「将来の進路選択に対する態度」の向上に寄与し、一定有効であるとの示唆をあたえてくれた。（今回、AO入試での合格者も2群で比較し検定を実施したが各項目に有意差は認められなかった。）

しかし、「進路選択に対する自己効力」については、入学前学習講座を受講することによっての効力得点変化に有意差は認められなかった。（AO入試でも同様に有意差は認められなかった。）

今回の予備的調査をベースとして、入学前教育が受講者にあたえる心理的な影響について検討を加えながら、より有効な入学前教育を開発していくことが求められる。その際は、同じ制度で同時に合格した入学予定者を2群に分け、入学前教育による効果測定を実施する必要がある。また、大学入学後の追跡調査も重要な視点となってくる。

【引用文献】

宮下明大 2003 AO入試合格者にみる進路選択理由と自己効力感について 日本進路指導学会第25回発表論文集
浦上昌則 1995 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究 教育心理学研究 42
河合塾 2000 高等教育が動き出した第4回 ガイドライン
文部科学省 2004 平成16年度大学入学者選抜実施要項

（みやしたあきひろ）

柔道の応用心理学的研究

（1）柔道に対するイメージ調査の検討

中島　彡木* 森脇保彦* 飯田穎男** 藤田主一***
(*国士舘大学、**日本武道学会名誉会員、***城西大学女子短期大学部)

キーワード：柔道･柔道イメージ.大学生･一般社会人

Ⅰ．緒言

古代中国の上流階級の生活文化の中に、「六芸」というのがあった。(①礼（礼儀)、②樂（音楽、舞踊)、③射（弓)、④御（馬)、⑤書（書道)、⑥数（数学）の六つの教養科目があり、この中に武道と関係の深い「弓」と「礼」と「樂」、つまり音楽を聴きながら踊ったり武術を行うことが含まれていた。また、武道の「武」という文字は「弋（ほこ)」という武器と「止」めるという文字が結びついたものであり、武道は争いを抑え和合の精神によって平和な世界を築くものである。

1800年代に入り、柔道の創始者嘉納治五郎師範によって欧米諸国の近代化の余波を受け日本伝統文化の一つであった柔術が→柔道へと変化し、柔道修業の目的は「その修行は攻撃防禦の練習によって、身体精神を鍛錬修養し、斯道の真髄を体得することである。そうして、これによって己を完成し、世を補益するのが柔道修行の究極の目的である。」と述べている。(1882)

1951年、ヨーロッパ諸国が中心となり国際柔道連盟（IJF）が発足し、1964年第18回東京オリンピックを境に急激に柔道が世界へと普及発展していった。いまや世界189カ国（IJF加盟国）の国々とおよそ400万人の愛好者がいるといわれているが、柔道が国際化によってスポーツの一領域である競技スポーツだと言われるように思われるが、そうでない、競技スポーツとは違う。柔道は、武道か？はたまたスポーツか？との問いに対していろいろな意見がある。

これまでに数多くの研究者が柔道に対する意識の研究について報告されているが最も頻繁に使用されているのが「講道館科学研究会普及と対策研究班」が作成した調査用紙(1)組織柔道人口の実態調査、(2)柔道に対する意識調査(28項目)、(3)35項目が使用されている。(1984)

Ⅱ．目的

緒言でも述べた通り、今日、柔道への捉え方や位置づけが大きく変わろうとしている。それは柔道を本来の「道」が核となる伝統的な立場と、「勝負」を核とするスポーツ競技の立場との葛藤である。

本研究では、柔道に対するイメージがどのような特徴を抱えているのかを知り、わが国における柔道の発展に寄与するために、柔道経験者と柔道観戦者(他スポーツ経験者、一般社会人)との間の差異を検討することを目的とする。

Ⅲ．研究方法

(1) 調査対象者

①柔道を専攻している大学生柔道部員 265名（男子 132名、女子133名）平均年齢20歳（SD= 1.1)。

②柔道以外のスポーツを専攻または経験している大学生 99名（男子78名、女子21名)、平均年齢20歳（SD= 1.6)

③スポーツ活動を生活の中心としていない一般社会人 187名（男子81名、女子106名）平均年齢41歳（SD =13)

(2) 調査材料

フェイスシートに続き、柔道に対する新しいイメージ方向を測定するためにその第一段階として本研究では自由記述による方法を採用した。「柔道」という刺激語を縦に15個並べ、各語の横には下線のみが引かれている。

教示は、以下の通りである。「柔道という言葉が15個並んでいます。あなたの柔道に対するイメージをできるだけ多く書いて下さい」また自由記述終了後に「あなたが書いた文章の中で、一番主張したい文章の数字に○印をつけて下さい」という教示を続けた。

尚,スポーツの種類は、球技系が最も多く、32 種目であった。

(3) 調査方法

調査は､平成15年11月から平成16年3月までの間に、6大学の学生および､東京都内在住の一般社会人等に依頼し、各小集団ごとに用紙を配布して実施した。

Ⅳ．結果と考察

調査結果を集計するにあたり、今回は男女混合でまとめる事にした。また、大学生柔道部員を「Ｊ1」,大学生の他のスポーツ部員を「Ｊ２」、一般社会人を「Ｊ3」と略記する。

Ｊ1.Ｊ2.Ｊ3から得られた総記述個数は、J1=2850(X=10.8)、J2=882(X=8.9)、J3=1700(X=9.1)であった。総記述個数に差は認められなかった。

最初のカテゴリー化として「個々の記述内容が、柔道を特定できるものか」あるいは「他スポーツと共有できるものか」を精査し、分類する事を試みた。

表1はその結果をまとめたものである。J1.J2.J3とも他のスポーツにも当てはまる記述が圧倒的に多い。例えば、「一本」「痛い」などは柔道に限ったものではないが、「精力善用自他共栄」などは柔道のみを指し示す独特の用語である。また、特定の選手名なども同様である。そこで出現率の差を検定（CR検定）したところJ1とJ2、J1とJ3との間に1％未満で有意差が認められた。すなわち、柔道部員よりも、他スポーツ部員や一般社会人の方が柔道を特定するイメージを強く持っている事が理解されるがこの結果のみで、他スポーツ部員や一般社会人に柔道イメージが強烈であるとは言えない。イメージの同一水準性という問題が残る。そこで、次のカテゴリー化として個々の記述内容を7種類に下位分類してその頻度をまとめる事を検討する。分類のためのカテゴリーは以下を想定する。

(A) 柔道の競技としての本質に関する記述。
(B) 柔道選手の個人的特質に関する記述。
(C) スポーツにおける柔道の位置づけに関する記述。
(D) 柔道の「道」に関する記述。
(E) 柔道の「楽しさ」や「リスク」に関する記述。
(F) 柔道選手の具体的名前に関する記述。
(G) その他。

表1　柔道を特定する記述の出現数(頻度)

カテゴリー	柔道特定	他スポーツと共通	合計
柔道部員	138(4.8%)	2712(95.2%)	2850
他スポーツ	63(7.1%)	819(92.9%)	882
一般社会人	192(11.3%)	1508(88.7%)	1700
合　計	393	5039	5432

(なかじまたけし,もりわきやすひこ,いいだえいお,ふじたしゅいち)

軽度発達遅滞の子どもたちの発達保障を考える（1）
ーK市における「親子教室」の子どもたちの取り組みよりー

○ 荒木美知子　　長崎純子
（京田辺市健康推進課）　　（京田辺市療育教室）

キーワード；軽度発達遅滞、「親子教室」、早期療育

1．はじめに

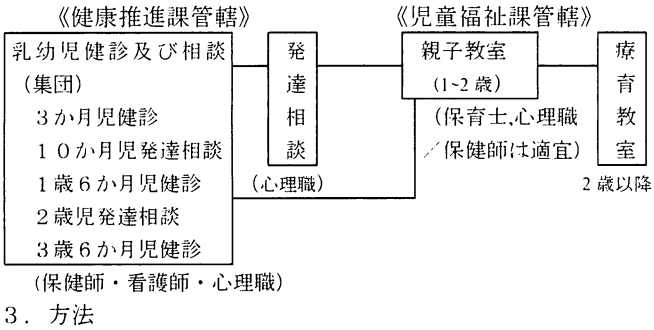
平成９年４月より施行された「地域保健法」以降全国の自治体において、出生から就学前までの健診等で子どもの健やかな成長や発達の確認がされていることはさまざまな調査から明らかにされている。とりわけ乳児期における３～４か月児健診、幼児期における１歳６か月児健診および３歳児健診がほとんどの自治体において実施されている[注]。問題はこれらの健診での担い手であり、何よりもその後のフォロー体制についてである。京田辺市では早くから健診およびフォローの場としての「親子教室」にも心理職がかかわっている。

2．本研究での課題

京都府京田辺市では、母子保健活動において 1960 年代に障害児のフォローを開始、1975 年にはシステム化がめざされ、1978 年に心理職が、さらに 1996 年から児童福祉課に心理職が配置され、児童福祉課直轄の児童館に常駐している。児童館では 1974 年から療育教室が、また子育ての主な担い手である母親などの要望に応える形での「親子教室」が 1993 年から、そして 1997 年以降はそれが１歳６か月児健診のフォローの場としても位置づけられた。現在軽度発達遅滞の子どもたちを含めた幼児の発達を保障する場および母親の育児支援の場として保育士や発達相談員が、また必要に応じて健康推進課の保健師が対応している。

①「親子教室」は母子保健事業内容や社会的要請に応じて変化してきている。この「親子教室」の変遷を追うことで、今後求められる「親子教室」の社会的役割を明らかにしていくことを課題とする。②健診から「親子教室」へ推奨されるケースが多数であるが、将来 LD、ADHD、高機能自閉症等と診断される可能性のある子を含む軽度発達遅滞の子どもたちが、０歳から２～３歳という時期にどのような課題をもっているかを明らかにすることによって、「親子教室」の役割を明らかにすることを課題とする。

図. 京田辺市親子教室の流れ(2004 年７月現在)



3．方法

上述の課題を明らかにするための方法として、以下のものを採用した。

①について、京田辺市の親子教室に関する事業沿革および母子保健事業の年譜を検討した。

②について、「親子教室」に在室していた子どもたちの「１０か月児発達相談」「１歳６か月児健診」「２歳児発達相談」「３歳６か月児健診」のカルテを検討した。それらの資料により、各時期の健診及び相談の中で、軽度発達遅滞児として継続的なフォローが必要となる可能性のある子どもたちの経過を予測するうえで鍵となる項目を選定した。

4．結果

京田辺市では現在、３か月、１０か月、１歳６か月、２歳および３歳６か月と月ごとに５つの健診および相談（３か月児健診を２回に分けており、月に６回の健診事業）をいずれも市の事業として行っている。これらの健診で保健師および心理職が直接親子を観察、スクリーニングをしており、本市で出生したすべての子どもの就学までの経過を市が把握することができる。その過程で援助が必要な親子や家庭に必要な援助の手をさしのべる体制をとることが可能となっている。なかでも、２歳児発達相談は 2001 年４月から新たに起こされた事業であり、１歳６か月児健診から３歳６か月児健診まで２年間の空白ができることを考慮して、その間の発達を確認することおよびこの時期の生活、遊びなどを指導する場として位置づけて開始されたものである。

「親子教室」はことばの遅れをはじめ発達の弱さ、対人関係の弱さ、多動等の問題を持った子どものフォローの場となり、同時にそこから「療育教室」へと見極める場ともなっている。健診項目を検討することで健診から親子教室への勧奨にさいしていくつかの健診項目の通過状況が鍵となることが示唆された。例えば、言語発達を中心としたコミュニケーションに関する１０か月児発達相談での「模倣」「要求」「共感」、１歳６か月児健診での「はめ板」「絵指示」「有意味語」、２歳児発達相談での「有意味語」の増加などである。

表.京田辺市の母子保健活動の年譜

1974(S.49)	＊療育教室開始
1978(S.53)	１歳６か月児健診開始・心理職配置
1982(S.57)	３か月児健診、９か月児相談の開始
1993(H.5)	＊「親子教室」（子育て支援）開始
1996(H.8)	＊児童館に心理職配置
1997(H.9)	市政施行(田辺町から京田辺市となる)
	３歳６か月児健診
	＊「親子教室」開始（フォロー教室）
2001(H.13)	２歳児発達相談開始
2004(H.16)	３か月児健診以外の健診に心理職配置

＊印は児童福祉課の事業

5．今後の課題

京田辺市では軽度発達遅滞の子どもに対して心理職による発達相談、児童福祉課での「親子教室」を軸に発達支援の体制ができつつある。それらをさらに有効なものにするために、各専門スタッフが有機的な連携を含めて対応をするようなシステムづくりが目指される。また、「親子教室」の位置づけを明確にするためにも、各健診項目を子どもの育ちとの関係で見直す必要がある。

（注）「地域保健法施行後の全国規模による乳幼児健診実態調査－同法施行前（平成７年）との比較－」『小児保健研究』第６１号第６号、2002 年

なお、この発表は京田辺市健康推進課保健師および児童福祉課職員との協同による検討を経たものである。

（あらきみちこ／ながさきじゅんこ）

児童期から青年前期における登校困難からの回復過程と教育支援

－ 自己認識と論理的思考及び社会的交流活動の発達連関をもとに－

田中真介
（京都大学高等教育研究開発推進センター）

キーワード ： 中学生の発達と教育、登校困難、自己認識、論理的思考、社会的交流活動、15 答法、三つの願い

【問題提起】近年、わが国の小中学校で、年間 30 日以上の長期欠席者のうち「不登校」を理由とする欠席者数が 13 万人を越えた（小学校 25,869 名、中学校 105,383 名。文部科学省 2003 年度学校基本調査報告）。

南西諸島の島々では、日本各地の中学校で登校困難となっている子どもたちを「離島留学」として受け入れ、里親のもとで生活させながら学校へ再び通えるように支援する取り組みが進められ成果をあげている。本研究では、南西諸島の中学校での取り組みを調査するとともに、登校困難から回復した小中学生の縦断的な発達調査と教育支援を行った。また、比較対照として京都府及び兵庫県の中学校でアンケート調査を実施した。これらの結果をもとに中学校での登校困難の実態を検討し、児童期から青年前期の発達支援と総合的な教育計画立案のための新たな観点を提案する。本稿では登校困難から回復した事例に焦点をあてる。

【研究の方法】 1. 対象事例の主訴と経過：小学校４年より中学１年まで学校を欠席。中学１年の２学期に沖縄県に転入した。島の学校に転校してきてからは登校することができ、学力も回復傾向にあった。しかし、中学３年の夏休み明けより再び登校困難の状態となった。

2. 発達調査と教育支援の方法：中学２年３学期（2003 年 3 月、14 歳 4 か月）及び再び登校困難になった中学３年の夏休み明け（同年 9 月、14 歳 10 か月）に次の課題を用いた発達診断と生活行動観察及び教育支援活動を行った。

（１）自己認識："Who am I ?"テスト：「私は...に続けて、何でも自分のことを書いて下さい」を15項目、及び"3 wishes"「３つの願い」を記述させた。

（２）描画課題：１）系列円描画：「小さいマルからだんだん大きいマルを、たくさん描いて下さい」と教示して〇を描かせたあと、「真ん中」とその判断理由を尋ねた。２）自画像：三方向画「自分を前から見たところ、横から見たところ、そして後ろから見たところを描いて下さい」。成長画「自分の赤ちゃんの時、現在、そして将来大人になった自分の姿を、描いて下さい」と教示し描画させた。

（３）新版Ｋ式（京都市児童院式）発達検査で、認知・言語機能の特徴を把握した。

【結果と考察】

1. 発達診断の結果と個別的考察（中学２年時）

(1) 自己紹介：1)（Who am I ?：私は...テスト）では、「ゲームがとくい。カードゲームがすき。ともだちとあそびます。ともだちとカードゲームをやります。テレビとビデオと DVD を見ます。本をよみます」の６項目を答えた。自分の特技や好きなこと、具体的な日常生活行動が表現されていたが、自己の直接的な欲求や願望が示されたのみで、比較対照群のような、内面的な性格特性や意志、社会的活動への言及度は小さかった。

一方で、「本」への願望は、イメージの世界、間接性のある世界、抽象的思考力の形成の充実を求める発達要求、「友だち」は関係作りへの期待を意味していると推察される。

2) ３つの願い課題では、「カードゲーム、ビデオと DVD のヒデオ、本のゆうぎ王の本とえいががみたいです」等と答えた。直接の欲求・願望、中でも、ゲームやビデオといった架空の遊びやアニメの世界に興味関心が限定される傾向にあった。比較対照群では、自分の個人的・１次的な欲求にとどまらず、友だちとの関係づくり、自分の将来の仕事についての希望、両親へのメッセージなどが表現された。また、目に見えない未来（時間）や世界（空間）をイメージして、自分の将来の進学先や職業などの具体的な目標、地球環境の改善といった社会的な要望が示された。

(2) 描画課題：1) 系列円の描画では、マルの面積変化にゆらぎが見られた(6/23, 2/7)。「真ん中」の判断理由としては、数量判断もできるものの、直観的な判断や空間的認知に頼る傾向が残っていた。

2)三方向画では、前向きの自分は描けたが、横向き画では、顔は横向きだが体幹部や腕・脚は正面向きとなった。

3)成長画では、幼時を体を小さくし、オムツ姿を表現した。現在の自分は、幼時よりも体や顔を大きくした。大人の自分のイメージとしては、体を大きめに表現したが、現在から将来への質的な変化は描画表現されなかった。ただし、大人は「仕事ができて、社会で働けたりする」等と述べた。

描画でのこれらの特徴は、発達的３次元の形成期（例えば小－ 中－ 大の３単位の変化を認識し表現できる発達段階：通常は幼児期後期）と共通する特徴であるが、自分自身の将来への質的な変化を認識し始めているといえる。

(3) 新版Ｋ式発達検査からは、児童期に獲得される「事象の因果関係を筋道立てて考える力」が芽生えていると推定されたが、目の前に具体的な手がかりがない場面での記憶・再生の力が未成熟で、発達的３次元を充実させる初期段階に焦点を合わせた指導援助が必要であることが示唆された。このような認知発達水準と現行教育課程の乖離が学校忌避の重要な素因の一つとなっているかもしれない。

2. 登校困難への教育支援（中学３年時）

再び登校困難に陥った時期に、上記の発達診断の結果をもとに、次の観点を重視した教育支援プログラムを立案・実施し、約１か月後に対象事例は学校へ復帰することができた。

(1) 社会経験の組織化： ヨット体験航海、音楽祭などの地域行事へ参加させ、発達的３次元の活動を準備した。また、各場面で重要な役割を担わせて努力と成果を評価した。

(2) 自己信頼性・自己尊厳感（自尊心）の醸成：友だちや教師、親との温かなつながりと交流を組織し、社会的な関係を整えた。ビデオ機器の操作など得意なことを活かして友だちとの交流を図り相互に評価しあえるようにした。また、心身の安全感・安定感を持たせ、自分の居場所を確保させた。

(3) 基礎学力の形成（論理的な思考力）と、視点変換の力（自分と相手との立場を入れ換えて考え、共通価値を発見する力）、及び生活リズムの確立（時間の流れの中に自己を位置づけ生活を実践する力）の連関を組織した。

学校に行けず家の中に引きこもりながら彼は、「明日、帰るの？」と私に尋ねた。「今度、いつ来る？」。時間的認識は、論理的思考は、自分にとって大切な人が次にいつ来てくれるのかを期待して待つというところに生まれ育まれるように思われる。今後の検討課題としたい。 （たなか しんすけ）

軽度精神発達遅滞の子どもたちの発達保障を考える（2）
—K 市における「親子教室」の子どもたちの取り組みより—

○長崎　純子　　荒木　美知子
（京田辺市療育教室・龍谷大学大学院）　（京田辺市健康推進課・大阪女子短期大学）

キーワード；軽度発達遅滞、親子教室、早期療育

1．問題の所在

K 市では乳幼児健診後のフォローの場として児童福祉課・健康推進課両課の協力体制の下、「親子教室」「療育教室」が行われている。本研究では、学校教育の場で軽度発達遅滞児の問題が注目されている中で、これらの子ども達の早期の発達を明らかにすることを通じて乳幼児健診の役割と発達保障の場としての「親子教室」のあり方を探ることを目的とする。

2．方法

【分析資料】ケース個票・保育記録

【分析対象】H10 年～16 年 3 月末に親子教室に在籍・修了した児：155 名（全在籍数 187 名の内 32 名は拒否・欠席・転出等により修了時まで通室しなかったので分析対象から外す）。対象児を親子教室通室期間及び終了後の進路より以下の 3 グループに分けられる。

	内訳／人数（全 155 名）		就園後
A	1 クール※にて修了	53 名	幼稚園・保育所のみ単独通園
B	2 クール以上通室後に修了及び就園前療育 1 年未満にて修了	60 名	
C	療育教室に移行	42 名	幼・保と療育との併行通園

※ 年 3 クールで実施。1 クール約 3 か月半

A は短期間の経験の積み重ねによって早期にキャッチアップしていったグループであり、B は発達の遅れは軽度であるが気になる点を残しながら親子教室に長期間にわたって在籍しているグループであり、C は発達の遅れや障害が顕著で療育が必要と思われるグループである。軽度発達遅滞の子どもたちが 0 歳から 2～3 歳という時期にどのような課題を持っているか明らかにするために、B グループ 60 名を分析の対象とする。

【分析方法】B グループ 60 名のケース個票・保育記録より、①親子教室入室時の発達状況として 1 歳 6 か月児健診の結果（絵指示,身体各部,積み木,はめ板回転,主訴）、②親子教室修了時の修了理由・気になる点、を検討し発達の傾向を見る。

3．結果

①1 歳 6 か月児健診：項目別結果　（ ）内通過基準

■絵指示(2/6)
■身体各部
(健診/聴取いずれか)

両方不通過	43 名：72%
いずれか通過	7 名：12%
記録なし	10 名

■積み木(3 個)

不通過	28 名(47%)
通過	10 名
記録無し	22 名

■はめ板(円回転)

不通過	14 名(23%)
通過	17 名
記録無し	29 名

■主訴及び検査時の様子　（複数回答あり）

行動	マイペース／落ち着きない／多動	21 名
成熟	身体・操作未熟／ぎこちない体の使い方	5 名
自我	テストのれず／人・場見知り強い／立ち直り難	11 名
対人	要求・共感・模倣弱い／表情が乏しい	14 名
言語	喃語／有意味語なし／有意味語 3 語以下	26 名

②親子教室修了時の様子　（複数回答あり）

	■修了理由	■気になる点
行動	周囲見て動く／誘いかけに興味を示す	大胆／乱暴／興味を持つと即行動／制止イヤ
自我	場への抵抗減／気持ちの立ち直り可	気分のムラ／気持ちの不安定さ／自信のなさ
対人	表情が増／人を求める	対人面の違和感／独占欲強い
言語	言葉が増／指示に応じる／やりとりが可	抑揚のない発声／理解の割に発語少
遊び	道具操作／感触の広がり／絵本・紙芝居へ興味	一つの遊びに固執／気が散りやすい

4．考察

①発達状況について－1 歳半健診の項目の検討

第一点は絵指示・身体各部不通過児が全体の 70%以上であり、認識・手指操作面の発達に比べて言語面の困難さが顕著である。第二点は、主訴及び検査時の様子では「マイペース」といった行動上の問題、「テストのりにくさ」「立ち直りにくさ」といった自我形成上の問題、「要求・共感の弱さ」といった対人面の問題が挙げられている。以上の点より、注意すべき項目として絵指示・身体各部・積み木・要求・共感が考えられる。同時にテストへの乗りにくさといった姿が見られる場合は発達の経過を注意すべきことが示唆された。

②親子教室での育ちと継続的問題

修了理由では、入室時の問題点改善が主である。特に他者からの関わりを受け止めたり、自分から関わりを求めるといった対人面の改善が見られた。以上の点より親子教室では、1 歳 6 か月児健診後早期からの対人面に重点を置いたフォローが大切と思われる。また、マヒとは異なる身体面の未成熟さや手先の不器用さは健診でも主訴で挙げられており、身体・手指へのアプローチも求められる。しかし親子教室修了後も、場面によって指示は入るが行動上の問題を残していたり気持ちの不安定さや語彙数の増加が見られにくいといった課題も残しているため、修了後も発達や行動上の問題について継続的な確認とフォローが必要である。

なお、本研究をまとめるにあたり京田辺市児童福祉課磯谷係長、田辺児童館登館長、健康推進課田尾係長のご指導・ご協力をいただきましたことをここに記し感謝いたします。（ながさきじゅんこ　あらきみちこ）

看護学生における心肺蘇生法実施に関する意識

○松田　好美[1)]　　松永　保子[2)]　　森田　敏子[3)]
([1)] 岐阜大学医学部看護学科　[2)] 信州大学医学部保健学科　[3)]熊本大学医学部保健学科)
キーワード：看護学生、心肺蘇生法、実施

【研究の目的】

看護職には、医療従事者として救命処置を行う場面に遭遇した場合、救命行動を実施する社会的責任がある。今までに心肺蘇生法の実施や知識の研究・調査には看護職や講習会などに出席した一般市民を対象としたものはあったが、若年者層を対象にし、救命行動を実施する意思に焦点を当てたものは少ない。今回は、看護学生と他学部の学生を比較し、実施しようとする意思と関連要因を調査した。

【方法】

対象はA大学看護学生4年生(以下N群とする)80名と、一般大学：教育学部、工学部4年生(以下T群とする)80名である。方法は無記名で自記筆質問紙によるアンケート調査である。質問紙は主として選択肢式で、一部自由記述とした。質問内容は①基本属性、②心肺蘇生についての講習会などの経験、③心肺蘇生法についての知識、④実際に現場に遭遇した場合の意思、⑤行うかどうかを決定する理由、などである。
統計処理にはSPSSを使用し、検定にはカイ２乗検定を行った。

【結果・考察】

アンケートの有効回答は、N群は68名（85%)、T群は80名(100%)であった。

N群は、男性２名、女性66名、21～25歳55名、26歳以上２名、平均年齢21.9歳であり、T群は、男性25名、女性55名、全員21～25歳、平均年齢21.5歳であった。全員医療職資格者はいない。

心肺蘇生についての講習会などの経験：心肺蘇生法の講習（あるいは授業）を受けたことがあるのは148名中133名(全体の89.9%)で、N群が68名(100%)、T群が65名(同81.3%)であった。講習を受けた平均回数は、N群では2.7回、T群では1.5回で、N群が多く講習を受けていた。講習の場所は、N群では大学の講義、自動車教習所、高校の保健体育の授業、ライフガードの講習が、T群では自動車教習所、中学校や高校の体育の授業、ダイビングスクール、プールの監視員の講習会があげられた。方法は、殆どがモデル人形を用いたもので、「ビデオの使用など」がN群T群とも数名いた。

心肺蘇生法についての知識：「心肺蘇生法」「CPR」「救命処置」等の言葉は高校教育が義務付けられたにも関わらず、T群において約10%の学生が知らないと答え、知らない学生が多いことがわかった。N群は全員知っていた。心肺蘇生法の知識ではN群は大学で受講しているため、知っている割合が高かった。「119番通報」「頭部後屈あご先挙上法」「呼吸の有無の確認」「人工呼吸法」については、80%以上の学生が知っていると答えている。しかし、「周囲の安全確認」「意識確認」「下顎挙上法」「おとがい部挙上法」「ハイムリック法」「人工呼吸の速さ」「脈の触知場所」については、N群がT群に比べて知っていると答えた割合が有意に高かった。
詳しい知識の確認をしてみると、心臓マッサージのときに骨折の危険性のある部位を選択するなどの学生（N群25%、T群50%以上）がおり、正しい知識の獲得が必要とされる。また、脈の確認をする前に心臓マッサージを行うと答えた学生がN群1名、T群8名おり、新しい心肺蘇生法の指針（ガイドライン2000年）に基づく教育の必要性を痛感した。
実際に現場に遭遇した場合の意思・行うかどうかを決定する理由：心肺脳蘇生法が必要な時に実際に行うかについては、N群(55名80.9%)はT群(24名30%)よりも有意に高く、行うと答えた。行うと答えた理由には、「命は大切である」「人を助けたい」「人間として行うべき」という内容が多く、「見捨てられない」「看護を目指しているから」などの意見もあった。一方、行おうと思わないと答えた理由には、「自信がない」「知識がない」「失敗して悪化させてしまいそう」などがあった（表１）。文献[1)]にも実施を決定する理由としてあげられている。

表１　心肺蘇生法の非実施理由

	T群 n=56 (%)	N群 n=13 (%)
自信がない	48(85.7)	12(92.3)
知識がない	35(62.5)	3(23.1)
失敗したら悪化する可能性	34(60.7)	7(53.8)
怖い	15(26.8)	3(23.1)
誰かがやってくれる	6(10.7)	1(7.7)
原因がわからない	6(10.7)	1(7.7)
人目が気になる	5(8.9)	1(7.7)
一人ではできない	9(16.1)	0(0)
関わり合いたくない	2(3.6)	0(0)

対象が家族や知人である場合とない場合では実施の有無に影響を与えるか、という質問に対しては、N群は約70%、T群は約30%ができると答えた。

感染の危険を感じるかという質問では、N群で有意に高く、半数以上が「感じる」と答えた。心肺蘇生の対象者は事故などが原因で血液などを付着させていることが多い。この感染不安は心肺蘇生法を阻む理由の一つといわれており[1)]、その場に居合わせて心肺蘇生法を実施ずる市民にとって当然な問題であるといわれてきた。今までに心肺脳蘇生法によって肝炎やHIVなどに感染したという報告はないが、現状を考えると、今後は感染についても考えていく必要があるだろう。しかし今回、T群では、感染の危険を感じるのは28名(35.9%)であり、N群より有意に低い値であった。心肺蘇生法の正確な知識の普及の必要性が示唆される。心肺脳蘇生法の講習会を受けたいと答えた学生は、N群では80%以上、T群でも60%以上おり、心肺脳蘇生法を習得したいという意識は認識されていると考える。

【引用文献】

坂倉恵美子・中村洋子・吉本照子・増地あゆみ　2001–看護婦の心肺蘇生法実施に対する意識調査　成人,子供及び高齢者に対する実施意思とその関連要因(原著論文)・北海道大学医療技術短期大学部紀要

（まつだ　よしみ・まつなが　やすこ・もりた　としこ）

開放性次元による外向傾向の代替可能性

- ハイリスク職種の選抜・教育に関する考察 -

廣島克佳
（航空自衛隊　航空安全管理隊）

キーワード：職務適性、選抜、ビッグファイブ、開放性次元

【概要】
既存の知見から、防衛、警察、消防等のハイリスク職種要員の選抜の改善に関して考察を行った。現在殆ど評価が行われていないと推定される性格の開放性次元を評価することは、危険と刺激への志向性及びストレス耐性の両面から有益であり、外向傾向等伝統的に評価が行われてきた次元を部分的に代替し得る可能性がある。

【問題】
防衛、警察、消防等のハイリスク職種の要員選抜において、性格特性に関しては外向傾向高く、情緒不安定傾向が低い人を選抜する傾向にあると総括できる（廣島 、2001）。危険は強い刺激であるから、これに耐えつつ好む性格傾向は適合的である。この志向性は、主として外向傾向次元によって担われていると言える。全般的にストレッサーが多いこれらの職種にあっては、ストレス耐性も重要である。ストレス水準が過誤率に影響する（ Lawton et.al.,1998 ）等が広く知られている事から、ストレス耐性は職務遂行上の安全にも関与する。ストレス耐性には情緒不安定傾向が低い事が強く関与する事が明らかである。

これら２次元はここ数十年の選抜で伝統的に用いられており、現在用いられている主要な性格検査も専らこれら２次元を対象としたものとなっている。これに対し、近年ビッグファイブ理論（ Costa et.al.,1985 ）が主流となりつつあり、高々２つの性格次元に基づいて選抜を行う事の妥当性は疑わしく、再検討の余地がある。

各次元の副作用も問題である。外向傾向が過剰な場合、暴力的傾向が出現する可能性があり集団生活に困難を来す。情緒不安定傾向が低すぎる場合動機づけ全般が弱くなり、識能向上に阻害的になり得る。これらの問題を回避して安全率を見込みながら中位の傾向に限定すると、適性のある人員数が減ってしまう可能性がある。

本小論は、外向傾向及び情緒安定傾向がこれらの職種において果たしている機能である、危険または刺激に対する志向性及びストレス耐性の二つの面に対する、開放性次元の作用に焦点を当てて探索し、選抜及び爾後の教育訓練をより柔軟にする事を目的とする。

【ストレス耐性に寄与する開放性次元】
ハーディネス概念（Kobasa,1979）研究は、ストレス耐性と個人差について研究を蓄積して来た。ハーディネスは、 commitment,control,challenge の３つの下位尺度の合成であり、ストレスに対する抵抗性に関わっている事が明らかにされている。

ハーディネスとビッグファイブとの関連性は十分検討されてきたとは言い難い。しかし、 NEO-FFI の外向傾向、勤勉誠実性及び開放性のそれぞれとハーディネス得点の間に相関が見いだされており（多田他 ,2001 ）、開放性次元がストレス耐性の一部として機能する可能性がある。

別の観点からも開放性次元がストレス耐性に及ぼす影響が肯定され得る。トラウマに対する自己内外への開示が心身の健康を改善することが知られている（ Pennebaker,1998 ）。（辻 ,1998 ）は開放性次元を日本人において拡張した概念である遊戯性次元において、内的敏感下位因子を見いだしている。内的敏感因子は自分のこころの動きを感知しようとする志向性であり、内的開示を推進する可能性がある。

【逆転理論が示唆する開放性次元による刺激への指向】
開放性次元は、逆転理論（ Apter,1982) が示す経路によって一定条件の元で強い刺激に対して志向的に作用する可能性がある。

逆転理論は、目的追求的なモード (telic) と非目的追求的なモード (para-telic) を区別し、 para-telic な傾向が強い場合、より強い刺激が強化的であるとするものである。逆に、 telic な傾向が強い場合、比較的弱い刺激を志向する傾向がある事を予測する。

ビッグファイブと逆転理論の関係は十分検討されてきたとは言い難いが、開放性次元は意識内容の変化に対する志向性であるとも定義されるので、開放性傾向が高い人は telic ・ para-telic の切り替え、特に para-telic な状態への切り替えに志向する可能性がある。即ち、逆転理論が妥当であって開放性次元との相関があるならば、権限を大幅に付与し自発的な行動を許容した場合強い刺激や高い危険性に耐えることが期待される。

【引用文献】
Apter,M.J.,1982,The Experience of Motivation: The Theory of Psychological Reversals,Academic Press.
Costa et.al.,1985,The NEO perosonality inventory manual,Odesssa,Fla.:Psychological Assessement Resource
廣島克佳、2001、リスク・マネジメントと性格、危険と管理、第32巻
Kobasa,S.C.,1979,Stressful life events, personality, and health:An inquiry into hardiness. Journal of Personality and Social Psychology,37(1),1-11.
多田志麻子他、2001、ストレス課題に対する心臓血管反応にハーディネスが及ぼす影響、バイオフィードバック研究、第28巻
辻斉、1998、 FFPQ の因子的妥当性と信頼性、５因子性格検査の理論と実際（辻平治郎編）、北大路書房
Lawton,R.et.al.,1998,Individual differences in accident liability,HUMAN FACTORS,Vol.40,No.4,December ,655-671
Pennebaker,J.W.,1997,Opening Up,The Guilford Press and Mark Paterson

（ひろしま　かつよし）

看護学生の意識構造

患者から拒絶反応を受けた場合

○金子潔子(呉大学)
弓削美鈴(足利短期大学)
渡辺ナツ子(広尾看護専門学校)
網野寛子(北多摩看護専門学校)
内海滉(千葉大学)

キーワード　意識構造　看護学生・拒絶反応

1．はじめに

看護学生は、患者中心の看護を行うことは、患者が病気や痛み、生きることに意味を見出せるように援助することであると学んでいる。ワトソンは「ケア過程の要素の一つに患者の肯定的感情と否定的感情を受け入れる能力の向上」をあげている。学生は患者心理とその対応の中で患者の言葉を傾聴することの重要性は学んできているが、実際に臨地実習で患者の拒否的な態度に戸惑うことは少なくない。実際に患者の拒否的な態度に対する学生の反応については、かかわり方の振り返りを通して指導をしている。しかし患者の拒否的な言動に対して倫理的側面からの検討は十分されていないのではないかと考える。

今回、泌尿器疾患患者の事例を用いて、卒業目前の学生に患者の拒否的な言葉に対する態度を、倫理的側面から検討しその意識構造を明確にすることを目的とした。

2．研究方法

1）対象：看護専門学校（3 年過程）3 校、看護短大の卒業直前の学生 296 名　回収率 91.2%

2）方法：事例を用いた質問紙を配布し、説明後、質問紙に回答、その場で回収した。

3）内容：事例(65 歳・男性・前立腺がん患者 4 人)。術後の尿漏れの訴えに対して、同じ説明を繰り返す看護師に、患者が「ぬれたオムツなんか不快だよ。あんたもつけてみろよ」と言われたことについての自由記述。

4）倫理的配慮　：調査前に調査の主旨と成績評価等に関連がないことまた、個人が特定されないこと結果の公表について説明し同意をえた。調査用紙は無記名とした。

5）分析：事例の回答で自由記載のあった 163 名の文節を 3 名の研究者で逐語分析し,KJ 法で分類、421 の文節をさらに検討し 5 項目に分類した。分類した 5 項目の平均値の算定、各項目間の相関を見た。さらに因子分析(バリマックス回転)により因子構造をみた。

3．結果および考察

臨地実習で患者の拒否的な態度に合うことは、実習意欲の減退につながるなど問題となることが多い。今回の調査では、患者の拒否的な反応に対する学生の感じ・思いは必ずしも否定的な結果ではなかった。

事例の「ぬれたオムツなんか不快だよ。あんたもつけてみろよ」という患者の反応に対して、学生の感じ・思いの記述してもらったところ 50.4%の 136 人の回答があった。逐語分析の結果、同情・批判・対応・内省・保身の５項目に分類できた。各項目の内容として　同情では、「かわいそう」「不快だろう」「気持ち悪いだろう」など、批判では「患者と同じではない」「仕方ない」など、対応では「話をよく聞く」「考える」「改善できるように」など、内省では「自分の言葉を振り返る」「反省する」「傷つけてしまった」など、保身では「自分は経験したことないから」「わからない」などであった。

5 項目の平均値は同情が最も高く保身が最も低かった

表1　項目ごとの平均

項目	平均値	標準偏差
同情	46.00	11.55
批判	27.25	3.9
対応	17.25	11.92
内省	13.25	8.55
保身	1.5	2.6

各項目間の相関では、対応と内省・批判と保身で正の相関を示し、批判と対応・批判と内省で負の相関が高い。

表2　項目間の相関

	同情	批判	対応	内省	保身
同情					
批判	-0.12				
対応	0.6	-0.85			
内省	0.5	-0.95	0.99		
保身	0.6	0.56	-0.29	-0.29	

対応と内省で相関が高いことは、どちらも患者のことを考え、ケアにつながる反応を示していると考える。

因子分析では、第一因子「内省・対応・批判」第二因子「保身・同情」第三因子「同情・対応」の３構造に分かれ、因子得点負荷量に学校毎の特徴があった。今後、紙上事例を臨床場面で活用できる為の看護倫理教育の開発・発展させていくことの重要性を認識した。

（かねこきよこ　・ゆげみすず・
わたなべなつこ・あみのひろこ・うつみこう）

ＴＶゲームとパーソナリティに関する一考察

橋本　泰子
桜美林大学大学院国際学研究科

キーワード：ＴＶゲーム、パーソナリティ、大学生

目　的

近年、ＴＶゲームに対して森昭雄氏（2002）は、「前頭前野の脳行動を劇的に低下させるものが多い。これを放置しているとキレやすく、注意散漫で、創造性を養えないまま大人になってしまう。さらに若年性痴呆状態を加速させる可能性がある。表情が乏しい、対人関係が浅い、自己中心的で身なりに氣を使わない、羞恥心がない、人間らしさが乏しい」とその特徴を挙げている。

そこで、大学生を対象にTVゲームの時間の長さによってどのような情緒特性が認められるか、心理テストにより検討した。

対象と方法

対象は都内近郊の四年制大学の学生で、男子 286 名、女子 425 名で、ゲーム時間が１時間内を NA 群、２時間以上をＡ群として男女別に４群に区分した。対象の内訳は表１に示す。使用したテストは、The Star Wave Test：SWT と Wartegg Zeichen Test：WZT で 2003 年９月から１０月に集団方式で実施した。

結果と考察

１．SWT の結果：　男子の主な項目を検討する。３項目に有意差（ｐ<．05）あり。（１）空と海のバランス。ＮＡ群は知性と情緒のバランス良い。A群情緒に偏る。（２）星と海の距離　対人関係の距離を示す。Ａ群は 4cm 以上が 30.4%で、対人関係の希薄さが窺われる。（３）波形　感情状態を表す。荒れている。A群 30.4%，凍結がＡ群 17.4%から情緒不安定で硬い感情特性が認められる。（４）筆跡　薄い、A群４７．８%からエネルギーの低さ、うつ傾向と解釈される。（５）月、あり、A群 65.2%、母親への依存願望だろう。

＊要約　男子；
Ａ群は情緒不安定で、感情表出が少ない。
対人関係が希薄である。母親への依存願望が強く未成熟である。

女子は４項目に有意差（ｐ<・05）が認められた。
（１）星と海の距離。4cm 以上がＡ群 40%で男子と同様に対人関係が希薄。（２）波形、さざなみＡ群０%，NA 群 23.8%凍結、Ａ群 23.3%、NA 群 8.3%から、Ａ群は感情抑制が認められる。（３）筆跡、薄い、荒いがＡ群各 50%から情緒不安定とうつ傾向が窺われる。（４）月、左弦、Ａ群 30%、NA 群 40.5%、２群とも依存的で、主体的決断が困難のようである。（５）流れ星、Ａ群 16.7%、海面暗い、Ａ群 10.0%から挫折体験やうつ傾向・感情の硬さが認められる。

＊要約　女子；
Ａ群は空想的で対人関係は希薄である。
情緒不安があり、挫折体験や抑うつ・無感動の傾向が認められる。
２群とも未来志向が強いが主体的決断が困難である。

２．WZT の結果

男子では１図、２図に有意差（ｐ<．01）が認められた。
男子；Ａ群は、対人緊張が強い。競争場面から虚構の世界へ逃避する。
葛藤場面では、攻撃性を露呈しやすく、このことが行動化と関係すると解釈される。
NA 群は、無意識や繊細な刺激に対応できず回避している。これは、青年期の発達課題であるユングの提唱するアニマの統合化が困難で、いわゆる“永遠の少年”の増加に関係していると推察される。

女子では１、２、４、７、８図に有意差（ｐ<．01）有り。
女子；Ａ群は男子と同様に対人緊張が強く、女性イメージが肯定的でなく、攻撃性を表出しやすく行動化に関係するようである。２群とも父親イメージを求めている。

結　語

大学生を対象に、ゲーム時間の長短によりどのような心理特性が認められるのか、心理アセスメントにより検討を試みたところ、男女とも長時間群は、対人関係の希薄さ、無感動、情緒の不安定さ、攻撃性の統制の困難さ、これが、行動化に関連するようである。

これらの、心理特徴は、森の指摘する表情が乏しい、対人関係が浅い、若年性痴呆状態、キレやすく、創造性が低い、に共通すると考察される。

今後、テレビゲームの影響に関する総合的な調査が必要であるのではと考察される。

表１　対象者の内訳

		男子	女子
Ａ群	人数	23 名	30 名
	平均年齢	19.7	19.3
	SD	1.49	0.83
NA 群	人数	36 名	84 名
	平均年齢	19.8	19.4
	SD	1.35	0.94

＊2 群間年齢に有意差なし。

（はしもと　たいこ）

性能的性格（３）

－慎重・綿密性の自己評定値と作業成績との関連その２－

○川島　大司　　岡村　美奈　　久米　稔
（東海女子大学　人間関係学部）　（ｱｲ ｼｰ ﾃﾞｨｰ）　（適合性評価研究所）

慎重・綿密性　自己評定値　作業成績

［目的］

これまでの性能（慎重・緻密性）に関する自己評定尺度値（ＥＰ－Ｓ，ＳＥＣ－Ｓ）と実際の作業成績（鏡映描写検査のはみ出し数とＣＥＬ－Ｓの見落し率）との関連性を検討してきたが、本研究では、これら（ＥＰ－Ｓ，ＳＥＣ－Ｓ）の自己評定尺度値と実際の作業成績（ＣＥＬ－Ｓの見落し率とワープロ（無意味綴）練習時の誤入力数）との関連を検討した。

［方法］

被験者：女子大学生　３４６名

材　料：性能に関する自己評定尺度（ＥＰ－Ｓ，ＳＥＣ－Ｓ）と作業検査（ＣＥＬ－Ｓ，ワープロ練習検査）

手続き：作業検査（ＣＥＬ－Ｓ）を実施する前に、性能に関する自己評定尺度（ＥＰ－Ｓ，ＳＥＣ－Ｓ）に自己評定してもらい、その後、作業検査（ＣＥＬ－Ｓ，ワープロ練習検査）を実施した。ＥＰ－Ｓ検査の慎重綿密型尺度（慎重：０，全然その通りでない～４，全くその通り、の５段階）、ＳＥＣ－Ｓ検査の慎重綿密性尺度（何かする時：０，全然慎重さが足りない～４，とても慎重、の５段階）の得点を採点した。作業検査（ＣＥＬ－Ｓ）は、43行の普通の英文で、それぞれの行の中にある「ｅ」の数を行毎に数えて記入してもらい（４分間）、総見落とし数を算出し、見落とし率（％）＝（総見落とし数／正答数）×100を算出した。作業検査（ワープロ練習検査）は英文の無意味綴りの文章を、６０分間ワープロで打ってもらう。最終２試行の誤入力数の中間値（入力時の作業態度）を計算した。

［結果と考察］

図１はＥＰ－Ｓの慎重・綿密型得点（Ｃ得点）とＣＥＬ－Ｓの見落とし率（Ｃ得点；Ｃ得点が高いほど、見落し率が低い）をプロットしたものである。両者間の相関係数を求めた結果、r=.129（N=142）という値が出、両者の間に関連は認められなかった。

図１の中で、慎重・綿密型得点（Ｃ得点）>7.5かつＣＥＬ－Ｓの見落とし率（Ｃ得点）<2.5に該当する３名（慎重・綿密型Ｃ得点,見落し率Ｃ得点で8,1が１名、9,0が２名）の被験者は、慎重・綿密性の自己評定尺度では、「極めて慎重・綿密」と評定していたにもかかわらず、実際の作業では、見落としが極めて多く、慎重・綿密さに欠け、両尺度の結果に不一致が認められたものである。

この不一致者３名を除いた１３９名による両尺度間の関連を相関係数で求めたところ、r=.221（P<.01）という値が出、両尺度間に関連が認められた。

表１は慎重・綿密性の自己評定値と作業態度の関連で、慎重・綿密性の自己評定では、「慎重・綿密でない」か「あまり慎重・綿密でない」と評定していたにもかかわらず、実際の作業では、慎重・綿密である場合と、これとは逆に、自己評定では、「極めて慎重・綿密」と評定していたにもかかわらず、実際の作業では、慎重・綿密さに欠けた場合の、不一致者を含む場合と除く場合の相関係数が示されている。

性能的性格（１）[1]の報告では、慎重・綿密型得点（ＥＰ－Ｓ）とはみ出し数（鏡映描写）の間には関連が認められた。しかし、慎重・綿密性は劣るが、はみ出し数の少ない、両尺度間が不一致の被験者も存在した（18.2～20.0％）。

性能的性格（２）[2]の報告では、過小あるいは過大評価をする傾向を示す被験者（17.5％）がいたことが判明した。

今回の場合は、２種類の自己評定尺度（ＥＰ－Ｓ，ＳＥＣ－Ｓ）と作業検査（ＣＥＬ－Ｓ，ワープロ練習検査）において、不一致者を除くと両尺度間に関連が認められることが判明した。

また、作業成績である見落し率（ＣＥＬ－Ｓ）と入力時の作業態度（ワープロ練習）の両者間の相関係数を求めた結果、r=.289　（N=103,P<.01）の値が出、両尺度間に関連が認められた。それに加え、両尺度では不一致者がまったく認められなかったことから、自己評定尺度では過小、過大評価する傾向が認められるが、作業検査ではそのような傾向が認められないことが判明した。

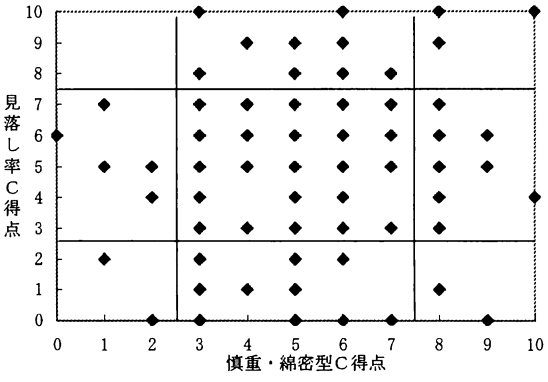


図１ EP-Sの慎重・綿密型得点とCEL-Sの見落し率Ｃ得点(単相関係数 r=.129 N=142)

表１ 慎重・綿密性の自己評定尺度値と作業成績との関連

	不一致者を含む	不一致者を除く
	見落し率(CEL-S)	見落し率(CEL-S)
慎重・綿密型(EP-S)	R=.129 N=142	r=.221 N=139 **
	入力時の作業態度(ﾜｰﾌﾟﾛ練習)	入力時の作業態度(ﾜｰﾌﾟﾛ練習)
慎重・綿密型(EP-S)	r=.085 N=244	r=.142 N=240 **
	試行数(CEL-S)	試行数(CEL-S)
慎重・綿密性(SEC-S)	r=.073 N=141	r=.225 N=136 **
	入力時の作業態度(ﾜｰﾌﾟﾛ練習)	入力時の作業態度(ﾜｰﾌﾟﾛ練習)
慎重・綿密性(SEC-S)	r=.086 N=346	r=.163 N=338 **

｛文献１｝川島大司等：性能的性格（１）日本応用心理学会第６９回論文集．２００２
(かわしま　だいじ)(くめ　みのる)
｛文献１｝川島大司等：性能的性格（２）日本応用心理学会第７０回論文集．２００３
(かわしま　だいじ)(くめ　みのる)

「血液型性格学」は信頼できるか（第21報）

—埋もれた心理学史を尋ねて　第2報—　目黒宏次・澄子の「人間関係学」を評論する

○大　村　政　男　　浮　谷　秀　一
日本大学　　東京富士大学

Key Words：血液型　気質　性格　目黒宏次　目黒澄子

はしがき　ABO式4型の血液型（Blood Group）と主として人間の気質・性格が関連しているという古川学説は，彼が『心理学研究』第2巻4輯（1927年8月）に「血液型による気質の研究」を発表して以来、さまざまに変貌して現在にいたっている。この変貌のなかに，石川七五三二の「血液型性格心理学」1931，目黒宏次・澄子の「人間関係学（関係的人間学）」1970、能見正比古の「血液型人間学」1971などを見出すことができる。この三者のうち，ほとんど注目されていないのが目黒夫妻による業績である。夫妻の著書が私家版レベル（現代心理研究会刊）のものだったせいもあるが，すぐあとに出版された能見の『血液型でわかる相性』1971（青春出版社刊）に喰われてしまったとみていいと思う。この発表は，「埋もれた心理学史を尋ねて」の第2報として目黒夫妻の思想を紹介しようとするものである（第1報は1989年の教心31回総会における「血液型気質相関説」）。

目的　目黒宏次・澄子著の『気質と血液型－関係的人間学への試み』（1970）を通して「人間関係学」の思想を明らかにしようとする。

思想の原点　最初、血液型の迷路に這り入んだのは澄子のほうだったという。彼女は，古川学説に興味を持ち，日常的に接触する人びとの血液型を当てることに専念した。そして個人が相手の血液型を想定する場合，一定の法則があることに気づく。要するに「ある人がどういう気質をもっているという場合、その人を云々する批評家の血液型が問題になる」（原文のまま）ということを発見するのである。これが原点になり、古川の血液型気質相関説から目黒夫妻の人間関係学，あるいは関係的人間学が誕生してくるのである。

方法　目黒夫妻は日常的な行動観察によって新しい理論を建設したので，その思索の軌跡を辿ることになる。なお，目黒理論を紹介した前川輝元（亜細亜大学）の『血液型人間学—運命との対話—』松籟社（1998）には触れないことにする。

結語＜1＞目黒夫妻の古川批判　古川がその研究の当初から使用している自省表（気質調査表）と血液型との関連には，古川が述べているような強い相関は見られない（大村：古川が得た東京女高師関係のデータは，回答者が古川の意図を忖度して作為的に反応しているという風評がある）。A型気質，B型気質，O型気質，AB型気質の差異は，本質的なものではなく量的な差異の表われ方が違うだけである。気質を調べるには，調査表を用いるのではなく，まず血液型を検査して，A型はこういう気質，B型はこう……と観察帰納すべきだと思う（気質の差異は量的なものなのであろうか。まず個人の血液型を検査し，その血液型に相応する気質を観察帰納すべきだ—という方略にはおどろかされる）。

結語＜2＞目黒夫妻は気質をどう考えていたのか　血液型に拠らなくても，気質の差異は単に量的なものとは考えられない。質的であり，かつ量的である—というならば了解することができる。表1は，木下政市たちによる浮浪者の血液型分布である。浮浪者には観察値と期待値の比較において，B型は90.5人，AB型は128.7人多い。$\chi_0^2=237.9$になっている。

表1　浮浪者（ルンペン）の血液型分布（1932年当時）

数値	A	B	O	AB	合計
観察値	356 (29.9)	343 (28.8)	249 (20.9)	243 (20.4)	1191
期待値	455.0	252.5	369.2	114.3	1191.0

（注）表中のカッコ内は%である。

表1の結果を正面に受けとると，B型とAB型とに浮浪性があることになる。1932年当時はχ^2検定というような技法はなかったので，木下たちは当時の日本における血液型分布を比較のために持ち出してくる。すなわち，A型は38.2%，B型は21.2%，O型は31.0%，AB型は9.6%というぐあいである。そうするとB型は7.6%，AB型は10.8%も多いことになる。しかし，木下たちはAB型には触れないで「このように浮浪者にB型者が多いというとB型者のうちには不快感を抱く人があるかもしれないが，それは理由のないことである。単にB型者が物事に淡泊であり，執着心に欠けるという気質の例を挙げたにすぎない。」と記述している。このような御都合主義の論理は，血液型気質・性格研究者によく見られるところである。この考え方は，個人の気質が個性的で，同一の血液型者間に共通の気質が見られるという仮説に基づいている。これに対して目黒夫妻は，A型とB型，B型とO型，A型とO型，AB型と他の3型との間に一定の相対的関係があり，そしてそこにはたらく法則は，性別，年齢，国籍によって変化することはないと主張する（気質というものがないとか，気質と血液型は無関係だといっているわけではない，気質は絶対的なものと同時に流動的なものである—としているのである）。古川学説を古典的実体論とすれば，目黒夫妻の考え方は道具的（手段的）状況論といえるかもしれない。

結語＜3＞目黒夫妻の血液型人間関係論　目黒夫妻の記述のなかからかれらの人間関係論のベースを見出してみよう。

ひとはつねに自我の拡大を志向するものであるから，血液型との関連をのべるならば，ひとは対象を同型と考えるのではないかと思う。（中略）また，ひとはつねに相手を征服支配しようとしているから，相手を支配しやすい型と考えるのではないかと思う（原文のまま）。

このような閃きをもとにして目黒夫妻の人間関係論が構築されてくる。不等号で示すと次のようになる。

O型＜A型（A型はO型に対し強者），B型＜O型，A型＜B型。さらに興味があることはこの強弱関係は循環することになる。ここにはAB型が含まれていない。AB型は，古川以来外観的行動はB型的だが思考形態はA型となっている。目黒夫妻もAB型をその二重性（それは本当なのか）のために上記の人間関係論の枠には入れていない。その障壁を乗り超えて，循環的強弱関係の図式を完成したのは能見正比古である。能見は古川竹二や目黒夫妻の著述を下敷きにして能見一門の「血液型人間学」を構成している。特に古川からのコピーは巧妙である。

結語＜4＞目黒宏次と鈴木芳正　目黒宏次の門下ともいえる人に鈴木芳正がいる。彼は，日本大学（経済学部）教授の田崎仁の研究室にいて，心理学研究の方略を会得した。彼は産心社という出版社を持っているので，血液型についての出版部数もきわめて多い。目黒夫妻の人間関係論は鈴木のなかに生きている—といっても過言ではないと思う。能見は鈴木を剽窃者として弾劾したけれども，能見も古川をコピーしているのである。能見はprojectionの渦中にあったといってもいいと思う。すべては古川竹二に帰せられるが，血液型と気質を繋ぐ機制は杳としてつかめない。

（おおむら　まさお）　（うきや　しゅういち）

ＭＳＣ（創造的構え）テスト改訂の試み（８）

タイプ・グループによる検討　そのⅡ

○寺澤美彦　　久米　稔　　成田　猛　　高野隆一　　伊賀憲子　　内藤美智子
（日本福祉教育専）（適合性評価研究所）　（秋田桂城短大）　（文化女子大）　（松本短大）

キーワード：創造的構え、タイプ・グループ、閃き型

［はじめに］　創造性の発揮には創造的思考能力のほかに、パーソナリティー変数である創造的構えが関係するといわれている。そこで、本研究者らはＭＳＣ創造的構え検査を作成し、数年にわたって改訂をおこなってきた。昨年よりＴＣＴ検査の閃き型に、ｏ反応の伴わないもの（飛躍的閃き型）と、伴うもの（漸進的閃き型）とがあることに注目、これらの出現に基づいた５つのタイプ・グループを設定して、ＭＣＳ検査各尺度との関連を考察している。今回の報告では被験者を拡大し、段階点ではなく粗点を用いた。

［方法］　被験者：秋田県内高校２年生男女758名。

検査課題：ＴＣＴ創造性検査（言語性下位検査として用途、原因推定、標題付け、非言語性下位検査として四点描画、想像力、図案発見からなる）およびＭＳＣ創造的構えテスト（性格尺度として自己信頼性、客観性、慎重性、動機づけ尺度として挑戦性、探究性、積極性がある）。

手続き：ＴＣＴ、ＭＳＣともに集団で実施した。ＴＣＴは被験者を６下位検査を通しての発想タイプ（飛躍的閃き型、漸進的閃き型、理詰型、柔軟型、流暢型、硬直型の６タイプがある）の出現傾向に基づいて５つのタイプ・グループに分類した。タイプ・グループは、群１：漸進的閃き型・同準型（飛躍的閃き型１または漸進的閃き方２以上）、群２：理詰型・同準型（漸進的閃き型１または理詰型２以上）、群３：理詰型（１個）～（理詰型１以上）、群４：流暢型～柔軟型（流暢型または柔軟型のあるもので群５の硬直型・同準型を除く）、群５：硬直型・同準型（硬直型４以上）の５つからなる。この中では、群１が最も課題の枠組みにとらわれない発想ができることになる。ＭＳＣは各尺度とも群ごとに平均値および標準偏差を求めた。

［結果と考察］　表１は昨年度報告した女子高校生126名における結果で、数値は段階点によるものである。表２は高校生男女758名における結果で、数値は粗点によるものである。データ数は約５倍となったが、タイプグループの出現比率は、群１、群３、群４がほぼ同じ、群２では増加、群５では減少した。被調査学校数が増えれば安定してくるものと思われる。

手続きで述べた５つのタイプ・グループ間の、平均値の差の検定結果（ｔ検定）は次のとおりであった。

自己信頼性では、群１と群４（t=2.706,p<.01）、群１と群５（t=2.875,p<.01）の間に１％水準で有意差がみられ、ほかに群２と群４、群２と群５、群３と群５の間に５％水準で有意差がみられた。群１の得点が高く、群５の得点が低いという特徴は昨年と同様である。

客観性では、群１と群５（t=4.591,<.001）、群２と群５（t=3.819,p<.001）の間に0.1％水準で有意差がみられ、群１と群３、群１と群４、群３と群５、群４と群５の間に１％水準で有意差がみられた。今回は群１が特に高くなるという傾向が見られたが、群５が特に低いという傾向は昨年と同様であり、より課題の枠組みにとらわれない発想ができる者ほど客観性が高いことを顕著に示している。

慎重性では、群３と群２（t=3.242,p<.01）、群５と群２（t=2.647,p<.05）、群４と群２（t=2.390,p<.05）との間に有意差がみられた。慎重性は群５で高く、枠組みにとらわれない発想には抑制的に作用する可能性が今回も示唆された。しかも平均値の最も低くなるのは群２で、数字の上では群１は群２よりも多少高いという点も昨年同様であった。

挑戦性では、群１と群４（t=3.529,p<.001）、群２と群４（t=3.361,p<001）、の間に0.1％水準で有意差がみられた。他にも群２と群３、群１と群５、群２と群３（以上１％水準）群２と群５（以上５％水準）で有意差がみられ、昨年有意差のあった組合せには、すべて今回も有意差がみられた。ただし昨年は群１より群２のほうが得点が高いという傾向にあったが、今回は自己信頼性や客観性同様、枠組みにとらわれない群ほど得点が高いという結果となった。

探究性では昨年同様、群間に有意差はなかった。

積極性は、今回ただひとつ群３と群１（t=2.197,P<.05）の間に有意差がみられた。しかし群１と群５の両極が低めであるという傾向は昨年同様であった。

創造的思考と関連の深いのは自己信頼性、客観性、挑戦性の３尺度であり、慎重性は発想に対して抑制的に作用するという傾向は今回のデータでも確認することができた。

（てらさわよしひこ、くめみのる、なりたたけし、たかのりゅういち、いがのりこ、ないとうみちこ）

表１．ＴＣＴタイプ・グループ別ＭＣＳ検査結果（段階点の平均値と標準偏差）　N=１４６

	N	自己信頼性	客観性	慎重性	挑戦性	探究性	積極性
１漸進的閃き型・同準型	20	3.1(0.67)	3.1(1.22)	3.0(1.07)	3.1(0.92)	2.9(0.77)	2.9(1.01)
２理詰型・同準型	27	3.0(0.88)	3.1(1.15)	2.7(0.86)	3.3(1.04)	2.8(0.82)	3.0(1.17)
３理詰型(1個)～	51	3.0(0.86)	2.5(1.16)	3.0(1.07)	2.9(1.12)	3.0(1.07)	3.0(0.88)
４流暢型～柔軟型	36	2.7(0.97)	2.5(1.09)	3.1(0.91)	2.7(0.97)	2.9(1.15)	3.1(0.85)
５硬直型・同準型	12	2.3(0.72)	2.1(0.86)	3.7(0.62)	2.3(0.72)	2.6(0.95)	2.9(1.11)

表２．ＴＣＴタイプ・グループ別ＭＣＳ検査結果（粗点の平均値と標準偏差）　N=７５８

	N	自己信頼性	客観性	慎重性	挑戦性	探究性	積極性
１漸進的閃き型・同準型	112	9.3(3.822)	15.2(4.061)	11.4(4.492)	16.6(4.713)	15.6(3.269)	10.6(4.415)
２理詰型・同準型	235	8.8(3.723)	14.5(4.308)	10.5(4.425)	16.1(4.816)	15.4(3.739)	11.4(4.488)
３理詰型(1個)～	216	8.8(3.619)	14.0(3.838)	11.8(4.315)	14.9(4.701)	15.4(3.660)	11.6(4.413)
４流暢型～柔軟型	177	8.1(3.577)	13.8(3.674)	11.8(4.002)	14.5(4.945)	15.0(4.066)	11.4(3.998)
５硬直型・同準型	18	7.0(3.029)	11.6(2.933)	13.2(4.250)	12.4(5.893)	14.4(3.899)	10.5(4.502)

妻の自己開示と夫婦関係満足度の関連性

自己開示尺度の作成と関連要因との相関関係

○虎谷美保　冨重健一[1)]
([1)] 武蔵野大学通信教育部)

キーワード：自己開示、夫婦関係、コミュニケーション

【問題と目的】 従来の国内の自己開示研究では、ほとんど取り上げられてこなかった「夫婦間の自己開示」について、妻の側から検証し、新たに尺度を作成し、夫婦関係満足度との関連を明らかにすることが、本研究の目的である。

夫婦間の自己開示は、長期にわたる親密な二者関係を前提として行われる。その自己開示は常にオープンとは限らない。関係の変化に伴い、自己開示の内容や量は変容するであろう。また夫婦であっても、あるいは夫婦であるからこそ、話す際に何らかの抵抗感のあるものが含まれるであろう。

米国では、自己開示をポジティブ/ネガティブの別で分類する場合があるが、ここでは、抵抗感の有無に着目した。抵抗感の有無というのは、「相手への表現の適切さ」を反映するだけでなく、話し手の感情（恐れ、ためらいなど）や価値観までを包含するからである。

本研究では、妻が夫にどのような自己開示をしているか、また、その内容と量、抵抗感が夫婦関係満足度にどのような影響を与えているかについて、夫婦間自己開示の縦断的研究の第一歩と位置付け、検証を試みる。

【予備調査】 質問項目収集に際し、まず国内外の自己開示関連の先行研究をあたったが、海外の研究では文化差・時代差があり、国内の研究でも青年対象が大多数であったため、概要を参考にするに留めた。また、実際の夫婦間自己開示の内容や領域を明確にするため、既婚女性 11 名の半構造化面接を実施し、抵抗感の有無という面から 28 項目の自己開示質問項目を作成し、本調査にて用いることとした。

【本調査】【方法】 2003 年 8～9 月に、通信制大学に在籍する既婚女性を中心に、郵送法とインターネット（パスワード入力）による匿名での回答を依頼、実施した。有効回答数は 209 であった。年齢層は 33 歳から 44 歳までが全体の 70%、結婚年数は 6 年以上 15 年以下が約半数を占めていた。主な調査内容は以下の 4 種類の質問項目であった。

1．自己開示の頻度について測定する質問項目：予備調査を通じて作成した 28 項目の自己開示質問紙を用いた（4 件法）。質問項目は「抵抗があると考えられるもの」「抵抗がないと考えられるもの」が、ランダムに呈示されるよう配置した。

2．自己開示抵抗について測定する質問項目：1 と同様の自己開示質問紙項目を用いた（4 件法）。

3．自尊感情尺度： Rosenberg (1965) の自尊感情尺度の邦訳版（山本・松井・山成, 1982）（10 項目 4 件法）を用いた。

4．夫婦関係満足度：諸井（1996）によって翻訳された夫婦関係満足尺度を用いた（6 項目 4 件法）。原版は、Norton (1983) の QMI である。

【結果と考察】 自己開示の頻度を測定する質問項目に対して、アルファ因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子の解釈可能性を考慮して 2 因子を抽出し、両因子に同時に高い負荷を示す項目や、いずれの因子にも高い負荷を示さない項目 6 項目を削除し、再度分析を行った。

表 1．各変数の平均、標準偏差、α係数

変数	平均（標準偏差）	α係数
親密開示	33.44 (8.69)	0.924
動揺開示	23.93 (7.02)	0.890
親密開示抵抗	18.21 (6.12)	0.879
動揺開示抵抗	22.15 (7.45)	0.911
自尊心	36.11 (7.30)	0.848
夫婦関係満足度	18.33 (4.21)	0.906

第 1 因子に高い負荷量を持つ項目を検討すると、「夫に感謝しているところ」「結婚生活で満足している点」「夫への愛情表現」「付き合いだしてからの思い出話」「自分の人生の目標・生きがい」などの話が含まれていた。これらは夫婦関係の親密さを深める方向に作用すると解釈できた。そこで第 1 因子を『親密開示』因子と命名し、12 項目得点の合計点を下位尺度（親密開示得点）として構成し、分析に用いることにした。

第 2 因子に高い負荷量を持つ項目では、「結婚生活に不満な点」「夫に我慢している点」「夫の負担が増えるような要望」「お金の使い道についての悩み事」といった内容が含まれていた。これらは夫婦関係を動揺させる方向に作用すると解釈できた。よって第 2 因子を『動揺開示』因子と命名し、10 項目得点の合計点を下位尺度（動揺開示得点）として構成した。なお、今回の因子分析の結果を「自己開示に対する抵抗感」について尋ねた項目データにも適用し、自己開示の頻度と同様の方法で 2 つの下位尺度を構成することにした（『親密開示抵抗』『動揺開示抵抗』得点）。

各下位尺度の平均、標準偏差、α係数を算出した（表 1）ところ、すべて高い信頼性を示した。既存尺度の自尊心や夫婦関係満足度の信頼性も高い値を示していることから、4 つの下位尺度の妥当性が支持された。

各変数の相関係数（表 2）において、夫婦関係満足度ともっとも強い相関がみられたのは、親密開示であった。一方、親密開示は動揺開示とも強い正の相関があり、親密な自己開示が多い妻は，動揺自己開示も多く行っている（あるいはその逆）ことが示唆された。これにより、米国の先行研究と同様、自己開示と夫婦関係満足度に強い正の相関があることが明らかになった。また、国内での夫婦関係研究においてたびたび指摘されてきた「会話によるコミュニケーション」の重要性を、妻の自己開示の観点から裏付けたといえよう。

自己開示と抵抗の間には，親密／動揺のいずれの側面でも負の相関が示された。つまり、親密開示を多く行う妻は，親密開示に対する抵抗が少ない。動揺開示でも同様の傾向が見られた。ここから、開示内容に関わらず，抵抗の小ささが実際の開示行動を促していることが示唆された。また、自尊心と夫婦関係満足度は正の弱い相関が認められた。

（とらたに　みほ ・ とみしげ　けんいち）

表 2．各変数の相関係数

	動揺開示	親密開示抵抗	動揺開示抵抗	自尊心	夫婦関係満足度
親密開示	0.632**	-0.718**	-0.452**	0.147*	0.644**
動揺開示		0.582**	-0.530**	0.034	0.280**
親密開示抵抗			0.582**	-0.232**	-0.592**
動揺開示抵抗				-0.162*	-0.369**
自尊心					0.264**

(**p<.01, *p<.05; n=209)

笹本戒浄と元良勇次郎の研究交流の序論的研究

—明治 41 年 7 月 8 日の讀賣新聞の記事を中心にした予備的検討—

高木　宣行
（龍谷大学大学院文学研究科）

key words:　元良勇次郎、笹本戒浄、明治 41 年 7 月 8 日の讀賣新聞、心理学史、仏教学、唯識

1-1. 笹本戒浄に関する概観：笹本戒浄(1874-1937)は、心理学者と仏教の僧侶を兼ね、仏教哲学を心理学的に研究し、その研究成果を幾つかの学術誌に残している。また彼は、日本心理学の父祖的存在である元良勇次郎に師事し、相互に研究交流を行ったとされ、その逸話が椎尾(註1)、笹本(註2)、千葉(註3)、梅崎らによって文献に示されている。しかし後世において、笹本の仏教僧侶としての著名な活動業績に関する回顧は度々なされるが、彼の心理学的業績に関する心理学者による再検討は、千葉胤成による研究がある他はあまりないと言っても過言ではない。**1-2. 笹本戒浄の心理学に関する略歴**：笹本は 1898（明治 31）年に浄土宗本校（現在の大正大学(註4)）を卒業、つまり仏教の宗派の学路を修学後、椎尾(1937)に曰く「普通の學路に更進」して、更に普通の学路を修めることとした。よって笹本は、同年に郁文館中学に編入学し、第四高等学校を経て、1902（明治 35）年に東京帝国大学文科大学の哲学科に入学し元良勇次郎のもとで心理学を学んだ。当時の大学は 3 年間の修学とされ、笹本は東大の心理学専修の第一期生(註5)として卒業する筈であったが、1 年間卒業を延期して修学し、第二期生として 1906（明治 39）年に卒業。その後 2 年間程度、東大大学院に在籍。また 1906（明治 39）年より宗教大学（現在の大正大学(註6)）等で心理学を教授した（笹本,1988; 梅崎,1987）。**2. 問題と目的**：**2-1. 笹本心理学に関する研究課題**：筆者は、笹本研究において、(1)笹本心理学の内容的検討、(2)その心理学史的意義、(3)笹本と当時の心理学者らの交流の様相、(4)元良の論文にみられる仏教学について、笹本からの影響の有無、等の検討を進めている。特に佐藤(2000)によれば、元良の東洋哲学論は、フランス心理学の父祖的存在である Ribot,Th.らの関心も得ている。筆者が思うに、この元良の東洋哲学論には仏教的知見も含まれており、笹本の影響の有無について関心を有する所である。**2-2. 本稿の検討範囲**：表題の新聞記事に関し、笹本の検討を中心に予備的検討を行う。**3-1. 明治 41 年 7 月 8 日の讀賣新聞の記事について**：当記事は、「讀賣新聞,1908（明治 41）年 7 月 8 日,朝刊,3 面　第一萬一千百七十四號」に掲載。当記事は最近の日本心理学史研究において、佐藤(2002)に、元良の人柄の検討文脈の中で取りあげられている。

3-2. 讀賣新聞の当記事の全文

學界の一美譚　元良博士膝を折って　一學生の教を請ふ

文學博士元良勇次郎氏と云はゞ我國心理學の泰斗として知られ居れるが同氏は近頃心理學の奥秘を佛書より探究せんとて「瑜伽」及び「唯識」等の經文を熱心に研究し始めしが抑も此動機は浄土宗の僧侶にて東京帝國大學を本年優等にて卒業せし笹本戒浄（二十六）の心理學に於ける卒業論文を視て今日より三千年の昔に釋迦が早くも今日の發達せる心理學と少しも異ならざる學説を説き盡して餘蘊なきに一驚を喫し印度の元始時代の典籍を研究せば今日に發見せられざる心理も發見されざる限りにあらずとて直ちに博士は自ら笹本氏に面會を求め諸種の經文の借讀を請ひしが由來佛典は特別の解釋力無ければ理解し難き點もあるとて更に毎土曜には笹本氏に請ひて講釋を聽き一方には博士が心理學上の諸説を笹本氏に講義し交換的研究を始め師弟相互に汗水流しての研究に日も足らぬ有様なりとかにて近頃學界の美事として噂され居れり

4. 検討事項：**4-1.「近頃」とはいつ頃か**：当記事に曰く、元良は、笹本の「卒業論文を視て」、「近頃（中略）經文を熱心に研究し始め」とある。ここで先ず「一文ごとの記事内容の確度」が問題となる。次に「笹本と元良の交流開始時期」も検討を要する。また「笹本と会う以前と以後」の「元良の仏教研究の到達点」の比較も必要である。サトウ(2001)によれば元良には 1895 年に参禅体験もある。**4-2.「卒業」とは大学か大学院か**：当記事に曰く「本年優等にて卒業」とあるが、東大の『卒業者名簿』、笹本(1988)、梅崎(1987)によれば、笹本の大学卒業年は 1906 年であり、その後、大学院に 2 年間程度在籍したことから、大学院修了が当記事の「本年」、つまり 1908 年ではと推察される。なお当記事は 7 月発行であるが、当時の『哲學雑誌』の「彙報」によれば、当時の東大では夏に卒業式、秋に入学式が挙行されたとみられる為、季節的な問題はないと思われる。**4-3. 記事中の年齢の検討**：当記事中の笹本の年齢については「二十六」と読める。但し筆者の参考資料は、CD-ROM 版『明治の読売新聞』からの複写物であるが、劣化が見られ、新聞発行時は「三十六」と記されていた可能性もある。しかし笹本(1988)や梅崎(1987)によると、笹本は 1874 年 1 月誕生で、当記事は 1908 年 7 月発行であるから、これに従えば当記事発行時点で笹本は満 34 歳、数え年 35 歳と考えられる。記者の早合点の可能性も推察されるが要検討事項である。**4-4.「交換的研究」の実施曜日**：「交換的研究」は、千葉(1959)においては「交換教授」と記されている事柄である。これは当記事では「毎土曜」に実施とあるが、笹本(1988)や梅崎(1987)によれば、元良宅にて「毎週二日宛（ずつ）」であり、その整合性が問題になる。**5. 今後の課題**：当記事の検討は途上であり、まだ他の検討課題が残存する。また笹本に関する他の資料の検討、また元良論文や、『元良博士と現代の心理学』等も検討が必要である。元良は基督教や仏教をめぐっての懇談を行うこともあり、仏教に詳しい知人も数名いたとみられる為、それらの検討も必要である。**註 1：椎尾辨匡**(1876-1971)：仏教学者。東京帝国大学等に学び、衆議院議員、大正大学学長等を務めた。（惠谷(監修),1974）笹本戒浄とは宗門学校以来の学友。**註 2：笹本浄光**：笹本戒浄の長男。仏教学を修学後、千葉胤成のもとで心理学を学ぶ。太平洋戦争中に戦死。彼が笹本戒浄の逸話を綴った『父の思い出』は仏教系雑誌の『光明』誌に 1938 年から連載。なお筆者は 1988～91 年の再連載版を参考にした。**註 3：千葉胤成**(1884-1972)：京都帝国大学の心理学の第一期生。東北帝国大学、満州の建国大学、日本大学等で教鞭をとる。「固有意識論」等を研究。笹本戒浄、笹本浄光とは仏教学や心理学をめぐり研究交流をした。**註 4, 6：大正大学**：仏教系各宗の連合大学。その前身校名は、笹本の所属した浄土系としては、明治・大正期に浄土宗本校、浄土宗大学、宗教大学等の校名変更を経た。**註 5：東大心理学専修の第一期生、第二期生**：佐藤(2002)や『卒業者名簿』（東京帝國大學文學部學友會,1936,神戸大学所蔵版）も参考にした。　（たかぎ　のぶゆき）

ユーモア測定尺度の作成（2）

― 性差・年齢差・性格検査との関連 ―

宇惠　弘
（関西福祉科学大学　社会福祉学部）

キーワード：ユーモア，性差，性格検査

【研究の目的】　先行研究（宇惠，2003）では，Humor Orientation Scale (HOS), Humour Initiation (HI), Coping Humor Scale（CHS），Sense of Humor Questionnaire（SHQ）の日本語版作成の第一歩として，尺度の邦訳，項目分析，因子構造，再検査信頼性について報告をした。

本研究では，HOS，HI，CHS，SHQ 日本語版の妥当性検証の１つとして，性格検査との関連を検討することが目的である。

【方法】　調査対象者：（調査 1）大阪府下私立大学学部生 309 名（男子学生 115 名，女子学生 193 名，性別年齢未記入 1 名，平均年齢 22.2 歳，SD=2.4 歳）。（調査 2）大阪府下私立大学学部生 171 名（男子学生 64 名，女子学生 107 名，平均年齢 19.4 歳，SD=1.3 歳）。

調査時期：（調査 1）2002 年 7 月（調査 2）2003 年 7 月。

測定方法：（調査 1）HOS は 17 の質問項目に対して，「そう思う」から「そう思わない」の 5 件法で回答を求めた。HI は 6 つの質問項目に対して 5 件法で回答を求めた（選択肢の内容は項目によって異なる）。CHS は 7 つの質問項目に対して，「そう思う」から「そう思わない」の 4 件法で回答を求めた。SHQ は 21 の質問項目に対して 4 件法で回答を求めた（選択肢の内容は項目によって異なる）。（調査 2）上記 4 種類の尺度に，NEO FFI 人格検査をあわせて施行した。

【結果】　(1)確認的因子分析，尺度間相関

宇惠（2003）で提案された探索的因子分析の結果に対して確認的因子分析を行った。Table1 に示した適合度指標の数値より，各尺度の因子モデルの全体的評価は概ね良好であった。

尺度間の相関（Person の積率相関係数）は HOS, HI, SHQ の第 1 因子（SHQF1）の 3 種類の尺度間の値が高く，全般的にも高い数値をしめしていた（Table2）。分析には調査 1 の資料を使用した。

Table1　各尺度の適合度指標

	GFI	AGFI	RMR
HOS	.856	.815	.067
HI	.942	.827	.086
CHS	.982	.958	.027
SHQ	.933	.892	.036

Table2　尺度間の相関

	HOS	HI	CHS	SHQF1
HI	.761**	–	–	–
CHS	.477**	.447**	–	–
SHQF1	.771**	.683**	.487**	–
SHQF2	.411**	.345**	.200**	.327**

**：1%水準で有意

(2)性差，年齢差

項目の得点を加算し，因子毎に因子得点をもとめ，性差と年齢差を調べた。その結果，CHS と SHQ の第 2 因子（SHQF2）に有意水準 5%で性別による差がみられた（CHS: $t(197.67)=2.37$，男子学生 M=16.54＞女子学生 M=15.57; SHQF2: $t(191.78)=-2.00$，男子学生 M=14.88＜女子学生 M=15.47）。年齢については，便宜的に 18 歳と 23 歳以上の２つのグループをつくり，その差を検討した。その結果，SHQF2 を除く尺度において年齢による差がみられた（HOS: $t(119)=-2.24$, $p<.05$，18 歳 M=52.45＜23 歳以上 M=58.00, HI: $t(126)=-2.11$, $p<.05$，18 歳 M=13.85＜23 歳以上 M=15.95, CHS: $t(122)=-3.71$, $p<.01$, 18 歳 M=14.85＜23 歳以上 M=17.27, SHQF1: $t(127)=-2.09$, $p<.05$，18 歳 M=12.95＜23 歳以上 M=14.05）。分析には調査 1 の資料を使用した。

(3)性格検査との関連

NEO FFI の 5 つの次元と 4 種類の尺度との Person の積率相関係数をもとめた（Table3）。その結果，E と A の 2 つの次元との間に比較的高い相関がみられた。分析には調査 2 の資料を使用した。

Table3　NEO FFI との相関

	N	E	O	A	C
HOS	-.188*	.506**	.092	.232**	.112
HI	-.179*	.451**	.142	.263**	.065
CHS	-.344**	.439**	.042	.187*	.014
SHQF1	-.325**	.463**	.038	.224**	.166*
SHQF2	-.081	.357**	-.107	.304**	-.133

**：1%水準で有意，*：5%水準で有意

【考察】　CHS，SHQF2 には性別による差がみられたが，HOS，HI，SHQF1 には性別による差がみられなかった。後者 3 つの尺度で測定される内容は，ユーモアの表出やユーモアに対する感受性である。一方，前者 2 つの尺度で測定される内容は，ストレス場面の回避方略としてのユーモアの利用やユーモアに対する嫌悪感である。先行研究を概観しても，性差に関して一貫した結果は得られておらず，性差の存在はユーモアの内容によって異なることが予想される。

年齢による差は SHQF2 を除き違いがみられ，年齢の高い群の尺度得点が年齢の低い群にくらべ高い値をしめした。5 歳の差とはいえ，年齢が高くなれば，他者とのコミュニケーションにユーモアを利用することが多いという結果である。しかし，今後，さらに幅広い年齢群を対象とし，年齢とユーモアの内容との関連を検討する必要がある。

NEO FFI の 5 次元との関連では，N（神経症傾向）との間に負の相関が，E（外向性）・A（調和性）との間には正の相関が多くしめされている。他者とのコミュニケーションやストレス回避にユーモアを利用できる人は，積極的に他者と関わり，しかも思いやりをもって接することができ，情緒的にも安定している人であることがわかる。一方，ユーモアの表現やユーモアに対する感受性には好奇心や創造性が関わっていることから，O（開放性）との関連がしめされると予想できる。しかし，本研究の結果では，この予想を支持しておらず，尺度の妥当性に関して問題が残された。

【引用文献】　宇惠弘 2003 ユーモア測定尺度の作成(1) 日本応用心理学会第 70 回発表論文集，110

（うえ　ひろし）

スポーツ選手の精神的適性に関する研究

― 柔道T選手とT高校女子柔道部員の事例的研究 ―

○増地　克之[1)]　藤江　学[2)]　吉鷹　幸春[3)]
([1)2)3)] 桐蔭横浜大学)

キーワード：柔道選手、性格検査、精神健康度

【研究の目的】

内田クレペリン精神検査（U―K）で得たデータを、スポーツの指導現場に生かした事例研究はこれまでも数多く報告されている。今回、アテネオリンピックに出場する男子T選手の最終選考会後の心身のコンディションならびに、神奈川県高等学校総合体育大会柔道競技で優勝したT高校女子柔道部員の試合前の心身のコンディションと試合結果との関係について考察を加えて報告する。

【方法】

1) 調査方法：数多くある性格テストのうち今回は作業を通して情意に関する状態をみる内田クレペリン検査（以下U－Kテストと略称）と、情意の特徴をとりあげて分　類する矢田部ギルフォード性格検査（以下、Y－G検査と略称）を行い資料を得た。
2) 調査日時：平成16年6月7日
3) 対象：男子選手T選手とT高校女子柔道部員の9人を対象にした。T選手はアテネオリンピック－73kg級日本代表選手であり、T高校女子柔道部員は神奈川県高等学校総合体育大会柔道競技で優勝し全国大会に出場するチームである。

【結果及び考察】

1) U－K検査からみた性格類型について

性格判定をするために、小林による分類法（性格10類型）を用いて判定をおこなった。T選手の性格類型は内的安定型であった。一般的に内的安定型は、精神健康度が高度である時には適応はとり立てて早いわけではないが適度に速く、適度に柔軟性もあって融通が利く。また自己主張が強すぎるわけでもなく、また安易な妥協などもしない。精神健康度が低度になると外部からの影響が強く作用したような場合には気力がなくなること、柔軟な動きがなくなって機能が硬化する特徴を持つといわれている。

T高校女子柔道部員の性格類型は、「粘着型」と「じっくり型」が最も多くみられた。女子柔道部員に多くみられた「粘着型」は、社交的なことは得意ではなく、筋道を通すようにつとめており、柔軟な考え方は不得意で気の向いたことには熱中するといった傾向が伺える。また「じっくり型」は、いわゆるおとなしいと言われる性格と、落ち着いて確実に粘り強く頑張るという性格である。

2) U－K検査からみた精神健康度について

精神健康度の評価はその程度によって、高度、中度、低度と3段階に分類される。T選手の精神健康度は高度であった。またT高校女子柔道部員の精神健康度は、高度85%、中度15%、低度0%であった。一般的に中学生の場合で、精神健康度の高度者の割合は集団の20%前後が普通であり、大学生の場合は精神健康度の高度者の割合30%を超える集団は、健康度が高い集団であるとみられている。したがって今回対象にした高校生は中学生と大学生の間に位置するものであり、T高校女子柔道部は精神健康度の高度者は85%であり、非常に精神健康度の高い集団であった。このことが今回、創部4年で初優勝という、優秀な成績を収めた要因の一つであったと思われる。

3) 事例的にみたT選手とT高校女子柔道部員の性格について

これまでT選手とT高校女子柔道部員の総合的な特徴について述べてきたわけだが、ここではT選手とT高校女子柔道部員の中で精神健康度が高度で特に試合で活躍したN選手のU－K曲線を図1、2に示し、柔道部監督からみた性格を人柄類型が示す精神的特徴と照らし合わせながら示すことにする。T選手は今まで数多くのチャンスがありながらもなかなかライバルに勝てず、世界選手権やオリンピックに出場できなかった。しかし、今回初めてチャンスを掴み取りオリンピック出場を叶えた。2ヶ月後のオリンピックに向けて精神的にも安定した段階の状態であるように思われる。是非、この精神健康度を高度に保ち続けてほしい。次にN選手はすごく真面目な性格の持ち主で、何事にもこつこつとやるタイプである。精神健康度も高く非常に充実しており、万全の状態であったと思われる。

図1　T選手のU－K曲線

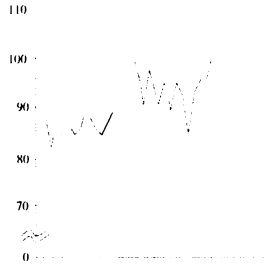
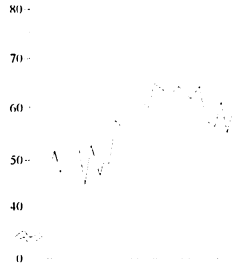


図2　N選手のU－K曲線



4) Y－G検査からみた性格的特徴

Y―G検査で調査される性格特性は12因子あり、その全体的傾向を診断したプロフィールの判定から、A型からE型までの5つの類型に分類される。つまり、A型（平均型）、B型（不安定不適応積極型）、C型（安定適応積極型）、D型（安定適応積極型）、E型（不安定不適応消極型）である。T選手のY―G性格検査による性格類型はC型を示しており、C型の特徴として情緒的安定、社会的適応、消極的内向性で、簡単にいえばおとなしい問題をおこさないタイプである。つまりオリンピックの出場が決まり、精神的にも安定しており目立ちはしないがオリンピックに向けてやるべきことはしっかりやっている状態だと思われる。T高校女子柔道部員（N選手を含む）の63%が示したB`型は悪く言えば猪突猛進タイプであるが、目の前の試合に向けて全力を注ごうとしている状態であったと思われる。

（ますち　かつゆき、ふじえ　まなぶ、よしたか　ゆきはる）

芸能活動を用いたサポート校での不登校生への援助

― 家庭内暴力を繰り返した、一少年のＳＣＴの変化について ―

○高野　真吾
（東京自由学園・東洋大学大学院文学研究科）

キーワード：サポート校、芸能活動、父性と母性

【研究の目的】核家族化による少子化や地域社会の崩壊等、子供達には様々な環境変化が生じている。いじめ、学級崩壊など多くの問題が生じており、子供達の教育の遂行には、この少子化、地域社会の崩壊を補う必要がある。（2004　山口）**この点に着目した、新たな学校の形がサポート校である。**

サポート校では、単なる詰め込み式の、教科科目の学習のみでなく、自らが体験することで実際に生きた教育を学ぶことが可能となる。この新たな教育方法である、サポート校での実際の学習効果については、未だ述べられてはいない。そのため、芸能活動を用いたサポート校での学習が、生徒の学校、両親、友人、人生の捉え方をどの様に変化させるか、その効果を確認することを目的とする。

【方法】家庭内暴力を繰り返していた、一少年をサポート校に通学させて教育を行い、入学時、及び初年度終了時のＳＣＴの変化を確認する。

１　対象

18歳男子学生

２　入学までの経緯

Ａ君は私立高校に通学時に、信頼していた教師に誤解をされ、厳しく叱られた。最終的には教師から、間違いだったとの詫びの言葉があったが、教師の裏切りを感じて、高校を中退する。両親に高校中退を批判された為、住み込みで様々な職を渡り歩く。アルバイト中に、同年代の青年たちの楽しそうな笑顔を見て、高校生活への憧れを抱き、ギターを弾くことが趣味だった為、芸能活動を行いながら勉強が出来るサポート校へ入学した。

３　サポート校での教育法

Ｔ学園では、午前中は学科の授業が行われる。提携している通信制高校に提出するレポートを、生徒が教科書を読み、学習書を読みながら完成させていく。

クラスごとに、学科担当の講師が待機しており、生徒の疑問点などに答えていく。講師は教員の免許状を取得しており、公教育における「優しい先生」のイメージである。何でも話しを聞いてくれて、励ましてくれる。そして、ある程度は遅刻をしても、授業中に無駄話しをしても、ほとんど怒ることは無い。言ってみれば、「母性的教員」と考えられる。

午後は芸能・音楽の授業が行われる。音楽に関しては、楽器単独の授業に加えて、集団で実際の楽曲を演奏するアンサンブルの授業などがある。

授業担当の音楽講師は、教員の免許状を取得していない者もいるが、ライブやテレビで実際に活躍している、現役のミュージシャンやレコーディングエンジニアである。文科系と言うよりも体育系のイメージがあり、一見すると怖いイメージを醸し出している。言ってみれば、「父性的教員」と考えられる。授業に遅れたり、関係の無い無駄話をした場合など、きつく叱ることが多い。

この様に、何でも許してくれる「母性的教員」の学科授業と、怖いイメージを持つ「父性的教員」の音楽授業、更にカウンセラーのいる相談室との連携により、教育を行っている。

幸いＡ君は、毎日の授業に出席することが可能であり、入学から１年間を通して、以上のようなサポート校における教育を施すことが出来た。

４　ＳＣＴの実施について

Ｔ学園では、入学試験時にＳＣＴを実施している。項目は、学校、両親、友人、人生などである。

今回は、ＳＣＴの記述内容の、入学時と初年度終了時の変化を調査する為、１学年終了時に再びＳＣＴを実施した。

【結果】ＳＣＴ記述内容の、入学時と初年度終了時の変化は、以下の通りであった。

１　入学時と初年度終了時のＳＣＴの記述内容

	入学時	初年度終了時
(1)学校は	大嫌い	面白い
(2)教師は	偉そうでろくな奴がいない	人それぞれ
(3)不登校は	別にいんじゃない	つまらない
(4)父親は	いないも同然	金稼ぐ人
(5)母親は	ウザイ	普通
(6)友人は	裏切り者	いない
(7)自殺は	したら負け	しない方が良い
(8)いじめは	遣った者勝ち	無くならないさ
(9)10年後は	犯罪者かな	ミュージシャン
(10)人生は	何だろな	何とかなるかな

２　ＳＣＴ記述内容の変化に関して

入学時のＳＣＴの回答と、初年度終了時の回答では、学校が、嫌いから面白いと変化し、教師は、悪から人それぞれというように、Ａ君の考え方が広がりを持ち始めている。両親に関しても、母親の心配を感じ取り、父親には生計を立ててくれているという、現実を認識する余裕が生まれてきたようだ。友人がいないと書かれたのは、友人を求め始めたことが考えられる。不登校・いじめに関しては入学時と比較して、自分との関わりを考えてきていると感じられる。人生に関しては明るい未来を持つようになっている。

【考察】

Ｔ学園での教育は、友人や教師との触れ合いの中で、個別指導方式で勉強を進めていく。この中では、比較的緩やかな時間が流れ、規則も概ね厳しいものは存在しない。疑問点は、その場で教師や友達に質問し問題を解いていく。その中で人付き合いが苦手な生徒は、徐々に会話に慣れて行く。公教育では、授業中は私語をすることは許されず、生徒は黙々とノートに書き写すのみである。教師への質問、相談は休み時間や放課後に行わざるを得ない。教師と生徒の間に誤解が生じている時、特に非行少年の対応の時には、好ましい関係の形成は、公教育の方法ではかなりの難易度があると思われる。

学科の授業で羽を伸ばした後は、厳しい音楽の授業に出席することとなる。この授業では厳しい音楽講師に、挨拶のことから始まり、目上の者に対する礼儀まで、様々なことをしつけられる。この「母性的教員」による学科と「父性的教員」による音楽という異なる教育環境で、様々な考え方の人に出会い、広い視点を身につける。Ａ君の変化は、そこにあると考えられる。更に、この大きな教育環境変化で、ストレスを抱えた生徒は、カウンセリングを受けて落ち着けるという状況が、好ましい効果を持つと考えられる。

【引用文献】山口正二 2004 生徒と教師の心理的距離に関する実証的研究　カウンセリング研究 第37巻 第1号

（たかの　しんご）

内田クレペリン検査の評価法について

—定型モデルと健常者一万人モデル —

山田耕嗣
（日本・精神技術研究所）

キーワード：内田クレペリン検査、定型指数、一万人モデルＰＦ値

内田クレペリン検査の曲線類型判定とその数量的処理法との関連を検討する。曲線類型判定の基本は作業量に応ずる典型的定型である。所与の検査結果が示す作業量水準に対応するような典型的定型を基準として求め、その基準からのずれの程度を表すのが定型指数である（山田,2002)。

表　曲線類型別の定型指数とＰＦ値

区分	定型モデル 定型指数 M	定型モデル 定型指数 SD	一万人モデル ＰＦ値 M	一万人モデル ＰＦ値 SD	N	曲線類型
A1	2.6	0.8	4.8	1.1	9	ⓐ
A2	3.4	0.9	5.5	2.6	21	ⓐ́
A3	5.4	2.8	7.0	4.8	32	ⓐ～ⓐf
A4	8.9	4.4	9.5	7.3	57	ⓐf
A5	13.0	4.3	10.6	4.3	24	ⓐf～f(A)
A6	19.6	7.4	16.7	7.1	22	f(A)
a1	3.0	0.8	5.5	2.1	6	a
a2	3.6	0.9	3.9	1.4	4	á
a3	5.1	1.2	7.2	6.8	15	á～áf
a4	8.7	3.3	8.9	4.7	45	áf
a5	13.9	4.1	12.4	4.0	44	áf～f(A)
a6	21.1	8.7	19.4	10.1	31	f(A)
b1	3.6	0.9	6.3	1.8	4	b
b2	5.5	2.2	6.6	3.3	16	b́
b3	10.1	3.2	8.5	3.7	27	b́f
b4	14.7	4.4	11.1	4.1	26	b́f～f(B)
b5	23.2	8.5	20.2	8.5	31	f(B)
c1	4.2	1.0	6.9	2.3	4	c
c2	5.1	1.5	5.6	2.2	6	ć
c3	9.8	3.3	8.4	3.4	19	ćf
c4	23.4	8.1	21.7	8.1	21	f(C)
f	71.8	35.2	70.3	35.7	30	fP

図１　定型指数の曲線類型別分布　M±0.5SD

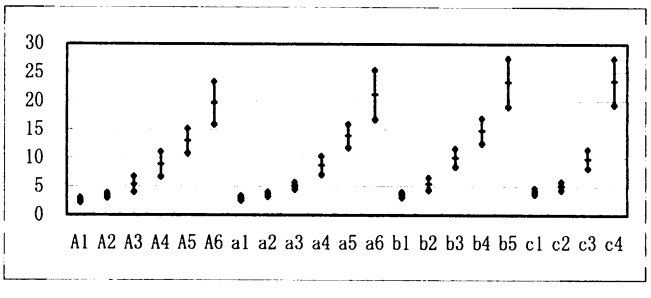
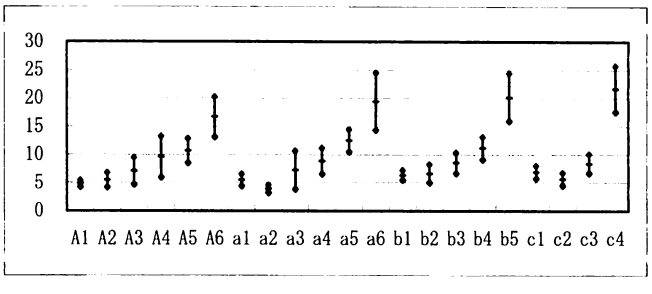


図２　１万人モデルＰＦ値の曲線類型別分布　M±0.5SD



定型指数は定型モデルによる数量的評価である。作業量に応ずる典型的定型を設定し前提としている。

一方、基準を作業量水準に対応する期待経過（期待曲線）とする捉え方がある。所与の検査結果が示す作業量水準に対応するような期待曲線を設定し、それからのずれの程度を求めるものである。その期待モデルの一つが健常者一万人モデル（以下一万人モデルと略）であり、一万人モデルＰＦ値は期待モデルによる数量的評価である。(日本・精神技術研究所, 1990)。

今回の報告は、同一データ群に定型モデルと期待モデルとを当てはめて評価の異同を調べ、検査応用の参考に資すればとするものである。

扱うデータは、「内田クレペリン検査図例集」（日本・精神技術研究所,1970）掲載の 344 例と「内田クレペリン検査判定実務図例集」（日本・精神技術研究所,1993）掲載の 150 例である。各例の曲線類型と定型指数およびＰＦ値との関連をみる。曲線類型のうち出現頻度が極端に少ないdとdPは除外してある。これら 494 例の曲線類型別の結果を左表と図に示す。図での曲線類型は便宜上簡略化した区分表示とした。図の縦軸は、図１が定型指数、図２がＰＦ値である。なお、fPの表示は省略する。

定型指数の分布は、定型指数の大小と曲線類型での定型～非定型の程度とに一貫性を示す結果となっている。

一万人モデルＰＦ値の分布は、定型指数のような一貫性を示してはいない。定型指数の分布に比べて次のことが指摘できる。一つは定型高度の類型と定型性を崩した類型との重なりであり、一つは定型崩れと非定型軽度との重なりである。

両モデルに共通しているのは、非定型特徴重度の分離といえよう。典型的非定型特徴に代表されるような重度の非定型特徴は、モデルがどちらでも明確に抽出できるといえる。定型性高度～定型崩れ～非定型軽度の区分けを求められると、一万人モデルよりも定型モデルに分があるようだ。

定型モデルが曲線類型という判定体系になじむものであるとすると、一万人モデルは、曲線類型とは別の判定体系を反映しているとも捉えられよう。検査結果に非定型特徴とするような一群を認め、それを一方の極に置くことには共通したものがある。非定型特徴を示さない検査結果群の極として典型的定型特徴を見いだして体系化したのが曲線類型判定法であり、定型指数はその数量化の一つである。

非定型特徴を示さない検査結果群を階層化せずに括って示しているのが一万人モデルＰＦ値ともいえよう。検査の応用を顕著な非定型特徴を分離することに置くのならば、モデルの差異を問わなくてよかろう。非定型特徴を示さない群、いわば広義定型群の中での差異を問うときに、一万人モデルは新たな基準と体系を創り出す方向で検討されるべきものであろう。

文献：○山田耕嗣,2002,内田クレペリン検査の数量的指標〔定型指数〕の算出,日本応用心理学会第 69 回大会発表論文集、○日本・精神技術研究所編,1990,内田クレペリン検査データブック

（やまだ　こうじ）

共通項目法による一般化部分採点モデルの項目母数の等化

—対称性を持たせた等化係数の推定—

服部　環
（筑波大学大学院人間総合科学研究科）

キーワード：項目反応理論、一般化部分採点モデル、等化

一般化部分採点モデル（Muraki,1992）はカテゴリ特性関数値、つまり、特性値 θ_i の受検者が項目 j のカテゴリ k に反応する確率を式(1) により定義する。a_j は項目の識別力、b_{jv} は項目 j でカテゴリ v を取る難しさを示す項目母数（ステップ母数と呼ばれる）であり、$a_j(\theta_i - b_{j0}) \equiv 0$ とおく。

$$P_{jk}(\theta_i) = \frac{\exp \sum_{v=1}^{k} a_j(\theta_i - b_{jv})}{1 + \sum_{h=1}^{m_j} \exp \sum_{v=1}^{h} a_j(\theta_i - b_{jv})} \quad (k = 0, 1, 2, \ldots, m_j) \tag{1}$$

ここで、2 つの定数 $A_{21}(A_{21} > 0)$ と K_{21} を用いて式(1) のモデル母数を式(2)、式(3)、式(4) のように変換しても、カテゴリ特性関数値は変わらない。そこで、共通項目法はこの関係を利用して、テスト冊子 1 の尺度値をテスト冊子 2 の尺度へ等化するための係数 A_{21} と K_{21} を求める。

$$\theta_i^* = A_{21}\theta_i + K_{21} \tag{2}$$

$$a_j^* = a_j / A_{21} \tag{3}$$

$$b_{jv}^* = A_{21} b_{jv} + K_{21} \quad (v = 1, 2, \cdots, m_j) \tag{4}$$

服部 (1998) は Divgi (1985) の最小 χ^2 法、Haebara (1980) の項目特性曲線法（Q_1 関数のみを利用）、Stocking & Lord (1983) のテスト特性曲線法を用いて等化係数 A_{21} と K_{21} を求めた。

目的　テスト冊子 2 の尺度値をテスト冊子 1 の尺度へ等化するための係数 A_{12}、K_{12} は、A_{21}、K_{21} との間に、

$$A_{12} = 1/A_{21} \tag{5}$$

$$K_{12} = -K_{21}/A_{21} \quad (v = 1, 2, \cdots, m_j) \tag{6}$$

の関係がある。最小 χ^2 法による等化係数はこの対称性を満たすが、服部はテスト冊子 1 の尺度値をテスト冊子 2 の尺度へ等化する際の誤差のみを利用したため、その方法によって求めた等化係数はこの対称性を満たさない。そこで、本稿はこの対称性を満たす Haebara の Q^* 基準を用いて等化係数を推定する。

最小化する誤差関数は以下の通りである。

・カテゴリ特性曲線法

$$Q_C = \sum_{i=1}^{s}\sum_{j=1}^{n}\sum_{k=0}^{m_j}\left[P_{jk}(\theta_i)^{(2)} - P_{jk}(\theta_i)^{(21)}\right]^2 h(\theta_i)^{(2)} + \sum_{i=1}^{s}\sum_{j=1}^{n}\sum_{k=0}^{m_j}\left[P_{jk}(\theta_i)^{(1)} - P_{jk}(\theta_i)^{(12)}\right]^2 h(\theta_i)^{(1)} \tag{7}$$

$P_{jk}(\theta_i)^{(t)}$ はテスト冊子 t で推定された項目母数値を用いて計算したカテゴリ特性関数値、$P_{jk}(\theta_i)^{(21)}$ はテスト冊子 1 で推定された項目母数値を式(3) と式(4) を用いてテスト冊子 2 の尺度へ等化した上で計算したカテゴリ特性関数値、$P_{jk}(\theta_i)^{(12)}$ は式(5) と式(6) の A_{12} と K_{12} を用いてテスト冊子 2 で推定された項目母数値をテスト冊子 1 の尺度へ等化した上で計算したカテゴリ特性関数値である。$h(\theta_i)^{(t)}$ は受検者群 t における能力値の確率密度関数（本稿の実験では標準正規分布）、s は求積点の数である。未知数の計算には改訂ニュートン法を用いた。

・項目期待値法

$$Q_I = \sum_{i=1}^{s}\sum_{j=1}^{n}\left[\sum_{k=0}^{m_j} k\left(P_{jk}(\theta_i)^{(2)} - P_{jk}(\theta_i)^{(21)}\right)\right]^2 h(\theta_i)^{(2)} + \sum_{i=1}^{s}\sum_{j=1}^{n}\left[\sum_{k=0}^{m_j} k\left(P_{jk}(\theta_i)^{(1)} - P_{jk}(\theta_i)^{(12)}\right)\right]^2 h(\theta_i)^{(1)} \tag{8}$$

・テスト期待値法

$$Q_T = \sum_{i=1}^{s}\left[\sum_{j=1}^{n}\sum_{k=0}^{m_j} k\left(P_{jk}(\theta_i)^{(2)} - P_{jk}(\theta_i)^{(21)}\right)\right]^2 h(\theta_i)^{(2)} + \sum_{i=1}^{s}\left[\sum_{j=1}^{n}\sum_{k=0}^{m_j} k\left(P_{jk}(\theta_i)^{(1)} - P_{jk}(\theta_i)^{(12)}\right)\right]^2 h(\theta_i)^{(1)} \tag{9}$$

実験　次の 2 条件について 100 回の数値実験を行った。

・水平等化　すべて 4 カテゴリとする 20 項目のテスト冊子 T_1 と T_2 を想定した。そして、母集団分布が等しい受検者群 S_1 と S_2 を用意して（各 500 名）、S_1 へ T_1、S_2 へ T_2 を実施し、T_1 の項目母数をテスト冊子 T_2 の尺度へ等化した。

項目反応はカテゴリ特性関数累積値と 0 ～ 1 の一様乱数とを比べることにより生成した。真値 θ_i と b_{jv} として標準正規乱数、a_j として 0.5 ～ 1.5 の一様乱数を用いた。等化係数の推定値は $A_{21} = 1$、$K_{21} = 0$ となることが期待される。

・垂直等化　被験者群 S_1 の能力値として正規分布 $N(0.7, 1.2^2)$ に従う乱数を用い、他の条件は水平等化と同一とした。等化係数の推定値として $A_{21} = 1.2$、$K_{21} = 0.7$ が期待される。

結果と考察　等化係数の推定値の平均と標準偏差を表 1 に示す。水平等化の場合、等化係数に対称性を持たせて推定したことにより、カテゴリ特性関数法と項目期待値法による等化係数 A_{21} の標準偏差がわずかに小さくなり、推定値が安定したことを示している。しかし、テスト期待値法、また、垂直等化の場合、本実験に関する限りその効果は小さいように思われる。

表 1 等化係数の推定値の平均と標準偏差

等化法	等化係数	水平等化 平均	水平等化 標準偏差	垂直等化 平均	垂直等化 標準偏差
Mean & Mean 法	A_{21}	0.998	0.066	1.209	0.080
	K_{21}	0.028	0.036	0.703	0.063
Mean & Sigma 法	A_{21}	1.005	0.115	1.224	0.135
	K_{21}	0.026	0.038	0.710	0.081
最小 χ^2 法	A_{21}	1.002	0.077	1.212	0.083
	K_{21}	0.032	0.042	0.706	0.064
単純最小自乗法	A_{21}	0.970	0.098	1.173	0.088
	K_{21}	0.027	0.037	0.683	0.074
カテゴリ特性関数法 *	A_{21}	1.020	0.062	1.222	0.062
	K_{21}	0.033	0.038	0.714	0.070
カテゴリ特性関数法	A_{21}	1.026	0.051	1.223	0.059
	K_{21}	0.034	0.041	0.716	0.067
項目期待値法 *	A_{21}	1.012	0.072	1.222	0.063
	K_{21}	0.030	0.038	0.714	0.063
項目期待値法	A_{21}	1.018	0.060	1.222	0.062
	K_{21}	0.031	0.040	0.714	0.063
テスト期待値法 *	A_{21}	1.020	0.055	1.222	0.056
	K_{21}	0.031	0.036	0.716	0.064
テスト期待値法	A_{21}	1.020	0.055	1.221	0.056
	K_{21}	0.031	0.036	0.715	0.064

* 対称性のない方法（服部,1998）による推定を示す。　（はっとり　たまき）

イップスの研究（1）
――完全主義的思考とＹＧ――

林　　潔
（白梅学園短期大学心理学科）

八木孝彦
（中央学院大学商学部）

（イップス　完全主義的思考　ＹＧ）

目的

スポーツの世界で，個人的な障害の問題をもつ人々は少なくない。その一つの例がゴルフのイップス（Yips）の問題である。さらにイップスだと分かってメンバーから外されることを懸念し，密かに自身で方策をめぐらす人々もある。

このイップスの問題に対するアプローチの前段階として，われわれはまず類似症状であるクランプ（cramp），特に書痙（writer's cramp）の諸事例について検討をした。

クランプをふくむ職業神経症は，ICD-10 では F4 の神経症性障害、ストレス関連障害および身体表現性障害に分類されている。クランプが該当するカテゴリーは，F48.8 他の特定の神経症性障害の箇所である。

なおこのカテゴリーは病因も疾病分類上の位置づけも不明確であり、ある文化圏では際立った頻度で生じる行動，信念，情緒の混合障害を含んでいると規定されている。このクランプには気質説と機能説があるが，機能説として理解される傾向が強い（井関，他、1974）。このようにクランプが”意志に反する”という説明が広く信じられるようになったのは第一次大戦以降である（Eysenck，異常行動研究会訳,1965）。そしてクランプの発症は，複雑な個人的事情と密着する（内山、1971）。

それでは書痙の症状をもつ人々の発症前性格はどのようなものであろうか。既発表の書痙の症例を通覧したところ，完全欲，几帳面，過度にまじめという条件が見出された。すなわち完全主義的傾向である。

”やるべきことは、完璧にやらなければならない”，”完璧にやらなければ、成功とはいわない”などの完全主義（perfectionism）は，多くの心理的，行動的な問題と関連があると指摘されてきた。

本報告は，運動機能障害の一つと考えられているイップス研究の一環として，完全主義尺度と YG との関連性を検討するものである。

すなわち、、大学生を対象として，桜井・大谷（1997）の自己志向的完全主義者尺度を実施し、この４つの下位尺度ごとに高得点群，低得点群を選定し，ＹＧへの回答傾向について検討した。これによって完全主義的傾向の人々の性格上の特徴を明らかにする。

方法

調査対象は首都圏の大学心理学受講生 120 名である。自己志向完全主義尺度と YG の双方に回答した被検者は男女 104 名であった。調査時期：2004 年 5-6 月。

結果と考察

自己志向的完全主義者尺度（以降，完全主義尺度）は，次の四つの尺度から構成されている。すなわち完全でありたいという欲求尺度（DP 尺度，5 問），自分に高い目標をかする傾向（PS 尺度，5 問），ミス（失敗）を過度に気にする傾向（CM 尺度，5 問），そして自分の行動に漠然とした疑いをもつ傾向（D 尺度，5 問）であって 6 件法である。項目ごとに 1-6 の重みづけをして，各尺度得点を算出した。

そして尺度ごとに得点分布を勘案しながら，おおよそ上位 25%を高得点者群（H），下位 25%を低得点者群（L）とした。

これらの H，L 群の得点について t 検定を実施したが、いずれも有意差は認められなかった（Table　参照）。

	DP		PS		CM		D	
	L	H	L	H	L	H	L	H
D	10.2	10.0	12.3	8.6	8.3	11.5	9.2	10.5
C	8.7	9.5	10.4	8.6	7.9	9.9	8.6	8.9
I	7.0	7.7	9.5	6.6	5.9	9.0	7.2	7.7
N	7.8	10.7	9.5	8.5	7.5	10.7	7.5	10.2
O	9.5	9.1	10.4	9.1	8.7	10.0	8.1	8.6
Co	7.9	8.9	9.2	8.4	8.0	10.4	8.3	8.6
Ag	10.0	11.3	10.2	11.6	11.1	10.5	11.1	10.3
G	10.7	13.9	10.8	13.0	13.3	11.4	12.8	11.8
R	11.2	12.6	12.8	13.3	13.2	10.5	12.9	11.2
T	9.8	8.5	9.5	9.4	10.4	8.4	10.6	8.7
A	11.1	11.3	9.5	12.7	11.8	10.0	12.0	9.5
S	11.1	12.4	11.0	13.3	12.9	10.2	12.2	11.8

その原因の一つとして、標準偏差の大きさを考えることができる。例えば，CM 尺度の H 群と L 群では、、YG 検査の D（抑うつ）尺度の平均得点をみると，8.3 と 11.5 であってその得点差は 3.2 である。しかし，それぞれの標準偏差が 6.57 と 4.96 であった。レンジを見ると H 群が 0-19，L 群は 2-20 であった。また L 群で YG の D 尺度の標準点 1 と 2 に属し被検者は 24 名中 14 名，4 と 5 に属した者は 5 名であった。H 群で 1 と 2 に属した被検者は，22 名中 6 名，4 と 5 に属した者は 5 名であった。

この直接の理由としては、いずれも標準偏差が非常に大きいことが上げられる。そしてデータを詳細に検討すると，完全主義的な傾向が大きい人々の中には，神経症的傾向の高い人々と，Active なレベルが高い人々がいるということが理解できる。

これらのタイプの被検者を分離して検討していくことが，今後の課題となってくる。

考察文献

Eyseck,H.J.　異常行動研究会訳　1965　行動療法と神経症　誠信書房

井関勝彦，他　1974　書痙患者の精神生理的知見　廣島医学，**27**,1317-1322.

桜井茂男・大谷佳子　1997　”自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係　心理学研究,**68**,179-186.

内山喜久雄　1971　書痙の臨床心理学的研究(1)　症状の心的特性　教育相談研究（東京教育大学），**11**,15-28.

（はやしきよし・やぎたかひこ）

仰臥位と座位のパーソナルスペース

○石橋里美　　内藤哲雄
（リバーサイドホスピタル）　（信州大学人文学部）

キーワード：パーソナルスペース・仰臥位・ストップディスタンス法

【目的】床および寝台での仰臥位と座位における対人距離と、パーソナルスペースを侵害されたことによる情動的反応や対人感情等の主観的反応の相違を明らかにすることを目的とした。

【方法】被験者は右利きの大学生24名（男12・女12）であった。接近者と被接近者の組み合わせは、お互いに面識のない同性同士とした。姿勢2（仰臥・座位）×高さ2（床・寝台）の2要因計画。いずれも被験者内要因であった。

接近者は、被験者が仰臥、または座したベッドサイド、マットサイドより3m離れたところから接近を開始した。速さは、10cmの歩幅で、45テンポであった。被験者の体側、右からの接近を行い、各条件下において被験者が「気詰まりだ」と感じた距離を、ストップディスタンス法により測定し、さらに被験者が仰臥、または座したベッドサイド・マットサイドまでの接近を行った。各条件下での接近行為終了直後、その場で毎回、質問紙に回答させた。なお、被験者の姿勢と高さの順序効果は相殺した。寝台の高さは70cmであった。

質問紙の内容：※石橋（2004）で用いられた接近行為への情動的反応についての4尺度と、対人感情についての3尺度に、「公的自覚」、「被軽視感」を加えた主観的反応についての9尺度を用意した。それぞれ7段階（1：そう感じなかった～7：そう感じた）で評定させた。

【結果】

対人距離：姿勢2（仰臥・座位）×高さ2（床・寝台）の2要因分散分析を行った結果、姿勢の主効果が有意であり（$F(1, 23)=11.09$, $p<.005$）、仰臥位は座位よりも対人距離を多くとることが示された。接近停止距離の平均は、仰臥位88cm、座位66cmであった。

主観的反応：表1-1に示したように、接近行為への情動的反応の評定尺度について確認的に因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った結果、※石橋（2004）と同様に4因子が抽出された（「怯え・自己卑小化」、「威圧・警戒感」、「羞恥心」、「苛立ち」と命名された）。表1-2に示したように、対人感情の評定尺度について因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行った結果、同様に3因子が抽出された（「抵抗・反発感」、「非人格化」、「信頼感」と命名された）。

「公的自覚」について「相手にどのように見られているか気になった」、「相手の目にさらされている感じがした」、「相手に映る自分の姿が気になった」の3項目の信頼性分析を施した結果、$\alpha=.77$であった。「被軽視感」について「さげすまれているような」、「軽んじられた」、「見くだされた」の3項目の信頼性分析を施した結果、$\alpha=.87$であった。

各々の因子ごとに項目得点を合計し、項目数で割った項目平均値を尺度得点とした。それぞれの尺度得点について、姿勢2（仰臥・座位）×高さ2（床・寝台）の2要因分散分析を行った。各条件別の尺度得点とSDを示したのが表2である。姿勢の主効果が有意、有意傾向であったのは「苛立ち」（$F(1, 23)=5.45$, $p<.05$）、「抵抗・反発感」（$F(1, 23)=6.76$, $p<.05$）、「被軽視感」（$F(1, 23)=6.66$, $p<.05$）、「威圧・警戒感」（$F(1, 23)=3.56$, $p<.10$）、「非人格化」（$F(1, 23)=3.36$, $p<.10$）であり、仰臥位は座位よりも、「苛立ち」、「抵抗・反発感」、「被軽視感」、「威圧・警戒感」、「非人格化」を抱くことが示された。高さの主効果が有意、有意傾向であったのは「被軽視感」（$F(1, 23)=8.02$, $p<.01$）、「威圧・警戒感」（$F(1, 23)=4.97$, $p<.05$）、「公的自覚」（$F(1, 23)=3.08$, $p<.10$）、「怯え・自己卑小化」（$F(1, 23)=3.78$, $p<.10$）であり、床条件では寝台条件よりも「被軽視感」、「威圧・警戒感」、「公的自覚」、「怯え・自己卑小化」が喚起されることが示された。「羞恥心」、「信頼感」については有意差は認められなかったが、平均値の結果から、どの条件下においても、羞恥心が喚起され、信頼感は生じないことが示された。

【考察】仰臥位においては、床・寝台の高さに拘らず、座位より対人距離は長くなり、主観的反応についても全体的にネガティヴな反応が強く、相手の接近を許容しないことが明らかになった。他方、床・寝台の高さの変化は、対人距離には有意差をもたらすほどの影響がないが、怯え・自己卑小化や被軽視感等の、自己評価に関わる主観的反応に影響を及ぼすことが示された。すなわち、高さの変化は、被験者に、相手との目線の高さの違いを意識させ、さらに相対的な地位の上下差、落差をも喚起させたことが推測される。

本研究の仰臥・座位での対人接近状況下における知見は医療等にも貢献できよう。

表1－1・情動的反応についての評定尺度の因子分析の結果（主因子法・プロマックス回転後）

項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
びくびくした	0.893	0.004	-0.048	0.078
おどおどした	0.888	-0.069	-0.022	0.145
弱弱しくなった	0.707	0.257	-0.153	0.229
意気消沈した	0.668	-0.051	0.093	0.033
怖かった	0.539	0.323	0.062	-0.129
神経が敏感になった	0.517	0.060	0.267	-0.096
ハッとした	0.456	0.055	0.069	-0.109
束縛された	-0.079	1.047	-0.183	0.127
拘束された	-0.119	0.872	0.141	0.207
押さえつけられた	0.280	0.635	-0.092	-0.003
警戒心がおきた	-0.002	0.572	0.207	0.015
圧迫された	0.156	0.491	0.059	-0.354
圧力があった	0.321	0.357	0.138	-0.328
むかむかした	0.030	-0.069	0.947	0.064
いらいらした	0.007	0.012	0.832	0.071
苛立った	-0.005	0.037	0.808	0.075
恥ずかしかった	0.129	0.076	0.010	0.829
照れくさかった	-0.133	0.128	0.148	0.714
顔が赤らむ感じがした	0.432	-0.167	0.031	0.465
因子寄与	6.978	6.398	4.883	1.931
累積寄与率	41.91	52.45	59.77	63.55

表1－2・対人感情についての評定尺度の因子分析の結果（主因子法・プロマックス回転後）

項目	第1因子	第2因子	第3因子
反発したい	0.992	0.121	-0.129
逆らいたい	0.938	0.067	-0.081
追い返したい	0.838	-0.040	-0.035
抵抗感があった	0.437	-0.082	0.347
許容できなかった	0.393	-0.136	0.343
自分を委ねられる	0.139	0.966	0.022
身体を預けられる	0.028	0.950	0.110
心をあずけられる	-0.156	0.694	0.006
物のように扱われた	-0.049	0.113	0.886
機械的に扱われた	0.027	0.022	0.769
事務的に扱われた	-0.113	0.069	0.659
因子寄与	4.184	2.882	3.339
累積寄与率	38.55	57.28	64.33

表2・各条件下における尺度得点の平均とSD

		仰臥位		座位	
尺度		床	寝台	床	寝台
威圧・警戒感	M	4.6	4.1	4.3	3.4
①＋②＊	SD	1.6	1.3	1.6	1.5
怯え・自己卑小化	M	3.7	3.3	3.5	3.0
②＋	SD	1.6	1.3	1.5	1.5
羞恥心	M	4.0	4.2	4.3	4.2
	SD	1.6	1.4	1.6	1.6
苛立ち	M	7.1	6.2	6.0	5.6
①＊	SD	4.3	3.6	3.2	3.4
抵抗・反発感	M	4.6	4.5	4.3	3.7
①＊	SD	1.6	1.6	1.2	1.5
非人格化	M	3.9	3.7	3.6	3.1
①＋	SD	1.6	1.5	1.3	1.5
信頼感	M	2.3	2.6	2.2	2.6
	SD	1.5	1.6	1.4	1.5
被軽視感	M	4.6	4.0	3.9	3.2
①＊②＊＊	SD	1.9	1.6	1.6	1.5
公的自覚	M	4.6	4.4	4.5	3.9
②＋	SD	1.6	1.3	1.6	1.5

最大値7・最小値1
①：姿勢②：高さ　＊＊＜.01＊＜.05＋＜.10

（いしばしさとみ・ないとうてつお）

※石橋里美 2004 仰臥姿勢におけるパーソナルスペース 信州大学人文科学研究科 修士論文 未公刊

イップスの研究（2）

完全主義的思考とMMPI

八木孝彦　　林　潔
中央学院大学　　白梅短大

（イップス　　完全主義的思考　　MMPI）

ゴルフプレイヤーのジストニア（筋緊張異常）にイップスがある。全身あるいは身体の一部の筋肉が異常緊張して、スムースでより目的的な運動、動作ができなくなる症状である。残りわずか1メートルほどのパットを20～30センチしか打てなかったり、逆に強く3～4メートル打ってしまったりする。
類似の症状として古くから報告例の多いものにクランプがある。writer's cramp, musician' cramp などで、前者は、書痙として知られている。

報告は、運動機能障害を中心としたイップス(yips)研究の一環として、完全主義尺度とMMPIの関連性を検討したものである。具体的には、大学生を対象に桜井・大谷（1997）自己志向的完全主義尺度を実施、4下位尺度ごとに高得点者群と低得点者群を選定し、MMPIへの回答結果を検討した。

《方法》調査対象は、C大学心理学受講生120名。上記の両尺度に回答した男女学生はそのうち、104名であった。調査時期は、2004年5～6月。

《結果と考察》自己志向的完全主義尺度（以降は完全主義尺度という）は、次の4尺度から構成されている。完全でありたいという欲求尺度（DP尺度5問）、自分に高い目標を課する傾向（PS尺度5問）、ミス（失敗）を過度に気にする傾向（CM尺度5問）、そして自分の行動に漠然とした疑いを持つ傾向（D尺度5問）で6件法である。項目ごとに1~6の重み付けをして、各尺度得点を算出した。

そして尺度ごとに得点分布を勘案しながら、おおよそ高得点者群と低得点者群が上位25%、下位25%になるように選出した。

高得点者群（H群）と低得点者群（L群）で、MMPIの尺度ごとに平均値を求めたものが表である。
＊　印はｔ　検定結果で、5％水準で有意差があることを表している。

基礎尺度は別として臨床尺度をみると、CMとPS尺度で両群の平均値の間に有意差が認められる。CM（ミスを過度に気にする傾向）Pd尺度（精神病質的偏奇性尺度）、Si尺度（社会的内向性尺度）である。いずれもCM尺度の高得点者群において高いスコアであった。

続いて、完全主義尺度のPS尺度においては、MMPIのD尺度（抑鬱性尺度）とMf尺度（性度尺度）において、有意差が認められた。D尺度においては、L群が、Mf尺度においては、H群が高い平均値であった。

筆者らは今後、さらに具体的な情報収集をするために、次の分析方法を検討中である。例えば、MMPIの下位尺度値を使用するのではなく、質問一つ一つへの反応の相違を検討するとか、完全主義尺度も上位、下位25％の抽出ではなく、5問すべてに高得点で回答している被験者とすべてに低得点で回答している被験者を抽出するなどの方法である。これらの分析方法を適用することによって、完全主義尺度についてより深い情報が得られると期待される。

表 1　完全主義的思考とMMPI

	?	L	F	K	Hs	D	Hy	Pd	Mf	Pa	Pt	Sc	Ma	Si
CML群	1.3	4.0	6.9	14.6	5.4	19.5	20.6	14.6	26.3	10.4	13.5	13.7	18.7	24.6
H群	＊3.3	4.3	9.8	12.3	6.3	21.6	18.3	*18.1	25.9	11.4	17.9	17.8	18.3	*32.3
PSL群	2.9	3.9	7.9	12.5	8.6	*23.6	21.1	18.1	25.4	12.0	18.2	16.4	18.5	31.0
H群	2.1	3.9	8.9	13.8	6.4	20.4	20.2	18.0	*29.7	11.8	16.2	16.6	20.3	26.6
DPL群	2.3	4.6	7.1	15.5	6.6	21.5	21.2	16.5	25.2	10.8	13.2	12.2	18.0	26.5
H群	2.5	4.3	9.4	12.6	6.7	19.9	20.1	16.6	28.5	11.7	16.5	16.6	19.5	27.4
DL群	2.6	4.2	7.6	14.3	6.5	22.1	21.1	16.8	26.6	11.0	13.9	13.7	17.6	27.8
H群	3.0	4.2	7.3	14.1	5.8	19.6	19.4	16.7	27.0	11.0	15.5	13.4	18.5	28.3

研究発表（口頭発表）

基礎看護学実習における３年課程と２年課程の自己像の比較

○高橋友子　　内海　滉
（兵庫医科大学附属看護専門学校）　（千葉大学）

キーワード：看護学生　基礎看護学実習　自己像

【研究目的】看護学生は、臨地実習において患者との相互関係の中で看護を展開するため、自己を見つめる機会が多い。学生個々を支持するには、臨地実習で学生がどのように自己像を変化させているのかを理解することが重要である。本研究は基礎看護学実習における３年課程と２年課程の看護学生の自己像を比較し、両過程の学生の特徴を明らかにすることを目的とする。ここでは、自己像を「自らが自己をとらえたイメージ」とする。

【研究方法】１．研究デザイン：質問紙調査法。　２．研究対象：H 看護専門学校　３年課程２年　107 名、２年課程２年　86 名の計 193 名。実習前と後（合計：386 データ）を調べた。　３．調査日：平成 13 年～平成 15 年の 10 月～12 月。４．調査方法：自己像に関する 42 項目の質問からなる自作の自己像のテストを用いた。質問紙は、自己概念の主要な構成要素(梶田叡一 1988)に基づき、６つの基本カテゴリー（1 自己の現状の認識と規定　2 自己の感情と評価　3 他者から見られている自己　4 過去の自己 5 自己の可能性と未来 6 自己に関する当為と理想）に分けて作成した。対象が看護学生であるため、性格特性・行動傾向・対人特性を検討した。５．分析方法：学生の自己像の構造を明らかにするために、回答を因子分析（バリマックス回転）した。次に３年課程と２年課程の学生の実習前後の自己像の変化を、実習前後の因子得点を比較した。６．倫理的配慮：学生には事前に協力は自由であり、不参加による不利益が生じないこととデーターを研究以外に使用せずプライバシーを守ることを説明した。

【結果】１．因子分析の結果、３つの因子が抽出された。３年課程の因子構造は、第１因子「実習達成因子」、第２因子「自己に対する期待因子」、第３因子「人間関係良好因子」と命名した。２年課程の因子構造は第１因子「自己に対する期待因子」、第２因子「実習達成因子」、第３因子「人間関係良好因子」と命名した。次に各因子に含まれている内容を比較した。３年課程の第１因子「実習達成因子」の内容は２年課程の第２因子の「実習達成因子」の内容とほぼ一致している。３年課程の第２因子「自己に対する期待」は、２年課程の第１因子「自己に期待する因子」の内容とほぼ一致している。第３因子「人間関係良好因子」は、３年課程・２年課程ともに内容はほぼ一致している。２．両課程の実習前後の因子得点の比較の結果、３年課程では第１因子、第２因子に有意差（P<.05）が認められた。２年課程では第２因子、第３因子に有意差（P<.05）が認められた。

【考察】３年課程と２年課程のレディネスの違いとして、３年課程の学生は実習が初めてであるため、看護技術のレベルが到達できることに思いが強く、２年課程は実習の経験や実践の経験があるため、具体的な技術レベルよりも、他者から看護師として承認されたいという思いが強いのではないかと考える。したがって、ふたつの課程を実習前後の関係において比較して論ずれば、３年課程の「実習達成因子」は、実習終了において高度に上昇し、２年課程の「実習達成因子」も同じく実習終了において中等度上昇した。逆に３年課程では、「自己に期待する因子」は実習終了において減少し、２年課程では、「人間関係良好因子」は実習終了において甚だしく下降した。それらから両課程の学生が、懸命に実習に臨んだ姿勢を窺うことはできるが、一方いびつな人間を作り出している姿を思わせるものがあった。やはり、周辺教育の問題性を追及する必要性有りと思われる。

表１　３年課程　実習前後の因子得点の比較

		平均値			t 値	自由度	
第１因子「実習達成因子」	前	−0.36	後	0.36	8.31*	106	有意上昇
第２因子「自己に対する期待因子」	前	0.12	後	−0.12	2.77*	106	有意下降
第３因子「人間関係良好因子」	前	0.06	後	−0.06	1.60	106	

*P<．05

表２　２年課程　実習前後の因子得点の比較

		平均値			t 値	自由度	
第１因子「自己に対する期待因子」	前	0.11	後	−0.11	1.86	85	
第２因子「実習達成因子」	前	−0.22	後	0.22	3.76*	85	有意上昇
第３因子「人間関係良好因子」	前	0.13	後	−0.13	2.62*	85	有意下降

*P<．05

医療安全におけるモティベーションの重要性に関する研究 I

― リピーターと安全意識の関係分析 ―

○天野　寛[1)]　酒井順哉[2)]
([1)] 愛知新城大谷大学社会福祉学部　[2)] 名城大学大学院都市情報学研究科保健医療情報学)

キーワード：医療安全、ヒヤリ・ハット、リスクマネジメント、モティベーション

【目的】 近年、医療の現場において、エラーを誘発しない環境や事故を未然に防ぐシステムのあり方が問われている（Wolff, 2000)。医療事故の予防には、ヒューマンエラーの観点とシステムアプローチへの取り組みが不可欠であり、組織的な環境整備の必要性が提言されている（Leape & Bates, 1995)。しかし、今までのシステムアプローチに関する研究の中で、新たに浮かび上がってきた問題が医療スタッフにおけるリピーター（ミスを繰り返す者）の存在であり、ここにおいて個人のモティベーションの問題としてエラーを把握する研究が必要となってきた（Reason, 2000)。すなわち、医療従事者の日常業務に対するモティベーションの低下が医療ミス、ヒヤリ・ハットなどのヒューマンエラーを発生させる大きな要因として考えられるのである。

平成 11 年に始まった厚生科学研究（医薬安全総合研究事業）分担研究「医療用具の不具合情報等の適性管理に関する研究」では、医療機関で組織しているリスクマネジメント委員会の有無と、不具合の発生頻度や診療業務マニュアルの整備に関連性があることが指摘された（酒井, 1999)。さらに、平成 15 年の分担研究「医療用具添付文書情報の活用方策に関する検討」において、医療用具の添付文書の把握体制は、診療業務マニュアルに義務付けせず、各医療スタッフに任せている施設が 7 割程度と多く、全ての医療スタッフが添付文書を確実に把握している状況になかったことが明らかにされた（酒井, 2004)。本研究では、それらの調査結果から得られた知見をもとに、診療業務マニュアルの把握や理解といった安全意識に対するモティベーションに関わる事柄に着目し、医療ミスやヒヤリ・ハットとの発生率の関係を分析することによって、その発生因を明らかにしていく調査を実施した。また、モティベーションと個人の資質との関連から、現状の職場環境の中でパーソナリティーが医療ミスやヒヤリ・ハットにどのように影響されるのかを分析した。

【方法】 診療業務に携わっている看護師を対象に、質問紙によって、「忙しさ」、「業務満足度」、「生活習慣」あるいは「診療業務マニュアルの把握」など、日頃感じているストレスや日頃抱いている安全意識などから、医療ミス、ヒヤリ・ハットの発生率への影響を調査した。回答内容は、医療スタッフ個人が特定できないように配慮されるが、調査用紙に記載されたハンドルネームによって、個別の診療業務上の問題点が照会できるようになっている。すなわち、自己点検の目的で調査結果を個人が確認することが可能であり、安全な診療業務を行う上で見過ごされている各自のウィークポイントを明確にすることができる。また、調査項目として、マニュアルの確認事項を問う質問項目や安全対策の意識を問う質問項目が含まれており、アンケートに回答することによって、安全に対する心構えを認識する回答の施行自体がモティベーションを向上させる作りとなっている。

調査用紙：医療事故防止関連マニュアルについては、「患者に役立つ医療安全チェックガイド」（酒井, 2003）を参考に、「誤薬防止」「院内感染防止」「患者誤認防止」「情報伝達ミス防止」「医療機器事故防止」「医療器材・医療材料事故防止」「転倒・転落事故防止」「インフォームドコンセント」「その他」として 9 種に分類した。また、アクシデント・インシデント体験の発生業務場面としては、「問診・診察」「採血」「臨床検査」「放射線」「与薬」「注射」「点滴」「輸血」「麻酔」「手術」「入院（療養上の世話)」として 11 の場面を分類した。

手続き：当該病院の看護部長および看護部リスクマネジメントのメンバーの協力で各所属長の指示のもと実施された。

調査対象：一般病床数 450 床の総合病院に勤務する看護師 270 名を調査対象とした。

調査期日：平成 16 年 2 月 28 日

【結果および考察】 Fig.1. は、医療ミス、ヒヤリ・ハットの発生件数によって分類された、高リスク（リピーター）群（H 群：平均＋SD～）と低リスク群（L 群：～平均－SD）および全体での平均をエゴグラム・パターンについて比較して示した結果である。なお、エゴグラム・チェックリストの項目は、医療従事者版として新たに作成したものを用いている。

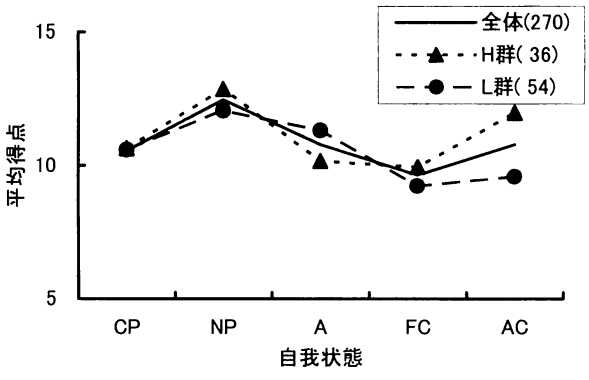


Fig.1. エゴグラムの比較

全体としてなだらかな N 型のパターンを示しており、FC の低さは当該病院の特徴というよりも項目内容の設定に由来している可能性が高い。各自我状態に関して、H 群と L 群の差の検定を行った結果、AC について唯一有意差（p<.01）が検出された。これまでの研究から、医療従事者において職場ストレスの高いものほど AC が高く過剰適応的であることが明らかにされているが（天野, 1998)、ここにおいて、AC の高さがリピーターの特徴でもあることが示唆された。同様に、POMS に関しても両群間の比較を行ったところ、気分を示す 6 つの尺度のうち、T－A（p<.001)、D（p<.001）および A－H（p<.001）の 3 つの尺度においてそれぞれ有意な差が認められた。すなわち、気分的側面として、H 群は L 群に比べて緊張・不安感が高く、抑うつ的で、そして不機嫌である傾向が強いことが示唆された。また、医療事故防止関連マニュアルの設問について H 群と L 群を比較すると、種別を合計した場合では、マニュアルがあると答えたものについて、H 群では 43%、L 群では 54%、保管場所について知っていると解答したものについて H 群では 34%、L 群では 40%、内容について理解していると答えたものについて H 群では 27%、L 群では 31%、実践していると答えたものについて H 群では 29%、L 群では 38% と、いずれも L 群の方が高い割合であることが明確になった。

（あまの　ひろし・さかい　じゅんや）

小児看護学実習における事故とリスク要因の検討

草野 美根子（群馬大学）
中 淑子　林田りか（県立長崎シーボルト大学）
内海　滉　（千葉大学）

小児看護学実習　看護学生　事故

＜はじめに＞医療現場では事故防止を行うため、各施設で事故防止対策のマニュアルなど様々な対策を立てている。その中でも、小児病棟では、転倒、転落、誤飲、輸液、薬品投薬量、投薬方法などの事故内容が多く報告されている。看護学生が小児病棟で実習を行う場合は、実習指導者の指導管理の上で看護ケアを行っているため、直接的医療事故につながる可能性は低いが、医療現場における看護学生の役割責任とその教育は重要であると考える。

そこで今回、看護学生が小児病棟でどのような事故を起こし、また事故の危険性を感じたかを自由感想文に記載してもらったのでその一部を報告する。

＜目的＞小児病棟における看護学生の病棟実習中の事故または事故の危険性が考えられた行動内容を自由感想文にて報告してもらい、その内容を検討することで、看護学生が起こしやすい事故とその要因を明らかにすることで、看護学教育上の指導のあり方を考える。

＜方法＞小児看護学実習中の事故または事故の危険性が考えられた行動や内容を同意の得られた看護学生 52 名に自由感想文にして書いてもらった。対象患児の年齢、性別、時刻、場所なども詳細に記載してもらった。

＜結果＞事故または事故の危険性を感じた行動や内容は実習期間中に何回あったかの問いに対し、0 回 23 名、1 回 19 名、2 回 7 名、3 回 5 回 10 回がそれぞれ 1 名であった。

受け持ち患児の年齢と性別について 1 歳未満は 28 名、1 ～ 6 歳は 14 名、7 ～ 13 歳は 10 名で、性別は男児 18 名、女児 12 名、未記載が 22 名であった。

時間帯については、10 時 10 名、11 時 12 名、12 時 1 名、14 時 4 名、15 時 2 名で、午前中に多く発生していた。

場所については、外来場面が 1 件のみで、ほとんどが病棟で、大部屋が最も多く、プレイルーム、廊下などがあげられていた。

自由記載の内容については、検温時やあそびの場面が多く、ついで入浴や歩行時などがあげられていた。

＜考察＞今回の調査では幸いにも、実際の事故は起こらなかったが、事故になりえた、事故の危険性があったと 56 %の学生が報告している。体験の回数は 1 回から多い者で 10 回という体験があるが、これは看護学生の注意不足などの要因だけでなく、患児の年齢や行動特徴から起こり得る危険に対する認識不足と考える。

患児の年齢は、4 か月から 13 歳までと幅広く、平均 52 か月で乳児期、幼児期、学童期の順に多かった。乳児期の患児は母親が付き添っているため、2 名以上の人間が関係していることから事故の可能性が低いと考えられがちであるが、むしろお互いの確認を、指導者は充分に行う必要があると考える。幼児期は安全に関する事故の理解力は乏しく、活動性は大きく変化に富むため、危険性がより大きくなる。従って幼児期の事故に対する認識を看護学生に充分に指導しなければならない。

発生時間帯が午前中に多く、午後に減少したのは、病棟内での看護業務や看護学生の検温や清拭のケアが多く実施されたいるためと考えられるが、午後の時間は学生自身の集中力の低下や慣れが影響していると考える。

発生場所は 、大部屋やプレイルームが多く、また場面は、検温やあそび、歩行時に多く、はしゃいだりふざけていて転倒やけがなどの事故が起こりそうになったと報告している。

以上のような結果から、事故の発生要因として、看護学生の事故に対する知識不足、看護技術の未熟さ、観察と確認の不十分さが考えられる。また新生児期から学童期まで潜在的事故の可能性があることがわかった。従って、小児期各期の発達段階と行動様式を充分に考慮した事故に対する事前学習を行う必要性があり、また受け持ち患児の行動特徴と個性、また安全性に対する子どもの理解力をアセスメントした具体的な指導を学生の個性や能力に応じて行う必要があると考える。

看護学生の達成動機に関する研究

—自己効力感との関連において—

○松永保子　信州大学医学部保健学科
森田敏子　熊本大学医学部保健学科
内海滉　千葉大学

キーワード：達成動機　自己効力感　看護学生　看護教育

＜目的＞

達成動機は，Murrayにより人間の「社会的動機」のひとつとしてとりあげられた後，McClelland & Atkinsonらにより，「自己の困難な目標をもとに物事をやり遂げようとする動機」と定義されている。わが国において，達成動機に関しては，宮本を始め堀野・森らが研究を重ねており，看護学生の達成動機については，松永・森田らの研究がある。

自己効力感とは，ある行動を起こす前に個人が感じる「遂行可能感」,すなわち自分にはこのようなことがここまで出来るのだという感じであり，この概念は，人間の行動に影響を及ぼす要因としてBanduraにより提唱された。自己効力感を高く評価するものは成績がよく，低く評価するものは成績も低いとの研究が多数ある。

今回、大学看護学科の学生の達成動機および自己効力感を調査し，その関連を明らかにした。

＜方法＞

大学看護学科の学生60名を対象とし，達成動機，自己効力感の測定をした。

達成動機の測定には，Bendingの質問紙を堀野・森が翻訳・加筆した23項目からなる双極7件法の「達成動機測定尺度」を用いた。自己効力感の測定には，坂野・東條が作成した16項目よりなり，「Yes」「No」で答える「一般性セルフエフィカシー尺度」を用いた。

各学生には，この調査が研究のためのものであり，個人的な情報は一切外部に漏れないことを口頭と文書で伝えて協力を求め，同意を得た。

分析方法としては，達成動機，自己効力感の測定結果を数量化し入力して，相関係数を算出した。また，各尺度について，因子分析を行い，因子得点の相関係数も算出した。

表1　因子負荷量（達成動機）

項　目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	第7因子
18．成功するということは，名誉や地位を得ることだ	0.76						
20．社会の高い地位をめざすことは重要だと思う	0.70						
22．世に出て成功したいと強く願っている	0.68						
17．就職する会社は，社会で高く評価されるところを選びたい	0.61						
15．今の社会では，強いものが出世し，勝ち抜くものだ	0.57						
13．勉強や仕事を努力するのは，他の人に負けないためだ	0.31						
23．こういうことがしたいなあと考えるとわくわくする		0.86					
12．何か小さなことでも自分にしかできないことをしてみたいと思う		0.69					
19．今日一日何をしようかと考えることはたのしい		0.60					
2．ものごとは他の人よりうまくやりたい		0.41					
10．何でも手がけたことには最善をつくしたい			0.77				
16．いろいろなことを学んで自分を深めたい			0.74				
21．難しいことでも自分なりに努力してやってみようと思う			0.65				
7．人に勝つことより，自分なりに一生懸命やることが大事だと思う			0.49				
9．競争相手に負けるのはくやしい				0.90			
5．他人と競争して勝つとうれしい				0.77			
11．どうしても私は人より優れていたいと思う				0.46			
3．決められた仕事の中でも個性をいかしてやりたい					0.80		
1．いつも何か目標を持っていたい					0.60		
6．ちょっとした工夫をすることが好きだ					0.53		
14．結果は気にしないで何かを一生懸命やってみたい						0.66	
8．みんなに喜んでもらえるすばらしいことをしたい						0.59	
4．人と競争することより，人とくらべることができないようなことをして自分をいかしたい							0.61

＜結果＞

達成動機と自己効力感について相関係数を算出した結果，0.189であった。

また，因子分析の結果，達成動機は7因子（表1），自己効力感は6因子（表2）が抽出された。

さらに，因子得点の相関係数を算出したところ，表3のようになった。

＜考察＞

分析の結果，達成動機と自己効力感で有意な相関が現れなかった。このことは，達成動機と自己効力感の類似性は別の概念の中にあることを示すことが推測された。

因子間の相関から，「自分にしかできないこと」を「積極的に行動することに躊躇している」ことや，「自分に優れた能力や知識があると思っているもの」が「自分の個性を出すことや工夫をすることが好き」など，類似項目の表面的な関連とは別に本質の構造を思わせる若干の所見がみられた。

（まつながやすこ　もりたとしこ　うつみこう）

表2　因子負荷量（自己効力感）

項　目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
2．過去に犯した失敗やいやな経験を思い出して，暗い気持ちになる事がよくある。	0.70					
14．小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである。	0.60					
7．何かをするとき，うまくゆかないのではないかと不安になることが多い。	0.49					
11．どうやったらよいか決心がつかずに仕事にとりかかれないことがよくある。		0.86				
10．結果の見とおしがつかない仕事でも，積極的に取り組んでゆくほうだと思う。		0.52				
4．仕事を終えた後，失敗したと感じることのほうが多い。		0.33				
16．世の中に貢献できる力があると思う。		0.26				
8．引っ込み思案なほうだと思う。			0.69			
15．積極的に活動するのは，苦手なほうである。			0.69			
6．何かを決めるとき，迷わずに決定するほうである。				0.80		
5．人と比べて心配性なほうである。				0.52		
3．友人よりすぐれた能力がある。					0.54	
13．どんなことでも，積極的にこなすほうである。					0.54	
12．友人よりも特にすぐれた知識を持っている分野がある。					0.52	
1．何か仕事をする時は，自信を持ってやるほうである。					0.36	
9．人より記憶力がよいほうである。						0.71

表3　因子得点の相関係数

自己効力感 ＼ 達成動機	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子
第1因子						0.36 *
第2因子			0.45 **			
第3因子		0.30 *				−0.28 *
第4因子						
第5因子	−0.27 *				0.38 **	
第6因子					−0.26 *	
第7因子						

＊ p＜.05　＊＊ p＜.01

幼児間の会話発達に関する研究（8）

－同輩幼児間における会話の質的変化と教育的課題－

山本弥栄子
（龍谷大学大学院　文学研究科）

キーワード：1.幼児間の会話　2. コミュニケーション　3. イメージ共有

研究の目的

2～3歳児期は、言葉を獲得し相手とのコミュニケーションが可能になると同時に、同輩幼児間で集団活動の萌芽期である。保育所では、日々子どもたちが自我をぶつけ合い、相互の意思を伝達し合う姿がある。「相互間で1つの情報保持がされる言語交流の相互作用過程」である幼児期の会話の発達過程を捉え、また会話の質的変化を分析した上で、同輩幼児間の言語交流における教育的指導を抽出したいと考える。本研究は、同輩間の会話発達に関する一連の研究として継続的に報告するものである。

方　法

観察時期と場所：2002年10月、京都市K保育園に在籍する2歳12名(CA2:8～3:5,M2:10,SD2.56)、3歳16名(CA3:7～4:6,M4:2,SD2.90)、4歳17名(CA4:6～5:3,M4:11,SD3.22)、5歳14名(CA5:6～6:6,M6:1,SD3.65)の計59名。**観察手続き**：幼児ペアを保育室の一室に招き、何も提示していない机に対座してもらう。「しばらくお話して待っていてね」と教示を行い、2児のみを部屋に残して観察者は退室した。部屋の様子はガラス窓から確認し、記録はVTR(Sony CCD-TRV80PK)にて行った。

結　果

【2歳群における会話（Fig.1）】

2歳児は、言語表出しながら相互に意志交流を行うことが少ないものの、歌や笑いなどによって感情の交流を行っており、「場面の共有」を相互に楽しんでいるようであった。言語模倣(叫び合い)やリズムなど、相手の言動の模倣や歌の歌い合いでコミュニケーションの場を維持する姿が多くみられた。観察開始後お互いの表情を見合いながらも、ことばのやりとりを行っているが、発話者の発話語尾を模倣しあうことでコミュニケーションの糸口を探しているようであった。

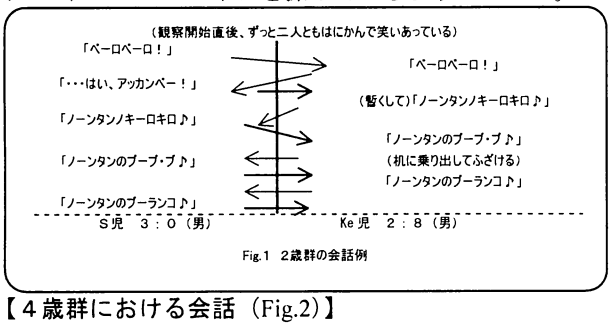


Fig.1　2歳群の会話例

【4歳群における会話（Fig.2）】

4歳になると、会話場面に媒介物が無く日常性の高い主題（園生活での決まり事や自分の家族の話など）における会話が可能となる。4歳児ペアでは、数日前の出来事を捉え、相手との関係に基づいて自己の活動に対する意思表現を行うことが可能である姿が窺える。

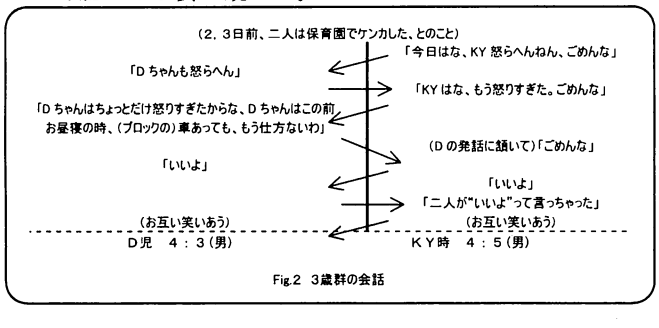


Fig.2　3歳群の会話

【5歳群における会話】

5歳群では、本研究の予備観察結果より、実在する事物を介した会話ではなく、相互間で共通のテーマを媒介にして会話が維持されることが明らかとなった。相互間の「共有テーマ保持」は、同じテーマに基づいて自己経験提示を行い、聞き手が類似経験の出力（言語表出）をした上で両者の共有テーマ保持が為される。また「将来について」をテーマに語る際、その理由を伝えることができ(Fig.3)、相手との相互交流の手段として自らの意志表出を行うことが相互間の会話の維持・発展がされている。

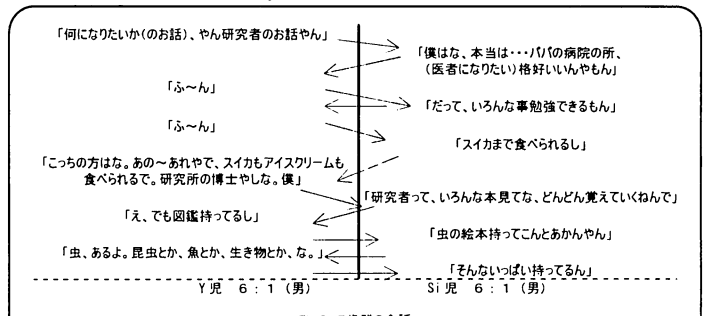


Fig.3　5歳群の会話

考　察

幼児期において、同輩間での会話を教育的観点から支援していくならば、幼児間の会話の発達的過程で質的変化のある次の二つの時期が挙げられるであろう。

第一に、2，3歳頃は、対大人との相互作用的伝達における足場かけが無く同発達水準の対児関係による応答が成立する時期である。幼児期の会話場面における応答能力の重要性に関しては、以前から指摘されてきたが(大井,1995)、2歳後半から3歳頃の幼児は、同輩間での応答能力を有しており、Eye-contactや歌遊びなどのことばのやりとりによって相手と何らかのコミュニケーションをとろうとしている。したがって、①相互間の応答能力の確認、②相手との発話交換において文脈に添って相手の発話を受け止めた応答の有無を確認する必要がある。この際内容として、相互間のコミュニケーションの調整を行わない単なる発話の繰り返し(オウム返しや言語模倣)でないという点は確認が必要である。

第二に、4歳頃は「思考を潜った」会話を為す時期である。この時期になると他者との会話がほぼ成立するとされる。この要因として、思考の発達（記憶力の発達）、語の修正や文脈理解の始まり、他者の視点取得などの要因が挙げられる。このことは、4歳以降の研究対象による幼児期の会話研究が多いことからも自明となりつつある。したがって、自らの意図を込めた発話を用い、さらに相手との相互交渉の手段として言語交流が成立するかどうかの確認が必要である。教育的配慮として、この時期媒介物を共有しなくても言語交流が可能となるが、思考を潜った会話が中心となるため、明確に説明できず、不明瞭な発話や吃音、事実と異なる会話内容などが確認できた際は、聴く姿勢を示すとともに充分に待ち、思考を通したことばのやりとりを行う援助が求められると考えられる。

（やまもとやえこ）

保育所における食事道具の扱い方の発達的研究（5）

～2歳半から3歳前後における食事場面の発達と保育のポイント～

守島　恵
（京都市内保育園）

キーワード：2次元形成期、自我の充実、食事活動に見る他児との交流

研究の目的

1歳後半から2歳前後における食事場面を取り上げた第70回日本応用心理学会発表では、発達的に大文字のⅠ次元形成期（「可逆操作の高次化における階層－段階理論」田中,1999）(以下、大Ⅰ形)に焦点をあてて分析した。通常2歳半から3歳前半にあたる2次元形成期(以下、2形期)は、自我の充実に向かうとされるが、その時期における食事の道具操作を診る。

方法

[観察場所]京都市A保育園1歳児・2歳児クラス **[観察時期]** 2003年12月2,10日 **[観察対象]（横断的研究）**2:5、2:6、2:7、2:9、2:10、2:11の計6名(全男児)を横断的に観察。**[観察場面]①食事場面**：午前11時～11時40分の昼食準備時間帯で、机につく前から食事終了まで。**②課題場面**：新版K式発達検査に基づく机上での課題（円模写、トラック模倣、大小比較の全課題通過を2形期と判定）。**[観察手続き]**ＤＶＣ(PanasonicNV-GS5K)撮影により、1児につき約20分間観察。

結果

■結果1（横断的研究）（表1参照）

【発達段階の推定】結果より、1児のみ大Ⅰ形期を残しているが、他児は2形萌芽期以降に入っていた。

【食事道具】使用道具は園の保育方針により3歳児以降はお箸を使用しているが、2歳児は全てフォークを使用していた。

【自我の発達】保育士の指示に対して反抗し、拒否する姿が見られた。例えば、「ご飯も食べようね」と声を掛けられてわざと味噌汁を飲んだり、「大きいお口(で食べている)だね」と声を掛けられてわざと口を窄めたり、また同輩関係では空席を探して他児が椅子を持って近づいてくるとわざと椅子を寄せて間を詰める姿がある。この時に保育士に注意されると“ここは全部自分の場所”と主張する姿があった。

■結果2（事例研究）A児、C児、F児の事例検討をした。

A児2:4(男)：大Ⅰ形期にあるA児の道具使用は、よりたくさん掬おうと掬い直したり、零れないように力を加減して口まで運んでいた。一口食べる度に周りを見回し、目が合うと微笑んで「コレコレ(これおいしいよ)」と指をさして教える姿もあった。保育士から、「おかずも食べようね」と声を掛けられると素直に器へ手を伸ばした。

C児2:6(男)：2形萌芽期にあるC児の道具使用は、よりたくさん掬おうと手前に寄せたり、右から左方向へ深く掬い上げており、零れないように弱手を添えていた。さらにおかずも促されるとわざわざ味噌汁を飲んだり、明確な反応はないが、ご飯を食べてチラッと保育士の方を一瞥していた。

F児2:11(男)：2形前期にあるF児のみ箸使用で、持ち方は「握り箸をやや緩く握ることで挟み方がやや自由になる」(山下,1978では3a型) であり、箸を使用するものの、まだ「挟む」「摘む」ことが困難であり箸で掬って食べていた。保育士の食事量に対する促しには、箸と格闘しているため、余裕がない表情であった。

考察

一口食べる毎に身体を揺らし、“おいしい”気持ちを表現したり隣りの子の話に相づちを打ったり顔を見合わせて笑ったりするなど、2次元形成期に入った児は自分の力を確かめながらこれまで以上に外の世界に取り組み外の世界を広げていき、体当たりや手応えでそれを受け止め、さらにそこで経験したことを言語化したり感情を交流するようになる。「反抗」は、不確定な2次元を確定していくために発達要求を強く出す姿とされているが、食事活動でもそれが見られた。例えば、嫌いなものには手を付けない児の中には、保育士に促されるとその働きかけに反して好きなものばかり食べ、嫌いなもののお皿には触れようともしない児がいた。この時期の保育のポイントとして、大人が「勝手にしなさい」「もう知らないから」と言いがちになるが、「ジブンデスル」という気持ちを受け止め、「○○組さんになったもんね・もう大きくなったからできるんやね」といった身近な見通しを提示して、あたたかく励ますようにすることが大切になる。(もりしまめぐみ)

表1　食事場面におけるスプーン操作の視点(A～F)と観察結果

	A児(2:4)	B児(2:5)	C児(2:6)	D児(2:9)	E児(2:10)	F児(2:11)
使用した道具	フォーク	フォーク	フォーク	フォーク	フォーク	お箸
メニュー	おかず、のっぺい汁 ウインナー、白飯	おかず、のっぺい汁 ウインナー、白飯	おかず、のっぺい汁 ウインナー、白飯	ふりかけご飯 金平ごぼう、豚汁	おかず、のっぺい汁 ウインナー、白飯	ふりかけご飯 金平ごぼう、豚汁
A （目的を捉える力）	掬おうとするものを見る。	食べたいものを選ぶ。 (好き嫌いがあるため)	食べたいものを選ぶ。 (好き嫌いがあるため)	食べたいものを選ぶ。	食べたいものを選ぶ。 (好き嫌いがあるため)	食べたいものを選ぶ (好き嫌いがあるため)
B （視線）	フォークを口へ運びながら周りを見る。	フォークを口へ運びながら周りを見る。	フォークを口へ運びながら周りを見る。	フォークを口へ運びながら周りを見る。	フォークを口へ運びながら周りを見る。	フォークを口へ運びながら周りを見る。
C （道具の持ち方）	フォークの先を持ち、拇指以外の4指の第2関節あたりに載せ、拇指で上から押さえている。	フォークの先から拇指、人差し指、中指の3指で鉛筆持ちのように持つ。	フォークの先を持ち拇指以外の4指の第2関節あたりに載せ、拇指は人差し指に掛けている。	フォークの基から握って持ち、拇指を人差し指に掛けている。	フォークの基から握って持ち、拇指を人差し指に掛けている。	箸の先を持っている（握り箸）。
D （道具の使い方）	手前へ掬い上げる。	フォークの先端から入れて右から左方向へ掬い上げる。	フォークの先端から入れて右から左方向へ掬い上げる。	フォークの先端から入れて右から左方向へ掬い上げる。	フォークの先端から入れて右から左方向へ掬い上げる。	箸の先端を入れて摘んで口へ運ぼうとする。
E （もう一方の手の協応）	お茶碗の縁に中指を掛けている。口から零れそうになると手を添える。	机に載せている。	お茶碗やお皿の縁に添えている。	宙に浮いているが、零れそうになると手を添える。	机に載せている。口やお茶碗からご飯が零れそうになると手を添える。	お茶碗を支えたり、口から零れそうになると手を添える。
F （食べ方）	先端から口へ入れ、そのまま抜く。	先端から口へ入れ、そのまま抜く。	先端から口へ入れ、そっと抜く。	フォークの先端や横向きに入れてそのまま抜く。	フォークの先端から口を入れそのまま抜く。	箸の先端から口へ入れそのまま抜く。
G （コミュニケーション）	自分の食べたものの名前「にんじん」「とうふ」「これは？」と言っている。	なし	周りから聞こえてくることばに頷いたり「そうや」と言っている。	零そうと手で掴み、ヒラヒラさせて隣りの子に「オバケー」と見せている。	隣りの子が言ったことばをそのまま真似て言う。	「○○やもんな」「○○もしたもんな」と隣りの子と話す。
発達段階	大Ⅰ形成	大Ⅰ形成	2次元形成萌芽期	2次元形成前期	2次元形成萌芽期	2次元形成前期
食事場面にみる自我の発生	◆	◆	◆ ◆	◆	◆ ◆	◆ ◆

注：食事場面に於いて見られた自我の様子について、嫌いなものに対して、保育士の働きかけでおかわりとの交換条件に応じられた場合は「◆」、保育士の働きかけとともに周りの子を意識し嫌いなものへ取り組めた場合は「◆ ◆」で示した。

ワークサンプリング法による船舶ブリッジチーム員の見張り方法に関する一考察

村井康二　　林　祐司
（神戸大学　海事科学部）

キーワード：ブリッジチーム　見張り（Look-out）　目視観察　行動分析

はじめに

船舶の航海当直時における操船者の判断や緊張を解析する研究は数多く行われているが、操船者の行動自体に注目し、その行動を綿密に観察、解析した研究は少ない。さらに、ブリッチチームを構成する操船者（船長、航海士）および操舵手の関連性を含んだ研究は見られない。操船者および操舵手の行動解析は、船舶の安全運航を実現するために必要な操船技術を評価するための最重要要素であり、海域や操船状況により変化すると考えられる。

本研究では安全運航を実現するための見張り（Look-out）方法に注目する。具体的には、操船者および操舵手の行動をワークサンプリング法により目視観察し、両者の行動特性を解析することにより「操船者の Look-out 方法」および「操舵手の Look-out 方法」について評価、検討する。

実験概要

実験は、神戸大学海事科学部付属練習船深江丸の夏季航海における 1 深江出入港・深江沖仮泊、2 室戸岬沖、3 日向灘、4 九州南岸、5 長崎入出港、6 九州北方海域、7 関門海峡、8 周防灘、9 来島海峡、10 備讃瀬戸六島沖、11 備讃瀬戸南航路－宇高西航路、12 高松入出港、13 明石海峡の合計 20 海域に対して行う。そして、操船者および操舵手の行動、視線を目視観察し、1 秒単位で手記にて記録する。また、音声を IC レコーダにより記録する。被験者は、船長 1 名、航海士 2 名、操舵手2名の合計5名である。図1に実験海域の概要を示す。図中の番号は、前文中の海域名称番号である。

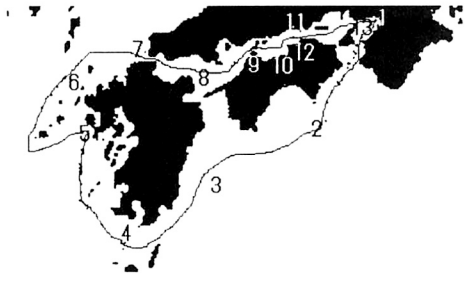


図 1　実験海域の概要

解析方法

実験により収集した行動データは、15 種類、89 項目の作業に分類しコード化する。そして、そのコードに基づき 20 海域に対する解析を行う。解析は、各海域における発生イベントおよび Look-out 方法の差異を抽出することで行ない、海域別、操船状況別の Look-out 方法を明らかにする。

結果および考察

20 海域に対して発生するイベントの種類には、ほとんど差異は見られないが、航海計器（レーダ）と操舵号令の占める頻度に差異が見られる。そして、航海計器（レーダ）の占める頻度に注目すると、相対的に広い海域に対して多く、相対的に狭い海域に対して少ないことがわかった。

次に、相対的に広い海域および狭い海域の Look-out 方法の結果を図 1、図 2 に示す。図 1 は相対的に広い海域である九州北方海域の結果であり、図 2 は相対的に狭い海域である明石海峡の結果である。両図は「肉眼(1)」、「双眼鏡(2)」、「レーダ(3)」および「その他(0)」による Look-out 方法の時間的変化を航海士および操舵手について示している。両図から、相対的に広い海域における航海士および操舵手の Look-out は、「肉眼→レーダ→肉眼」という方法が主であり（図 1）、航海士の Look-out を操舵手が確認するように行われている。一方、相対的に狭い海域における航海士および操舵手の Look-out は、「肉眼→双眼鏡→肉眼」という方法が主であり（図 2）、航海士の見張りを操舵手が補佐するように行われている。

これらの結果から、Look-out 方法には、大きく広い海域と狭い海域に対する方法があり、操船者と操舵手の役割に差異があることがわかった。また、本研究の行動データは、乗船経験豊富な船長、航海士および操舵手から収集していることから、安全運航に務めるための海域別 Look-out 方法のスタンダードとして提案可能であると考える。

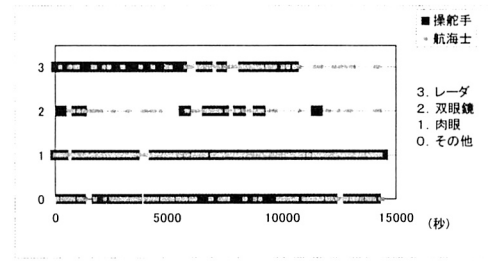


図 2　九州北方海域

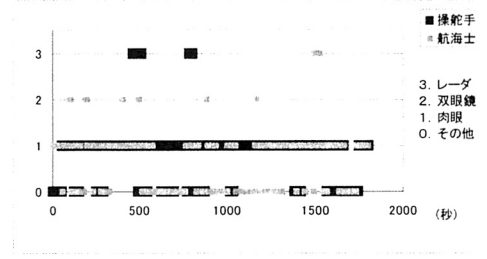


図 3　明石海峡

おわりに

本研究では、船舶の航海当直作業の一つである見張り（Look-out）に注目し、各ブリッジチーム員（操船者、操舵手）の Look-out 方法の特徴について評価、検討した。そして、船舶ブリッジチーム員の Look-out 方法に関して、1) Look-out 方法は、操船者および操舵手間で独立でなく、関連性を有する。2) 海域別により、Look-out 方法が異なることが明らかとなった。

今後は、さらなるデータ収集とブリッジチーム員間の行動特性評価指標の開発について研究を進める必要がある。

（むらい　こうじ・はやし　ゆうじ）

列車運転スキルの獲得過程に関する研究

—列車運転の手順と構造化の試み—

深沢伸幸
（財団法人　鉄道総合技術研究所人間科学研究部）

キーワード：運転スキル，学習過程，運転曲線，列車運転シミュレータ

【研究の目的】

列車運転教習の現場では，教習生（運転士見習）に対し，より科学的で，かつ効果を上げるための教習方法を希求する声が出始めている。そこで，人が列車運転スキルをどの様に学習していくのかという点に関し，研究を始めることにした。学習過程を研究するということは，何らかの人的側面に関する「推移・変容過程」を明らかにすることであるが，これに先立ち，この過程についての解釈を容易にするため，本論ではまず初めに運転の手順とその構造を検討した。

【方　法】

1．実験装置：　A鉄道会社の10駅区間を模擬した行動分析用の列車運転シミュレータを使用した。この区間には，±25‰の勾配と，複数のカーブが存在し，運転が比較的容易な駅間から，難しい駅間までが含まれている。

2．被験者：　23～36歳の男性5名である。被験者は運転士見習として運転教習所に入所し，第一教程を過ぎ（学科試験合格者），実技訓練途中（3ヶ月目）であった。

3．手続き：　各被験者には，始発A駅～終点J駅までの10駅間をそれぞれの標準運転時間で運行し，かつ決められた停止位置標に正確に止めることを求めた（1系列）。1系列の実験時間は25分で，実験は5系列を連続行うことにより，被験者1人当りの総時間は2時間5分となる。

4．解析指標：　本研究では運転スキルを評価する指標として，運転曲線（各駅間を運行する際の速度曲線）を取り上げ，曲線の形状と運転速度のバラツキの大小に着目した。

【結　果】

1．運転曲線の形状：　図1は運転曲線の一例で，図中のB→C駅間は，全体として緩やかな上り勾配（10→12→5‰）で，比較的運転が易しい区間である。図には5本の曲線が描かれているが，ほとんど重なり合い，形状は極めて安定していることが読み取れる。またこの被験者においては，平均で停止位置標の手前－0.6mで止め，平均で運転時間を2.6秒上回る程度の遅れを示したが，位置・時間共に極めて正確である。図2は全被験者25本の曲線結果を示す。図より，全体的な曲線形状は，すべての被験者においてほぼ重なり合うが，B駅出発後750m～停止するまでの区間に曲線の振れ幅が大きくなることが読み取れる。

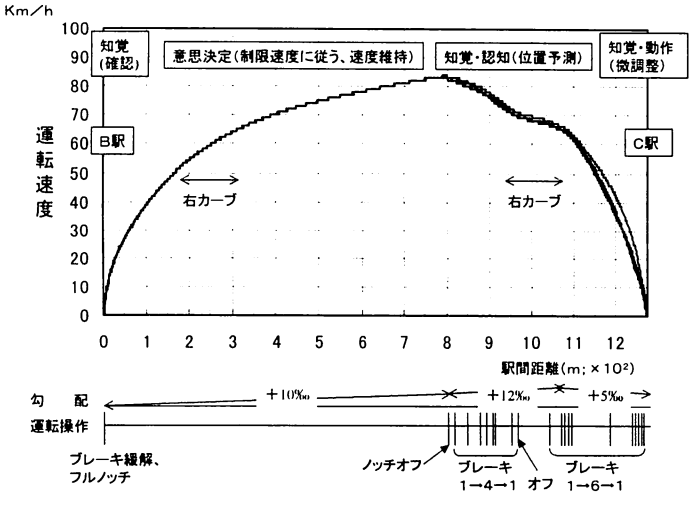


図1．B駅→C駅間の運転曲線と運転操作（sub.S.T.,Age27）

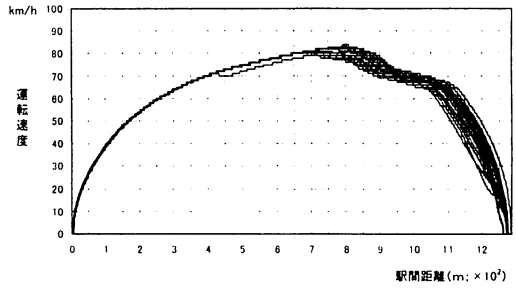


図2．B駅→C駅間の運転曲線（被験者全体N＝5）

2．速度のバラツキ（標準偏差）：　駅間距離を50m毎に区分し，その時点における速度データを用い，被験者全体として速度に関する標準偏差を算出した。一例としてB－C駅間の結果を示す。B駅出発～700m区間の標準偏差値は0.00～0.71を示したが，750m～1250m（停車の手前20m）では1.50～5.62と拡大した（図2参照）。

【考　察】

1．曲線形状：5名の被験者が示す運転曲線はほぼ同一の形状を示し，この駅間に対して設定された車両性能や線路形状から規定される，物理的・効率的特性から引かれる標準運転曲線と近似することが明らかであった（深沢他，2004）。

2．運転手順と構造：　駅間の運転速度，そのバラツキの大小，及び速度コントロールとしての運転操作の各側面から総合的に判断すると，運転手順を5つに大別することができる（表1，図1参照）。

表1．列車運転の手順と構造

(1) 知覚機能：	発進時、戸閉めランプ点灯や信号機等の確認（出発合図ブザー後5－7秒でブレーキ緩解及びノッチ投入）
(2) 意思決定機能①：	加速時（ノッチオン～オフ）、制限速度の遵守（速度のバラツキはほぼ0、運転操作はノッチオン－オフ）
(3) 意思決定機能②：	惰力走行時（再力行、減速）、制限速度遵守・維持（速度のバラツキは小、運転操作は少）
(4) 知覚・認知機能：	減速時、目標接近時の速度と停止位置に対する予測・演算（速度のバラツキは大、ブレーキ操作は頻発）
(5) 知覚・動作機能：	停止時、停止位置標への注視が多く、速度微調整（速度のバラツキは小、ブレーキ操作は頻発）

本例では駅間が短い事例を紹介してきたが，駅間が本例の2倍以上の長い場合でも同様の結果であった。本例にはない，長い惰力走行条件下での速度のバラツキは驚くほど小さな結果を示した。このため加速過程と惰行過程は，一括して意思決定過程と考えることができるかも知れない。いずれにしても，学習によって変容する過程は，各駅間の後半30～40%の範囲であり，速度と停止位置への予測（知覚・認知）機能に着目することが重要である。スキル獲得時の学習過程においては，この範囲における速度のバラツキの大小，言い換えると信頼性を効率的に学習させるための研究が，今後は重要となることが明らかになった。

【引用文献】

深沢伸幸他 2004 —列車運転シミュレータ上での速度コントロール技能の獲得過程— 鉄道総研報告 Vol.18(2) p.35-40

（ふかざわ　のぶゆき）

障害の重い青年期以降の労働問題と人格性発達Ⅱ

2次元可逆操作期における労働に対する主体的関わりと認識の形成

山田　宗寛
（社会福祉法人おおつ福祉会　唐崎やよい作業所）

キーワード　労働と人格発達　成人期障害者の発達保障　2次元可逆操作期

1.研究の目的と方法

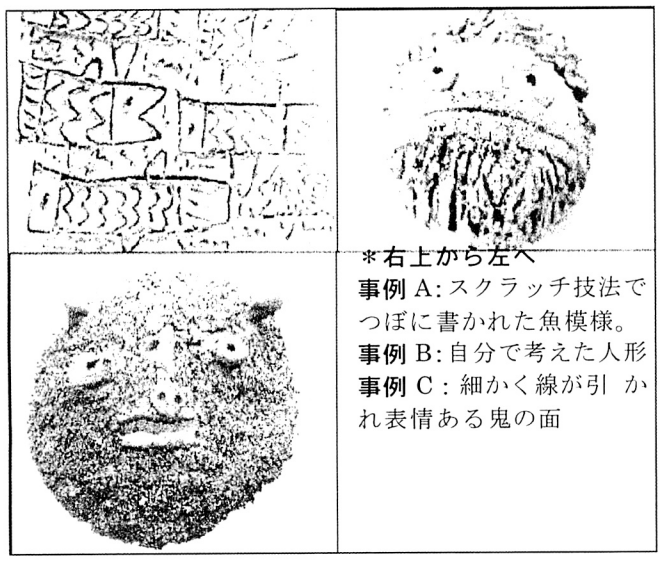
今回の報告は第70回日本応用心理学会報告に続くもので、発達の階層－段階に応じて相応しい労働条件および支援のあり方と労働が人格性発達にどうむすびつき、いかなる効果を与えているのかについて事例検討を行う。

事例は自宅からY通所授産施設（利用数40名）に通所し、陶芸グループ12名のうち3名である。

2.事例の概要

事例	事例A	事例B	事例C
年齢	26歳	27歳	33歳
性別	女	男	男
障害	統合失調症	ダウン症	ダウン症
生育歴	幼稚園→小学校（2年生まで普通学級在籍）→中学校→養護学校高等部→	障害児通園→保育所→小中学校（障害児学級）→養護学校高等部→	保育所→養護学校小中高学部→入所施設（職業訓練のため）→
職歴	H共同作業所（約1年）→K共同作業所（約3年）→Y作業所（4年）	H共同作業所（2年）→K共同作業所（3年）→Y作業所（4年）	K共同作業所（7年）→Y作業所（4年）
＊H共同作業所…自立支援センター的機能、就労訓練 ＊K共同作業所…授産機能、創作活動、生きがい活動 ＊Y通所授産施設…通所授産施設			
陶芸	6年	7年	7年
内容	粘土に絵を描いて模様をつける。皿、ペンダント、壺	人形、壺、オブジェなど	お面、人形、つぼなど
道具	ニードル（粘土に絵を描くペン状の道具）	ニードル、こて、へら、手回しろくろ、電動回転式スポンジ・砥石	ニードル、手回しろくろ、
賃金	11000円	14000円	11000円

3.陶芸及び作品の変化

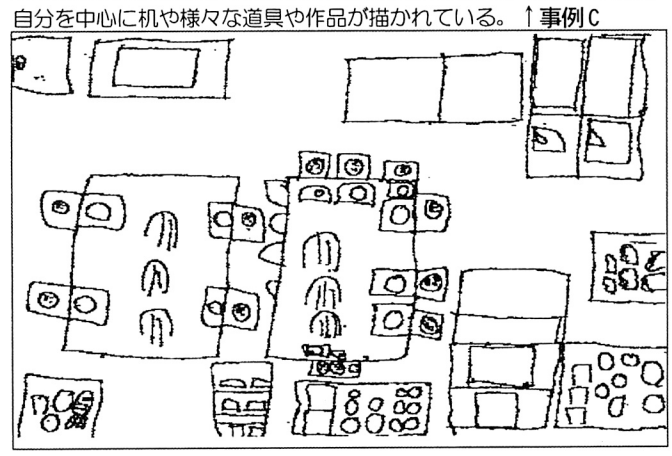


＊右上から左へ
事例A:スクラッチ技法でつぼに書かれた魚模様。
事例B:自分で考えた人形
事例C：細かく線が引かれ表情ある鬼の面

4.仕事の絵

←事例A：ペン（ニードル）を持って魚模様をろくろの上にのせた壺に描いているところ。手前の線は机

自分を中心に机や様々な道具や作品が描かれている。↑事例C



事例 B:かなり具体的で正確に仕事場の様子が描かれている。仕事なかまの席や自分の作品、道具も書き込まれている。

5. 2次元可逆操作期における労働の状況

どの事例も自分がつくったものが売れたり、評価されることが仕事への自信につながり、労働意欲も高まった。また作業工程や手順も経験があれば理解出来るようになり、仕事内容を他者に説明することも出来るようになる。そして出来具合も自分で評価できるので修正や工夫も可能となり製品の完成度が高まった。仕事には集中して取り組めるようになり、作品の変化や発展も見られる。道具の操作はペンで描くことから機械の操作まで特性を理解して使いこなすことが可能となった。生活面ではコミニュケーションを積極的に持とうし、仕事のなかまへの配慮が出来るようになるなど人格面での拡がりも見られるようになった。

6. 2次元可逆操作期における労働の特徴と条件

障害が重いとされるこの発達段階においても適切な支援があれば仕事に取り組み、労働に対する認識を持つことが可能である。それが生活の充実に結びつき、人格性発達につながっていくと言える。発表にて事例や作品を通して2次元可逆操作期の労働に対する主体的関わりと認識について詳細に説明したい。

（やまだ　むねひろ）

保健室利用と不登校に対する教師の意識の一側面（2）

―「10年経験者研修」参加教師に対する調査から―

小谷　正登
（関西学院大学教職教育研究センター）

キーワード：保健室利用、不登校、生徒指導

【研究の目的】　2001年度に138,722人で過去最高となり、前年度比で3.3%増加した不登校の児童生徒数は、2002年度には131,252人となった。これは、現在の基準（不登校で学校を年間30日以上欠席）で調査を始めた1991年度以降初めての減少である。また、「学校嫌いで50日以上欠席した児童生徒」を集計していた過去の調査を含めても、人数、出現率ともに1975年以来の増加が止まった。しかしその反面、不登校そのものが多様化し、その態様もいくつかの特徴を併せ持つ「複合型」が増加している。このため、不登校の児童生徒への理解や対応がより一層困難になっているのが現状である。2002年度の不登校児童生徒数を学年別にみると、学年が進むにつれて増加し、中学３年生で最も多く、全体の34%を占めている。また、同年度の調査では、小学校が25,869人（前年度比642人減）、中学校が105,342人（同6,869人減）と中学校の減少が著しい。1995年度からスクールカウンセラーの導入が開始され、01年度から02年度にかけて全国配置が本格的に始まった。初の減少がこの時期と重なることから、相談態勢の充実に対する一定の評価が下されている。さらに視点を変えると、この減少に関係するものとして、「保健室利用・登校」、「別室登校」の動きや適応指導教室（教育支援センター）の働きを見逃すことができない。中でも、「保健室登校」は、不登校が増加し始めた1980年代中頃から学校保健関係者の間で使用され出した言葉であり、その定義は「常時保健室にいるか、特定の授業には出席できても、学校にいる間は、主として保健室にいる状態」とされる。現在、保健室登校をする児童・生徒の数は増加傾向にあり、さらに様々な理由で保健室を利用する児童生徒の数もそれ以上に増加している。本来、保健室は、養護教諭の働きのもと学校における健康管理・保健指導・健康相談の施設であるが、現在は児童生徒の心の問題に対するカウンセリング的な対応も求められ、その働きは重要なものとなっている。しかし、ヘルスカウンセリングとも呼ばれるこの新しい働きは、担任を含め学校全体の理解を初めてとして学校協働化を必要とする。小谷(2004)は、学校協働化のキーパーソンとしての学年主任の働きに注目した。　本研究は、昨年度の研究に引き続いて、2004年度８月上旬に実施される兵庫県公立学校教員対象の「10年経験者研修」への参加者に対するアンケート調査によって、保健室利用（保健室登校）に対する意識調査および保健室利用（保健室登校）についての実態調査を実施し、保健室の利用を通しての不登校の心理的メカニズム、また登校に対する学校の取り組みの課題を明確にするものである。さらに、生徒指導上、該当児童生徒への適切な対応を考察するものである。

【方法】

1. 調査対象：兵庫県公立学校教員対象の「10年経験者研修」への参加教員（小・中・高等学校・養護学校）約100名
2. 調査日時：2004年8月上旬
3. アンケート内容
   ①保健室利用・保健室登校に関する知識の有無について
   ②勤務校の保健室利用・保健室登校の実態について
   ③保健室に対する意識調査について
   ④養護教諭に対する意識調査について
   ⑤保健室登校と不登校の関係について
   ⑥保健室利用・登校の生徒指導上の問題について
   ⑦保健室利用・登校に関するその他の問題について（進路指導・教務関係など）
   ⑧保健室利用・登校に対する学校全体の取り組みについて
   ⑨学校協働化のキーパーソンについて　など

以上のアンケート内容について、評定法・自由記述式で回答を得ることとする。

【結果】　伊藤(2003)は養護教諭および保健室登校を経験した児童生徒を調査対象にした研究において、保健室登校の増加に伴い、養護教諭へのサポート、教師間のネットワーク作り、学校と関係機関とのつなぎ役という形などでＳＣが寄与するなどの養護教諭とＳＣの協働（コラボレーション collaboration）の効果と必要性を提示している。反面、ＳＣの関与・連携が不十分なケース、ＳＣの配置により保健室登校が増加し、養護教諭の多忙感を高めている可能性が報告されている。このように、保健室利用・登校に関して、養護教諭とＳＣが重要な働きを担うキーパーソンであることが度々述べられている。しかし、小谷(2004)の調査では、「保健室登校・保健室利用を解決するためのキーパーソン」「不登校・いじめ・暴力行為を解決するためのキーパーソン」の項目中、「その他」で多く見られたのが「全ての教員」であった。この問題を学校全体の課題として取り組むためには、管理職、担任教諭、専門部の教諭、養護教諭、ＳＣなど全てを結びつけることが必要である。

【考察】　その働きを担うことが可能である職の１つが学年主任と考えられるが、瀬戸(2000)は、学習充実、職場満足、校内研修、分掌の機能性、協力体制、管理職の指導力など学校組織特性教師とＳＣの連携の有効性を左右する要因としている。そして、保護者に対する教育相談やＳＣについての広報活動などの「組織的支援活動」の重要性を示唆している。さらに、連携の担当者に校内研修、学年会議、分掌会議、職員会議など多面的な実践を行う多面的なマネージメント能力を求めている。以上の諸条件も考慮しながら、学校全体の連携化・協働化を図るために、キーパーソンの働きを再構築・再認識する必要性がある。また、養護教諭やＳＣの働きを視点におきながら、学年主任や担任教諭など一般の教員の立場から児童生徒の「心の問題」に関する連携化・協働化を、保健室利用・登校の動きを通してより一層考察することがこれからの生徒指導の必須課題であると考えられる。

【引用文献】

伊藤美奈子　2003　保健室登校の実態把握ならびに養護教諭の悩みと意識－スクールカウンセラーとの協働に着目して－　教育心理学研究，51，251－260.
小谷正登　2004　保健室登校をめぐる学校協働化の必要性―「10年経験者研修」参加者の意識調査から―　教職教育研究(関西学院大学教職教育研究センター紀要)，9，39－52.
瀬戸健一　2000　高校の学校組織特性が教師とスクールカウンセラーの連携に及ぼす影響　教育心理学研究，48，215－224.

（こたに　まさと）

国家の変容と心理教育に関する考察

― ジェンダー思潮の焦点化を端緒として―

望月雅和
（日本認定心理士会）

キーワード：ジェンダー　ジェンダーフリー教育　男女共同参画社会

【問題の所在】「日本女性の社会的政治的地位向上を実現するために設置され、女性を局長にしたわが国で最初の政府機関」（上村千賀子「日本における占領政策と女性解放」『女性学研究』第二号、所収）である旧労働省婦人少年局関係者、及び、文部省関係者と、筆者は、共同研究の成果として『戦前婦人労働論文資料集成』（全８巻）を刊行した。また、この研究に関連し筆者は、本学会での研究報告を行い、労働におけるジェンダーの視座からの論考である「母性焦点化における女性労働論考」、及び、マクロな社会福祉について、ジェンダーの視座を探った「社会福祉学とジェンダー」を、それぞれ論じてきた。今回は、これらに引き続き、ジェンダー思潮への焦点化を端緒としながら、国家の変容と教育について考察をしていく。

【方法・対象】ジェンダー（gender）の概念は、女性への研究の対象化としてならば、戦前からも多く見ることが可能である。例えば、わが国においては、筆者が編集に携わった『戦前婦人労働論文資料集成』に収録された、医学博士の暉峻義等の一連の女性に関する生物学的研究（もちろん、これらは性差を射程としたものである。例えば、暉峻義等「婦人労働と乳幼児愛護事業」の研究）や、政治的社会的な視野も有する奥むめお「女性の社会的進出と乳幼児」、恩田利子「職業婦人の福利施設について」の研究等、数々の当時の研究成果が示唆するように、戦前期からある、この分野への関心の高さと、研究への意欲を見出すことが可能である。むしろ、ジェンダーに関する研究は、今日的なものであるとの固定観念があると、史的文献、原資料を探っていく中で、優れた過去の研究業績の前に、逆の意味でギャップを見出すこともあろう。しかし、その上で、今日的な意味でのジェンダー論の視座が、本質的に新しい視座の上に立っていると言う視点、つまり、パラダイム転換状況にあるという認識が重要である。

フェミニズム（feminism）理論をみれば、現代が、「第二波フェミニズム」以降の時代状況下であると指摘される。つまり、1960 年代以降からアメリカ等でみられた、ポスト女性参政権運動である新しい女性運動、「社会慣習や社会意識による性差別」（江原由美子「フェミニズム」『岩波女性学事典』）をも射程とした、第二波の新しい運動期であるとの認識である。

また、別に、今日的な国家の変容を辿っていくと、さらに新しい変化が生じてきていることも見て取れる。これは、いわゆる、「gender mainstream」概念に示されているが、わが国では明示的に、1999 年に制定された男女共同参画社会基本法の前文において、「男女共同参画社会の実現を二十一世紀のわが国社会を決定する最重要課題」と名文化しているように、国家変容の過程にあって、ジェンダー的視座が、単に、対抗社会論ではなく、文字通り、メインストリームな位置づけとして、こうした論題が対象化され、議論される構造が生じてきているのである。

伝統的に、女性学研究は、社会・時系列的な研究、「女性史」の研究分野が重視されてきたが、今日のジェンダーパラダイムの転換状況下においては、一層、国家や社会の変容過程に自覚的であることが、どの方法論を採用し諸問題に接近するのであれ、重要なことであろう。例えば、ジェンダー研究の全ての業績を、フェミニズム論にある革新的フェミニズム理論の範疇で類型化していくことは、現在、「わが国の最重要課題」と法律により明文化され、内閣府に男女共同参画局が所属する現状では、現実を反映しきれないということがあろう。いずれにせよ、ジェンダーの捉え方が大きな変化をもたらしている現在に諸問題を対象化する際、転換的なジェンダーの思潮に自覚的であることが、基本的な意味を持つ。

【考察】さて、ジェンダーの視座が、社会慣習や社会意識による性差別を問題にする限り、その社会を生成する根本要因である、人間や人間心理の生成の源泉である、教育の問題に論題が進むのは必然である。教育への問題の対象化も、史的にみれば、戦後の GHQ の教育改革により、女子への高等教育の開放、大学教育の共学化など、制度的な極めて重大な論題が散見されるが、今日問題にされているのは、いわゆる「ジェンダーフリー教育」に見られるように、制度的な問題でありつつ、社会心理／精神的な論題が生じてきている。つまり、より本質的な男女間の平等に関するあり方が問われているのである。

ジェンダーの概念は、生物学的な性差（sex）と立て分けられるように、ジェンダーフリー教育とは、人間としての生物学的な差異を否定するような言説ではないし、教育ではない。また、ジェンダーやフェミニズムの思潮は、戦前期、特に、わが国の戦時期に、既成のナショナリスティクな教育や労働に抗したように、革新的な要素があったが、だからといって、現代における女性の社会進出を促すような教育が、国家や女性に対する対抗理論のみで語られるものでもない。今日は、男女共同参画社会の理念が、政府においても謳われている時である。

現在、急激な少子高齢化による労働人口の減少の予測や、性差による性別役割分業の意識・現状の変化も存在する。こうした中、求められるのは、より普遍的な意味での、男女共同参画社会、社会的性差の基礎的再認識である。ジェンダーと教育が意図する目的について、今もって、固定的な立場から、「一切の性差を否定する教育」という偏った見方が存在することについては、基本的整理を加えると共に、そうした社会的な言説を生み出す社会精神にまで踏み込み、問題を設定していく余地があろう。

【参考文献】

望月雅和 2003 –社会福祉学とジェンダー- 日本応用心理学会第 70 回大会発表論文集
望月雅和 2002 –母性焦点化における女性労働論考- 日本応用心理学会第 69 回大会発表論文集
赤松良子・原田冴子監修　福沢恵子・望月雅和編集・解説 2002–戦前婦人労働論文資料集成第４巻-クレス出版
国立婦人教育会館　女性学・ジェンダー研究会編著 2000 –女性学教育／学習ハンドブック-有斐閣

（もちづき　まさかず）

職場におけるセクシュアル・ハラスメント

― その心理・社会的基底（1）―

加藤　理[1)]　吉田　悟[2)]　○南　隆男[3)]
（[1)]日本経営協会総合研究所　[2)]駒沢女子大学人文学部　[3)]慶應義塾大学文学部 ）

キーワード：Sexual Harassment at Work Place, Gender, Organizational Compliance

【本報告の背景と目的】 職場におけるセクシュアル・ハラスメント（Sexual Harassment at Work Place）の論議は“熱い”ものがある。一言で言えば、それは「在ってはならないこと」であり、それが在った場合には、“被害者”の“トラウマ”はもとより、職場における目標達成（職務遂行行動）に“足枷”的に作用していく、というのが一般の理解である。しかしながら、「職場におけるセクシュアル・ハラスメント」の実態／実情に関して、我々の理解は非常に希薄であることも、また、事実である。

本報告では、某企業組織（以下、X社と略記）の協力と許諾とを得て、当該組織で実施された『セクシュアル・ハラスメントに関する意識調査』のその結果を、許された範囲で、供覧する。

【サイトそしてサンプル】 X社は、いわゆる“カード業務”に従事する会社である。従業員規模は約3,000名で、就業形態別に、①“正規”の社員1,417名（男性社員456名・女性社員961名 ）、②“非正規”のパートタイマー社員1,182名、③嘱託社員76名、から成る。2003年2月に上記の全社員を対象とした、悉皆の／留置の／質問紙による『従業員意識調査』が実施された。調査の内容は広範に渡っていたが、その一部に、X社のコンプライアンス行為の一環として、「セクシュアル・ハラスメント」についての意識／意見が尋ねられた。

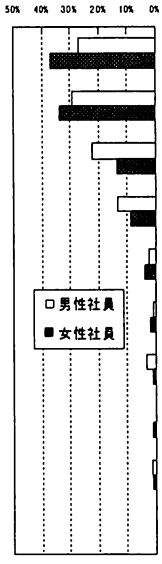
以下に、上記のうち、①の“正規”の社員の資料を援用して、「男性社員」($\bar{X}$=31.9歳,SD=8.3歳）と「女性社員」($\bar{X}$=29.7歳,SD=5.7歳）との反応を比較しながら、「職場におけるセクシュアル・ハラスメント」に対する意識と意見との“実態／実情”を通覧する。

【セクシュアル・ハラスメント：その捉え方と相談相手】 図1-1は、「セクシュアル・ハラスメントをどのような問題と捉えているか」を尋ねた結果であり、女性社員では「就業環境を乱す」、男性社員では「起こしてはならない問題である」が、それぞれ筆頭に来る。全体を見ると、男性／女性社員間（≒ジェンダー）で捉え方に差異がある。図1-2は、「セクシュアル・ハラスメントを受けたとき、まず誰に相談するか」への反応であり、男性／女性社員ともに「部内の同僚」が、まず相談する相手である。全体としては、ここでも、男性／女性社員間（≒ジェンダー）で相談相手の選択に差異がある。

表1-1は、「セクシュアル・ハラスメントの未然防止に向けてのX社としての組織的対応」（1ほとんど適切な対応をとっていない～5非常に適切な対応をとっている）と「最近1年内のセクシュアル・ハラスメント行為の発生頻度」（0～14）と「セクシュアル・ハラスメント行為への不快感」（0不快とは思わない／1不快である）の相関を見たものである。

当然のことではあろうが、「発生頻度」が多ければ「不快感」も増す。「セクハラ防止に向けての組織的対応」は、女性社員にあっては不快感を減らす方向に繋がっているが、男子社員にあっては、そのような関係は意識されていないようである。

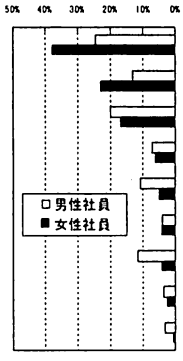
図1-1 あなたは、セクシュアル・ハラスメントをどのような問題だと思いますか。



		男性 (N=456)	女性 (N=961)
1	就業環境を乱す（働きにくくなる、働く意欲が減退する）労働上の問題である	26.8%	36.7%
2	起こしてはならない問題であり、見受けられた場合は厳重に対処すべきである	29.3%	33.2%
3	名誉、プライバシーに関わる人権問題である	22.2%	13.3%
4	過剰に反応しすぎると、かえって職場のコミュニケーションに悪影響を与える危険性がある	13.3%	8.6%
5	社員の能力発揮を妨げる問題である	2.4%	3.6%
6	マスコミが過剰に反応しているが、実際はそれほど大きな問題ではない	1.1%	1.7%
7	わからない	3.1%	0.9%
8	「日本の文化(男性を主人と呼ぶ等)」の問題であり、程々の対応でとどめるべき問題である	0.0%	0.9%
9	当事者間の問題であり、第三者や企業が介入するべき問題ではない	1.6%	0.8%
10	全く問題とは思わない	0.2%	0.2%

（χ^2-test:p<.000）

図1-2 あなたがセクシュアル・ハラスメントを受けた場合、まず誰に相談しますか。



		男性 (N=456)	女性 (N=961)
1	部内の同僚に相談する	24.6%	37.8%
2	家族や社外の友人に相談する	13.1%	23.0%
3	上司に相談する	20.1%	16.9%
4	部門の相談窓口であるメンタルアシスタントに相談する	7.3%	5.9%
5	労働組合に相談する	11.0%	5.0%
6	他部門の社員に相談する	4.2%	4.2%
7	誰にも相談しない	11.7%	3.9%
8	社外の専門家（弁護士やカウンセラー）に相談する	3.7%	2.3%
9	人事部に相談する	3.3%	0.5%

（χ^2-test:p<.000）

表1-1 職場におけるセクハラ行為の、「組織的対応」「発生頻度」「不快感」の関係

	1	2	3
1 セクハラ防止に向けての組織的対応		-.22 **	.02
2 職場におけるセクハラ行為の発生頻度	-.21 **		.26 **
3 職場におけるセクハラ行為への不快感	-.12 *	.17 **	

** p<.01 , * p<.05

註：対角線の，下段が女性社員(N=961)，上段が男性社員(N=456)

かとう　ただし
よしだ　さとる
みなみ　たかお

職場におけるセクシュアル・ハラスメント

― その心理・社会的基底（2）―

加藤　理[1)]　○吉田　悟[2)]　南　隆男[3)]
（[1)]日本経営協会総合研究所　[2)]駒沢女子大学人文学部　[3)]慶應義塾大学文学部 ）

キーワード：Sexual Harassment at Work Place, Gender, Organizational Compliance

【職場におけるセクシュアル・ハラスメントの実情】 図2-1は、「あなたの部門では、最近1年以内に、以下の1～14のような行為が発生しましたか？」との問いかけへの反応を、男性／女性社員ごとに、整理したものである。但し、ここで気をつけなくてはいけないのは、「発生しましたか？」の『発生』は、「自分自身がそのような“セクハラ行為”を受けた」という事実、そしてまた、「自分の周りの他者がそのような“セクハラ行為”に遭ったのを見かけた」という体験の両方を含めて尋ねられていることである。このことに注意喚起されたい。

結果を眺めると、さすがに(?)、『職位を利用して性的要求を突き付ける』は、男性社員で0.2%、女性社員で0.2%と、ともに僅少である。逆に、最も発生頻度の多いそれは、男性／女性社員ともに『卑猥な冗談を言う』である。続いて『身体に触れる』→『服装・化粧・髪型・体型などについて、とやかく言う』→『「もっと女(男)らしく」「女(男)のくせに」などと言う』といった行為で、10%程度の発生頻度である。

「発生頻度」と「社員の年齢」との関係を見ると、男性／女性社員いずれにあっても、一般的には、「年齢の“若い”社員ほど、セクハラ行為を“受けた、または、見かけた”」との報告が多くなる。

男性社員にあっては、1－卑猥な冗談をいう（20代後半が最頻）／2－身体に触れる（20代後半が最頻）／3－服装・化粧・髪型・体型などについて、とやかく言う（30代前半が最頻）／5－「もっと女(男)らしく」「女(男)のくせに」などと言う（20代前半が最頻）／6－「なぜ結婚をしないのか」「なぜ子供をつくらないのか」などをしつこく聞く（30代前半が最頻）／8－異性との関係をしつこく聞く（20代前半が最頻）／11－飲みたくないお酒を強要する（20代前半が最頻）、といった様相である。

女性社員にあっては、1－卑猥な冗談をいう（20代後半が最頻）／2－身体に触れる（30代前半が最頻）／3－服装・化粧・髪型・体型などについて、とやかく言う（20代後半が最頻）／4－仕事上で「女(男)ではだめだ」などと言ったり、そのような態度をとる（30代後半が最頻）／6－「なぜ結婚をしないのか」「なぜ子供をつくらないのか」などをしつこく聞く(30代前半が最頻)、といった様相である。

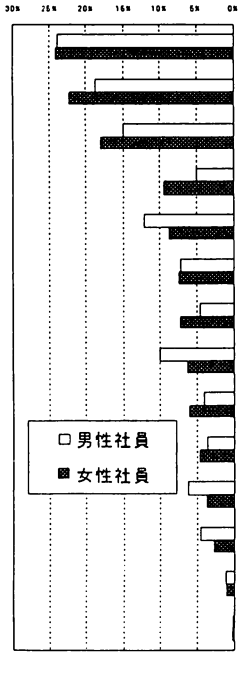
男性社員にあっても、女性社員にあっても、この「年齢」と「セクハラ行為を受けた／見かけた」こととの関連性の特徴は、了解可能であり、解釈に困難性はない。

男性／女性社員間での反応の差異をみると、4－仕事上で「女(男)ではだめだ」などと言ったり、そのような態度をとる（男性社員＜女性社員）／5－「もっと女(男)らしく」「女(男)のくせに」などと言う（男性社員＞女性社員）／8－異性との関係をしつこく聞く（男性社員＞女性社員）／11－飲みたくないお酒を強要する（男性社員＞女性社員）／12－性的な噂を流す（男性社員＞女性社員）、といった様相である。

この男性／女性社員間に見られた違いは、多少の解釈の難しさが存在しよう。男性社員の方が、よりセクハラ行為をしがちであり(!)、また見聞もしがちだ(?)、ということの反映ということもあろうか…？

（かとう　ただし・よしだ　さとる・みなみ　たかお）

図2-1　最近1年以内に発生した（受けた、または、見かけた）セクシュアル・ハラスメント行為



	男性（N=456）		女性（N=961）		男女間の差
	%	年齢による差	%	年齢による差	
1 卑猥な冗談を言う。	23.9%	**	24.1%	*	
2 身体に触れる。（挨拶代わりに触る・肩をもむ・手を握る等）	18.6%	**	22.2%	*	
3 服装・化粧・髪型・体型などについて、とやかく言う。	14.9%	**	18.0%	**	
4 仕事上で「女(男)ではだめだ」などと言ったり、そのような態度をとる。	5.0%		9.1%	**	**
5 「もっと女(男)らしく」「女(男)のくせに」などと言う。	12.1%	**	8.6%		*
6 「なぜ結婚をしないのか」「なぜ子供をつくらないのか」などをしつこく聞く。	7.2%	*	7.3%	**	
7 いやらしい目で見る。	4.6%		7.0%		
8 異性との関係をしつこく聞く。	9.9%	**	6.1%		*
9 酒席でお酌等のホステス・ホスト役を強要する。	3.9%		6.0%		
10 しつこく食事やデートに誘う。	3.5%		4.5%		
11 飲みたくないお酒を強要する。	6.1%	*	3.5%		*
12 性的な噂を流す。	4.6%		2.6%		*
13 ヌード写真を見せたり、目に付くところに掲示する。（パソコンの壁紙等）	1.1%		1.0%		
14 職位を利用して性的要求を突きつける。	0.2%		0.2%		

** $p<.01$　* $p<.05$

註：「年齢による差」は、20代前半／20代後半／30代前半／30代後半／40代／50代の6層間での差異が、「男女間の差」は、男性社員／女性社員の2層間での差異が、χ^2-testで吟味された。

職場におけるセクシュアル・ハラスメント

― その心理・社会的基底（3）―

○加藤　理[1)]　吉田　悟[2)]　南　隆男[3)]
（[1)]日本経営協会総合研究所　[2)]駒沢女子大学人文学部　[3)]慶應義塾大学文学部 ）

キーワード：Sexual Harassment at Work Place, Gender, Organizational Compliance

【職場におけるセクシュアル・ハラスメント行為の構造】図3-1（男性社員）および図3-2（女性社員）は、「最近1年以内に発生した（受けた／見かけた）セクハラ行為」への反応（受けた／見かけたを1として数値化）にクラスター分析（ウォード法）をかけて抽出されてきた“構造”である。

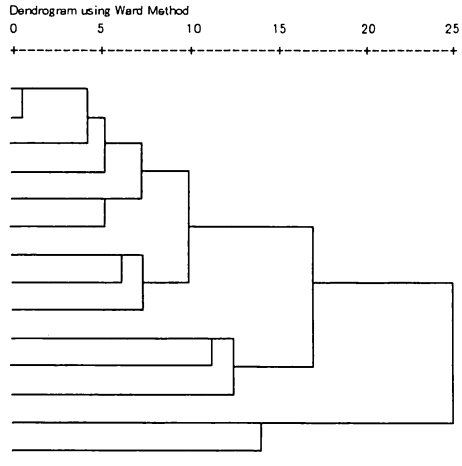
男性／女性社員ともに、その“構造”は、大まかには、4つにクラスター化される。両社員のクラスターに共通している項目で見れば、それらは、①“卑猥な冗談を言う”などの「性的冗談行為」、②“なぜ結婚しないのか／なぜ子供をつくらないのか、などをしつこく聞く”“もっと女（男）らしく／女（男）のくせに、などと言う”などの「性差別的発話行為」、③“飲みたくないお酒を強要する”といった「“パワーハラスメント的”強要行為」、そして、④“ヌード写真を見せたり、目に付くところに掲示する”“職位を利用して性的要求を突きつける”の文字どおり「“セクハラ的”行為」である。

但し、仔細に眺めると、これら4つのクラスターのそれぞれに包含されてくる項目には、男性／女性社員間に“異同”が存在する。この、クラスターを構成する項目の、男性／女性社員間での微妙な“異同”は、恐らくは、「セクハラ行為を受けた／見かけた」頻度にもとづいて抽出された“構造”化のゆえであろう…。図2-1（発表(2)）に見たごとく、男性社員と女性社員とでは「受ける／見かける」その頻度に違いが在るのである。推量するに、より“加害者的”立場に陥りやすい男性（社員）と、より“被害者的”状況に押しやられがちな女性（社員）とでは、“受ける／見かける”経験そのものに違いがあるのであろう。極言すれば（断言ではないが）、特定少数の“男性加害者”と不特定多数の“女性被害者”といった、職場における「社会構造」である。

このような「社会構造」要因に、男性と女性とでの「セクハラ行為への不快感情」要因が絡まったのが、図3-1／図3-2に見られた構図か、とも思われる。ちなみに、“飲みたくないお酒を強要する”は、女性社員にあっては、より“セクハラ的”行為に受けとめられているが、男性社員では、より“パワハラ的”行為の受けとめである。同様、“性的な噂を流す”は、女性社員は、文字どおり“セクハラ行為”に位置づけているが、男性社員は、どちらかと言えば“パワハラ行為”との位置づけである。

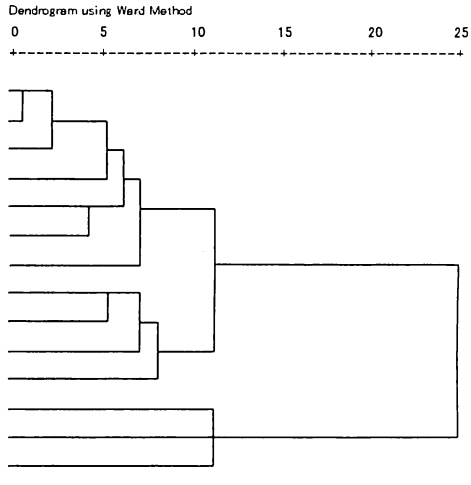
（かとう　ただし・よしだ　さとる・みなみ　たかお）

図3-1　最近1年以内に発生した（受けた、または、見かけた）
セクシュアル・ハラスメント行為についてのクラスター（男性社員　N=456）



- ヌード写真を見せたり、目に付くところに掲示する。（パソコンの壁紙等）
- 職位を利用して性的要求を突きつける。
- しつこく食事やデートに誘う。
- 酒席でお酌等のホステス・ホスト役を強要する。
- いやらしい目で見る。
- 性的な噂を流す。
- 仕事上で「女（男）ではだめだ」などと言ったり、そのような態度をとる。
- 「なぜ結婚しないのか」「なぜ子供をつくらないのか」などをしつこく聞く。
- 飲みたくないお酒を強要する。
- 服装・化粧・髪型・体型などについて、とやかく言う。
- 異性との関係をしつこく聞く 。
- 「もっと女（男）らしく」「女（男）のくせに」などと言う。
- 身体に触れる。（挨拶代わりに触る・手を握る等）
- 卑猥な冗談を言う。

図3-2　最近1年以内に発生した（受けた、または、見かけた）
セクシュアル・ハラスメント行為についてのクラスター（女性社員　N=961）



- ヌード写真を見せたり、目に付くところに掲示する。（パソコンの壁紙等）
- 職位を利用して性的要求を突きつける。
- 性的な噂を流す。
- しつこく食事やデートに誘う。
- 酒席でお酌等のホステス・ホスト役を強要する。
- 飲みたくないお酒を強要する。
- いやらしい目で見る。
- 異性との関係をしつこく聞く 。
- 「なぜ結婚しないのか」「なぜ子供をつくらないのか」などをしつこく聞く。
- 「もっと女（男）らしく」「女（男）のくせに」などと言う。
- 仕事上で「女（男）ではだめだ」などと言ったり、そのような態度をとる。
- 身体に触れる。（挨拶代わりに触る・手を握る等）
- 卑猥な冗談を言う。
- 服装・化粧・髪型・体型などについて、とやかく言う。

【謝辞】資料を開示・提供下さったX社に衷心よりの謝意を表します。とりわけ、分析に向けて貴重な助言をいただいた能代成一郎様、佐藤友紀様をはじめとするX社人事部の皆様に、深く御礼を申し上げる次第です。

「癒し」の心理尺度作成の試み

― とくに芸術作品に対する癒し ―

○松本　洸[1)]　外島　裕[2)]　山崎　晴美[3)]　佐藤　清公[4)]
([1)] 日本大学芸術学部　[2)]日本大学商学部　[3)]日本大学歯学部　[4)]日本大学総合科学研究所)

キーワード：癒し、心理尺度、芸術作品

【研究の目的】　本研究で目的としている「癒し」の心理尺度は、主に芸術作品や居住環境などを対象に、その対象から癒される気持ちが生起するかを測定する尺度とした。単純にＳＤ法のような外的刺激に対する印象評価ではなく、刺激から得られる評定者自身の心的変化を内省しながら評価する尺度である。芸術作品の印象から生起する被験者の心的変化が「癒される」方向に変化しているのかを捉えなければならない。その意味で、尺度項目のワーディングと評価の仕方に工夫をしながら、測定可能な質問紙の作成とスケーリング（尺度得点化)を目指して研究が進められた。今回の研究報告は、その大目的の「癒し」の心理スケーリング研究プロセスの中で、予備調査の分析結果から「癒し」の因子抽出までを取りまとめて報告する。

【方法】　本研究に関連した調査は、これまでに３回ほど実施した。第１回目は一般に「癒し」と言われている内容がどのような心的反応をいうのかを、第２回目は「癒し」にかかわる心的反応にはどのような因子があるのかを、第３回目は「癒し」の心理測定が実際の芸術作品に適用できるかを評定項目を作成して調査した。

第１回目の調査は、いわゆる「癒し」とは一般にどのような意識をいうのか、また、「癒し」の心的反応とはどのような内容なのかを知る目的で調査を行った。調査票は、すべて自由回答法による記述式にした。具体的な質問は次のとおりである。(1)「癒されたいと思うときはどういう時ですか」を自由記述、(2) 文章完成法による自由記述を８項目（例えば、「疲れた」時には＿＿＿＿など)、(3)「癒し」という言葉からの連想語、(4)「癒し」の反対語を調査した。以上４問の質問に性別、年代のフェイス質問を入れて、質問票とした。調査対象者は、高校生 42 名（男５名、女 37 名)、大学生 73 名（男 22 名、女 51 名)、会社員 51 名（男 38 名、女 13 名)、家庭女性・老人 17 名（男３名、女 14 名）の計 183 名（男 68 名、女 115 名）であった。調査実施期間は、2001 年 12 月から 2002 年１月中とした。

第２回目の調査は、第１回調査における「癒し」の連想語中、心的反応語として扱える「ことば」を選んだ。選定の基準は、「～気分になれる」、「～感じがする」、「～気持ちになれる」につなげられる連想語を選定した。それを整理して 82 語を心的反応語として評価項目に利用した。評定は４段階評価とした。刺激語は６語（「大地」、「祭り」、「恋人」、「ぬいぐるみ」、「初日の出」、「タマちゃん」）を用意した。調査対象は大学生 113 名（男性 30 名、女性 83 名）であり、調査は、2002 年９月 20 日～９月 30 日に実施された。

第３回目の調査は、２回目調査の因子分析より因子負荷量の高い項目を 56 項目選び、調査票を作成した。刺激は、芸術作品など 12 作品（聴覚刺激で６作品、視覚刺激で６作品）を用意して、それを聞きながら（見せながら）評価する。それに加えて、ストレス内容等を回答するフェイスシートが加えられた。被験者は、10 歳代から 60 歳代までの 140 名（男 65 名、女 75 名）であった。調査期間は、2003 年７月 20 日～10 月 10 日であった。

【結果】　第１回目調査における「癒し」の連想語および反対語から，K－J 法で「癒し」のイメージ構造図を作成した。その図から，「癒し」が五感と大きく関わっていることがわかった。連想語の頻数が多かったのは，女性は「アロマテラピー」，「音楽」で，男性は「音楽」，「温泉」などであった。また，「癒し」の心的反応語として約 90 語の言葉が出たので，これを整理することによって，第２回目の調査項目を選定できた。第２回目調査は，６個の刺激語をそれぞれイメージしながら反応評価したものを因子分析法にかけた。因子分析の結果，有効因子(固有値 1.0 以上)が８因子抽出された。因子名称は，＜やすらぎ＞,＜希望・清らか＞,＜快活＞,＜ストレス＞,＜触感的安堵＞,＜無の気分＞,＜ほのぼの＞,＜おもいやり＞因子とした。参考に抽出した 10 因子までの中から因子負荷量の高い項目を絞って，第３回目調査の調査項目とした。第３回目調査は，芸術作品に対して「癒し」評価が可能かどうかの調査である。その結果、被験者にとって「癒し」対象になっている刺激と、「癒し」対象にならない刺激を明確に仕分けがつけられることがわかった。また、56 項目を因子分析した結果、＜なごむ・安心＞,＜勇気・力＞,＜静か・清らか＞,＜うるおい＞,＜無邪気・楽しい＞,＜まったり＞の 6 因子が抽出された。これらの因子を用いて、それぞれの刺激の「癒される」側面をプロフィールに描くと、刺激の「癒し」タイプの違いを仕分けることができた。総合的な「癒し」度を反応数で計測し、「癒される」側面を因子プロフィールで表示することで、芸術作品の「癒し」心理スケール作成の骨組みができた。

【考察】　第１、第２回調査は、まずは「癒し」が一般の人々にどのようなイメージで認識されているのか、「癒し」に対する心的反応とはどのようなものがあるのかを探った（第１回目調査)。そして、その心的反応の連想語を利用して、「癒し」の心的構造が多次元であることを想定して、その次元を抽出することを第２回目調査で進めていった。これらの調査データと分析を通して、「癒し」の心的構造を考察しておく。第１回目調査における文章完成法の質問項目「芸術は、わたしを～」の自由回答での多くの記述は、「こころを豊かにさせてくれる」、「自分を楽しくさせてくれる」、「前向きな気持ちにさせてくれる」など自己のエネルギー源の性質を指摘している。「芸術」のかかわりを目的にした「癒し」の心理的尺度化には、高次元の自己啓発的性質も高次の「癒し」とみなして構造化した方が適切であると考える。すなわち、芸術に対する「癒し」には、治癒的消極的「癒し」と自己啓発的エネルギーをもたらす積極的「癒し」とがあると考えられる。刺激を見聞きしての心的変化は、評価項目のワーディングで、「～の気持ちになる」、「～感じになる」という表現にし、それに対して「そう思う」という反応語を使用することで解決出来る見通しがついた。このことより、今回の３回目調査の結果をより洗練させれば、「癒し」の心理尺度が完成できる見通しがたった。今後の課題は、実際的妥当性を吟味して、より妥当性、信頼性の高い尺度を完成することである。

（まつもと　こう・としま　ゆたか・
やまさき　はるよし・さとう　きよたか）

個人のパーソナリティ特性と組織のＨＲＭ施策に対する認知が職務行動に与える影響

○竹内　規彦[1)]　竹内　倫和[2)]　外島　裕[3)]
([1)] 愛知学院大学経営学部　[2)] 明治大学経営学部　[3)] 日本大学商学部)
キーワード：パーソナリティ、HRM、職務行動

【研究の目的】

近年、人材の採用・配置管理、評価・報酬制度、及び教育訓練や能力開発を含む人材マネジメント諸施策の有効性は、企業や組織レベルでの効率性の指標のみならず、個人レベルでの職務態度や行動的特性からも評価されるべきという見方が強まってきている。すなわち、組織が提供する特定の人的資源管理（HRM）施策が従業員の職務行動に、いかなる影響を与え、かつどの程度の強さを有しているかを評価することによって、特定の人材マネジメントツールのあり方が検討されるべきとする考え方が定着しつつある。こうした視点は、近年の戦略的人的資源管理論（SHRM）のみならず、広く管理会計分野（例えば、バランスド・スコアカード）の研究においても広く支持される傾向にある。

一方、従業員の行動指標となる離転職意思や職務成果など、広く従業員や組織メンバーの職務行動に関する研究は、既存の心理学分野の研究において数多く蓄積されているのも事実である。とりわけ、特性理論の立場から、ハイパフォーマンス人材や離転職意志の高い人材の性格的・行動的特性を抽出する試みが数多くの研究で実施されてきている。こうした研究に対しては、近年の入職初期段階での離職者数の増加傾向や、人材マネジメントを組織の競争戦略の一手段と位置づける企業側の意識変化と相まって、実務家・研究者双方から強い関心が示されている。

しかしながら、上述の両者を統合する視点、すなわち、(1) 個人のパーソナリティ特性と職務行動との関係、(2) 人材マネジメントと職務行動との関係、及び (3) 特定の人材マネジメント施策が実施されている（と知覚されている）状況下での、パーソナリティ特性と職務行動との関係など、パーソナリティ、HRM、及び職務行動（離転職意思や職務成果）の３者関係に関する詳細な検討は、未だ十分には行われてはいない。こうした議論を踏まえ、本研究では上述の３つの関係について、質問紙調査データの実証分析を行うことによって、既存の職務行動及びHRM研究に寄与する経験的事実を提供することを目的としている。

【方法】

(1) 調査対象・時期

調査対象は、医療・介護関連施設に勤務する看護師、保健師、介護士の正規職員である。調査は2003年11月中旬から12月中旬にかけて行なわれ、医療・介護関連10法人で働く従業員1371名を対象に質問紙調査が郵送法で行なわれた。その結果、1052部（有効回答率：76.7%）の回答を得ることが出来たが、上記条件に該当する404部のみを分析対象とした。

(2) 測定尺度

<u>HRM施策に対する認知</u>　日本労働研究機構(1999)で使用されたHRM施策に対する認知（以下、HRM認知）の項目を参考に、以下の４つの側面について、職員が勤務する組織のHRMの特徴をどのように知覚しているかを測定した。すなわち、職員の(1)採用・配置、(2)人事考課、(3)教育訓練、(4)報酬の４つの下位次元ごとに、それらがどの程度、適切に実施されているかを中心に質問項目が設定されている。なお、回答は全て、「1=そう思わない」～「5=そう思う」までの５段階評定が用いられた。確認的因子分析の結果、設定された11項目が上述の４つの因子（潜在変数）によって説明されるとする４因子モデルが、高い適合度指標を示した。信頼性係数（α）は、いずれも.60を上回っていた。

<u>パーソナリティ</u>　パーソナリティの測定には、外島・藤野・増田・三木（2001）による35項目の尺度を一部修正して用いられた。この尺度は、パーソナリティとして７つの下位次元（「意欲」、「心配」、「不安」、「世話」、「短気」、「オープン」、「耐久」）が含まれている。しかし、確認的因子分析の結果から、本研究では、「意欲（α＝.76）」、「不安（α＝.80）」、「世話（α＝.78）」、「短気（α＝.79）」の４次元が高い適合度指標を示した。尺度は全て５段階評定によって回答者から評定された。

<u>職務行動</u>　本研究では職員の職務行動に、以下の４つの側面が含まれた。すなわち、(1)離転職意思(2項目：山本, 1995)、(2)職業転換意思（2項目）、(3)仕事の質の向上行動(4項目：山本, 2000)、及び(4)利用者尊重行動(4項目：増田・外島・藤野, 2003）の４つの行動的特徴である。尺度は全て「1=そう思わない」～「5=そう思う」の５段階評定によって評価され、回答者の素点が得点として与えられた。確認的因子分析の結果、職務行動４因子モデルのデータに対する適合度指標が良好な値を示していた。また、信頼性係数（α）は、いずれも.70を上回っていた。

【結果】

まず、上述のパーソナリティ及びHRM認知の職務行動に対する主効果を検討するため、職務行動４変数を従属変数とし、(1)コントロール変数（年齢・性別・転職経験・施設規模など７変数）、(2)パーソナリティ４尺度（意欲・不安・世話・短気）、及び(3)HRM認知４尺度（採用・配置、人事考課、教育訓練、報酬）を独立変数とする階層的重回帰分析が実施された。その結果、パーソナリティ特性として「意欲」が強い職員ほど、離転職意思や職業転換意思が抑制され、利用者尊重行動や仕事の質の向上行動が促進されることが明らかとなった。一方、(1)「短気」は、転職意思を高める、(2)「不安」は職業転換意思を高めると同時に、仕事の質の向上行動を抑制する、及び(3)「世話」は利用者尊重行動を高めることが明らかとなった。HRM施策の認知では、(1) 教育訓練に対する適切性の職員認知が強まると、仕事の質の向上行動が促進される、(2)給与の適切性が高まると、職業転換意思が抑制されるなどの結果が明らかとなった。しかし、全体的に説明力は高くはなく、パーソナリティが職務行動を強く規定している点が伺える。

さらに、パーソナリティと職務行動の関係に関するHRM認知のモデレーター効果を検討するため、上述の各回帰式の第４ステップにパーソナリティ４尺度とHRM4尺度の交互作用項（計16変数）が投入された。その結果、「世話」及び「短気」と仕事の質の向上行動との関係は、特定のHRM施策の認知によって調整されていることが明らかとなった（具体的な交互作用のプロットは当日報告いたします）。

【考察】

本研究の結果、(1)本研究で用いられた４つのパーソナリティ特性が、職務行動を強く規定している点、(2)HRM施策に対する認知が職務行動に与える直接的な影響は必ずしも大きくはない点、及び(3)HRM施策は、パーソナリティと職務行動（仕事の質）の関係を調整する役割を果たしている点が確認された。こうしたHRM施策の調整効果は最近の研究結果を支持するものである。

（たけうち のりひこ・たけうち ともかず・としま　ゆたか）

個人のパーソナリティ特性と個人－環境適合がストレスに与える影響

○竹内　倫和[1)]　竹内　規彦[2)]　外島　裕[3)]
([1)] 明治大学経営学部　[2)]愛知学院大学経営学部　[3)]日本大学商学部)

キーワード：個人－環境適合、ストレス、バーンアウト、パーソナリティ特性

【研究の目的】

これまで､欧米ばかりでなくわが国においても看護師や保健師、学校の教師などの対人サービス専門職における高いストレス度合いやその一つの症状としてのバーンアウトが大きな問題として捉えられてきた（e.g., 土居, 1988; 田尾, 2001)。その高いストレス度合いやバーンアウトに対処するために、その関連する要因を分析する研究がこれまで多く行われてきた。その中で、本研究ではそのストレスに関連する要因として、個人のパーソナリティ特性と個人－環境適合（Person-Environment fit; 以下、P-E fit）に焦点を当てて分析を行う。ストレスやバーンアウトとパーソナリティ特性との関連を示す研究には、Cherniss（1980）や増田・外島・藤野（2003)、またP-E fitとの関連を示す研究には、Edward & Cooper（1990）やHarrison（1978)、Kaldenberg & Becker（1992）がある。しかしながら、特にP-E fitとストレスとの関連に関して、必ずしも十分な検証が行われていないことが指摘されており（岩永, 2003)、いまだ議論の余地が残されている。

そこで、本研究では医療・介護職員（看護師、保健師、介護士）のパーソナリティ特性と個人と環境との適合感がストレスやバーンアウトに対していかなる影響を与えるかを実証的に明らかにすることを目的とする。

【方法】

(1) 調査対象・時期

調査対象は、医療・介護関連施設に勤務する看護師、保健師、介護士の正規職員である。調査は2003年11月中旬から12月中旬にかけて行なわれ、医療・介護関連10法人で働く従業員1371名を対象に質問紙調査が郵送法で行なわれた。その結果、1052部（有効回答率：76.7%）の回答を得ることが出来たが、上記条件に該当する404部を分析対象とした。

(2) 測定尺度

<u>P-E fit</u>　本研究ではP-E fitの測定において、下位次元（P-O, P-J, P-G, P-V fit）ごとに、個人の主観的適合を測定する尺度を用いた。P-O fitは、Cable & Judge (1996)で用いられた3項目を使用して測定された。P-J fitは、Lauver & Kristof-Brown (2001)で用いられた5項目の中から3項目を用いた。P-G fitは、この調査で新たに開発をした3項目を用いた。P-V fitは、Lauver & Kristof-Brown (2001)で用いられたP-J Fit尺度を参考に､「職務」を「職業」に修正を行った3項目を使用して測定した。なお、回答は全て、「1＝そう思わない」～「5=そう思う」までの5段階評定を用いた。確認的因子分析（Confirmatory Factor Analysis）の結果より、(1) モデル1（P-O, P-G, P-J fit）及び、(2) モデル2（P-O, P-G, P-V fit）が高い適合度指標を示したため、上記の2つのモデルを以下の分析では用いる。

<u>パーソナリティ</u>　パーソナリティは、外島・藤野・増田・三木（2001)による35項目の尺度を一部修正して用いた。この尺度は、パーソナリティとして7つの下位次元（「意欲」､「心配」､「不安」､「世話」､「短気」､「オープン」､「耐久」）が設定されている。しかし、確認的因子分析の結果から、本研究では、「意欲（α＝.76)」､「不安（α＝.80)」､「世話（α＝.78)」､「短気（α＝.79)」の4次元が高い適合度指標を示したため、これら4下位次元を用いて分析を行う。回答は全て、「1＝そう思わない」～「5=そう思う」までの5段階評定を用いた。

<u>ストレス・バーンアウト</u>　ストレスは、外島・藤野・増田・三木（2001）による5項目の尺度を用いた（α＝.74)。バーンアウトはPines (1985) による21項目からなる尺度を用いた（α＝.94)。なお、回答はストレスに対して、「1=そう思わない」～「5=そう思う」の5段階評定、バーンアウトに対しては、「1=まったくない」～「7=いつもある」の7段階評定を用いた。

【結果】

ストレスとバーンアウトに対するパーソナリティ特性とP-E fitの影響を明らかにするために、階層的重回帰分析を行った（Table.1)。その結果、ストレスに対しては、パーソナリティ特性の「不安」､「世話」､「短気」が正の有意な影響を与え、個人－環境適合では､P-O fitが負の有意な影響を与えることが明らかになった。また、バーンアウトに対しては、パーソナリティ特性の「不安」､「世話」､「短気」の各特性が正の有意な影響を与え、個人－環境適合のP-O fitとP-G fitが負の有意な影響を与えることが確認された。

Table.1　パーソナリティとP-E Fitがストレスとバーンアウトへの影響（階層的重回帰分析結果）

	ストレス				バーンアウト			
	model 1		model 2		model 1		model 2	
	β	(S.E.)	β	(S.E.)	β	(S.E.)	β	(S.E.)
統制変数								
・年齢	-.043	(.059)	-.044	(.058)	-.023	(.072)	-.024	(.072)
・性別[1)]	.015	(.104)	.014	(.104)	.023	(.127)	.024	(.128)
・婚姻状況[2)]	.022	(.089)	.021	(.089)	-.023	(.110)	-.023	(.110)
・転職経験[3)]	-.049	(.094)	-.048	(.094)	-.026	(.116)	-.026	(.116)
・職種[4)]	-.006	(.093)	-.004	(.092)	-.044	(.115)	-.045	(.115)
第1ステップ R^2	.022		.022		.027		.027	
Adjusted R^2	.007		.007		.012		.012	
パーソナリティ								
・意欲	-.046	(.075)	-.049	(.074)	-.086	(.092)	-.089	(.092)
・不安	.156 **	(.049)	.156 **	(.050)	.260 ***	(.061)	.261 ***	(.061)
・世話	.178 **	(.067)	.179 **	(.067)	.206 ***	(.084)	.205 ***	(.084)
・短気	.269 ***	(.054)	.269 ***	(.054)	.169 **	(.068)	.168 **	(.068)
第2ステップ R^2	.171		.171		.210		.210	
Adjusted R^2	.149		.149		.187		.187	
ΔR^2	.150***		.150***		.183***		.183***	
P-E fit								
・P-O fit	-.230 ***	(.065)	-.227 ***	(.067)	-.309 ***	(.083)	-.312 ***	(.084)
・P-G fit	-.046	(.059)	-.048	(.059)	-.111 *	(.075)	-.111 *	(.074)
・P-J fit	-.032	(.061)			.010	(.076)		
・P-V fit			-.026	(.065)			.019	(.080)
第3ステップ R^2	.225		.225		.321		.322	
Adjusted R^2	.197		.197		.295		.296	
ΔR^2	.054***		.053***		.112***		.112***	
F 値	8.032***		8.020***		12.356***		12.365***	

***p .001 **p .01 *p .05 p .10

【考察】

本研究の結果、以下の二点が特筆すべき点として挙げられる。

第一に、個人のパーソナリティ特性の中で、相手を援助し保護しようという特性を表わす「世話」がストレスやバーンアウトに正の有意な影響を与えることが確認された点である。すなわち、対人サービス専門職において職務を遂行する上で、「世話」はとても重要なパーソナリティ特性といえる。しかしその一方で、そのような特性はストレス度合いを高め、バーンアウトに陥る可能性を示唆する結果といえる。

第二に、P-E fitの中で、個人の組織との適合感と同僚との適合感がストレスやバーンアウトを抑制する影響を与えることが確認された点である。この結果から、ストレスやバーンアウトに対して、個人の職務や職業との適合よりも同僚や組織の価値観との適合が重要な役割を果たす可能性が示唆される。

（たけうち　ともかず・たけうち　のりひこ・としま　ゆたか）

自然災害の中のヒヤリ・ハット体験

―― 山口県宇部市を対象にした高潮災害のケース ――

申　紅仙

（常磐大学人間科学部、独立行政法人　防災科学技術研究所）

キーワード　：　自然災害、ヒヤリ･ハット、宇部市、減災

1. はじめに

ヒヤリ・ハットとは、危ない場面で“ヒヤッ”としたり“ハッ”としたりしたが、なんとか怪我をせずにすんだ体験をいう。ヒヤリ･ハットは大きな事故につながりかねない危険源抽出のための重要な「情報提供者」として、建設業・交通・医療をはじめとする多くの領域で既に実施され、一定の成果を上げてきた。しかし、自然災害では殆ど活用されていない。本調査では過去に高潮被害があった山口県宇部市を対象にヒヤリ・ハット調査を行い、宇部市のヒヤリ・ハットの特性を探ることとした。

2. 方法

2.1 調査対象地域

過去に高潮災害が発生した東岐波、西岐波、厚南地区。

2.2 調査票配布時期および配布数

東岐波および西岐波地区：平成15年2月　100部・200部配布

厚南地区：平成15年1月20日100部配布　（計400部）

2.3 調査票配布・回収方法

東岐波地区および西岐波地区は、宇部市役所総務部防災課から自治会長へ質問票が手渡され、調査対象者には自治会長より配布された。厚南地区には平成15年1月20日に開催された防災講演に参加した市民に配布された。調査票は防災科研へ直接郵送回収された。

2.4 調査票回収数および回収率

回収数：118部（回収率　29.5%）のうち、有効回答数110件。

男女比は全体としては男性が73.64%、女性は22.73%（25名）であり、4名が不明であった。年代の内訳は、20代1名、30代6名、40代6名、50代17名、60代41名、70代34名、80代2名、不明者3名であり、60代と70代だけで全体の約7割を占めた。

3. 結果

回収された体験110件は5つのカテゴリーに大別された。

［第1カテゴリー］：避難又は移動中、道路の状態が悪くて危ない思いをした体験　（例）「側溝にすいこまれそうなった。」

［第2カテゴリー］：危険が迫り家に留れなくなって避難した体験

［第3カテゴリー］：災害・被災状況に対する不安・回想

［第4カテゴリー］：家財保護・復旧体験等の減災に関する体験

［第5カテゴリー］：様子見・声かけ

全体の傾向として、第3カテゴリー（不安・回想）が約7割を占め、次に第4カテゴリー（保護）10.91%、第1カテゴリー（移動）6.36%と第2カテゴリー（避難）5.42%、第5カテゴリー（様子見・声かけ）3.64%となった。各体験は地図にプロットされた（図1）。

4. 考察とまとめ

過去に高潮災害を経験している山口県宇部市を対象にヒヤリ・ハット体験調査を試みた。その結果、ヒヤリ・ハット体験というよりはむしろ怪我や災害の強度が強い体験が多いことが明らかとなった。しかし、若干数ではあるがヒヤリ・ハット体験は確認することが出来た。ヒヤリ・ハット体験の数の少なさであるが、実際に少ないのか、あるいはヒヤリ･ハットに対するなじみが薄いためなのか、その原因については判断しかねる部分がある。ただ、今回の記入者の中心が60代、70代であること、宇部市の災害が高潮に対するインパクトが強すぎることなども要因と考えられた。従って他年代の情報を見ないことには最終的な判断は出来ないものと考えられた。しかし、ヒヤリ・ハット体験で危険源が少しでも明らかになった限り、改善すべき所はあると考えられた。

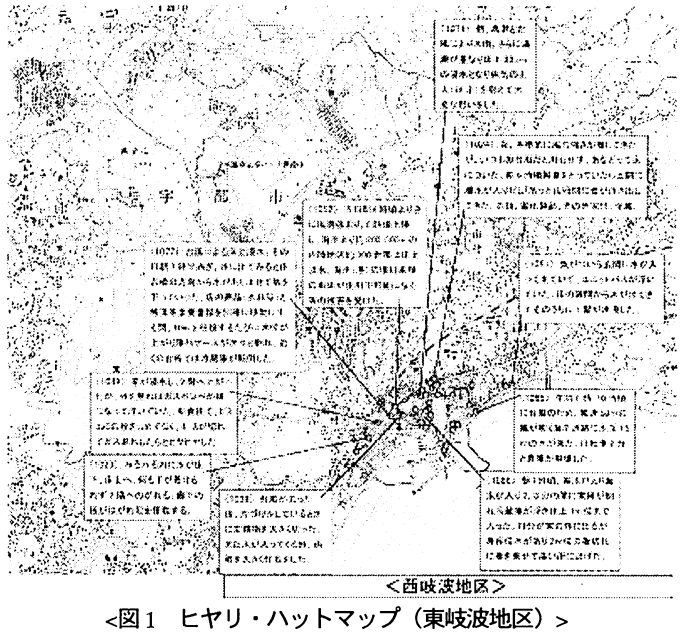
5. 参考文献

1）申紅仙・中根和郎（2002）：自然災害におけるヒヤリ・ハットの有効性について、日本災害情報学会第4回研究発表大会予稿集.

2）申紅仙・中根和郎（2003）：自然災害におけるヒヤリ・ハットの有効性について（2）、日本災害情報学会第5回研究発表大会予稿集.

6. 謝辞

本調査は、(独)防災科学技術研究所が山口県宇部市総務部防災課の協力のもとに行ったものです。宇部市総務部防災課係長　弘中秀治氏には質問票配布協力の他に質問票の内容についても多くの助言をいただきました。ここに感謝の意を表します。また、質問票配布に協力して下さった自治会長、質問紙調査に協力して下さった、118名の山口県宇部市の方々に感謝の意を表します。



<図1　ヒヤリ・ハットマップ（東岐波地区）>

（しん　ほんそん）

多変量解析による印刷手法の分類

関　陽子
(科学警察研究所)

キーワード：1．印刷物　　2．印刷方式　　3．数量化Ⅲ類

1．目的

身分証明書などの印刷物は、偽造防止のため、様々な技術が用いられている。その一つに、複数の印刷方式を組み合わせる（異なる箇所に異なる印刷手法を用いる）という手法が用いられる。また、一般では印刷が困難な特殊な印刷方式を用いるという偽造防止手法も用いられている。

偽造印刷物では、真正印刷物に比べると印刷手法のバリエーションが小さく、特殊な印刷手法はあまり用いられていない。しかし、偽造印刷物作成者により、組み合わせる印刷手法が異なっているため、用いられている印刷手法により偽造印刷物を分類することは、偽造印刷物の特徴を考察するために有用である。

本報告では、数量化Ⅲ類を用いて偽造印刷物の分類を行った。

2．方法

偽変造日本国旅券37冊を収集した。それぞれの資料について、表見返しページおよび裏見返しページを実体顕微鏡を用いて拡大検査し、印刷方法を推定した。検査箇所は、表見返しページでは、肖像、地紋様、不動文字、データ文字、署名、裏見返しページでは、不動文字、マイクロ文字、地紋様、ページ右下の紋様とした。

それぞれの箇所の印刷方法を平版印刷、インクジェット方式、レーザー方式、熱転写方式、凹版印刷に分類し、分類結果を数量化Ⅲ類を用いて解析した。

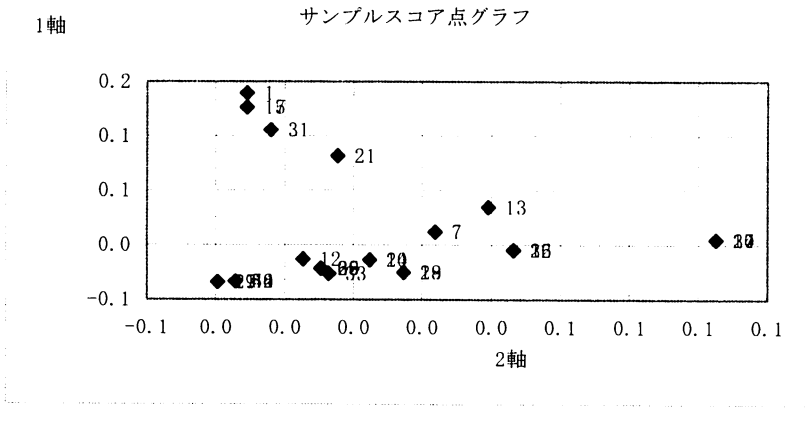
3．結果および考察

観察箇所の印字方式は、データ文字以外の箇所では、インクジェット方式が最も多く用いられていた。データ文字の箇所は、レーザー方式で印刷されている資料が多かった。使用されている印刷方式を観察箇所全体で見ると、インクジェット方式が約57%、レーザー方式が約33%、熱転写が約７%、平版印刷が約２%、その他１%であった。レーザープリンタは、データ文字部分における使用が非常に多く、データ文字部分では、全体の約80%の資料に使用されていた。

数量化Ⅲ類を用いて分類結果の解析を行った。

カテゴリースコアを求めると、第１軸は、肖像・熱転写、署名・熱転写、裏面文字・平版印刷、裏面文字・熱転写で係数値が大きかった。第２軸では、肖像・レーザー、署名・レーザー、表面地紋様・レーザーで係数値が大きかった。第３軸では、文表面不動文字・平版印刷、表面不動文字・平版印刷、裏面花模様・平版印刷、裏面不動文字・平版印刷で係数値が大きかった。それぞれの軸は、第１軸が熱転写方式、第２軸は、レーザー方式、第３軸は平版印刷を表していると考えられる。

サンプルスコアにより資料を分類した結果を示す。各資料は、熱転写方式群、レーザー方式群、インクジェット方式群に分けられた。真正旅券は、熱転写方式と平版印刷・凹版印刷をもちいていることから、熱転写群は真正旅券に近い作成方法のグループであると考えられた。



(せき　ようこ)

筆字固定時期の推定

○ 三井 利幸　（愛知工業大学）
若原 克文　（愛知県警察本部）
菅原 博嗣　（愛知県警察本部）
関　陽子　（科学警察研究所）

キーワード：筆字固定時期，　クラスター分析，　主成分分析

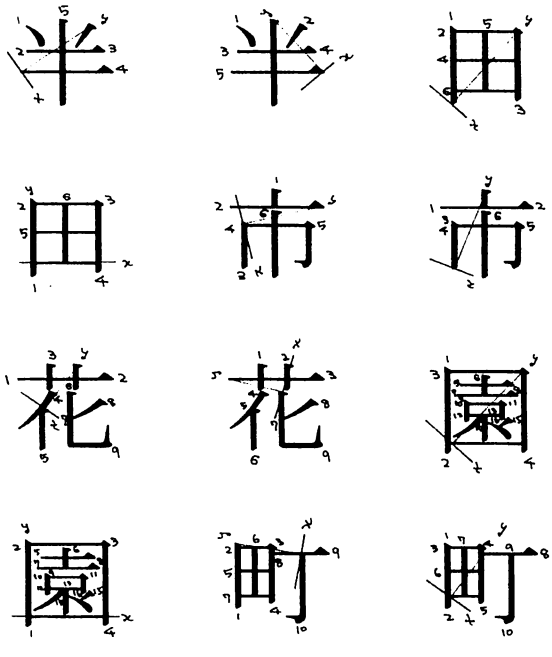
《はじめに》人は幼稚園や小学校で文字を書き始めた頃は，字体を学ぶときの手本の影響を受けたり，字体の記憶が完全ではなかったりするために，その人の個人的な特徴は固定されていない．しかし，早い人で小学校の高学年，遅い人でも高等学校の高学年の頃になると，筆字は無意識に習得した個人的な特徴を維持し続けていくといわれている．

筆者識別は，この個人が無意識に習得し維持している筆字の特徴を抽出して，筆者を判定している．そこで，大きく変わることのない個人的な筆字の特徴を，筆者が何歳頃に習得し維持しているのかについて検討した．

《個人的特徴の抽出方法》従来からおこなわれている個人的な筆字の特徴の抽出は，記載文字全体や部分的な筆の運び等を比較している．経験を積めば，この方法で非常に正確度の高い筆者識別が可能である．しかしながら，判断基準が個人の主観に委ねられているために，第三者を充分に納得させるだけの理由が希薄である．さらに，記載文字にも筆者の年代によって丸みを帯びるなどの変化がみられたり，個人的な筆字の特徴を隠すために作為を加えたりする場合があるので，記載文字全体や部分的な筆の運び等を比較する方法では，筆者識別を誤る可能性がある．

したがって，ここでは筆字の固定化を，記載された文字の筆の運び等を比較するのではなく，筆の導入部及び止め部の位置が何歳頃から固定されるのかを調べることによって，筆字の固定時期を検討した．

記載文字の筆導入部や止め部の位置の測定は，すでにくり返し報告してきた座標点を測定する方法でおこなった．記載文字の大きさが異なると，当然筆導入部や止め部の位置も異なってくるので，筆字の大きさを揃えるために，基線の長さを測定し，測定した各座標点を基線の長さで除した．今回使用した文字の基線の長さと測定した位置を図に示した．



基線（Y軸）の長さと測定座標点の位置

《筆字固定時期》10名の筆者に対して，図に示した6文字を対象として，基線に指定した測定点が筆者の筆字固定の重要な特徴点を示している可能性があるので，図に示したように基線の取り方を替え測定した数値を用いた．したがって，「半田市花園町」の1筆跡に対し208個の数値（カテゴリー）を用いて筆字固定時期を判断した．筆字固定時期の判断は，クラスター分析，主成分分析，SIMCA分析を使用した．クラスター分析，主成分分析，SIMCA分析による筆字固定時期の判断方法を，小学校5年生から高等学校1年生までの筆跡がある筆者について説明する．

1．クラスター分析

小学校5，6年生の筆跡はそれ以外の学年の筆跡とは分離した．デンドログラムからは，学年が上がるに従って筆字が固定化されている状況がわかる．中学1年生以降は1つのグループを形成しており，筆者は中学1年生の段階で筆字が固定化されたものと判断された．

2．主成分分析

第一主成分寄与率が26.424%，第二主成分寄与率が24.534%，第三主成分寄与率が17.063%で，図で表示できる第三主成分までの累積寄与率が68.021%であった．したがって，使用した筆跡がもっている全内容の約70%しか表示されていないが，7筆跡の大まかな特徴は抽出されているものと考えられた．各主成分の寄与率を考慮した図から明らかなように，小学校5，6年生の筆跡がそれ以外の学年の筆跡とは明確に分離した．

3．SIMCA分析結果

SIMCA分析は，グループ内の試料数が最低でも3試料必要であるために，小学校5，6年生の筆跡に中学校1年生の筆跡を加えた試料グループをグループ1，それ以外の試料グループをグループ2に指定して検討した．その結果，小学校5年生の筆跡のみがそれ以外の筆跡と分離した．さらに，帰属グループの正しい判定を求めたところ，BESTは最初に指定した各グループに帰属するのが妥当と判定された．NEXTではグループ1の3試料はグループ2に帰属するのが妥当と判定され，グループ2の4試料は帰属グループなしと判定された．このことから，小学校5年生の筆跡も比較的それ以外の筆跡と類似しているものと推定された．

《10名の筆者の筆跡固定化年齢》クラスター分析，主成分分析，SIMCA分析を用いて筆跡固定化年齢を推定したところ，小学校4年生が6名，小学校5年生が2名，小学校6年生と中学校1年生が各1名であった．検討した試料人数が10名と少ないので，明確に判断することはできないが，少なくとも従来から言われているよりも低年齢で筆字は固定化されている可能性が高いものと考えられる．

参考として，筆字が固定化されていない筆跡も含めた状態で，45通りの異なった筆者間の異同識別をクラスター分析，主成分分析，SIMCA分析で試みたところ，40通りで筆者識別が可能であった．これらの結果から，小学校5年頃にはすでに個人の書き癖が顕著になり，筆者識別が可能となるほどの個人差が表れてくることが推定できた．

（みつい としゆき・すがわら ひろし・わかはら かつふみ・せき ようこ）

筆跡座標値の測定方法の違いが筆者識別に及ぼす影響について

○若原克文　　菅原博嗣　　三井利幸
（愛知県警察本部）　（愛知県警察本部）　（愛知工業大学）

キーワード：筆跡座標値　測定方法　筆者識別

１．はじめに

筆跡を座標値として読み取り数量化し多変量解析で分析し筆者識別が可能である事を報告してきた。座標値の測定は記載された文字を拡大し、文字の始筆部、終筆部などの主に端点を結ぶ直線を基線、その一方と直交する点を原点とし座標化後、基線で除し標準化する方法で数量化を行ってきた。

前回までに筆跡を形成するために影響を及ぼす種々な物理的、心的要因による変動下で筆者識別に有効な多変量解析法の手法など検討し筆者識別が可能な事を報告し、実務鑑定に応用できる事を確認してきたが、実務鑑定に応用する際、同一資料における測定者間の座標値の測定方法が異なる事による影響の有無が考慮される。測定方法には筆跡の拡大方法、拡大倍率、座標値単位などの違い、これらに使用する機材などの違い、同一資料間における測定誤差など考えられるが、今回、拡大倍率の違い、同一測定者の測定時期が異なる測定誤差が及ぼす影響について検討したので報告する。

２．分析手続

・検査資料：実務資料の疑問筆跡１、対象筆跡２人分
・文字種：「佐」「豊」の２文字　疑問筆跡から各１文字、対象筆跡から各５文字２人分　計各11文字
・測定部位：「佐」　第２画終筆部と第３画終筆部を結ぶ直線上の第２画終筆部と直行する点を原点とする。
　「豊」　第７画終筆部と第13画始筆部を結ぶ直線上の第13画始筆部と直行する点を原点とする。
・測定箇所：10箇所(X、Ｙ各10)と基線値Ｙ座標の計21
・拡大倍率：測定文字は資料を写真撮影
　１　キャビネサイズ(12.0 ㎝×16.5 ㎝)に焼付　疑問文字約15倍から約18倍　対象文字７倍から約10倍
　２　手札サイズ(8.25 ㎝×12.0 ㎝)に焼付け　疑問文字約10倍から約11倍　対象文字４倍から約５倍
・測定者：10名(男７名　女３名)　１㎜方眼シートで測定
・測定手順：測定箇所、方法(測定時間指定なし)を教示後、
　第１回目キャビネサイズ　　第２回目手札サイズ
　第３回目キャビネサイズ
・測定間隔：約１週間
・分析手法
　１　個々の座標値を測定者間及び対象文字間における変動
　２　クラスタ分析(最短距離)法　主成分分析法
　　「佐」、「豊」、「佐豊」の座標値を基線で除し数量化した値を分析データとした。
　　第１、２、３回の個々分析　第１、２回、第２、３回、第１、３回、第１、２、３回のそれぞれ併合分析
・使用ソフト　ジーエル サイエンス社製「ピロエット」

３．結果及び考察

(1)　個々の座標値(実測値)の標準偏差

個々の座標値は、X、Ｙそれぞれ10と基線値の計21、文字数22文字の10名間の標準偏差を算出すると第1～3回までのそれぞれにおいて最小が０㎜、第１、３回で最大偏差が３㎜代の座標が１、第２回は２㎜代の座標が１であった。標準偏差が１㎜以上の座標値は第１回目約41%、第２回目約12%、第３回目約22%で、他は標準偏差１㎜未満の変動幅であった。また、第１回目の座標値１㎜以上の出現を見るとＹ座標値の変動が多く指摘でき、同一のデータである第３回目の座標値及び第２回目の結果からも一部を除きＹ座標に変動が多い傾向は指摘でき、縦方向に変動が大きいと考えられ今後検討を要する。今回の測定者は、１名を除きいずれも初めて筆跡の座標測定を行う人で回を重ねることで変動が少なくなる傾向が見られ習熟度の差による変動と考えることもできる。第２回目の拡大倍率が小さい資料での変動幅は、今回の資料からは変動が小さい傾向がみられる。測定者の内省から対象資料の測定がやり易すかったとの指摘があり、その理由を聞くと「画線の幅が細くなり測定位置を悩まずに決定できた」との意見が多くあった。しかし、第３回目の測定の結果からも変動幅が縮小する傾向が認められ、先の習熟度によるものか拡大倍率によるか明確には判断できない。一方、従来から報告してきた筆跡の数量化では、拡大倍率を５倍から１０倍位の倍率で行っており、今回の検討によっても支持され矛盾はない。

(２)　多変量解析法による分析結果

「佐」「豊」「佐豊」の個々分析計90通り、併合分析計120通り合計210通りのクラスタ分析及び主成分分析の結果では疑問筆跡と対象筆跡中の１名と混合し、他の１名と明確に分離する結果を得た。

ア　個々分析のクラスタ分析で、第１回目の結果は１名の「豊」中の１文字、第２回目の結果は４名が「豊」中の同一の１文字、４名中の１名が先の「豊」を含め２文字、第３回目の結果は１名が「佐」の１文字、他の１名が「豊」の１文字を、他の対象筆跡に混合する結果が認められた。混合した「豊」は２回目検査の１文字以外はいずれも共通し、疑問筆跡と分離する対象者のものであった。しかし、クラスタ分析で他者と混合したデータの主成分分析による結果では、いずれも同一筆者内で混合し、他者とは明確に分離する結果が得られた。

イ　併合分析の結果では、クラスタ分析で３名の測定者、計５種の併合分析で測定誤差と考えられる分離が認められた。しかし、個々分析と異なりいずれも同一筆者内における他の文字と混合し、疑問筆跡、対象筆跡間は明確に分離した。また、主成分分析の結果では、いずれも同一筆者内で混合し、他者とは明確に分離する結果が得られた。

今回の多変量解析法による分析結果では、個々分析のクラスタ分析で一部に他者筆跡と混合する結果が認められたが、前報までで明らかなように測定文字数を増加もしくは基線位置を複数検討することにより他者筆跡との分離は可能である。また、併合分析は測定誤差の可能性を示唆するものであるが、同一筆者内での変動であり同一筆者内の文字が近似した構成を有する事を証明するものであり、実務鑑定の目視比較による類似性の検討を、客観的な筆跡の数量化で補完できることが明確となった。

筆跡の数量化分析は一般化されると考えるが、その測定に際しての方法の違いによる影響は考慮する必要はないと判断できる。また、今後クラスタ分析の最短距離法以外の分析法との比較、分析ソフト間の比較などを行っていく。

（わかはらかつふみ、すがはらひろし、みついとしゆき）

筆跡からの筆圧の指標化に関する研究（Ⅱ）

○菅原博嗣　　若原克文　　三井利幸
（愛知県警察本部）（愛知県警察本部）（愛知工業大学）

キーワード：筆跡、筆圧、ESDA

1．はじめに

筆跡の形状から筆者識別を行う方法については、これまでに多くの報告がなされており、我々は多変量解析法を用いた研究において、筆者識別が十分に可能であることを報告してきた。しかし、実務上の筆者識別においては、筆跡の概形に加え、運筆の状態の検討も重要な要素である。

昨年の報告では、運筆の状態を示す一つの要素である筆圧に注目し、①書かれた文字から判断される筆圧レベルの指標化、②その指標を筆者識別の要素とすることの可否の検討を行った。その結果、筆圧の関する筆者の記載時の意識レベル、その筆跡から感覚的に評価して得られたレベル、ESDA（*E*lectro *S*tatic *D*etective *A*pparatus、Foster & Freeman 社製）による筆圧痕文字の検出レベル間で整合性が認められ、書かれた文字から筆圧を指標化し、筆圧の強弱の程度を筆者識別の要素することが可能であることを示した。

だが、実務においては、最近の犯罪の巧妙化や複雑化により、犯罪が実行されてから事件発覚に至るまでに時間を費やす場合が多くみられる。

そこで、今回は昨年の報告で使用した試料について、ESDAによる筆圧痕文字検出を再度行い、筆圧痕文字の経時変化やその程度を検討した。

次に、被検査者の記載時の筆具の持ち方や記載時の意識が筆跡に反映する影響について検討した。

2．実験方法及び結果

2.1 検査試料

昨年、成人男女10名がA6判の用紙（55 g/m²）5枚を重ねた状態で、1枚目の用紙に想定署名「神家健悟」の筆跡を横書きに4回記載したものを試料とした。

記載時には、通常の筆圧、強い筆圧（カーボン複写を想定）、弱い筆圧で記載することを教示した。

筆具は三菱製黒色ボールペン、証券細字を使用し、記載台や椅子についても共通した条件とした。

試料は、昨年の実験終了後、各用紙を冊子状に束ねた状態で封筒に入れ、事務机の引出し内に1年間保管した。

2.3 ESDAによる筆圧レベルの再検討

ESDAはコロナ放電により、紙面上の凹凸に帯電させ、紙面上にできた静電潜像を現像剤（トナー）で可視化させる装置である。

コロナ放電は手作業で行い、放電ユニットを紙面上で縦横5往復、現像は用紙のﾊﾞｯｸｸﾞﾗｳﾝﾄﾞ濃度を目安として行った。

検出レベルは5段階で評価し、2枚目の用紙に筆圧痕文字が検出されないものをレベル1とし、2枚目以降の用紙の筆圧痕文字検出によりレベル2から5とした。

その結果、ESDAの検出レベルは普通の筆圧がレベル3及び4が各5名（レベル平均3.5：昨年レベル平均3.5）、強い筆圧はレベル5が2名、レベル4が8名（レベル平均4.2：昨年レベル4.8）、弱い筆圧はレベル1が1名、レベル2が3名、同3が5名、同4が1名（レベル平均2.6：昨年レベル3.2）となった。

ESDAによる筆圧痕文字の検出については、昨年の結果と今回検討した結果で、強い筆圧と弱い筆圧で記載した文字の検出レベルに若干の劣化が認められるが、約1年の時間経過でも筆圧痕文字検出において、極端な影響がないと考えられた。

また、一部の試料は、今回の検出結果が昨年の検出結果より検出レベルの高いものが認められた。

これは、筆圧痕文字検出の現像時に、用紙のﾊﾞｯｸｸﾞﾗｳﾝﾄﾞ濃度を目安としているが、試料を冊子状に保管したことや保管状態により用紙の平滑性が向上した影響も考えられる。

表1　ESDAによる筆圧痕検出レベルの昨年との比較

	普通の筆圧	強い筆圧	弱い筆圧
今回の検出レベル	3.5	4.2	2.6
昨年の検出レベル	3.5	4.8	3.2

海外においては、10年以上経過した試料から筆圧痕文字が検出された例も報告されており、保管状態によっては紙の物理的な変化を抑えることができ、筆圧の強弱のレベルは経時変化が少なく、筆圧を筆者識別の指標として取り入れることが可能と考えられた。

2.4 聞き取り調査

実務鑑定において、筆跡の端点や終筆を払う部位、抜く部位の状態は、筆者の意識の影響を受けやすいと考えられてきた。

そこで、実験終了後に被検査者への聞き取り調査（強い筆圧で記載する場合の力の入る部位等）を実施し、同時に筆具の持ち方についても観察した。一例を示す。

- 筆者1は強い筆圧で記載することを教示した場合、「指先の力みが強い」と答え、意識により指先の自由度に制約が生じ、普通の筆圧に比較して各文字がやや小さく記載された。
- 筆者7は筆具を抱えるように握っているために、普通の状態でも筆圧が強くなりがちである。

  そのため筆具を持つ手の自由度が小さく、記載された文字の大きさの変化は少ない。

従って、記載時の筆具の持ち方や手首、指先への意識が書かれた文字の大きさやその状態に反映することが十分に考えられた。

2.5 結果

試料から得られる筆圧痕文字検出については、一般的な保管状態において筆圧痕文字の経時変化（約1年）は少なく、筆圧の強弱のレベルを筆者識別の指標とすることが可能と考えられた。

また、実験終了後の聞き取り調査から、筆者は記載時の意識（強い筆圧、丁寧な記載等）が腕や指先の運動に作用し、筆具の持ち方からも文字に影響を与えることが示唆され、今後の課題とする。

（すがはらひろし、わかはらかつふみ、みついとしゆき）

プロセスレコードを用いた他者理解と自己理解に関する計量的分析Ⅲ

○吉田一子[1)]　山本勝則[1)]　多久島寛孝[1)]　内海滉[2)]
([1)] 熊本保健科学大学保健科学部看護学科　[2)] 千葉大学)
キーワード：他者理解、自己理解、プロセスレコード

はじめに

心のケアに取り組むためには、相手および自分の心理状態を理解することが必要である。

我々は、会話をしている相手の内面の推測を書く欄と、自分の内面を書く欄を設けたプロセスレコードを用いている（図参照）。

それを用いて、①「患者が表出したことへ看護者がどの程度注目したか」②「患者の心理状態へ看護者がどの程度注目したか」③「看護者自身が表出したことをどの程度自覚したか」④「看護者が自己の心理状態についてどの程度自覚したか」という四側面から調査した。これらを直接的に知ることはできないが、出来事の直後に、できるだけ詳しくプロセスレコードを記載することで、ある程度把握できると考えた。

上記①～④の四側面は、図の①～④の記載欄に対応している。そして、それを用いて看護学生に看護場面を再構成させた。

看護場面は、患者である他者を理解し、看護師（看護学生）としての自己に目を向ける場面であり、心理状態を理解する場面として、適切であると考える。

方法

1）全体状況と対象：准看護師免許を有する者が入学する2年制短期大学の2年次看護学生が、臨床で行われる精神看護学実習において、患者との会話場面を、プロセスレコードとして記載した。

2）記載場面：2週間の精神看護学実習のうち、実習初日と最終日を除く、指定された日の一場面または学生が検討したいと思った場面とした。

3）記載場所：実習病棟内とした。

4）記載方法：患者と関わった直後に記載した。

5）プロセスレコードの用紙：B4サイズ横置き横書きで、左から順に、①患者の言動の欄、②患者の内面の欄、③学生の言動の欄、④学生の内面の欄、の四つの欄に分かれていた（図参照）。

患者の言動	患者の内面	学生の言動	学生の内面

図　プロセスレコードの一部

6）データ集計方法：これを各欄ごとに、学生が記載した字を、文字、記号などを区別せず、全て1文字として数え、集計した。

7）データ分析方法：臨床経験の有無に分けて、各欄の記載字数の最少、最多、合計、平均を求め、次に、四つの欄全てを集計した総記載字数を求め、それらに占める、各欄の記載字数の割合を求めた。また、学生の年齢で22歳以下とそれ以上に分けて、同様の分析を行った。

結果

記載者から了解が得られ、分析可能であった93場面を用いた。

表1に、年齢によって比較した結果をしめした。

表2に、臨床経験の有無によって比較した結果をしめした。

表1　年齢別比較

22歳以下（N=39）

	患者言動	患者内面	学生言動	学生内面
最少	80	0	74	94
最多	599	315	617	531
合計	10321	3700	9664	9050
平均	**264.64**	**94.87**	**247.79**	**232.05**
SD	130.76	74.0	142.81	91.74
割合	**32%**	**11%**	**30%**	**28%**

23歳以上（N＝54）

	患者言動	患者内面	学生言動	学生内面
最少	110	0	92	73
最多	752	353	714	554
合計	16453	7120	16242	16576
平均	**304.69**	**131.85**	**300.78**	**306.96**
SD	127.50	95.39	125.12	112.96
割合	**29%**	**13%**	**29%**	**29%**

表2　臨床経験の有無による比較

臨床経験無群（N=67、24.12歳）

	患者言動	患者内面	学生言動	学生内面
最少	80	0	74	73
最多	599	353	617	531
合計	17395	7679	16988	16644
平均	**259.63**	**114.61**	**253.55**	**248.42**
SD	115.97	91.9	123.41	101.77
割合	**30%**	**13%**	**29%**	**28%**

臨床経験有群（N=26、28.58歳）

	患者言動	患者内面	学生言動	学生内面
最少	191	0	92	193
最多	752	288	714	554
合計	9379	3140	8918	8982
平均	**360.73**	**120.77**	**343.0**	**345.46**
SD	136.9	80.68	143.27	102.59
割合	**31%**	**10%**	**29%**	**30%**

平均記載字数についても記載割合についても、患者の内面欄の記載が、他の三つの欄の記載よりも少ない。

平均記載字数は、23歳以上の方が、そして臨床経験のある方が、全ての記載欄において多い。ただし、臨床経験の有無による、患者の内面に関する記載字数の差は軽微である。

患者の内面に関する記載割合は、23歳以上の方が、大きく、臨床経験が無いほうが大きい。

考察

臨床経験により、患者の言動、学生の言動、学生の内面欄の記載は増加するが、患者の内面欄の記載は増加しない。臨床経験により客観的情報の把握や自己への気づきは向上するが、患者の内面については変化しにくい。

（よしだいちこ・やまもとかつのり・たくしまひろたか・うつみこう）

プロセスレコードを用いた他者理解と自己理解に関する計量的分析Ⅳ

○山本勝則[1)]　吉田一子[1)]　多久島寛孝[1)]　内海滉[2)]
([1)] 熊本保健科学大学保健科学部看護学科　[2)] 千葉大学)
キーワード：他者理解、自己理解、プロセスレコード

はじめに

心のケアに取り組むためには、相手の心理状態を理解することが必要である。それと同時に、自分の心理状態に気がつくことも必要になる。そして、臨床の場におけるこれらの必要性は、しばしば強調されてきた。

心理学的には、歴史的に見て、性格などの特性の理解に重点がおかれてきたように思われる。しかし、ケアの場では、その時々に生じている心の状態についての vivid な理解が優先される。

出来事を捉えるには録画や録音を用いることができるが、心の状態を捉え理解するには、そのような方法は使えない。そこで、我々は、(相手および自分の言動を書く欄だけでなく)会話をしている相手の内面の推測を書く欄と、自分の内面を書く欄を設けたプロセスレコードを用いている（図参照)。

看護場面は、患者である他者を理解し、看護師（看護学生）としての自己に目を向ける場面であり、心理状態を理解する場面として、適切であると考える。

方法

1）全体状況と対象：准看護師免許を有する者が入学する2年制短期大学の2年次看護学生が、臨床で行われる精神看護学実習において、患者との会話場面を、プロセスレコードとして記載した。

2）記載場面：2週間の精神看護学実習のうち、実習初日と最終日を除く、指定された日の一場面または学生が検討したいと思った場面とした。

3）記載場所：実習病棟内とした。

4）記載方法：患者と関わった直後に記載した。

5）プロセスレコードの用紙：B4サイズ横置き横書きで、左から順に、①患者の言動の欄、②患者の内面の欄、③学生の言動の欄、④学生の内面の欄、の四つの欄に分かれていた（図参照)。

患者の言動（発言・行動・表情等）	患者の内面（思考・感情・意志等）	学生の言動（発言・行動・表情等）	学生の内面（思考・感情・意志等）

図　プロセスレコードの一部

6）データ集計方法：これを各欄ごとに、学生が記載した字を、文字、記号などを区別せず、全て1文字として数え、集計した。

7）データ分析方法：各欄の記載字数の平均を求めた。そして、以下の記載欄の組み合わせで、記載字数の相関を求めた。

(1)「患者の言動欄と学生の言動欄」(2)「患者の言動欄と患者の内面欄」(3)「患者の言動欄と学生の内面欄」

(4)「学生の言動欄と学生の内面欄」(5)「患者の内面欄と学生の言動欄」(6)「患者の内面欄と学生の内面欄」

そして、相関の強弱を検討する。また、それぞれの組み合わせの相関の強さを比較して、その傾向を調べる。

結果

記載者から了解が得られ、分析可能であった93場面を用いた。

学生の年齢は19～45歳、平均25.37歳であった。臨床経験を持たない学生のプロセスレコードが67枚、臨床経験を持っている学生のプロセスレコードが26枚であった。

表　相関

	患者言動	患者内面	学生言動	学生内面
患者言動				
患者内面	0.28			
学生言動	0.67	0.21		
学生内面	0.49	0.43	0.51	

(1) 患者の言動欄の記載字数と学生の言動欄の記載字数は r=.67 で中程度（強め）の相関であった。

(2) 患者の言動欄の記載字数と患者の内面欄の記載字数は r=.28 であり、弱い相関であった。

(3) 患者の言動欄の記載字数と学生の内面欄の記載字数は r=.49 で中程度の相関であった。

(4) 学生の言動欄の記載字数と学生の内面欄の記載字数は r=.51 で中程度の相関であった。

(5) 患者の内面欄の記載字数と学生の言動欄の記載字数は r=.21 であり、弱い相関であった。

(6) 患者の内面欄の記載字数と学生の内面欄の記載字数の r=.43 で中程度の相関であった。

考察

六つの組み合わせのうち、相関が最も高かったのは、(1)「患者の言動と学生の言動」の組み合わせである。これは、実際にあった発言に関する記載の組み合わせであり、学生が、出来事に即して記載することを重視すれば、当然生じる結果である。この組み合わせに比べると、(4)「学生の言動と学生の内面」の組み合わせや (6)「患者の内面と学生の内面」の組み合わせで生じた相関は、やや低い。

これに対して、昨年報告した4年制大学在学中の看護学生に関する報告では、(1)「患者の言動と学生の言動」の組み合わせの相関が r=.479、(4)「学生の言動と学生の内面」の組み合わせの相関が r=.730、(6)「患者の内面と学生の内面」の組み合わせで生じた相関が r=.613 と、今年の報告と反対の傾向を示していた。

以上のことは、このテーマでの一連の報告のうちのⅢ（今年のもう一つの報告）で報告した、「臨床経験により客観的情報の把握・・・は向上する」ということと同一の傾向を示すものかもしれない。

なお、記載用紙について検討すると、患者の内面欄と、学生の内面欄を十分に区別できているかという疑問を排除しきれない。その理由は、「患者の内面」は学生が推測するものであり、学生の内面欄に記載される可能性がある。そこで、患者の内面欄には「患者の気持ちについて推測したこと」という注釈をつけ、学生の内面欄には「患者の気持ち以外」という注釈をつけることが望ましいと考えられる。

(やまもとかつのり・よしだいちこ・たくしまひろたか・うつみこう)

看護学生のストレスに関する研究（その1）

—ストレスの因子構造—

○今留　忍　矢口　久実子　内海　滉
（杏林大学保健学部）　（千葉大学）

キーワード：看護学生，ストレス，因子構造

はじめに

看護学生の臨地実習におけるストレスに関しての研究は、数多く報告されている。しかし、われわれは、ストレスを生活上の出来事と関連があるという知見から、看護学生の日常生活場面を焦点化し、どのようなストレスが多いのか、それをどのように対処すべきか、という課題を探究することは、重要と考えた。本研究では、ストレスの因子を明らかにして、看護学生のより健康な生活と学業継続への支援の資料とすることを目的とした。

研究方法

1. 調査対象

看護専門学校の1年次～3年次学生208名　平均年齢24.0歳（SD＝5.8）

2. 調査方法

自由記述の質問紙調査　2003年7月11日～28日

3. 調査内容

最近（1月～7月）ストレスと感じた状況の中で、それが強かった事柄を上位3項。

4. 分析方法

1）記述内容をKJ法に基づいた分類。

2）VARIMAXの因子分析。

結　果

1. ストレスの分類

「受験」「学習」「就職」「仕事・アルバイト」「人間関係・対人関係」「アルバイト・職場の人間関係」「友人関係」「家族関係」「教員との関係」「異性関係」「学校の運営」「健康」「実習の緊張」「看護の実践」「実習記録」「通学」「金銭」「退職」「ゆとりのなさ」「今後の不安」「学業との両立」「目標の設定・遂行」「ストレスなし」「その他」の24項目になった。

2. ストレス因子の抽出

表1　看護学生のストレス因子分析の結果　VARIMAX回転後

項目名	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	第6因子	共通性
第1因子：自己の弱さと他者非難因子							
目標の設定・遂行	.65	-.06	.04	.07	.05	.01	.44
学業との両立	.60	-.02	.02	.12	.09	.05	.39
教員との関係	.42	-.03	.07	.14	.08	.58	.54
アルバイト・職場の人間関係	.35	-.02	-.21	.16	.15	-.41	.38
第2因子：思い通りにならない因子							
仕事・アルバイト	-.06	.78	-.11	-.03	.09	-.10	.64
退　職	-.07	.55	.01	.09	.03	.04	.32
学校の運営	.30	.34	.11	-.12	-.10	.10	.25
第3因子：価値基準逸脱因子							
受　験	-.21	-.14	.43	.23	.32	-.14	.43
看護の実践	-.20	.13	.39	.32	-.16	-.11	.35
友人関係	.17	-.21	.34	.01	.16	-.46	.43
ゆとりのなさ	-.18	-.19	-.55	.10	-.30	.08	.39
金　銭	-.02	.14	-.63	.12	.07	-.17	.47
第4因子：学習環境調整困難因子							
学　習	.18	.18	.01	.62	.05	.06	.46
健　康	.04	.03	.13	.55	.15	.06	.35
人間関係・対人関係	.11	.12	.04	.39	.07	.06	.19
通　学	-.08	.11	.07	.38	.00	-.04	.17
第5因子：生活を脅かす因子							
家族関係	.13	-.13	-.03	.06	.46	-.04	.25
今後の不安	-.28	-.02	.13	.17	.44	.30	.41
就　職	-.11	-.10	.17	.23	-.61	-.04	.48
第6因子：臨地実習影響因子							
実習記録	.02	-.11	-.05	.02	.02	.59	.36
教員との関係	.42	-.03	.07	.14	.08	.58	.54
寄与率（%）	7.16	6.39	6.12	5.72	5.56	5.29	
累積寄与率（%）	7.16	13.54	19.67	25.39	30.94	36.23	

件数が少なく、また、複雑な要素を含む記述で、分析結果に影響を与えると考えた「その他」を除外した23項目について、因子分析を行った。その結果の因子パターン行列は表1に示す通りである。

6つの因子が抽出され、第1因子を「自己の弱さと他者非難因子」、第2因子を「思い通りにならない因子」、第3因子を「価値基準逸脱因子」、第4因子を「学習環境調整困難因子」、第5因子を「生活を脅かす因子」、第6因子を「臨地実習影響因子」と命名した。

累積寄与率は、36.23%であった。

考　察

ストレスの分類結果は、土屋らの研究において明らかにされたストレスの内容と類似するものであった。

抽出された第1因子は「自分の方向が定まらない」「目標を見つけられない」「学業と私事の両立ができるか心配」など、精神的な弱さを含んでいると考えられる。また、「教員のフォローがない」「教員同士の連絡が円滑でない」「バイト仲間が働かない」など、他者に対する非難が見受けられる因子であり、未熟さとわがままがその背景に存在しているようである。

第2因子は「仕事・バイトが思うようにいかない」「仕事を辞めなければならない」「学校の段取りが悪いので、計画が立てにくい」など、自分の思いや、考え通りに物事は上手く運ばないことを説明する項目が多い因子といえる。非難や攻撃の対象は、第1因子と類似している。

第3因子を構成する「受験」「看護の実践」「友人関係」といった項目は、「合格しないと入学できない」「看護ケアはミスが許されない」「約束を破る友人は駄目だ」など、ある一定の価値基準が存在していることを表している。つまり、自分自身の価値基準を満たしているか、満たしていないかが、行動の基準になっている因子を含んでいると考えられる。

第4因子にみる「勉強の方法がつかめない」「授業についていけない」「成績が気がかり」は、学習に関わる不安内容が語られている。また、「試験・勉強疲れ」「テスト勉強で睡眠時間がない」「満員電車で疲れる」などは、学習における健康状態を表現しているといえる。こうしたことから、第4因子の構造は、学習と学習環境とは相互に作用し合っており、環境調整には困難さが伴うことを示している。

第5因子は「家族内のもめごとが気がかり」「学校生活、新しい職場になじめるだろうか」「入学することへの不安」「入試に落ちたらどうしよう」など、家族や入学試験、環境に関する問題や障害を示す項目である。従って、生活への影響に関係することが考えられる因子である。

第6因子は「実習記録を書くことが嫌だ」「実習記録が多い」「実習記録に追われ体調を崩した」など、思考の整理の手段である記録を負担としてとらえていることがうかがえる。また、「教員が自分の意見や考えをおしつける」「一方的な態度」「教員の目が怖い」「教員が不在」など、教員に対し批判的である。すなわち、臨地実習において、学習に影響を及ぼす因子として、指導に関わる教員の欠点、学習プロセスにおける実習記録の負担感を示唆している。

看護学生のストレスに関する研究（その２）

－全日制と定時制の比較－

○矢口　久実子　今留　忍　内海滉
（杏林大学保健学部）　（千葉大学）

キーワード：看護学生, ストレス, 全日制と定時制

はじめに

学習を主としている看護学生（全日制）と仕事と学習を両立している看護学生（定時制）とでは、ストレスは異なることが予測されるが、その違いを研究したものはみられない。そのストレスの違いを把握した上で、教員が学生に関わっていくことは、看護教育をする上で重要である。本研究は、全日制と定時制の看護学生のストレスの違いを明らかにする。

研究方法

1. 対象：A看護専門学校看護学生 208 名
（全日制 120 名、定時制 88 名）
2. 期間：H15 年 7 月 11 日～28 日
3. 調査方法・内容：郵送調査法で自由記述方式にて、「最近ストレスと感じた状況の中で、それが強かった事柄」を上位３位まで記載してもらう。
4. 分析方法：ＫＪ法にて、24 項目に分類した項目を、１位３点、２位２点、３位１点と点数化し、因子分析（バリマックス回転）を行った。但し、全日制において削除した項目は回答のなかった「退職」の項目、定時制において削除した項目は、回答のなかった「受験」、「異性関係」、「目標設定の困難さ」の項目、そして、「その他」の項目は両者とも削除した。

結　果

１．全日制のストレス因子構造

６因子抽出し、累積寄与率は 40.44%であった（表１）。

第１因子は、「目標設定の困難さと他者否定」因子。第２因子、「課題達成への緊張」因子。第３因子、「自己イメージに反すること」因子。第４因子、「量と時間の長さのコントロール不足」因子。第５因子、「成功への不安」因子。第６因子は、「他者の評価意識」因子と命名した。

２．定時制のストレス因子構造

６因子抽出し、累積寄与率は 43.11%であった（表２）。

第１因子は、「期待と現実への反発」因子。第２因子、「自己と他者の違いを意識する人間関係」因子。第３因子、「経済的・精神的ゆとりのなさ」因子。第４因子、「物事の両立によるアンバランス」因子。第５因子、「距離間コントロールの困難」因子。第６因子は、「人生を脅かす」因子と命名した。

３．全日制と定時制の因子構造の比較

全日制と定時制において、因子構造は極めて異なっていた。全日制においては、「自己と学校を中心としたストレス」の内容であり、定時制においては、「社会的関係と学業との葛藤によるストレス」の内容となっていた。

考察

全日制は、自己の現状認識と将来の設定が未完成であり、心理的に自己の不安定さを表出する意識が抽出されたと考えられる。定時制においては、期待と現実及び自己と他者の違いを認識し、ゆとりのなさを感じ、環境との調和を苦慮している大人びた意識が抽出されたと考えられる。

これらより、E.Erikson の発達過程概念のモラトリアムが全日制であり、ややもすれば早期完了に走る意識が見受けられるのが定時制と考える。

これらには、教育指導の影響少なしとしないものと考える。

表１　全日制学生ストレス因子（バリマックス回転）

	第１因子	第２因子	第３因子	第４因子	第５因子	第６因子	共通性
Ⅰ目標設定困難さと他者否定							
目標設定の困難さ	.78	.02	-.10	-.00	.07	.12	.64
学業との両立	.63	-.04	.15	-.10	.05	.02	.43
バイト・職場の人間関係	.40	-.10	-.50	.05	.08	-.20	.47
学校の運営	.35	-.13	.32	-.04	.01	-.12	.26
教師との関係	.31	-.02	.01	-.12	.02	.70	.61
Ⅱ課題達成への緊張							
就職	-.11	.71	.11	-.32	.03	-.03	.63
学習の緊張	-.03	.69	-.05	.08	.16	-.09	.52
ゆとりのなさ	-.06	.28	-.08	.33	.13	.13	.23
Ⅲ自己イメージに反すること							
健康	-.04	-.20	.41	.24	-.20	-.20	.35
学校の運営	.35	-.13	.32	-.04	.01	-.12	.26
Ⅳ量と時間の長さのコントロール不足							
学習	-.23	-.12	.16	.68	.03	-.03	.55
通学	-.11	-.07	.19	.48	.16	.00	.30
ゆとりのなさ	-.06	.28	-.08	.33	.13	.13	.23
Ⅴ成功不安							
受験	-.25	-.33	-.05	-.36	.43	-.10	.50
友人関係	.22	-.28	-.02	-.19	.33	-.48	.50
看護の実践	-.22	.06	.07	-.44	.25	-.06	.34
Ⅵ他者の評価意識							
教師との関係	.31	-.02	.01	-.12	.02	.70	.61
実習記録	-.02	-.07	.04	.04	.05	.54	.31
今後の不安	-.24	-.27	-.12	-.12	.18	.36	.32
累積寄与率(%)	8.37	15.52	22.30	28.49	34.52	40.44	

表２　定時制学生ストレス因子（バリマックス回転）

	第１因子	第２因子	第３因子	第４因子	第５因子	第６因子	共通性
Ⅰ期待と現実のギャップへの反発							
仕事・バイト	.81	.09	.11	-.02	.30	.13	.52
学校の運営	.71	-.03	-.11	-.02	-.14	.08	.56
退職	.34	.05	.00	-.01	.02	-.05	.12
Ⅱ自己と他者の違いを意識する人間関係							
バイト・職場の人間関係	-.04	.42	.08	.22	-.03	.05	.24
なし	-.15	.24	-.28	-.28	-.12	-.35	.38
友人関係	-.26	.23	-.13	.09	.31	.31	.34
Ⅲ経済的・精神的ゆとりのなさ							
金銭	.02	.17	.80	.02	-.08	.14	.70
ゆとりのなさ	-.15	-.08	.77	-.11	-.03	-.16	.66
Ⅳ物事の両立によるアンバランス感							
学業との両立	-.05	.19	-.04	.75	-.09	-.07	.62
教師との関係	-.06	-.23	-.08	.62	.02	-.18	.48
家族関係	-.07	.18	.02	.44	-.03	.23	.29
バイト・職場の人間関係	-.04	.42	.08	.22	-.03	.05	.24
実習記録	-.14	-.62	.13	.20	.04	-.18	.50
Ⅴ距離間コントロールの困難							
通学	-.04	-.00	-.08	-.06	.79	.10	.65
人間関係	.15	-.01	.01	-.03	.70	-.12	.52
友人関係	-.26	.23	-.13	.09	.31	.31	.34
仕事・バイト	.81	.09	.11	-.02	.30	.13	.78
Ⅵ人生を脅かす							
学習	-.12	.04	.08	-.14	.05	.73	.58
就職	-.13	.04	-.16	-.16	-.16	.44	.29
友人関係	-.26	.23	-.13	.09	.31	.31	.34
家族関係	-.07	.18	.02	.44	-.03	.23	.29
健康	.10	-.50	-.10	-.03	-.18	.20	.35
累積寄与率(%)	8.87	16.39	23.67	30.69	37.31	43.53	

教育評価の研究（その４４）

ヒト　一生の学習時代を考える

岸本　英男
（大泉会四期会）

キーワード：切れる子ども、荒れる大人、教育愛

目的

日進月歩の科学の成果は高度情報化社会を生み出し、イラク戦争は、物心両面に於てその成果を競い、破壊と殺戮、人間性の退敗に拍車をかけ、その止まる所を知らない。苛烈な戦闘場面をモデリングした仮想現実のラビリンスは電脳社会にはまりこんだ青少年の認識能力を麻痺させ、今日、所謂キレル子どもの大量発生となり、教育関係者の心胆を寒からしめている。

この種の事件は既成社会の価値観評価観の鋳型にはめこまれて呪縛された現在の所謂おとなの常識では理解でき難く、異化された次元の問題として類型化され、青少年問題の許容事項として結果的には政争の具として葬り去られ、そこにひそむ「いのちのメッセージ」をおとなへの警告として読みとれない。理由は、子どもが成長して到達した筈の「おとな」が漢字の「大人」になりきれていない。子どもと同じ発達の次元で追求する価値観に呪縛されているからである。つまり、おとなが「大人」になれず荒れているからという事になる。

この種の社会経済的病理現象を、いかに適確に診断し処方するための、よりよき仮説を創造し且検証するか、を目的とする。

方法

問題の所在が、教育病理にある以上、正確な診断が前提となる点医学に於ける所謂「みたて」患者の病因をさぐる一連の作業過程が必要となる。而し個人の心身の不調を対象とする医学とは異なり、社会構造上の病理を対象とする教育病理の診断には科学的根拠や基準となるべき客観性を検証するシステムもエージェンシーもなく、政治経済的司法のカテゴリの一部となっている慣習法に判断の大部は、ゆだねられている。従って極めて文学的類推や芸術的直観に左右されるため、緻密な論理構成による科学的実証性の持つ説得力に乏しく、折角の問題提起も実効を期し難く、ジャーナリズムの仇花として消滅し、教育病理処方箋としてのカルテになりにくい。この種の欠点を補うべく、aetiology の手法を用いる事を社会通念とする。この問題提起も方法論の一つとする。ちなみに aetiology は医学術語であり、病因論と訳されている。そして二義的には「現在のある事実を、過去のあるできごとから説明する説話の方法」として文学界に広く普及している。教育病理が文学として政争の具に利用されてきた所に今日の荒廃の原因の一つがある事は、つまり「教育と政治のあり方、それは、政権を担当する政治家、つまり「おとな」として完成している筈の「大人」の世界の代表者の専権事項であった筈が、その職責を果し得なかったという事になり、つまり、荒れる大人としてしか、子どもの目にはうつらなかった。それが、切れる子ども大量発生の主原因という事になろう。

結果

現在の教育病理を以上の方法論から見る時、その原因は遠く日本民族の近代国家建設の時点にまで、さかのぼって考察する必要があろう。後発資本主義国として欧米先進国に追いつき追いぬく国是の下、無謀な戦争政策を強行した結果の当然の敗戦として、それまでの国家制度文物の大改造が行われ、西欧先進国の長所に学ぶ国家制度が日本民族の第二の誕生をもたらした。その契機をもたらしたものはアメリカによる占領政策を指導したマッカーサー将軍であったが、彼の日本人評は「英国人が４０才とすれば１２才である」との事。爾来６０年、１２才の子どもは今日世界第二の経済大国をつくり上げたが、急激な成長加速現象は、さまざまな分野で予想もできなかった多くのひずみを生んだ。その最たるものが、大人になり切れない「おとな」の大量発生であり、つまり、子どもに垂範できず、嘘とごまかし暴力肯定のポリシーを必要悪として黙認する価値観、評価観を、子どもの世界にまで、まんえんさせてしまった事になる。結果として今日の児童青少年問題の多発に、関係者をうろたえさせる教育病理現象を生じた事になろう。

考察

病因が分れば治療の方策は立つ。而し社会構造のしくみや運用に起因する症状に対してはきめてとなる対策はあり得ない。人間存在の運命的遺伝子に起因するものもあり、又単なる適応障害で臨床的政策変更で改善できるものもあり、人と環境との分担関係の見直し、而し、事が教育である以上、評価マトリックスの根本的見直しが前提となろう。つまり、「おとな」が真の意味で「大人」になり、ゆるぎなき価値マトリックスを行じていく事であろう。子どもは、そこから、つまり「大人」の垂範から「いのちのメッセージ」を受け取り、より次元の高い地平に飛躍できる事になろう。

今日の日本民族の繁栄の基を構築した価値マトリックスは平和憲法と、その理念の実現に具体性を与えた教育基本法にあった事は歴史的事実として世界史の承認する所である。終戦時、米英人の発達年齢に比して１２才と評価したマッカーサーの判断の基準は、戦前戦中の日本人のあり方について研究を続けていた文化人類学の成果によるものであった事が多くの占領策策にコミットメントした知日派知識人の著作や回顧談等によって明らかとされた。この１２才論は侍蔑と受けとられたが、発達心理学者ウェルナーの学説では「形而上学的自己中心性の時代と位置づけている。つまり、子どもとおとなの中間、「子どな」の時代として豊かな可能性に溢れる夢と希望の年頃とされていた。そこに着目したからこそ、マッカーサーの占領政策は奏功し、今日の日本がある事になる。歴史の流れを逆行させかねない今日のアメリカのイラク政策だが唯一の希望は、６０年前の歴史的現実に果した役割を免罪符としながらも、伝統的教育愛の理念が実現される事である。

発達と発達保障への研究

―人間発達における創出の階層への移行について―

○小倉　昭平　　田中　昌人
（京都発達研究会）　（人間発達研究所）

キーワード：創出の階層、創出移行抽出可逆対操作、群性体、対称性

1．［研究の目的］

この研究は、前回（2003年次）発表『大学生の学習のところでの考察(2)』を継いで、さらに発達と発達保障への研究を発展させ深まりをもつことを目的としている。前回においては、大学生の学習のところにある発達にかかわる要素をとらえている。今回発表は、その学生たちのその後において、"学習、勉強、研究の深め、そして自己の力を高めること" に向かい進んでいる状況を観察して、発達への要素をとらえ、考察を深めている。そのことは広く青年期の発達の研究を進めることにつながり、そしてさらに青年期を越えて成人の時期における発達を研究することに接続している。敢えてとるその姿勢の基調には、大きい目的として、発達について、"科学的な研究"を深め築いていくという留意がある。

2.［研究の方法］

A）この考察において、観察をもちそれを深めている対象は青年のところにある。「数学ゼミ」と呼ぶことにして、それは大学生よりあとの時期における青年の勉強心により存在している。自主的自発的に"諸々の取り組み"を存在させている青年の生活と活動とともにあり、"数学の学習を進める"という目標において成立している学習活動態のものである。そのような場は、青年の発達にかかわって極めて重要である。発達に不可欠の場であり形態となっている。そのところにおける事象に注意をもち、観察し分析をもつところから研究は起きて、はじまっている。

B）前回の発表におけると同じく、考察と研究の理論的基礎及び基盤は、つぎのところにある。1）田中昌人の「可逆操作の高次化における階層－段階理論」、『人間発達の理論』及びそれを基本にもつ一連の研究と実践。2）（したがって）可逆操作、可逆対操作、連関、人格の発達的基礎、発達の原動力、教育的発達の源泉、発達保障の階梯などの概念と見方をもって、観察と把握を進め深める。．．そのところに立って、とくにこの発表では、観察は、発達の第５の階層（抽出の階層）から第６の階層（創出の階層）への移行が起きている状況に注目し、そこでの事象に、分析と考察を深める。

3.［結果と考察］

学生期を過ぎて、その後の青年期にあって....青年がなお学習を継続・前進させたいという意欲をもち、そしてそのための方法・方策を自ら求めるという姿勢をもっている状況・状態があるとき；～この研究発表は、「その状況・状態」（以下にこの表現を使う）の存在を前提とする。さて、研究の角度において観察と考察の姿勢に立つとき、「その状況・状態」は，発達と発達保障にかかわり、強く重要な内容をもっていることを教示する。それは、"いよいよ人間発達を実際に発展的に個人努力の充実をもって実現していく" ということであり、そういう新しい節目にあるということである。理論的観点をもって言い換えて表現して、それは、人間発達の第５の階層から第６の階層へ移行する、という飛躍の発達をもつ時期を内容付けようとしていて、そこに発達にかかわる固有の"諸要素"を秘めている。さらに一層未来へ向けて発達して行く上で重要な課題を担う「その状況・状態」の内容の具体的把握とその科学的分析へ。以下において、そこのところを明らかにしていく一歩としての分析と考察を。～

【考察する場面の具体性】

ここでの考察は、「継続して、次ぎの２書から学び、力を育て、発展を生んでいる学習活動 ；a）高木貞治著『解析概論』．b）ワイル著『リーマン面』」のところに向かう。

【分析】《把握－１》：「移行」のこと

ここで注目している「その状況・状態」（先に指摘）は微細・微妙な"変化"を含んでいて、研究と発達保障の観点の目は、そこのところを十全的確に、そして科学的にとらえることができている必要がある。"数学を学び、力を養う"という、知的精神的活動は、その継続発展において，20歳を過ぎ25歳ごろに至るところにおいて、人間発達にかかわって、重要な画期的な変化を形成していく。そこに確認されるのが、発達の階層の概念においてとらえて、質的変化、飛躍の変化の性格の"移行"であり、新しい"創出"の操作の誕生である。

《把握－２》：「創出移行抽出可逆対操作」のこと

新しい階層への"移行"が起きていくということは，そこにそれ相応の条件が成立・成熟しているということで確認される。すなわち、上の《把握－１》ように観察と分析をもつところで，確認されるのが、抽出の階層，その第３段階にあって、その段階の活動が進むほどに、そこのところに新しい力が育つ，ということであり，"創出移行抽出可逆対操作"と命名するところの力の現れである。実際、そのような発達上重要な新しい力が、「連関」とのかかわりを含んで、誕生し育つようになる。そのゆえに、この"移行"にかかわるところは、発達上重要であり、発達保障の濃やかな注意が必要である。

《把握－３》：「可逆操作"創出"の誕生」のこと

「その状況・状態」というところを観察していて、実際新しく頼もしい力の現れとして見えるのが、"創出操作"、そして"創出可逆操作"、である。"創出"の操作は、実際に現実に、"新しいものを創り出す"の内容をもつ。その性格で活躍して、人間発達の「生後第６の階層」を形成していく。この力は人間でこそのものであり、美しく重要性高い能力と役割をもつものとなる。「青年の年齢層において、この力が育つ」ということに、発達と発達保障の観点から注目が必要である。

《把握－４》：「群性体」のこと

この内容は、人間発達の階層の成長とともに形成される。群性体は、人間の内面に、人間のもつ操作が具体的に形成する内容であり、生きて内的に作用する力になっていて、その存在は、数学と共存して強さをもつ。"数学を学ぶ"過程のところには、群性体の形成にかかわる貴重なステップがある。

《把握－５》：「対称性」のこと

"対称性"の概念と観点をもって、「状態」を観察する。この内容は、人間発達の生後第１の階層から成長してここのところに存在する。「対称性」は、人間の置かれる様々な環境・状態に対し、"安定性、不変性"のものとして存在する。対称性とともに、その"破れ"は、人間発達の"たくましさ"を造る。注目する「その状況・状態」のところには、対称性を形成し強化していく、微妙にして重要なステップが存在する。

《むすび的に》：人格とのかかわり

発達の微妙さ、そこに深いかかわりをもつ人格。人格の発達的基礎は、その故に発達にかかわり重要であり注目される。

（おぐら しょうへい ・ たなか まさと）

索　　引

人名索引

ア
秋元幸見 50
天野　寛 78
網野寛子 62
雨森雅哉 33
荒木美知子 57, 59
飯田穎男 56
飯田敏晴 19
伊賀憲子 66
石橋里美 75
伊藤典幸 29
井上枝一郎 27
今留　忍 101, 102
岩崎祥一 40
宇惠　弘 69
浮谷秀一 36, 65
臼井恵美 11, 13
臼井伸之介 25
内海　滉 12, 15, 20, 39, 54, 62, 77, 79, 80, 99, 100, 101, 102
宇部弘子 23
大澤　光 24
太田さつき 21
大野高志 41
大村政男 65
岡村一成 21, 28, 34, 36
岡村美奈 64
荻野七重 30
奥村隆志 27
小倉昭平 104
小野公一 7
小野寺富男 3
カ
鑑さやか 48
梶原隆之 51
梶村尚史# 53
加藤　理 88, 89, 90
加藤奈保美 12
金子潔子 62
嘉部和夫 1, 4
蒲生澄美子# 11, 13
川島大司 64
河野　望 32
神田幸治# 25
菊池洋子 14
岸本英男 103
木村たき子 34
木村友昭 42
草野美根子 15, 39, 79
久米　稔 64, 66
纐纈葉月# 11, 13
小谷正登 86
小林桂子 38
サ
齊藤　勇 30
酒井順哉# 78
佐々木妙子 14
佐藤恵美 44, 46
佐藤清公 91
施　桂栄 27
篠原一光 25
篠原純子 43
申　紅仙 94
菅原博嗣 96, 97, 98
鈴木綾子 26
鈴木大輔 40
角野善司 17
関　陽子 95, 96
関口和代 28
関口恵子# 11, 13
關戸啓子 54
タ
大坊郁夫 7
高木宣行 68
高嶋正士 22
高野真吾 71
高野隆一 66
高橋清久# 53
高橋友子 77
高原素子 11, 13
多久島寛孝# 99, 100
竹内倫和 92, 93
竹内規彦 92, 93
太刀掛俊之 25
田中真介 58
田中昌人 104
田之内厚三 31
玉木ミヨ子 11, 13
土屋明夫 18
寺澤美彦 66
時田　学 6
徳光紗妃 52
外島　裕 5, 44, 46, 91, 92, 93
冨重健一 67
豊村和真 45
虎谷美保 67
鳥山敏子 1
ナ
内藤佳津雄 5
内藤哲雄 38, 75
内藤美智子 66
中　淑子 15, 39, 79
中尾彩子 33
長崎純子 57, 59
中島多木 56

中島　亨# 53
中林哲夫# 53
中村隆宏 25
成田　猛 66
布川清彦 47
野口　薫 4
野瀬　出 33, 41
ハ 橋本泰子 63
蓮見将敏 49
服部　環 73
林　潔 74, 76
林　祐司 83
林田りか 15, 39, 79
樋口紀男 6
廣島克佳 61
深沢伸幸 84
福田　廣 37
福本純一 37
藤江　学 70
藤島和子 11, 13
藤田主一 22, 56
細田　聡 27
堀　達# 53
マ 正田　亘 8, 9
増地克之 70
松尾千尋 33
松田好美 60
松永保子 20, 60, 80
松本　洸 3, 91
三井利幸 96, 97, 98
南　隆男 88, 89, 90
宮下明大 55
宮島直子 16
村井康二 83
望月雅和 87
森下節子 16
森下高治 8
守島　恵 82
森田敏子 20, 60, 80
森脇保彦 56
ヤ 八木孝彦 74, 76
矢口久実子 101, 102
山内和枝 14
山内香奈 35
山岡　淳 33, 41, 42
山﨑晴美 44, 46, 91
山田耕嗣 72
山田宗寛 85
山村　豊# 51
山本勝則 99, 100
山本弥栄子 81
弓削美鈴 62
吉田一子 99, 100
吉田　悟 88, 89, 90
吉田統子 53
吉鷹幸春 70
余村朋樹 27
ワ 若原克文 96, 97, 98
和田裕一 40
渡邉　剛# 53
渡辺ナツ子 62

(#印は非会員)

日本応用心理学会第７１回大会　準備委員会

大会準備委員長・大会会長	嘉部　和夫（日本大学商学部）
大会顧問	馬場　昌雄（日本大学経済学部）
事務局長	外島　裕　（日本大学商学部）
幹事委員	久我　隆一（日本大学文理学部）
委員	佐藤　清公（日本大学本部）
	野々村　新（日本大学法学部）
	土屋　明夫（日本大学経済学部）
	伊坂　裕子（日本大学国際関係学部）
	松本　洸　（日本大学芸術学部）
	高久　信一（日本大学生物資源学部）
	中里　弘　（日本大学薬学部）
	岡村　浩志（日本大学理工学部）
	常磐　満　（日本大学工学部）
	松野　俊夫（日本大学医学部）
	山﨑　晴美（日本大学歯学部）
	真邊　一近（日本大学大学院総合社会情報研究科）
	田中　堅一郎（日本大学大学院総合社会情報研究科）
事務局	時田　学　（日本大学商学部）
シンボルデザイン	木内　理恵（日本大学大学院学生平成１５年度）
表紙写真	長尾　航太郎（日本大学商学部学生）
表紙デザイン	中西　康智（日本大学商学部学生）

日本応用心理学会第７１回大会発表論文集
発行日　２００４年８月１日
発行者　日本応用心理学会第７１回大会準備委員会
準備委員長　嘉部和夫
〒１５７－８５７０　東京都世田谷区砧５－２－１
日本大学商学部　嘉部研究室
ＴＥＬ：０３－３７４９－６８５６
ＦＡＸ：０３－３７４９－６８５６
大会ＨＰ：http://db1.wdc-jp.com/jaap/ps71/jp
印刷　　株式会社　国際文献印刷社

※　本発表論文集に掲載された論文の著作権は日本応用心理学会に帰属する。